
トマトリップ

みーや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トマトリップ

【Nコード】

N45910

【作者名】

みーや

【あらすじ】

莉月^{りつき}20才は、ある日、異世界へ飛ばされます。共に異世界へと渡ってきたのは、手にもっていたミニトマトの苗、一株99円。拾われた屋敷で優しい人達に囲まれ、メイドとして働く傍ら、苗を片手に畑作りに精を出す。そんな時、畑で出会った男とは…。ラブコメディの異世界トリップファンタジー。逆ハッピー頑張ります。

1 ツマツと共に(前書き)

よろしく願います。

1 トマトと共に

心地よい風が吹いてる。

空は快晴で雲一つなく、日差しは眩しく鳥たちはさえずり、緑の木々は風に吹かれてそつと揺れている。

私は一つ、深呼吸をして伸びをする。

「んー！ー！今日もいい、おつ天気！」

こんないい天気だったら、私の植えた苗もぐんぐん伸びて成長するに違いない。

私は、自分のテリトリーである自分の畑を満足して見つめる。

…とは言っても勝手に決定しただけで、私の土地ではないのだけれども。

照らしつける太陽に、爽やかな風を肌で感じて、上機嫌になりながら、鼻歌なんぞ歌って水やりをする。

この世界は、常に一定の気候が保たれており、快適だ。たまに雨は降るけれど、聞くとところによると、年中一定の気温らしいから驚きだ。

だけど、私はまだこっちに来て、半年なので、あと半年過ごしてみなければ年中一定の気温かどうかはわからないのが正直なところ。

なぜ半年かと言うと、話は半年前に遡る。

その日、会社も休みの休日、朝から私はホームセンターに行った帰り道。手にはミニトマトの苗。

なぜなら、今住んでいるアパートのベランダのプランターでミニ家庭菜園をやるべくして、苗を購入しに行ってたのだ。

昔から、植物や野菜など育てるのが結構好きで、機会があれば畑など耕してみたいものだ、と常々思っていた。

まあ、あまり若い娘の趣味とは言えないので、密かにこっそりアパートのベランダなどせまこましい空間でひっそりとやっているだけだったのだが。

なにせ、ミニトマトは実用的だと思う。

サラダにもなるし、お弁当の色どりにも最適だ。

さあ、家に帰ってプランターに植え替えて肥料をやらなくては！

と意気込んでいた矢先、いきなり視界に入ってきたのは光。全身を包む光。

自分の体がいきなり光に包まれたかと思った瞬間、私は意識を手放

した。

……

……

チチチチチ

どこからか、鳥の鳴き声が聴こえる……。ああ……、もう朝か……仕事……仕事に行かないと……。

……… つて、仕事！？

私は、その場で跳ね起きた。先ほどの出来事は夢か、幻か、いや夢じゃない。その証拠に……

「どっ…どっよ！？」「うーっ？！！」

気がつけばあたり一面は緑の木々が生い茂り、地面に寝そべっている状態だった私、そして手には先程購入したはずのミニトマトの苗、一株99円が袋に入ってしっかり手に握られていた。

「えーっ？えー…っ？？？」

確か、確か、道路を歩いて帰り道を急いでいたはず。それがなんでこんな自然たつぷりの場所に来ちゃっているわけ？しかもアスファルトから、マイナスイオンたつぷりの緑の木々に囲まれているし！

もしかして、わたし…

道に迷った！？

…少し考えて、その可能性はない事を悟る。
いくらなんでも、迷子というよりは、スケールが違う感じがする。
落ち着けわたし。さあ、よく考えて。

とりあえず、起き上り、体全身に付いていた土を払う。心を落ち着
かせるように努力して、周りの状況を改めて確認してみると、あた
り一面は木に囲まれていて、人の気配など全く感じない。軽くパニ
ックになりそうになり、泣きそうになった。

「ここは…どこだ…」

いきなり光に包まれたかと思うと、見知らぬ土地で、しかも森。こ
の状況は私に向かって『死ぬ』と言っているのと同じ状況じゃあな
いか。

それともアレですか。

リアルサバイバルですか。自分でしかけなんて作って小動物とか仕
留めて食べるようなサバイバル生活に突入しろと！？
うさぎ追っかけて、かのやゝまゝ まで行かねばならんと！？

死ぬのも嫌だけど、サバイバル生活も無理だと涙が出そうになった、

いや、確実に目の端に涙は溜まっていたはず。

心が折れそうになった次の瞬間、後ろの茂みから何かの気配を感じ、悲鳴が出そうになった。

もしかして熊とか狼とか、遭遇しちゃったりして！？うさぎ追っかける前に私が食料になったりして！？

危険な考えは、ぐるぐる頭の中を回るのに、足が動かない、頭の中をこれまでの人生が走馬灯のように走りさるうとした瞬間、茂みの中なら聞こえたのは、

「あら？あなた、どうしたねー？」

茂みから現れた人物は、熊でも狼でもなく、まぎれもない人間だ、そして女性だ。その瞬間『助かった！』とガッツポーズをしたくなった私だが、何か違和感を感じて振り挙げかけた腕をいったん停止して、目の前の女性をまじまじと見つめる。

「あなた、どこからまぎれこんだね？ここら辺一帯は、ヒューストン伯爵様の私有地だよ」

不思議そうに言う女性を、私も不思議な思いで見つめていた。だって…服装が…。

「あなた、不思議な格好してるけど…どこから来たんだい？」

…その台詞、そっくりそのままお返ししたい。だって、目の前の女性には、本でしか見た事のないまるで中世ヨーロッパのような服装。ふんわりとした長めのスカートにエプロン、まるでどこかの屋敷に仕えるメイドさんだ。

「あの…すみませんけど…ここは…どこです…か？」

その答えを聞くのは怖いけど、勇気を持って目の前の女性に尋ねる。

「ここ？ここら辺一帯は、ヒューストン伯爵様の私有地で部外者は立ち入り禁止の土地だ。あなたは一体…」

ヒューストン！？

ヒューストンって何ね！？

そんな地名、日本に、いや、近所にあったっけ？私が歩いて行ける

距離に！？思考回路がショート寸前、いや、完璧ショートした。その瞬間、

「どこだよー……！……！……！……！……！……！……！」

もう駄目だ。

私は、こらえていたはずの涙をいつせいに解放し、人目もはばからず大声あげて泣いてわめいた。

私、みやかわ宮川 りつき莉月

途方にくれて泣きわめいた20才の初夏……

チーン

1 トマトと共に（後書き）

誤字脱字、設定不足等あると思いますが楽しんで書けたらいいなあ
と思っています。

トマト×トリップでトマトトリップ

作者のタイトルセンスのなさがモロばれの作品ですが

お付き合いありがとうございました。

2 トマト畑に侵入者

しかし、いま思いだしてもアレは恥ずかしい。いい大人が初対面の人の前で涙と鼻水を垂らして号泣するなど、日頃の私からは考えられない行動だ。それだけ、パニックになっていたっていう事だろうな。

私は、庭の畑に水をまきまき半年前の回想に思いをふける。

その後、私は、号泣しつづけた。目の前の女性は、そんな私の様子に驚き、ドン引きしていたようだったけど、しばらくすると、泣いていた私をそのまま放置できないと思ったのか、必死にいろいろ心配をしてくれて気遣ってくれた。

女性の名前は、マーサと言った。

しばらく号泣し続けた私が落ち着くのを待つて、マーサさんはゆっくりと優しく話してくれた。

ここはカールディア大国のヒューストン伯爵の領地だという事。そしてマーサもそこで女中として働いてるという事。

そして、私の目を真っ直ぐに見つめて言った。

「どこか余所の世界から迷い込んできたね」

びっくりした。私の当たってほしくない予想をドンピシャで当てた。なんでも、このカールディア大国には、異世界からの迷い込んでくる人たちが年に数人はいるとの事。だから、マーサさんは驚きながらもどこか冷静に対処してくれたのだった。

私は信じたくなかったけど、自分の身に現実に起きている事だ、信じるしかあるまい。

しかし、よく小説とかで異世界トリップとかあるけど、あれじゃない？

だいたいトリップ先は、その国の王子の元とかで、惚れたはれたの逆ハ－展開が待ち受けているんじゃないの？

こんな森の奥地で、道に寝っ転がって泥だらけって設定もあんまりじゃないか。

全く、途方に暮れて涙が止まる事はない。

マーサさんは大層、同情したらしく、

「大丈夫、ここのカールディア大国は異世界人を見つけたら迫害する事なく、元の世界に戻るまで面倒をみるのが普通なんだ、そもそもヒューストン伯爵は大変慈悲深いお方。きっとあんたの事も面倒みてくれるから、心配するでないよ」

マーサさんの台詞を聞いた瞬間、涙が一瞬止まった。

「え…？元の世界に戻る事が出来るの？」

「ああ、異世界から来た人達は、時期が来たら皆帰っていくっていう噂だよ。だからあんたも心配しないで安心おしよ。あんたの面倒は、ヒューストン伯爵に私が頼んであげるからさ」

元の世界に戻る可能性のありがたさと、初対面のマーサさんの優しさに触れてまた涙が出てきた。

それから私はマーサさんに連れて行かれて、ヒューストン伯爵に對面を許された。

初めて会う伯爵様は、優しげな顔立ちの中にも紳士の威厳を兼ねていた素敵なおじさまで、まさにダンディ、ダンディズム。

元の世界に戻るまで、この領地でマーサと一緒にメイドとして働かせてもらえる事を快く了承してくれた。

惚れてしまっただろっ！

そんなに優しくされてしまっとうっ！

なんて、一瞬本気で思ったが、長年連れ添った奥様もご子息様もいるらしい素敵なダンディおじさまなので、懂れで終わる事にする。

そうして、あれよ、あれよ、といううちにヒューストン伯爵の土地の一角にあるマーサの家に居候として、ヒューストン伯爵の城で女中として働かせてもらえる事になり、その日の晩にはマーサの家で家族に居候として紹介され、温かい食事をして柔らかい毛布にくるまってぐっすり熟睡した。我ながら自分の神経は図太いと思いがら。

そんなこんなで、あれから半年。

いまだに元の世界に戻る方法はわからないけれども、「異世界人は時期が来たら元の世界に戻る」というマーサさんの言葉を信じて、焦ってもしようがないので、どうせなら自分のこの状況、立場を楽しもうという事で日々充実した毎日を送っていた。

ヨーロッパあたりの古城をおもわせる城で働けて、マーサさんを筆頭とする皆が優しい。

初めは、「異世界トリップは王子様つきだろ！」とリアルに思ったが、右を見ても左を見ても王子様なんていやしない。けど、私はむしろこっちの人生、マーサさんに出会って拾われた事に感謝する。マーサさんは、こっちの世界のお母さんみたいな存在で、私にいろいろ教えてくれたいわば命の恩人だ。マーサさんがいなかったら、今頃、私は森で熊か狼の食糧か、はたまた、うさぎ追っかけるサバイバル生活の末、狩りが一度も成功する事なく餓死していた

かもしれない。

そんなマーサさんへの感謝の気持ちと、半年前の回想にふけりながら、

私は、水やりを終えた畑を眺める。

「よし！今日も、水やり完了！」

満足して声に出す。実はマーサさんに拾われて城で働き始めて真っ先にした事は、このヒューストン伯爵の土地である森のはずれに、ちょっとした畑を作ったのだ。そうして、そこに私と共に異世界トリップしてきた運命共同体のミニトマトの苗を植えたのだ、駄目もとで。

それが、予想と反して、育つわ育つ。

もともと土地が栄養たっぷりなのか、気候が適しているのか、あつという間にミニトマトは実り、もはやミニとは言えないぐらいの大振りのミニトマトになって赤く熟れている。

株を増やしたら、あつというまに増え、もはやミニトマト菜園状態。うはうはだ。

こっちの世界には、トマトという野菜がないようなので、最初収穫してマーサさんにあげたら、おっかなびっくり口にしてたっけ。でも食べた後の感想が「すっぱいけど甘くて美味しい」と言ってくれたので、調子にのった私は、朝晩の水やりを欠かさないで、せっせとトマトを育てていた。

私もトマトは好きだし、なによりマーサさんの喜ぶ顔が見たいから。

その日。

いつものように早朝、城での仕事前にマイ畑へ水やりに。
早朝なので、少し霧がかかっているけど、畑への道のりは慣れたものだ。

だてに毎日、朝晩通っていないもんね。

だけど、その日は思わぬ先客がいた。

私が畑につくと、霧の中、私の畑に人影があった。私が近づくと、相手も気付いたようで私を振り返った。

「お前は…」

その人物から問われて私は驚きで目を見張る。

流れる蜂蜜色のハニーブロンドの髪は長めで、蒼い空を思わせる瞳、すっきりとした鼻筋、霧の中でもそうとわかる、整った顔立ちの美形な男性は、私より頭一つぐらい高いであろう頭上から、私を真っ直ぐに見つめている。

やけに美形な男性と目があった瞬間、私は固まった。

そして次の瞬間、

私は、いきなり走り出し目の前の彼を勢いよく突き飛ばした。

勢いよく弾かれたその男性は、ふらつきながらも後退する。私的には全身で猛タックルラグビー選手並みのつもりだったが、そこは体格差であろつ。

「な…なにを…！」

「何をじゃないわよー！そこ！踏んでるっ！」

さっきまで美形がいた場所を指さして、訴える。

「そこにトマトの小さい苗植えたばかりなんだから！踏みつけてたっ！」

きつと私は涙目になって叫んでいたに違いない。

3 侵入者は変な奴

「苗…?」

「そうよっ！トマトの苗よっ！昨日植えたばかりなんだから！」

いきなり私に突き飛ばされたあげく、続く言葉攻めにあい、目の前の彼は、一瞬あつけにとられていた様子だったが、すぐに体勢を持ち直した後、いきなり人の事を頭のとっぺんからつま先まで、観察した後、

「で、名は？」

と偉そうに高飛車に聞いてきた。

人に尋ねるのに、何じゃ！その上から目線な態度はあー！しかし、そんなに気になるのか、と考えたあげく、

「だから『ミニトマト』だつてば！」

私は胸を張って堂々とその名を主張する。どうだ！見事なかわいいミニトマト達だろう！私が栽培しているのだ！うはははは！

目の前の彼は、少し不思議そうな顔をしながらも

「…ミニ…トマト？」

反芻して聞いてきたので、私はコクンと一つうなづく。

「…変わった名前だな、お前」

「…って、私がかいつ！？」

「今、自分で言ったじゃないか」

「だから、それは畑の作物の名前っ！」

いくらなんでも、『ミニトマト』なんて名前、つけられたら親を恨むって。

ミニトマト… ミニトマト 実煮戸真戸… ミニトマト ミニ都魔斗…って、当て字にしてもあんまりだ。しかも最後のは格闘系でやたら強そうな気がする。実際、この名前なら親を恨むというか確実に殺意レベルを抱くね。私の思いっきりひきつった顔を見ても、全然ちつとも気にした風でもなく目の前の彼は涼しい顔して聞いてきた。

「で、お前の名前は？」

再度私に聞くと言うより上から目線な物の言い方の態度を見て、力チコーンと来た。人に尋ねるのにその態度ですか、ああそうですか。ちょっと美形だからと言って、そんな俺様な態度は初対面の人間にどうかと思うんですけどね。大体初対面の人間にその態度は礼儀がなっていないよ、全く。

私は先程、自分がその初対面な人間をいきなり突き飛ばした事も忘れて、ムツときたので

「人に名乗る前に先に名乗るのが礼儀です」

と、つつけんどんに言ってやった。そしたら、彼は

「…知らないのか」

と少し驚いたような様子だった。

だけど、私は、逆にそっちの態度にビックリだよ！いるんだよね、こーゆう、ちょっと美形だからって自分の事は知らない人はいないはず！と思っている自称有名人みたいなのが。かーっつ。見てらんないね、その思いこみの激しさは。だから言ってやった。

「知りません」

はつきりと。真っ直ぐに、彼の蒼い空色の瞳を見つめて。そう告げられた彼の空色の瞳は、驚きの表情を再度見せ、次の瞬間は、

笑った。

唇の端を少し上げて、まるでおもしろい物でも見るように私を見た後、再度目を細めて笑った。私はそれを見て、不覚にも一瞬ドキッとしてしまった。

ハニーブロンドの髪を風になびかせて蒼い瞳を細めながら、微笑む様子を見ると、こんなに整った顔立ちで笑うとなおさら美形率がアップするのね、と素直に感心した。

性格はどうだかいまいちわからないけれど、きっと周りにもてはやされて、こんな高飛車になってしまったのかもしれない、などと冷静に分析した。

「アデレイだ」

「え？」

「俺の名前はアデレイだ」

何が面白いのかわからなかったけど、微笑んだ後の彼は、まっすぐに私を見つめ、私の頭一つ高い場所から、見下ろして私に教えてくれた。

彼の名前は、アデレイか。

ふーん、と思った瞬間、大事な事を思いだした。

「…で、お前の名は？」

「やばっ！私もう行かなきゃっ！」

そうだ、朝だ、早朝だ。

私は水やりを終えたら、城にお仕事で向かわないといけない、今日は早朝当番なのだ。

ここで見知らぬ人… いや、名前だけついさっき知った人物アデレイと話しこんでいる暇はない事をようやく思いだした。水やりもしている時間は、今の私にはない。残念だけど、仕事が終わったらここに来よう。

今来た道を帰るべく、彼に背を向けて走りだそうとしたけど、ふいに思い出して彼に、アデレイと向き合う。

「ここはヒューストン伯爵様の土地だから、勝手にあちこち侵入したら駄目だよ」

親切心から言っただつたつもりだったが、彼は再度おもしろそうに目を細めて笑い

「じゃあ、お前みたいに『トマト』とかいう物を勝手に植えるのはいいのか？」

何とも鋭いツツコミが帰ってきて、一瞬ぐへえと、言葉に詰まるが、そこは何とか笑顔でカバーと言うより、笑って誤魔化する。

「眠らせておくより、土地の有効活用よ！食料にもなるし！」

開きなおり、「じゃあ、私もう行くね」とだけ言って去った。背中にさっきの男、アデレイの視線を感じていたが、時間がないので、気にしちゃいられなかった。

しかし、目的の水やりも出来ず、何しに行ったんだ、私。

3 侵入者は変な奴（後書き）

4 お茶とお菓子と噂話

朝のお城は慌ただしい。

まずは、私の仕事は、城の窓拭きなど床の掃き清掃などに、それが終わったらヒューストン伯爵様の食事のご用意のお手伝いなどなど。その日によって、仕事は様々だけど、メイド頭のアドマさんとか、マーサさんや他のメイド仲間に囲まれて充実した職場環境だと実感している。厳しいながらも優しく指導してくれるから苦手だった家事も、まあ上達したかもしれない。

今日も、仕事が一段落ついたので、皆で甘い焼き菓子を囲んでちょっと一息休憩タイム。

温かい紅茶を飲みながら、ほっとする。

ああこの時間が幸せだ。そこで、おしゃべり好きなカリアが口を開く。

「ねえ、庭師のローディって、本当に素敵よね。今日も庭の掃き掃除の時、掃除しているふりして私、チラチラ見ちゃったわ。あの茶色の髪が日に透けて、爽やかに『おはよう』なんて言うから、もう朝からドキドキしちゃって」

どうやら、カリアは庭師のローディにぞっこんラブ（死語）らしい。カリアは十代後半の赤毛でそばかすのかわいい女の子だ、恋について熱く語る。これって十代の特権だよな。って私も最近まで十代だったけど。

「ねえ？リツキは？どう思う？」

話の矛先を向けられた私は、笑って誤魔化す。だって正直、ローデイの顔とやらが思い浮かばない。実際いつか元の世界に戻るものと割り切って、恋などしてる暇もないし、仕事を覚えるのに精一杯だったので、男の人の顔と名前が一致しないのが正直な所。

「おや、おや。つい最近まで、馬屋の飼育係のボブが素敵とか言っていたのに、もう心変わりかい？」

茶目つけたつぷりに、からかうマーサさんにカリアも

「いいじゃないのー。見ているだけでも目の保養だわ」

カリアは恥ずかしそうに赤くなりながら笑顔で言った。

「でも、一番の目の保養といえは…」

それまで口を閉ざしていた皆が一斉に口を開いた、

「……ヒューストン様のご子息様よね!」「……」

皆が同じ名前を口にしたので、びっくりした私を尻目に皆が口ぐちに騒ぎ始める、

「あのスラリとした身長!」

「そして爽やかなあの笑顔!」

「物腰も柔らかくて!」

「あの方に話かけられたら、もう一日夢心地よね！」

なんだ、なんだ、皆が騒ぎ始めたが、私一人は蚊帳の外だぞ。あぜんとする私にカリアが、教えてくれた。

なんでもこのヒューストン伯爵様のご子息様は、とても美形で素敵な方らしい。

今は、王都のほうにいらっしやるらしいのだが、長期休暇になると帰ってくるのだが、そのたびにメイドのテンションが上がるらしい、という事を聞かされた。

ふーんという風に聞いていたら、カリアに急に

「そういえば、リツキは元の世界にいなかったの？好きな人」

唐突に聞かれて

「へ？」

間抜けな声を出す私に、カリアは興味津々に聞いてくる、

「だってさー！絶対もてそうだって！リツキってば！」

いやいやいやいや、そんなそんな、私なんて、めっそもございません！とばかりに紅茶を噴き出しそうになった。

カリアの声の大きさに、皆が気付き、

「そうだよ、リツキ！あんだ、好きな人ぐらい、いなかったのかい？」

「いたでしょー？」

話の矛先が私に変わった。皆に続く質問攻めにあいタジタジだ。

「だって、リツキ、女の私から見ても綺麗だもん。悔しいけどさあ」

「そうそう。リツキのまつすぐに伸びた黒髪に、シミ一つない白い肌、ぱっちりとした二重に、小さいながら少し上向きの赤い口。初めて見たとき、驚いたわ。そのうち、でっかい目に涙ポロポロ流して、わーわー大泣きして、よく見りゃドロだらけで、こっちがビツクリだったさー」

初対面での出会いをマーサさんに笑い話として語られて、赤面する私。

「そうだよ、リツキの事、初めて見た時、思ったもん。ねえ、異世界人で、みんなこんなに綺麗なの？」

「いえいえめっそうもない！」

「きつと皆が物珍しさに騒いでるだけだと思う。ほら、やっぱり」となく漂う異国の顔立ちというか雰囲気。

「けど、まあ褒められるとやっぱり嬉しいよね。照れるけど。」

「こっちでは黒は神秘的な色として崇められてるからね。黒髪に黒い瞳なんて、憧れだよ」

「そうだよ、うらやましいー！」

「日本じゃ、黒髪黒目なんて、当たり前だったし、むしろ金髪に憧れ

た。かつこいいじゃん？金髪。

ふと、今朝会った不思議な金髪の男の人の事をなぜか急に思いだした。

アデレイって言ったよな？確か。

だけど、思いだしたのは、ほんの一瞬の事で、ぼんやりしていたら

「さーで、そろそろ戻るかね」

女中頭のアドマさんの掛け声と共に、本日の私達の憩いのお茶会は幕を閉じて皆が持ち場に帰っていった。

さて！もうひと頑張りしますか！

5 庭園にて

ヒューストン伯爵の庭はだっ広い。

そりゃ、もう東京ドーム何個分？というぐらい。一人でぶらぶら出歩いたら、迷子確実間違いなし。

現に迷子になるのは、半年前に身をもって体験済みだ。…あの時、庭を涙目でさまよう私をカリアに見つけてもらえなかったら…と思うと今でも怖い。

今は慣れたので、迷子になる事もなくなっただけだね。

その庭の全ての隅々のいたる所まで、手入れが行き届いているから感動だ。ところどころに、多種多様の花が咲き乱れ、それでいてバランスのとれた彩色の花の群衆は、見ている者の気持ちを幸せに思うと思う。

今日の私のお仕事の担当は、庭から花を摘んでくること。そしてそれを花瓶にいけて城に飾るのだ。さて、どの花を城に飾ろうかしら…。

私は、辺りを見渡すけど、本当にどれも綺麗。かすみ草のように、可憐な花もあれば、薔薇のようにゴージャスな花も。みんなそれぞれに個性があつて、どれも素敵。目移りしてしまう。

どーのーはーなーにしようかーなー？

音程外れ調子はずれの自作の歌を口ずさみながらも、花に手を伸ばす。

「ちょっと待って」

ふいに背後から声がして、驚いて後ろを振り向くとそこにいたのは、日に焼けたがっしりした体つきの男の人だった。

年は私よりちょっと上ぐらいかな？たくましい体つきで、こんがり日焼けしていて健康的。爽やかな笑顔で、気さくな感じのお兄さん的な感じの人だった。

「今日飾る花は… って… あんた…」

男の人は、急に私の顔を見つめて、口に手をあてて、何やら驚いている様子。

あれ？なんだろう。きっと異世界人が珍しいのかな。

けど、この城で働いてもう半年だし、私の事見かけた事ぐらいはあ
ると思うんだけど…。

「あの…」

おずおずと、話しかけた私に、目の前の男の人は、なぜか照れたのか真っ赤になって、

「ああ！すまん！ちょっと。ブーツとしてた！」

手を振りながら弁解を始め、そこで我にかえった様子で、

「花を飾るなら、ちょうど囲いの向こう側の花が、今が一番いい時だ、って教えようとしただけなんだ。迷惑だったらすまないが」

男の人は、慌てながら、そこから100メートルほど離れた囲いの辺りを指をさし、教えてくれた。
なんと！このお兄さんは、お勧めのお花を、親切に教えてくれたのだ。

親切な人だな、と感動しながら

「ありがとうございます！早速行ってみます！」

お礼を言っ て立ち去ろうとする私に、

「待ってくれ。あんた… 名前は… リツキだろ？ 異世界から来たっていう？」

「はい。やっぱり異世界から来たって事で、ある程度有名なんですかね？ 私」

苦笑しながらも答えると、彼はちよつと返事に困ったように

「いや、あんたが有名なのは、単に異世界人だからって訳ではないんだけど…」

「??」

「とにかく…！」

そこで、彼はうつむいてた頭を上げ、そらしがちだった瞳を真っ直

ぐにして私の目を見て言った。

「異世界人ってだけじゃなく、あんたは皆から注目されているってことさ」

…??意味がわからず、首をかしげるが、まあいいや。

私はお礼を言つて、そそくさとお目当ての花を摘みに行こうと足をすすめるとふいに後ろから声が聞こえた。

「また来るんだろ？明日も。城の中はいつも花を選んで飾ってるもんな」

「はい、当番ですが、カリアさんに指示されてから摘みに来てます」
飾ったお花が枯れてしまう前に3日に一度ぐらいのペースで花を生けているのだ。

「じゃあ、またあんたが来た時の為に、一番綺麗に咲いている花に目星をつけておくから」

「ありがとうございます」

「…だから、また来いよ！」

「はい」

「俺の名はローディ、この庭の管理をしているから、また来たら、声をかけてくれ」

そう言うとローディは日焼けした肌に、ひとなつっこい笑みを浮かべて笑った。

私は、その名前にどこかで聞き覚えを感じながら、その場を後にした。

花を花瓶にうつし、その花の美しさにうつとりと、しばし見つめていると、カリアが水場にいた私に急いで走って近寄ってきた。

「大変！！大変リツキ！」

「?どうしたの？」

「ヒューストンご子息様が、急きよ、王都から帰国したそうよ！なんでも、ヒューストン伯爵の急なご用命らしくって、昨夜遅くについたんですって！」

興奮して上気して赤くなったカリアに私が示した反応とは、

「…ふーん」

「何よおっ！？リツキの反応？！それだけっ？！」

カリアの反応は、あきらかに不服そうだ。

「だって、私会った事ないし、まあ、はっきり言ってしまうえば関係ないというか…」

「何言ってるの！？ご子息様は、年齢22歳、誰もが認める美形！すらりと高い身長！それに私たちメイドの者にも優しいし、それになんていつても、この伯爵家の跡取り！お金持ちよ！」

「…あれ？カリアさっき誰かの事かっこいいって言って…」

そこまでしゃべってカリアに遮られる、

「何言ってるの！ご子息様は観賞用よ！雲の上の存在よ！見かけるだけで、存在を目にするだけで幸せな気持ちになれるお方よっ！」

…なるほど。

目の保養的存在ね。ふむふむ。

「とにかく!」

カリアの声にびくっとなりつつも

「昨夜遅くにお城にいたらしくて、まだ寢室らしいから、お見かけ出来るのを楽しませていきましょうね。あと…」

コホンと咳払いをしつつ、カリアが言う。

「ご子息様にお茶を運ぶ役目とか、ご子息様に関するお仕事は、抜け駆けなしのジャンケンよっ!」

カリアに、いまだかつてない勢いで力説されて、ただうなずくしかなかった。

6 またまたトマト畑に…

本日のお仕事は、早番だったので、いつもより早めに仕事から上がる事が出来た。帰りぎわに、カリアが息をきらせて急いで走ってきた。

「どうしたの？」

「今、さっき！ご子息様に廊下でお会いしたの！」

何やら興奮冷めやらぬ様子で、カリアが早口にまくしたてた。

「そうなんだ。で、どうだった？」

「相変わらず、素敵だったわ！」

カリアは、まるで夢の中にいるかのように幸せそうに遠い目でつぶやく。おい。意識は戻ってますか。カムバーク。

しかし、カリアが、ここまで言う人物ならちょっと興味があるし、見てみたい。

けど、このお城で働く以上は、いつかはすれ違う事もあるだろうから、次回から廊下を歩く時は、きちんとすれ違う人の顔を見て、そして覚えておこうと思った。

「そっか。私もいつかは会う事ができるかもね」

「そう！その事なんだけど…」

カリアが興奮冷めやらぬ様子で教えてくれた。

「ヒューストン伯爵様がご息様を急に呼び戻したのはね、実は、そろそろこの城を譲って引退なさりたいそうよ。ほら、奥様の体の具合がよろしくないから、北のお屋敷のほうに何年も休養中じゃない？ヒューストン伯爵様は、何でも、奥様の側でゆっくり毎日を過ごされたいらしいわよ」

ふむふむ、なるほど。ここで、愛妻家判明。私の中で更にポイントUP。

「で？だからご息様を呼びもどしたのね」

「そう！そう！…って事はつまり…」

「つまり？」

「ご息様のお顔を見れるチャンスが増えるって事！」

そうか、そういう事か。

ヒューストン伯爵も、奥様といい加減離れて暮らすのが、寂しいんだろうな。

だから、そろそろ息子に任せて引退なさりたいのだろう。しかし、ヒューストン伯爵が北のお屋敷にうつったら、私はちょっと寂しい。異世界人の私に本当に優しくしてくれた人だから。

ヒューストン伯爵のこれからの悠々自適の生活にエールを送りたい気持ちと共に、寂しい複雑な気持ちを抱えたまま、私は城を後にした。

「遅かったな」

…招いていない客が…いた。

昨日は、ヒューストン伯爵の引退の噂話をカリアから聞き、寂しさからちよつとへこんで帰った、その翌日。

毎朝の日課の畑に向かった私の目の前には、先客がいた。知り会ったばかりの彼、アデレイだ。

なぜ、彼がここにいるのか、意味がわからず、思考停止。しばらく考え込む。

そんな私を、まっすぐに見つめる、目の前の男、アデレイ。

彼は一体何をしにここまで来ているのだろう。

私は不信そうに、彼を見つめたら、そんな思いが伝わったらしい。眉間に少し皺を寄せて、

「なんだ。何を考えている」

目の前の男、アデレイはなぜか、面白そうに言った。

何を…って。

あなたが聞きますか。こっちが聞きたいよ。何かご用ですか？私の

畑が気になりますか？
もしや、伯爵に密告するつもりですか。

「伯爵の土地で勝手に、畑を作っている奴がいます。もはや家庭菜園レベルというかわいいレベルではないです」と。

それは、まずい。それはまずいぞおおおお。

ヒューストン伯爵の土地は、緑と花に囲まれた、まるで童話に出てきそうな素敵かつメルヘンチックな風景なのに、実はその裏の一角にはこんな所帯じみた畑がありました、しかも無断で。なんて事が知られたら、さすがにイメージダウンにつながる。

目の前の彼を、ちらりと見つめる。

サラサラした細いハニーブロンドの金の髪に、意志の強そうな蒼い空の色をした瞳。すっきりした鼻筋に、口元を少し上げ、長身に長い手足。

やっぱり美形だな、この人。立っている姿も様になっているご様子。

加えて、白がベースの服装は軽装だけど、質は上物だとわかる。腰に巻くベルトも足元に履くブーツもきつと、一流品だと感が騒ぐ。この人、さりげなく身につけている品物はシンプルだけど、それで

いて素材は高級品だと思う。

まさにシンプル イズ ベスト みたいな。

そんな事をぐだぐだ考えていて、観察を兼ねて見つめていたが、気がつく、目の前の彼もまた、自分の事を観察していた事に気づいた。

「何を考えていた？」

おもしろそうに、聞いてきたので、あれこれ悩むより、こっちも正直に出る事にした。

「いや、ここで何をしているんだろっとなあって思ってた」

ストレートに自分の気持ちをぶつけてみた。アデレイは、くくくつと口端を上げて笑った。

「早朝の散歩の途中だ」

へえ、そうなんだ。健康的だな、この人ってば。

そんな思いを込めてアデレイを見つめる。見た感じ20代前半ぐらいに見えるが、普通このぐらいの年頃とえば、早朝とえば『眠い』『だるい』に加えて『あゝあ仕事行きたくねえな』じゃないだろうか。

そしてたまにの二日酔いに。

それは、日本で育った異世界人である、私的偏見かもしれないが。

…てことは、こないだも早朝散歩の途中だったのだろうな。めっちゃくちゃ朝型だな、おじいちゃんみたいだな。ふと実家の祖父も毎朝5時には起床していた事を思い出す。

「いつも、ここに来るのか？」

「私？私は、毎朝ここに水やりと様子を見にくるわ」

そう言いながらも、手を動かし水やりを始める。

その間も彼、アデレイはじっと私の作業を見つめている。その視線を感じていたので、表面は平常心だったが、内心ときどきしていた。なぜならいつ畑の事を突っ込まれるのか、詳しく聞かれたらどうしようか、と。態度には出さなくても、内心は小心者のチキンハートな自分ですから。

「…そう言えば、まだ聞いていなかったな…」

「へ？」

きつ、きたーーーー！！

ついにきたよ、質問タイムが！

畑？畑にみえますかね？いや、自然に成長している、不思議な赤い実ですよ。たまたま、見つけて毎日水やりしてるんです。そん

で『ミニトマト』って勝手に命名したんですよ！

「人に尋ねる時は、自分からと言ったのはそっちだろう。だから、俺は答えた。今度は、そっちの番だろう？」

上から目線の彼の言い分に、一瞬ボカーンとした。

「…はい？」

何？何て言ったこの人？

畑関係はスルーですか。ほっと一安心し、つい頬が緩む。しかし、今度は私の番とは一体何の事だろう？

7 遅れましての自己紹介

今度は私の番…？

今度は、そっちのほうに頭を悩ませ、つい、不思議顔になってしま
う。何の事を言っているか、さっぱり思い出せないけど、何か約束
でもしたっけな…。

正直、記憶にない。目の前の彼、アデレイの顔を見つめながら、考
える。

風になびくハニーブロンドの金の髪は、日に透けてより一層金色に
輝いて見え、まっすぐに私を見つめる蒼い目は透き通っている。ま
るで、童話に出てくる王子様みたいだな…。

いるんだな、異世界には、こーゆう王子様チックな人…
漫画の世界以外にもいるんだな… 8等身の人間って…

ぼーっと観察していたら、

「聞いているのか？」

ハッ！瞬間、我に還りました、すみません、心は違う方向に向かっ
ていました。

だけど、約束事なんて正直覚えてない。

昨日の晩ご飯すらすぐには思いだせない私に、そんな話は無理、無

理、無理。

ここは正直に、

「えっと… なんてしたっけ？」

はつきりと、正直に、だけと思いつきりの笑顔で尋ねる。ここは、おどおど申し訳なさそうに聞くより、正々堂々と開きなあってスマイル満点で聞くのだ。

人間開き直りが肝心。

私の満点の笑顔とは裏腹に、目の前の彼は、そっぽを向き、盛大なため息を一つついたら後、私のほうに向きなあす。

あれ？

今ため息ついたよねえ？ 思いつきり呆れたよねえ？

そんなつつこみは心の中にしまつて、ニコニコと笑みを絶やさず私は、笑って誤魔化す、スマイル全開。

「…お前の名前だ」

…は？

「私の…名前…？」

「そうだ。言っただろう、『人に尋ねる前に自分から名乗れ』と。だから俺は名乗った」

…思いだした。

そう言えばそうだったような気がする。けど、そんな事を聞く為になぜわざわざここに来たの？

しかし、私ってば、偉そうにそんな台詞吐いたまま、結局自分の名前も言わずに去った気がする。

今さらながら、失礼な事したと思いだしてちょっと後悔しながらも、

「私の名前…？」

「ああ」

「私の名前は…」

口が開きかけた時に、ふわっと一瞬強い風が吹き、彼の髪が風に流れる。私の黒髪も同じように風に流れる、今日は風がいつもより強い日だと感じながら自分の髪を手で押さえる。私が口を開くより先に、彼が口を開いた。涼しい蒼い瞳をまっすぐに私に向けて。

「…リツキ」

「えっ？どうして…」

私の名前を知っているの？その疑問を口にする前に、彼のほうが先に口を開いた。すごく優しい眼差しで、それでいて真剣な顔をして、

「最近話題になっている異世界人とは、お前の事だろう」

まっすぐに質問される。なんだ？最近話題って。異世界人って珍しくもないって話だったような…。

「話題かどうかは知らないけど、確かにこの国の人達から見たら、私は異世界人って呼ばれるのかもしれない」

…同じ人間なのにね。

最後の部分は、自分自身に言い聞かせるかのように小さい声で下を向いてつぶやく。彼に聞こえているのかいないのかはわからないけれど。

そしてすぐ顔を上げて、彼に問う、

「だけど、どうして？それに最近話題って…？」

「…自分で自覚なしか…」

彼のつぶやく言葉に、私はますます首をかしげる。

「この世界のあちこちに、異世界人が時おり紛れ込む。だが、神秘的な黒髪に黒い瞳を持つという人間が紛れ込む事は珍しい。それにその容姿では、話題になるのは当然だろう。その他、使用人の男達は浮足だっているとも聞いたが」

黒髪に黒い瞳って珍しいのか。てことは、日本人が紛れ込む事は稀という事？

けど、時が来たら帰る事が出来るんだよね？マーサさんがそう言ってたし。

急に不安な気持ちが広がる。いつかは帰れると思って、ここでの暮らしを楽しまなきゃ損だと割り切ってきたけど…

「紛れ込んだ異世界人の人達って、皆いつか帰るんでしょ！？今まで紛れた人って皆帰ったんでしょ？」

アデレイは、一瞬じっと私の目を見つめて、

「…そうだな。時期がきたらな…」

フツと、誰に言うでもなく呟くように囁き微笑する。一瞬不安になったが、その言葉でもって安心し、つられて私も自然に笑顔になる。

「だけど、私は運が良かったと思うの。ここに来て最初に出会ったマーサさんは本当に親身になって私の世話を焼いてくれた。そして、ここの伯爵様も。私は、得体のしれない異世界人なのに、快くお側で働く事を許可してくれたわ。正直、ここの人間関係には、だいぶ救われているわ」

アデレイは、またしても私の顔を見つめ、ふっと笑った。

「…そうか」

「ええ、そうよ、本当にそうだわ」

人間、どんな状況に陥っても、何かプラスに考えられる事が一つでも多いほうがいいと思う。

自分の状況をなげいていたって何も変わらないと思うから。

そう告げると、アデレイは、

「そうか」

「ええ、そうよ」

「ここの、土地の一角で自分の畑も作れたしな」

「えっ?! それは…」

慌てる私に、アデレイはくくくつと再度口の端を上げて笑った。
ばれてる、ばれてる、モロばれやんけー！

だけど、それ以上追及しない彼に、何となくだけど、他言はしない
ような気がする。

「じゃあ、そろそろ行くね」

「…ああ、またな」

彼は私に軽く右手を上げて、ふつと微笑んだ。

なんだ、なんだ、その仕草。やけに美男子オーラを振りまいてるけど、相手は私だぞ。無駄だ、もつたいない。だけど、本物の美男子っていうのは、あーゆう仕草も自然なのかもしれない。…美形の考えている事は正直よくわからないが。

しかし、アデレイ…。お城の関係者が何かか？私と同じ使用人か？いや、でも、彼の放つオーラというか気品は、一般人のそれと、ちと違う気がするが。

まあ、いいや。後で誰かにでも聞いてみよー

呑気に考えながらも、いつものように畑を後にした。

8 強制連行

ふん ふん ふん

今日も元気に…さあ

どろろはるなみてもきれいだなあ

つとな。

鼻歌混じりに、歌なんて、歌って本日飾るお花を目ざとく探しながら、お庭探索。

本日の私のお仕事は、このお庭でのお花選び。
さあ、今日の一番のお勧めのお花はどこでひっそり咲いているのかな？

枝切りハサミを片手に、園庭をずんずん歩く。ああ、癒される緑の庭園よ。咲き誇る花に、緑に、風は心地よく、きつとマイナスイオンたっぷりのお庭だ。

振り返ると、広大なお城。大きく広い歴史あるだろう由緒正しきお城を振り返り、日差しを眩しく感じながら眺める。

このお城の部屋数はいったいいくつなんだろうか。このお城で皆でかくれんぼでもしたら、確実に迷子だな。

「おはよう!」

ぼーっとお城を眺めていたら、後ろから声がかかったので振り返ったら、ローデイが立っていた。どこからか、走って現れたらしく、顔がほんのり上気して赤い。

「あ、おはようございます」

頭を下げ、笑顔で朝の挨拶。これ基本。

「今日も、花を選びにきたのかい？」

「はい、そうです。それで今日は、どの花がお勧めですか？」

微笑みながら、ローデイに問いかけると、ローデイは先ほどより、もっと赤い顔になった。あれ？

「きょ…今日は、向こうの噴水の手前に今朝咲いたばかりの赤い薔薇がある。もしなら、それがおすすめだ」

なんだかしどろもどろで、赤い顔をしながらもローデイは、噴水側に向かって指を差しながら教えてくれる。

実は、前々から噴水側の薔薇がつぼみをつけた頃から目をつけていたのだ。一番綺麗な時に摘んで城に飾ろうと思っていたので、時期が来た事に私は喜び、お礼を言って立ち去ろうとしたら、不意に呼

び止められる。

「あつ、あのさ」

「はい？」

「今度さ…！」

「はい？」

「おれ…！」

「はい」

「おれ…！」

そこまでローディは言つて一息ついて黙つたままだ。次に続く言葉を待っているのに、なかなか言葉が出てこないらしい。

なんだろう？ 『おれ』 『おれ』 って。

おれおれ詐欺？？

この異世界で面と向かつて『おれおれ詐欺』はなかつと、自分自身につっこみを入れつつも、ローディの次の言葉を待っていると、意を決したようにローディが口を開く。

「おれと今度、休みの日に市場でも買い物でも行かないか？」

「…え？」

「そこで、美味しい物でも食べてさ」

…それはどうゆう意味だろうか。市場に行つて、食糧品の買い出しに付き合つて欲しいとか、そういう事か。

「え…つと…」

私は、返答に困る。ローディは、私の返事を待っているのか、赤い顔したまま、私の目をそらさない。正直休みの日は、お世話になつてゐるマーサさんの為に、掃除したり、慣れない家事に悪戦苦闘したり、たまにカリアと休みが合えば遊びに行つたりと忙しいんだけど、ローディは私の事を暇人だと思つてゐるのか。だから、市場に連行して一緒に用事を足して欲しいのか。

『なんか断りにくいけど…』

迷いながらもローディを観察すると、私の返事を待つて緊張しているのが空気で伝わってくる。
ううう、どないしょ。悩んでいたら、ふいに、後方から声がした。

「誘われてるのか、お前」

…こっ…この声はっ！

確信と共に、後方を確認すると、声の主はやはり予感的中、アデレイだった。

なんで、こんな場所にアデレイがっ！？

私は、一瞬パニックになる。だけど頭が混乱しつつも、ハニーブロンドの髪と蒼い瞳を持つ美形アデレイと、緑に囲まれ、多種多様な花の咲き誇る庭園では、あまりにも似合いすぎていて逆に私とローディの方がミスマッチな気がしてくる。……すまんローディよ。

ローディは、いきなり現れた人物に驚いたのか、びっくりした顔をして声も発せず口を開けたままアデレイの顔を凝視している。対するアデレイは、眉間に皺寄せて、そんなローディを横目で軽く見つけた。

あれ？アデレイ？

いつものアデレイの雰囲気とちょっと違うモノを感じる。そう、どっちかと言っと、不機嫌なオーラが漂うというか…微妙に何かが違う気がする。

いやいや、しかし関係ない！状況を把握したのち、

「ちょ…、ちょっと、用事思い出したので、失礼しますね！ローデ
イさん！」

定番の言い訳文句をしどろもどろに伝えたと、不機嫌そうな顔して
いきなり目の前に現れた男、アデレイの袖を強引にぐいぐい引っ張
って行き、噴水の方に無理矢理連れていく。

8 強制連行（後書き）

ローディ… 不憫なヤツ…

脇役だから我慢して（笑）

9 自称客人（前書き）

9 自称客人

とりあえず清らかな水の流れる噴水までアデレイを連れ出し成功。

「見かけによらず、積極的だな」

「は!？」

「だが…。そうゆうのも嫌いじゃないぞ」

先程までの不機嫌そうな様子はどこへやら、ハニーブロンドを光に輝かせながら、蒼い瞳の目尻を下げて、嬉しそうに視線ぶつけてくる彼の発言に思いつき眉をひそめて

「…何を言ってるのか、まるっきり意味不明だけど」

彼の思考回路は一体どうなっているのか。意味不明なイミフー発言は、この際スルーして、

「…ていうか、何でここにあなたがいるわけ？」

アデレイはふふんと鼻で笑って、

「俺がここにいちや悪いか？」

「いやいやいやいや、まずいでしょ！」

アデレイってば、アデレイってば、もしや朝の日課の散歩の途中でそのままふらふら庭園にまで迷い込んだんじゃないだろうな。ここは、ヒューストン伯爵の土地だよ、関係者以外まずいって、何回も言ってるでしょう！朝の散歩の途中で迷いこんで帰り道わかんなくなっちゃったなんてさあ、徘徊老人じゃないんだからさあ！しつかりしてよね！

「ここは、ヒューストン伯爵の私有地よ。関係者以外は立ち入り禁止だよ。見つかったら怒られるわよ！」

「じゃあ、問題」

私の焦りと裏腹に、さも愉快そうに呑気にアデレイは、私に向かって立てた人差し指を揺らして、

「俺がここにいる怒られる事はない」

は？

思いつきり不審人物ですけど、その自信はどこから来るんでしょうか。

「だけど、怒られないのには、理由がある。その理由とは何だ？」

怒られない理由？

何だソレ。

アデレイは、ここにも怒られる事はないし、不審人物扱いを受ける事はないという事か…。

そしてその理由は何だと思う？って、どうやら私に聞いているらしい。なぞなぞかよ。全くアデレイめ！もったいぶりやがって！

そう思いつつも、アデレイが楽しそうなので付き合っただけやる事にする。

目の前のアデレイの様子をじっと観察していた瞬間、ひらめいた。

「まさか！」

「わかったか？」

「今日から、ここのお城で働く事になった、とか？」

ふいに思いついた事を自信たっぷりにアデレイに言う。

アデレイは、一瞬私の答えを飲みこみ、考えた後、急に吹き出した。そして吹き出した後、笑いが止まらないという感じで楽しそうに笑っている。

いつもの含み笑いではなく、心底楽しそうに声を出して一人で笑っている。

なんだ、失礼な奴だな、その態度。

むつとくるが、その反応を見ると、私の出した使用人説は消えたな。あとは…。

「もしかして…このお屋敷に招かれたお客さま…とか」

そうだ、よく見る、私よ。アデレイの身につけている物は、全て素材は一級品ではないか。会った時に感じた違和感をもう一度自分の中で思い出せ。彼の容姿、装飾品等からいって、ただの使用人ではあるまいと。

未だに愉快そうに笑っているアデレイは、

「…まあ、そんなところかな？」

なんて、口端を片方上げて、あいまいに答えた後、またもや愉快そうに笑っている。人が真面目に答えたのに、なんなのさ、その態度。そもそも捕まると悪いから心配してやったのに、心配して損をした。

「不法侵入だと思って捕まると悪いから心配してやったのに…」

ぼそりとつぶやいた、その言葉を聞いて、ますます面白そうに笑う彼は、どうやらツボにはまったようだ。この際、笑い上戸の彼はそつとしておいて、自分の仕事を全うさせる事を優先する事にした。

噴水の手前側には、ローディが教えてくれたとおり、真つ赤な薔薇が咲き誇る庭園が広がる。薔薇のアーチなんて、本当に見事だ。

薔薇の香りが鼻をくすぐり、その薔薇の香りにクラクラするぐらい酔ってしまいそうだ。この庭に、ずっといたら、私自身が薔薇の香りを身にまとう事になりそうないだ。

一面に敷かれた緑の芝を背景に、咲き誇る真つ赤な薔薇達は、激しいぐらいに己の存在感を示していた。

私は、目ざとく狙いをつけた、一番大輪の花びらを咲かせている薔薇に手をかけた瞬間、

「痛っ！」

指先に激痛を感じ、反射的に薔薇の枝から、手を引き抜く。どうやら、視界に入らなかった鋭い薔薇の棘がうっかり刺さってしまったらしい。

私の人差し指から、一筋の血が道を作って流れる。その道すじの色はまさに薔薇と同じ色。薔薇と同じ色の道すじが、私の体から流れて行く…不思議な気持ちで自分の人差し指から流れて行く深紅の道すじを見つめる。

その様子に気付いたのか、愉快そうに一人笑っていたアデレイがふいに真剣な顔して近づき、

「見せてみる」

私の右手を有無を言わず掴み、人差し指の傷口を見つける。

「ああ…これは、結構深く刺さったな」

そう言うといきなり、私の人差し指の傷口を指でなぞった。

一瞬、痛みがチクリときて、顔をしかめるけれども、アデレイに、されるがままでその様子を見つめていた。

次の瞬間、アデレイは、私の指を自分の唇で優しく口付けた。

えっ！!?と思ったのもつかの間、

「薔薇は、棘が鋭い。気をつけないと痛い目にあう」

それは、一瞬の仕草だったけど、私の目を見つめたまま言うと、啞然としている私に向かって、なんて事もないような自然な様子で微笑んだ。

私の右手を掴んだまま、微笑む彼を見つめたまま固まる私。

そして、そのまま、ふいに力をこめ、私の右手を力強く引き寄せた。一瞬の事だったので、バランスを崩し、私は前につんのめり、結果的にアデレイの胸元に飛び込む形になった。

薔薇の香りが広がる園庭で、薔薇以外の香りが私を包み込む。

弾ける水しぶきのような爽快感を思わせるベルガモット系の香りは、透明感と力強さを併せ持つ香りで、私を包み込むのは、その香りだけではなくアデレイ自身でもあるとようやく理解して顔を上げると、彼と目が合った。

彼は私のその姿勢が、まるで計算どおりだったとも言つように、再度不敵に微笑みながら、真正面から私に問う。

「あれに、何を誘われていた？」

あれ？あれって、もしかローディですか？アレ扱いですか。

いや、それよりも、何をするっ…！

そう口にするより前に、アデレイは私の腰を引き寄せ、気がつきや、アデレイの力強い腕と見かけよりもずっと厚い胸板に包まれていた。

9 自称客人（後書き）

ジェラシーアデレイ、手が早い（苦笑）

お付き合いありがとうございました。

10 薔薇と反撃（前書き）

リツキの反撃、カウンター作動します。

10 薔薇と反撃

え……！この体勢……！

ぐんと、近づいたアデレイとの距離と、私を包みこむ薔薇とは違う香りに焦った私は、

…パンツ……！

乾いた空気を裂く音、何かにぶつかる音が晴れた青空の下、響き渡る。

一瞬、アデレイが驚き、腕の力が緩んだ様子が伝わってくる。どうやら自分の頬が打たれたと気づくよりも、呆氣にとられているのかもしれない。

その隙について、アデレイの元から走り抜け、後退しながら距離をとる。アデレイは、打たれた左頬を抑えながら、口を開きかけたので、そんなアデレイを遮って、私は想いをぶつける。

「何するのよ！このエッチ！エロ！エロス！」

私は鼻息荒く、まくしたてる。

もちろん顔面真っ赤になりながら、先程、アデレイの唇に口づけられた私の人差し指を自分のスカートでぐいぐい擦りつけ、拭きながらだ。

このお城のお客様だか何だか知らないけど、いきなり、何しやがんでえええ。

いくら美形だからと言って失礼にも程があるわっ！こっちの世界の貞操感がどうなっているかどうか知らないけど、私は私、乙女の純潔、自分で守るのみ！

拭き終わった人差し指をアデレイに向かって突き付け、声も高々に言い放つ、

「例え、綺麗な薔薇じゃなくても、棘はあるもんなんだよ！覚えておきなよっ！……アデレイ！！」

薔薇だって、棘は自分の身を守るもの。たとえ薔薇ほど綺麗じゃなくても、自分の身を守る為なら、棘を出すんだからね、私はっ！最初、私の勢いに呆気にとられていたのか、大人しく聞いていたアデレイは、ようやく事態を理解したのか、口を開く。

「初めて……」

なんだよ、なんだよ、まさか『初めて女に叩かれた』とでも言うわけ？

そりゃ、残念でした！いくら美形でも、万人が万人オッケーではないのだ。

初めての挫折に打ちひしがれて、己の行動に後悔するがいい。アデレイの言葉の続きを、少し緊張した面持ちで待つ私に、アデレイが口を開く。

「初めて…呼んだな。俺の名を」

……

……はい？

…今………なんと？？

叩かれた事より、拒否された事よりも、そっちですかい！

アデレイはハニーブロンドの髪を風になびかせながら、やけに、満
足げな表情で爽やかな笑顔を私に向けて笑っている。

……アデレイ……。

初めて女に叩かれておかしくなってしまったのかもしれないと、本
気で心配した。

先程の薔薇園で意味不明に無敵に微笑む自称・客人のアデレイを放
置して、私は大輪の薔薇を抱えてお城に戻ってきて、水場にて花瓶
に飾る。

花瓶に飾りながらも、さっきの出来事を反芻していた。

庭園からの去り際、この際アデレイを無視して薔薇を選んで、枝切
りハサミを大活躍させていたら

「今日は薔薇を飾るのか」

「……」

もう、この際、めんどくさいのでシカトしていたら

「薔薇とはいい選択だ」

「…？なんで？？」

やばっ。つい好奇心に負けて、口を聞いてしまった。シカトするって決めたばかりなのにいいい。

「俺が好きな花だからだ」

…はい、わかりました、左様でございますか。自信たっぷりに言うアデレイに、返す言葉がない。

しかも、そこで自信たっぷりなところが、全くもって、意味不明のイミフー君だ。

確かに、薔薇がとても似合う容姿ですけどね。薔薇庭にたたずみアデレイは、薔薇に負けていないぐらい綺麗な顔立ちだ。…というより薔薇を常に背負っていつも現れる気がする。そこまで華やかな人…って事だけ。

口を開くと残念な人だけ。

摘んできた薔薇を全て花瓶にいけ、お屋敷の所々に飾る。かすかに廊下に香る薔薇の香りが良い感じ！我ながら、グットチョーイス！なんて、自分で褒めたけど、本当はローディのおかげだ。

…あれ？そっいや、ローディにさっきは誤魔化しながら、その場を離れたけど、きちんとお礼を言ったっけな？

なんだか、自信がないけど、まあ、いいや、今度会ったら、きちんと

と謝って、薔薇のお礼を言わないとな。

「あつ！戻ってきちゃった！」

「ええー！ライバルは少ない方がいいのにいー！」

給仕室に入った途端、その場にいたメイド仲間全員が一斉に私を見て、騒ぎまくしたてる。

え？私なんかしたっけな？

「ほら！そんなトコにぼけっと立ってないで！リツキも参加だよ」

カリアが前に出てきて、私の手をひっぱる。私は、何がどうなっているのか、わからないまま、されるがままに引かれて皆の輪の中に自然に入る。

そこでカリアが咳払いを一つ、

「えーでは。土壇場になって、ライバルが一人増えましたが、時間がないので、手短に行きます」

皆の空気が真剣なものへと変わり、一瞬で空気が重く張り詰めたのを感じる。周囲にはカリアの真剣な声のみが響き渡る。

「では、行きます」

皆がぐくりと、唾を飲み込むのがわかった。その次の瞬間、カリア

が大声を張り上げる。

「恨みつらみはナシの正々堂々の…」

皆が真剣だ、私も身を固くしてカリアの声をしっかりと胸に刻む。
張り詰める空気…！

「本日のご子息様にお茶をお出しする権利です…！」

…では、ジャン、ケン、ポイ…！！…！」

皆が一斉に各々の勝利への願いを込めて、ジャンケンの手を差し出す。つられて私も、つい条件反射で…。

「きゃー…！」

「またダメだったあああ！」

各々の叫びが聴こえる中、じっと手を見る、自分の右手。どうしよう、成り行きとはいえ…

「えー、では、恨みつらみはナシにして、今回はリツキに決定です」

コホンとカリアが皆に言い渡すけど、皆怖いよおお。さっき恨みつらみはナシって言ったよねえ？

正直、ご子息様のお茶の権利とか、あんまり興味が…。そう思い、
ここは穏便に

「私、今回は辞退…」

「ダメよっ!」

ここでキャリアにきつく叱られる。

「平等に決めた事だから、行つてらっしゃい!本当は、ワイロ渡してでも交代してもらいたいけどさ、
そうしたら皆にずるいつて責められちゃうから、リツキが行つてきなさいよ」

…はい。

あと3分でも、遅かったら、参戦しなくても良かったのに、自分の
タイミングの悪さを呪うわ、私。

10 薔薇と反撃（後書き）

しかしアデレイには、ちっとも反撃とも思われてない様子！
残念でした。

【番外編】それぞれの休日（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます

今回の番外編は、物語の始まる前の設定です。

書き進めるうちにリツキが、おっさんのようになってしまいました。

なので、見たくない人は注意です（汗）

【番外編】それぞれの休日

「なあ、お前も見た？」

「アレだろ！？見た見た見た！もう俺ビックリしたのなんのって」

「だろー！？」

市場の隅にある、いつも常連で賑わうこの酒場は今日も常連客で賑わっている。そんな酒場の隅に男達が3人。アルコールを片手に最近話題の話に華が咲く。

「俺なんてよー、この間バケツの水ひっくり帰した場面にたまたま出くわしてしょ、チャンスとばかりに手伝ったんだぜ」

赤毛の青年は自慢げに話しをすると、

「お前、それ水ひっくり返すようにわざと仕向けたんじゃないの？」

やっかむかのように、隣のそばかす顔の青年が言う。

「いや、俺は何もしてねえって！けどよ、床が濡れたのを手伝って拭いてやったらよ、『ありがとうございます』って、かわいい顔で笑ってお礼言っただけだぜ！」

そこで赤毛の青年は思い出したかのように、目尻を下げてでれでれと笑う。そばかす顔の青年も負けじと反論する。

「バツカ！お礼言っなんてそんなん当り前だろう！たいして珍しくもねえーっていうの！」

そこで赤毛の青年も負けてはいない。

「はあゝ？じゃあ、お前はしゃべった事があるのかよ？」

そう聞くとそばかす顔の青年は胸を張って

「ああ、あるさ！俺なんてこの前、重いカゴ持って歩いていたら自分から進んで『持つてやるぜ、貸しな』って、荷物運んでやったんだからな！これで俺の株も上がるの間違いねえって！」

赤毛の青年は黙って聞いていたが、アルコールをグイッと飲みほすと、

「はあゝ？『なんてキザなヤローだ』って思ったに違いねえぜ！」

「なんだと！？お前みたいにお礼言われたぐらいで喜んでる男に言われたかねえな！」

「なんだと！このキザヤロー！」

冗談から段々とピリピリしたムードになってきたのを感じた瞬間

「ストップ！」

一人のよく日に焼けたやわらかい茶色の髪 of 青年が立ち上がり、仲

間の2人を止めにかかる。

「2人とも、もうやめなつて。俺から聞いていたら、どっちもどっちだし、くだらない事で言いあいなんて止めようぜ」

そこで赤毛とそばかすの青年は声をそろえて

「くだらない事!?!」

「ああくだらない事だろ、どうせ」

「お前、俺たちが何の話してるのかわかってる?」

と、赤毛の青年が問い、

「いや?わからん」

と、茶色の髪の青年が答え、

「お前: まだ会った事ないだろ?」

とそばかすの青年がため息と共に尋ねる。

「って誰に？」

「……」

「……」

そこで赤毛の青年とそばかすの青年は顔を見合わせ、盛大なため息を一つついて、茶色の髪 of 青年に向かって言う。

「…お前も一度会ってみるといいわ。ヒューストン伯爵の城で働く異世界からきた娘を。」

そしたらきつとお前も俺達の話題に入ってこれるだろうな、ローデ
イ」

いきなり二人は、うなずきあいながらローディを『可哀想なモノを見る目つき』で見る。

『何なんだ！何で俺が同情されなきゃいけないんだ…』

理不尽に思いながらもローディは酒をかつくらう。かつくらっている間も2人だけの会話は尽きない。

「あのサラサラして真っ直ぐな黒髪に、白い肌に、まるで人形みてえだ」

「ああ！肌は白く透き通ってるし、黒い瞳と対象的でいつそう綺麗に見えるよな」

「手も荒れていないし、きつと異世界では働いた事がないような良

い所の娘だったんだろうなあ……」

「そうだろうな。……けど頑張ってるよな、今」

話に入れないローディは、一人黙々と2人の話をつまみに酒を飲みすすめるしかなかった。

「今日も良い天気だー！ー！」

私は、晴天の元トマト畑に朝から来ている。本日お休み、フリータ
ーイム。

……なので、今日はトマトの株分けをしてトマトを増やしていきたい
と思います。

名付けて『トマト増量大作戦』です！ハイ！そのまんまです。

とりあえず事前に借りてきたクワを片手に土を耕す。

しばらく耕していると鼻の頭にうつすら汗をかいてきたので、首に
かけてあったタオルで汗をぬぐう。ああ労働の汗って素敵。

コンクリートジャンゴーだった元の世界とは大違いだね。人間やつ
ぱり緑とか自然って癒されるわ。

私は、汗を拭いたあとタオルを首にかけようと思ったが、

そろそろ日差しが強くなってきたので、タオルを帽子かわりに頭にかぶった。ほっかむりの出来上がり。

調子づいた私は、そのまま鼻歌歌いながらクワで耕して進む。

「完了」

クワで耕し、トマトの苗を植えて水をやり、満足気に畑を眺める。そろそろ日も高くなってきたし、今日の畑仕事はこれで終了するか。片づけを終え、私は自分の畑をもう一度振り返る。赤いトマトはまだ小さいながらも、ちゃんと実をつけている。もっともっと実るといいなあ、と期待を込めると同時に

「……しっかし……だんだん大きくなってきたな……この畑」

当初の予定より広がりつつある畑を眺めて苦笑しながら、クワを肩に担いで畑を後にした。

【番外編】それぞれの休日（後書き）

名前のない赤毛の青年だのそばかす顔の青年だのに囲まれていると、ローディ、名前が出ただけ主役のような感じですが、本編では立派な脇役です。

リツキ… おっさんやん…

人は見た目じゃわかりませんねー！。

11 紅茶の時間とご子息様

紅茶道具一式の用意されたカートを押しながら、進むべくは、ヒューストンご子息様のお部屋の前へ。

ああ気が重い。

皆が羨ましがる中、一人重いカートを押して進むご子息様の部屋までの道のり。

このカートと私の気持ちのどっちが重いかしら。皆が羨ましがるけど、私的には、コレ何の罰ゲーム？

なぜなら礼儀作法にはあまり自信がない。

だって、『お茶の時間』って簡単にいったって、お茶にはいろいろな種類があるらしいのだ。それこそ、なんとかの葉っぱと、かんとかの葉っぱを、7対3の割合でブレンドしてゝとか、どこぞの産地の紅茶の葉は甘めで、ここぞの産地の紅茶の葉は渋みが強い、とか私にはさっぱりで、ちんぷんかんぷんだ。

すごいよ、皆さんその知識、紅茶のマイスターになれるよ。

だいたい、日本で育った私には、『お茶』といえば、コンビニで買うペットボトルのお茶だ、おー、お茶とかね。こんな葉っぱからブレンドして、しかもティーポットで入れた事は、人生において

片手で数えるほどしかないかもしれない。

本当に大丈夫か？私。

急に不安になる。一応、マーサさんには、この世界に來た当初、お茶の入れ方を指導してもらったのだが、正直、あまり自信ない。今來た道を、カートを押してそのまま、まわれ右って引き返したいぐらいだ。

カタカタとカートを押して進む、直線状のたたっぴろい、なおかつ広い廊下は、高級なシックな赤い色の絨毯がふかふかしている。このふわふわ具合なら、私なら床でも寝れると思う。

あらかじめ教わっていた、ご子息様の私室とやらの目印のファンファールを意味するラツパのシンボルがついた扉を見つけ、そのラツパのシンボルの素晴らしさに息を飲む。

『ラツパのマークの正露丸』

一瞬、そんな事が思い浮かんだが、正露丸が扉に張り付いている訳ではない。当り前だ。その精巧で何だかめでたい造りのするラツパ

の彫刻から、緊張度が増したような感じがする。ここは、息を一つ、吸い込み、教えられたとおりに、ドアを3回ノックする、ええい、ここまでできたら、女は度胸だ。

その人は、窓辺にたたずみ、本を読んでいた。

私のノックに軽く一言返事をし、部屋へ入る事の許可をくれた。

部屋に入った瞬間、部屋の広さ、豪華さは、目を見張るものがある。だけど本当はもっといろいろあっちこっち観察したい気持ちを抑えて、職務を全うするべくカートを押し部屋の隅へと進む。

話題のご子息様は、今は読書に夢中で、私の事は眼中にない。アウト・オブ・眼中ってやつですね。

ご子息様の、視界、しいては、興味の対象に入っていないのを良い事に、今のうちに仕事を終え、さっさと退散するべく手元の紅茶の用意を急ぐ。

確か、この葉っぱを3の割合で、こっちは7の割合で用意して、言われた分量をティーポットにそそぎ、しばらく蒸らす。その間もティーカップは温めておいて…と、何だか一人でテンパったけど何とか一通りの用意は出来た。

ここまできたら、ホッと一息、あとはマーサさんに教わった通りに、数分蒸らすだけ。

ここまで来て、ようやくご子息様の姿を視界に入れる余裕というものが出来てきた。

栗色の柔らかそうな髪に、優しげな大きな瞳は、夢中になって目の前の本に注がれている。鼻筋も整っていて、口元は、優しく引き締まり、窓辺にたたずむその姿は、まるで一枚の絵のようだ。

『うわあ。これは、カリア達が騒ぐのもわかるわ。見て納得』

実際、ヒューストン伯爵の面影もあり、伯爵の若い頃が少し想像できた。ご子息様が、歳を召して渋みとダンディさをプラスすれば、今のヒューストン伯爵様の出来上がりって感じかな。

『しかし、ご子息様ってば、伯爵様のいいトコどりだわ』

男性にしては、可愛らしい系の顔立ちで、線は細めで、まるで童話に出てくる王子様みたいだ。

白いブラウスに、ハーフパンツ丈のグレイのパンツに茶色のブーツを履いている。そのブーツの飾り具が銀色に輝きをはなっている。

フリフリレースのブラウスとか、小さな王冠を頭に乘せたら似合いそう！うん、絶対似合いそう。下手したら、かぼちゃのパンツも似合っちゃうかもしれないな。

白いタイツも似合いそう、…うん、よし、ご子息様なら許そう。

そんな事を、考えていたら、紅茶のいい香りが鼻につき、慌てて温まったティーカップを用意して、お茶を注ぐ準備をする。やばっ！あんまり時間をおきすぎると、渋みが出るってマーサさんに口を酸っぱくして言われたのに、はやる気持ちで、あわてて紅茶を注ぐ。ティーカップに紅茶を注ぐと、これまた良い香りが部屋中に充満した。

『さすが、高級そうな紅茶の葉っぱ。Ｔバッグとは違うわ』

私は感心しながら、紅茶の他に甘いお菓子を添える。焼き菓子もなんだか上品な出来上がりのフィナンシェで、私なら一口で食べれるだろう。このお皿全てのフィナンシェも3分で食べ尽くすことが出来るだろうな、などと思いながらも準備完了。

さあ王子様よ、味わってください！

と言わんばかりにご子息様に声をかけるべく顔をあげた瞬間、目があつた、王子様：いえご子息様と。瞳がぶつかる。

いままでの私の作業、一人でお茶を用意するまでのテンパった様子が見られていたかと思うと、恥ずかしく感じるとともに、何か失礼

な態度をとっていないか不安になる、たとえば、甘いお菓子を食べたそうに見ていた、とか。

私と目が会った瞬間、何かに弾かれたように、一瞬驚きの顔をして、その後まじまじと私の顔を見つめた。

私は、初対面のご子息様に穴があくほど見つめられ、この場から逃げ出したい心境。

「あの…」

おずおずと声を出したが、ご子息様は私を見つめたまま動こうとしない。私は、頭に???と浮かびながらも、困惑した表情を浮かべていたと思う。

ご子息様は、柔らかそうな栗色の髪に、目の色は、薄紫のすみれ色だ。そのすみれ色の瞳は、くりくりとした大きさで、私の事を見つめている。

その眼差しは、なんというか、その…

『とつても興味あるものを見つけた』

そんなニュアンスの瞳で輝いているように、見えるのは、私の気のせいだろうか。

その興味の対象も、色恋とかじゃなくて、例えていうなら都会の小

学生が、カブトムシを見つけたときの瞳の輝き…そんな例えがよく似合うような輝きだと思う。

しばらく、カブトムシになった気分でこ子息様の視線をずっと浴び続ける。

「君が…異世界から…」

ああ、異世界人が珍しいのか。やっぱり気分はカブトムシ。

1 1 紅茶の時間とご子息様（後書き）

12 紅茶の時間と乱入者

ご子息様から、薄紫の瞳の真っ直ぐな視線を受けて私は、うなずきながら

「はい、そうです。リツキと申します」

よろしくお願いいたします、という意味を込めて頭を下げる。

ついでに言つと、『ほんとうに、お宅のお父様にはお世話になりました、本当にまあ、助かりました』

などと、言いだしたかったが、おばちゃん風なので厚かましいと悪いので、やめておいた。

「そうか、君が…。いや、まじまじ見つめてしまつて失礼。だけどなるほど。皆が騒ぐだけの事はあるし…なにより彼が気にかけるのもわかる気がするな…」

なんだか、独り言のようだ、私は意味もわからなかったが、とりあえず微笑んでおいた。

「ああ、ごめん、僕は、このヒューストン家のラインナルトだよろしく」

すみれ色の薄紫の瞳を私に向けて優しい笑顔で挨拶してくれる。なんて紳士的…！

なんてジェントルメン…！！

「いえ、あのこちらこそ、よろしくお願いします」

私は慌てて、頭を下げる。伯爵家のご長男ともいうお方がただのメイドにわざわざ自己紹介をして、挨拶までしてくれる、そんな出来事に私は感動していた。

つくづく、このヒューストン伯爵家に雇われて幸せだと思う。

「何をしてる」

不意に後ろから最近聞きなれた声が聞こえると同時に、扉を力強く開け放つ音と人との気配を感じて振り返る。声の主は金髪のハニーブロンドが日に当たり、透けるような金の糸のようにまぶしく輝き、蒼い空色の瞳は、輝いてこちらを見ている。

まるで、彼もおもしろい興味の対象を見つけたように、空色の瞳は嬉々として輝いている。

アデレイだ。

アデレイがいた。

って事はご息様の知り合いか？というよりご息様のお客様って事なのか。ノックなしでご息様の部屋に入ってこれる程親しい間柄って事だよな…。

「アデレイ」

ご息様が声をかける。その声に反応し、軽い微笑みで視線だけをご息様によこして、あとは無言でおもしろそうな目ですんずん私の目の前まで、近づいてくるアデレイは、まるで網をもってカブトムシを捕まえに來た捕獲者のようだ。

距離を詰め目の前にやって来るアデレイに、姿勢は引き気味。なんだ、なんで近づいてくるのだ。一瞬ひるんだが、

「何やってる？…って言われても、ご息様にお茶をお出しして…」

そうだ、アデレイ、私の本来の仕事はメイドだよ。トマト畑にいるのは飯の姿の趣味の世界だよ。

こっちが私の本職なのよ、忘れないでもらいたい。

全部言い終わらないうちにアデレイは

「紅茶」

「はい…?」

「紅茶」

「……」

…紅茶って一言かつ！もつと別の言い方あるだろう。「紅茶が飲みたい」とか「紅茶が欲しい」とか。私はあんと長年連れ添った夫婦じゃないんだよ。一言で通じる仲には、まだまだ遠いつていうの！まったくアデレイめ。先程のご子息様の紳士的な態度をちよつとは見習って欲しい。

…でも、ここは我慢我慢。彼は、お客様、ご子息様のご友人。怒りを抑えつつも先程の手順で、紅茶を用意する。ティーポットから沸き立つ紅茶の葉っぱの香りが、心地よい。高級そうなティーセットを一客出して、紅茶を注ぎ入れ、焼き菓子を用意する。

そうして、目の前で待つアデレイに無言でぐいっと差し出す。

さあ飲め、心おきなく、味わいたまえ。

アデレイも無言で紅茶のセットを受け取ると一口、口にした挙句

「…渋い」

なっ…なんですとー！

「まず、ティーポットに入れてから時間が立ち過ぎた。これでは、香りが半減し、味も渋みを増す」

そうだったのか！しかし、アデレイめ！ただの変わり者では、なかったようだな。

あんた紅茶のマイスターになれるよ。

そう言われた瞬間、はっと顔を上げ

「ご息様！すみません、先ほどの紅茶は飲まないで下さい！」

ご息様は、優しく微笑み

「大丈夫、僕には十分に美味しかったよ。しかし、アデレイは紅茶に厳しいね」

お世辞だろうかも知れど、美味しいの一言にほっと胸をなでおろす。
しかしご子息様の優しさはお父上譲りでしょうか？それに比べて…

「…渋いものは渋い」

はつきりと断言した台詞を聞いた私は、一瞬ケツという顔をしたと思う、っていうより出した。それに目ざとく気付いたアデレイが

「何だ、その顔」

何だと言われましても、だっふんだ。たとえご子息様のご友人だとわかってても、先ほどの園庭でのエロスな態度を忘れてはいないぞ、私は。

「…いえ、別に」

「…何だ、可愛げがない態度だな」

「はい、可愛くないです。ありがとうございます」

嫌味を込めて、台詞棒読み。

私とアデレイのやり取りを、ご子息様は私とアデレイの顔を交互に見つめながら興味深そうに眺めていた。

…というより、絶対おもしろがってる。だって薄紫のすみれ色の瞳は楽しそうに輝きを増して口元は笑いをこらえて歪んでる。

アデレイは私の不機嫌な態度の理由をちつとも気にしていない風で、それがまた腹の立つ。

このマイペース人間め。

「まあまあ、二人とも仲良く、仲良く。前から知り合いみたいだし？ ケンカするのは仲良しの証拠でしょ」

ご子息様のからかうような台詞を受け、

『仲良くななんてありません！』

って、全面否定の言葉をご子息様に叫びたかったが、怒鳴る訳にもいかず喉まで出かかった声をぐっと抑える。

『アデレイ、否定しろー！』

と噂の相手のアデレイを眼力で訴えてみたが、効果はちっともない
ようで、どこ吹く風の涼しい顔だ。
しばらくすると、私の眼力に気づいたらしく

ん？

なんて、首をかしげて甘い微笑みを向けてくる。ちょ…むやみに笑
顔を向けないでくれる？アデレイ、中身は残念だけど、外側は極上
なんだから、その甘い笑顔に、不意打ちだとドキツとくるじゃない。
アデレイ相手にドキツとくるなんて、不覚だわ。赤くなる顔を隠す
ようにアデレイから顔をそらす。

…って空気読んで否定しろっ！アデレイ！

12 紅茶の時間と乱入者（後書き）

アデレイにとって、空気は読むものではなくて吸うだけのものです。

13 誰の紅茶の時間？

わたしが赤くなった顔を隠すように、後ろを向いていたら何だか、背後から心地よい香りがしてきたので振り返ってみるとアデレイがいきなり無言で私に紅茶のティーカップを差し出してきた。

え？これってどういう事？

「アデレイが君の為に紅茶を淹れてくれたから遠慮せずにどうぞ」

ご子息様が、ティーカップをアデレイから受け取り、テーブルに置いて、さりげなくソファアに座るように勧めてくれる。

え…でも私…お仕事中ですから…

戸惑いを隠せないでいると、

「立ちながら飲む紅茶より座りながらリラックスして飲むほうが美味しいよ。ね？アデレイ」

話を向けられたアデレイも、座れと言わんばかりにソファアに視線を送る。

ええ？でも、ご子息様もアデレイも目の前に立たれていて座っていないのに、私だけ座れと？それは、無理だよ。

「いいから座って。ほらほら、遠慮せずに」

ご子息様に勧められ申し訳なく思いながらも、ソファーに腰かける。ソファーの感触は、もうふつかふか。

目の前のテーブルに置かれた私に淹れてくれた紅茶を手に取り、恐る恐る一口飲む。

もちろん、間違っても、紅茶をソファーにこぼしてシミなど作らないように細心の注意を払って、だ。

元が庶民なので、こんなふかふかソファーなんて座った事ないし、逆にリラックス出来ない気がするのは気のせいではないはずだ。

「美味しい」

口の中に広がる紅茶の香りに、体だけじゃなくて心も温まる気がする。

「良かったね、アデレイ」

ご子息様が、アデレイに向かって微笑む。アデレイは涼しい顔でご子息様と自分の分の紅茶をティーカップに注ぐ。部屋中に広がる紅茶の心地よい香り。

本来、紅茶ってこんないい香りを出すものなんだ、と感心した。しかしアデレイ、自分で紅茶を淹れるとは、やるな。さすが紅茶マスター。

「あ、良かったら、リツキこれも…」

「ご子息様から、差しだされたのは甘いお菓子のフィナンシェ。」

「え！」

「いいんですか？と言いたかったが、それは無理でしょう。それはご子息様の分です！」

「と、ご子息様は察したのか」

「良いんだよ、一人じゃ食べきれないし、甘い物はそんなにたくさん入らないし、ここで食べなかつたら捨ててしまっただろうし。それなら作ってくれた人に申し訳ないから食べてくれるとありがたいな」

「でも…でも…」

「美味しいっ！」

結局、甘いお菓子の誘惑に負けて食べてしまった…

ち…違うつ！これは！ご子息様が頼むから…！業務の一環よ！

だけど、このフィナンシェ、バターの味がしっかり出ていて甘さもちょうどいい。確かに上品なお味だわ。

遠慮なく口にいれた後、率直に美味しいと感じたままの感想を叫ぶ私に

「…一口か」

アデレイが呟く。その隣に立つご子息様は微笑みながらも

「さあ喉につかえると悪いからアデレイの淹れた紅茶をもう一杯飲んで。それにそんなに慌てて食べなくてもまだたくさんあるからね？」

いや、ごめんなさい、ご子息様。これ私の普通です。そう思いながら勧められるまま紅茶2杯目を飲み干す私。

美味しい紅茶とスイーツと美形な二人に囲まれてティータイムなんて幸せだわ。例え一名、中味がちよつとアレでも。

しかし…

何この高レベルの執事カフェ・イン・異世界。

やばいわ。元の世界に帰ったら、私執事カフェとか通っちゃうかも常連になっちゃうかも。

しかし、ここまで高レベルな執事の組み合わせってそうそうないんじゃない？

一人は、かわいらしい感じの美形の執事で物腰は柔らかく、薄紫のスマイレ色の大きい瞳は興味深げに動き、行動はレディーファースト。もう一人の執事も綺麗な整った顔つきの美形で髪はハニーブロンドに、蒼い空色の瞳でとっても美味しい紅茶を淹れるのが上手。

こんなタイプの異なる美形執事2人に囲まれてのお茶なんて、そうそう飲めることなどないわ。一生でもう最後かも…。

ほっと一息至福の時…

って…

ご子息様とその客人（飯）を前にして、ソファ―に腰かけ紅茶に、
焼き菓子まで食ってくつろいでるメイドがどこにいるんだ！！！！
！！！！

…って私だよっ！！！！！！！！

穴があつたら入りたい。メイド失格じゃ！！執事カフェとか萌えて
る場合か！？私！？
ノンノン、そりゃ違うだろ～～！

我に還つた瞬間、自分の愚かさに目まいがする。

「本当にすみませんでした！」

「なんで謝るの？気にする事なんてないのに。ね？アデレイ」

あれから、私はソファ―を飛び跳ねて立ち上がり、平謝りだ。
これじゃあ、誰のお茶の時間だかわかりやあしない。

「けど本当に美味しかったです、紅茶。私ももっと美味しく淹れる
事が出来るように勉強します」

次回、ご子息様の紅茶の時間争奪戦のジャンケンに勝利した時の為
に練習しなくては。

「じゃあ、毎日、紅茶を淹れてもらおうか」

いきなりのアデレイの発言に私は

「げっ！」

今度は顔だけじゃなくてモロに声に出した。だって自分でも聞こえたもの。カエルの踏みつぶされたような声が。

「それは、無理です」

と即答する。

「何？」

「私は、ヒューストン伯爵家のメイドです。決して、あなた専属のメイドではありません」

私はつーんと顔をそっぽに向けて言ってやった。そうだ、そうだ、雇い主はヒューストン伯爵だ。雇い主の言う事無視して勝手に決めれるかっていうの。

そんな様子の私にアデレイとご子息様は声を出して笑い楽しそうだ。

なんだ、なんだ、その態度。

その日の夕刻、執事のメリーストさんから、丁重な一通の封書を渡された。ヒューストン伯爵直々の家紋が押されており、何だかただならぬ雰囲気醸し出す封書だ。

メリーストさんは、この伯爵家に昔から仕えている執事さんで、年は50代ぐらいの白髪まじりの目尻の優しい素敵なおじさまロマンスグレーだ。

「え…これは…」

驚く私にメリーストさんは

「伯爵様からの封書です」

と優しい笑顔で微笑み、私に手渡す。

あせる気持ちのまま、封を解き、入っていたのは一枚の手紙。その紙を見て、驚愕する。

その紙に書かれていたのは、何とまあ、私風に簡単に略すると

『毎日、客人であるアデレイに紅茶係を頼む。BY あなたの雇い主のヒューストン伯爵』

……そんなような事を丁寧な文章かつ達筆に記されていた。

くっそー！アデレイめ！なんか汚い手を使ったな！

私はその場で地団駄を踏んで悔しがった。

14 ご子息様のお気遣い

「ごめんね、父が君の意見も聞かずに……。それに、アデレイは言い出したら聞かない性格なんだ」

先日、ご子息様に会ったら、開口一番に謝られた。

いえいえいえいえ！めっそうもございません！そんな伯爵家のご子息様ともあろうお方が、わざわざメイドの私に頭を下げるなどとは、恐れ多い。

私は慌てて

「いえ、そんな、謝らないで下さい」

手を振りながら、答える。

「彼は、ああ見えて少し気難しい人物なんだ。だから、誰かを気にいたりする事はめったにない事なんだ。だから、リツキ！君はすごいよ」

何がすごいのか、よくわからんが、私はご子息様が自分の名前を覚えていてくれた事のほうが、ビックリ感謝感激だ。

「気にいられてるかどうかは、わかりませんが…毎日、紅茶のしごき…いえ、指導してもらってます」

実際、あれから、毎日紅茶を差し出すのは、日課になった。そのたびに「渋い」とか「香りが無い」とか散々だったけど、本来負けず嫌いだっただけは、ようやくアデレイが納得する紅茶を淹れる事が出来るようになってきた。そうすると、自然と私自身も、紅茶に興味が出てきて、美味しく淹れる努力も苦にはなくなってきたのだ。その点ではアデレイに感謝している。

なので、ここは素直に

「でも、おかげで私の紅茶の腕前も上達したと思います。だから感謝してます」

そう言つと、ご子息様はほっとした顔をして

「そう言ってもらえると、僕も嬉しいよ。何よりアデレイが楽しそうだしね。」

…本当はね、彼は最初は『リツキを自分専属のメイドに』って希望したんだ」

そこまで聞いて、ゲツという気持ちがモロに表情に出た。その顔を見たご子息様は苦笑して

「ああ、大丈夫、その点では、しつかり止めたから。リツキの立場も考えたほうがいいってね」

そりゃそうだ。傍からみたら、ご子息様の客人の専用メイドの立場なんて、羨ましく思う人もあると思う。だけど、私は困る。

そんな立場になったら、嫌でも皆の嫉妬や妬みを買ってしまっではないか。

そりゃ、この世界の住人だったら、『目指せ気にいられて玉の輿！』とガッツの一発でもわくものかもしれんが、私は所詮異世界の人間。いうならば腰かけだ。この世界では平穩に、皆楽しく暮らせたならそれで幸せだ。

せっかく築きあげた友情を女の嫉妬とかで壊したくはない。だって、いずれ元の世界に還るのだから。

しかし、ご子息様の優しい心遣いに感謝だ。私は目の前のご子息様を見つめ、にっこり微笑みながら

「ご子息様のお心遣い感謝いたします」

そう言って頭を下げた。

私より、少し背が高いご子息様は、すみれ色の瞳を細めて、笑った。その笑顔は、極上王子様スマイルでくらくらする。

なんなの、このリアル乙女ゲーレベルの王子様は！ご子息様の、お優しいその態度に、前々からの疑問を投げつけてみる。

「あの…　そもそも彼が私を気にいつてゐるって、ご子息様はおつしやりましたが、なぜなんでしょう。特に気にいられる事はしていないはずですが…」

むしろ、嫌われても不思議ではないと思う。…　実際ひつぱりたいし、初対面ではタツクルくらわした気がする。これはご子息様には内緒だけ。

「彼はね、リツキのその態度が好きなんだよ。実際、僕の客人でも、特に媚びる訳でも、言いたい事ははっきり言うでしょ？だからだよ。…　本音で接してくれるからだと思うよ。あと…　余計な詮索はしないでしょ？アデレイの事、本人から何か聞いたりした…？」

アデレイの事…？アデレイに関する情報とえば、まったくない事に気づく。彼はご子息様のお客人だけど、どういった立場のお客人なんだろう。

しばし、首をひねる。

「その様子だと、何も聞いてないね。…　そう言つたリツキの態度が好きなんだと思うよ」

んーと。アデレイは、そうだなあ。まあ実家は金持ちだろうな。で、きつとイメージ的には貴族の六男とか七男とかで、好き勝手に遊んでる放蕩息子とか？んで、親に『お前の素行の悪さを直してこい！』と言われ、ご子息様と同じ王都へ出されたとか。そこで、ご子息様とお友達になり、ご子息様の里歸りに、暇なのでついてきた、

と。そんな感じのイメージかな。

「確かにご子息様のご友人でいらっしやられるので、それなりの身分の方だと思うのですが、私はこのお屋敷のメイドです。そのメイドがご子息様のご友人を、あれこれ詮索する訳には行きませんので……」

ご子息様の瞳が笑みで揺れる。私もつられて笑う。さすが、ヒューストン伯爵様のご子息、きちんと父親と友人のフォローもして、私みたいなメイドの事まで心配してくれるなんて、たいしたお方だと思ふ。実際、そんな心配されるほどの事でもないんだけどなあ。ただアデレイと過ごす紅茶の時間が増えたぐらいで。

私とご子息様の秘密のお話みたいな感じに思えて、私とご子息様の二人は目を合わせてふふふとお互いに微笑んだ。

「あつ、そうだ、リツキ」

急に思いだしたかのように、ご子息様は口を開く。

「その『ご子息様』って言い方やめてよ。僕の名前はラインナルトだよ。ラインって呼んで欲しいな」

ご子息様の申し出に、一瞬思考が固まるが、即座に

「むっ…無理です！私はメイドです」

私は、断固拒否の姿勢を示したが、ご子息様も怯まない。笑顔のまま

「だって彼の事は、呼んでるでしょ、アデレイと」

「それは…」

だ、だ、だって…。

それは、いつの間にやら、そうなっただけで、今からでもアデレイの呼び方変えればご子息様は、ご満足か！？

アデレイは、そうだなあ、『ご子息様のご友人様』とか、『ご子息様の悪友様』とか『ご子息様のご友人である貴族の放蕩息子様』とか？

アデレイへの憶測を含めて、勝手に呼び名を考えていた私に、ご子息様は笑って

「そんなに悩む事はないよ、リツキ」

「だって、それは…。私なんかは、ただのメイドですし」

「彼の興味の対象になっている時点で、将来的には、立場が変わる可能性もある」

「…？」

「いや、今のは何でもない」

ぼそりと独り言のように、意味不明な事を言い、また笑顔に戻る、ご子息さま。

ううう、無理だよ。私的には、会社の上司を呼び捨てにするような感覚だよ。

精神的に苦痛。これぞ、現代におけるパワハラじゃー！助けてー、メンタルヘルスを希望する。

15 爽やかな権力行使

精神的に苦痛。これぞ、現代におけるパワハラじゃー！助けてー！
メンタルヘルスー！

ご子息様を呼び捨てなんて恐れ多くてバチがあたる、困ってちょっと涙ぐんでいたら、

「何をしている」

左腕がふいに掴まれ、その力の強さから顔をしかめる。掴まれた腕を見つめ、その先を見ると、アデレイだ。そのいつも整った顔は、微妙に険しい目つきで、目の前のご子息様を不機嫌な顔して見つめていた、というより睨んでいた。

「ここで、何をしている」

アデレイは、私の顔を見ず、掴んだ腕も離そうともせず、また力を緩める事もなく、ご子息様に詰め寄る。

一方、ご子息様は、相変わらずの優しい空気を身にまとい、余裕のオーラだ。

私はというと、アデレイに掴まれた腕は熱を持ってジンジンときてる。

「ただ、お話してただけだよ、ね？リツキ」

話のご子息様から私にふられて、アデレイが私の顔を見た瞬間、一瞬目を見開き驚いたような顔をしてから再度ご子息様に向き合い

「だったら、なんで、涙ぐんでいる」

「それは…」

私は、しつこくご子息様に詰め寄ろうとする、アデレイに向かって

「それは、アデレイに掴まれた腕が痛いからだよっ！！」

声も高々に言い放った。もうちょっと優しく掴めえ〜！取り扱い注意だよ！

「まったく、アデレイってば早とちりすぎ。僕がリツキをいじめているとでも思ったの？」

ご子息様は、ため息をつきつつも笑顔で問題の主に問う。問われた相手は、無視だ。完全なるスルーだ。窓際にたたずみ外なんて眺めている。

おおおい。人に聞かれたら、ちゃんと答えようよ。無視はイカンよ。

私はため息をつき、

「ご自分で勝手に勘違いして、そのくせ都合が悪くなると無視なんて、勝手すぎます」

「……」

おい！またもや無視か。無理矢理、目の前まで行って目を見て言っ
てやろうとか思ったが、時間がないのでやめた。
今日もお仕事忙しいのだ。本来の業務に戻るべく、早々に退室の
言葉を告ると、帰りぎわにご子息様が声をかけてきた。

「さっきの事、考えておいてよ」

「無理です……」

「……じゃっ、これは、業務命令」

「……！！」

にこやかに爽やかに、サラリと権力行使してきたご子息様のスマイレ
色の笑顔が一瞬、デビルに見えた。それもものすっごい美形な小悪

魔系。やっぱりメンタルヘルスが必要かもしれない。

「だって、こうでもしないと、呼んでくれないでしょ、『ライン』って」

ご子息様は、爽やかに笑顔に、権力行使をしてくる。負けた、完敗だ。

「…はい、わかりました。…ライン様」

「『ライン』だってば。様はいらないよ」

「…はい」

明るく権力行使を試みせたご子息様とは、真逆に私の顔色は悪い。だいたい、アデレイといい、ご子息様といいなんだって私に構うのだろうか。

そんな私の心中を察したのであろう、彼は

「他の人の前では、今までどおり『ご子息様』でもいいから、僕と二人の時は、ラインって呼んで欲しいな」

「わかりました。でも…」

なんで、このお屋敷の跡取りともいうお方が私には、こんなに友好的なのか。なんだろう。なにか裏があるのだろうか。いつておくが、私は何も持っていないぞ。

私の疑問を読み、あつさり口にする彼は

「この国は、稀に異世界人が現れる。過去にもそういった例はあるからね。過去の異世界から来た人たちは、皆、さまざまな知識などを僕たちに教えてくれて、それがとても貴重な情報であり、新しい知識なんだよ。僕たちの国が栄える為のね。だから、こそ、異世界人が現れた時点で皆、歓迎するんだよ。リツキ、父は君が望んだから、メイドという立場に置いたけど、なんなら、今からでも客人として迎えて…」

「いえ！それは結構です」

ご子息様のありがたいとも思える申し出を即答で遠慮する。

私的には、雇っていただけでもありがたいのに、異世界人つてだけで、客人扱いなんてされて日には、申し訳なくて神経すり減らす。

それよりも、こうやって肉体労働しながら、働いていたほうが、よっぽど気が楽だ。

異世界人だというだけで、客人対応されても、私には返すようなものはない。知識って言っても、私は学者でもないし、たいして頭が良かったわけでもないし、

どこにでもいる20歳の社会人だ。『客人』として扱ってやったのに、お前の知識はその程度か！といつか追い出される日もくるかもしれない。おーこわ。

もちろん、そんな事はしない人達だとは思うけど、根っから庶民の私には、かしくかれる客人なんて似合わんよ。正直、三食プラス昼寝つきには憧れるけど、

そこまで待遇されるような大した知識持ってないし。

このままこのお屋敷でみなさんと一緒に働きたいと思っている意志を、はつきりと、ラインに告げ、先程アデレイに掴まれた為、熱を持った腕をさすりながら退室する。

リツキの退室した後に残された男が二人。

「本当に、面白くて興味深い。ねっ？アデレイ」

「…あまり必要以上にかまうな」

「あれ？アデレイってば焼きもち？」

「…」

「そんな目で睨まないでよ。…だってさあ…正直に言つとさあ、アレイが人に興味を持つ事なんて珍しいじゃない。だから僕もお近づきになっておいたほうがいいと思うんだ」

「…言っている意味がわからん」

「そんな事言つて、わかつているくせに…。それに、彼女もこれらの君との関係を見ると、僕という味方をつけておいたほうが、彼女の為でもあるし、保身だと思うけど」

「……」

内心、『彼女とこれからの君との関係』とやんわりと指摘したけど、沈黙を決め込んで否定しなかった事に気付いて、窓辺にたたずむ、長年の親友を見つめ、微笑んだ。

その笑顔とは裏腹に何もなかったような態度で、窓辺から離れ、部屋から出て行く親友の後ろ姿に軽く手を振る。

きつと先程部屋から退室した彼女を追いかけていったのだろう。そんな親友の後ろ姿を見ながら、残された部屋で一人苦笑した。

16 心配と謝罪と責任と

ラインの部屋から退室し、さてお次は厨房のお手伝いかなと思って歩を進めっていると、

「おい」

背後から、声が聞こえる気がする。しかも、最近とつてもよく聞くこのお声。なんだろう、何か用事かな？と思つて背後を振り返ると例のごとくアデレイだ。

「はい？」

なんだろう、なんか用事でも言いつけられるのだろうか？そう思つて見つめると当の本人のアデレイの顔は少々困惑気味だ。

「見せてみる」

そう声がしたと思つた瞬間、私の腕はいきなり掴まれ、袖をまくりあげられる。一瞬の事で、身動きのとれなかった私は、びつくりを飛び越して思考停止だよ。

「…赤いな」

そう呟いたアデレイの視線の先は、先ほどアデレイに掴まれた私の

左腕。いきなりだったから、力の加減が出来なかったのだろう、指の跡が多少、残っていてうつすら赤くなっていた。だけど、痛くはないので、あと一時間もすれば、きっと跡は消えるだろう。だから

「大丈夫。痛くもないし。あと一時間ぐらいで消えると思うわ」

私の腕をまじまじ見つめるアデレイに、腕じゃなくて顔が赤くなりそうだよ。というより、そろそろ離して欲しいんですけど。

「あの…」

さすがに、いきなり腕を引っこ抜いては、失礼かと思って、そろそろ解放してほしい空気を出したが、アデレイは、そんなのどこ吹く風だ。

『離して！アデレイ！腕の脱毛は、ここ1か月ぐらいさぼってるの！』

ああ、そう叫べたら、どんなに楽か。しかし、アデレイは、何が面白いのか、まじまじ見てる。なので、強行突破でゴー。

「はい、はい、もう、おしまい」

そう言うと、私は、アデレイから腕を抜…こうとしたが、アデレイは離してくれなかった。ちょ…アデレイってば、どういつつもり？

「細い」

「は？」

彼は、感心したように呟く、

「俺の手で容易く掴む事が出来る腕の細さだな…。きっと、骨を折る事も容易いんだろうな」

ぞおおおっ！

やめてっ！何を考えてるの？まさか、本当に出来るかどうか、実験

がてらに、私の腕をやっちゃわないよね？あ、ポキツとな…みたい
な。

折られちゃたまらんと、必死の形相で腕を引っ張りぬく私に、すご
く真面目な顔して

「冗談だ」

笑えねーし。

しかも、冗談なら、もっと笑って言えー！

「ちょっと、アデレイ、わざわざそんな冗談言いに来たの？私忙し
いんだけど…」

「いや、部屋を出るときに、腕をさすっていたので、気になった」

え？

もしかして、さっきの力強く腕をつかんだ事、彼なりに反省し、謝

りに来てくれたのかしら。
私はアデレイに常識というものが、あるのだと感動し、謝罪の言葉を待つ。

「
……」

「
……」

しばし無言でお互いに向き合ったが、一向に、謝罪の言葉が出てこない。その攻防戦に私のほうが痺れを切らしてアデレイに尋ねる。
私はお仕事中で忙しいのだ。

「……たしかに腕を、強く掴まれて赤くなつてちよつと痛かったわ。
……で??」

謝罪の言葉をアデレイの口から聞けるかと期待して待っていた私にアデレイは、蒼い瞳を揺らして口元にも笑みを浮かべ、上機嫌のやけに優しい声で私にささやく。

「わかった。責任はとるつもりだから安心しろ」

「は？」

責任って何の責任だ？思わずツツコミたかったが、間髪いれずに

「いえ、結構です」

そう告げると、その場を早々に立ち去る事にする。やっぱり彼に謝罪という言葉はないらしいという事を知った。そして彼の責任と云う言葉の意味も聞いちゃいけない気がした。

今日も大量収穫祭り。

私は、赤く実ったミニトマトを摘み籠に入れる。それでもってここ最近ではマーサさんだけではなく、アドマさん、カリアなど他のメイド仲間にも配っているのだ。
トマトを食べた皆の感想は

「みずみずしくって美味しい」

「ちょっと酸味があるけど美味しいね」

と口々に褒めてくれるので、私も段々調子にのりつつあり、畑もどんどんでかくなってきた気がする。

…いい加減このぐらいの畑の大きさに止めておかないと。

この前、ローディにも庭園であげたら、喜んでくれた。

それこそ、どっちがトマト？ってなぐらいに顔を真っ赤にして喜んでくれた。

…彼はそんなにトマトが食べたかったのか。それは、生産者としては嬉しい限りだわ。

本当はヒューストン伯爵にも差し上げたいんだけどね…。

けど、いきなり異世界からの食べ物差し上げるって、かなりハー

ドル高いと思うんだ。

変な話、伯爵との立場にもなれば見た事もない変なの食べさせられて体調崩す事があると思ひし。

調理人達は、ものすごく細心の注意を払って健康管理して日々の料理に挑んでると思うし。

それを私が「採れたて新鮮です」と言つてトマトを差し出したつて怪しいし、使えないよね。

だけど、いつかは食べてもらえるといいな。

無理だと思いながらもそんな期待を持ちつつ今日の収穫を終了した。

16 心配と謝罪と責任と（後書き）

ローディ、本編に帰ってきた。（笑）

いや不憫のお声が多くって。

どうせなら本編で不憫な役をやらしてもらおうかと（鬼）

なんて、先の事はわかりません。

意外にラストはローディと幸せな家庭とトマト農園築くかもしれない。

17 イメージと誤解

今日もお茶の時間に話が咲く。
話題はもちろん。

「ああ、本当に今日も素敵だったわ！ご子息様ってば！」

毎日、毎日、同じ話題でよく飽きないなあと思いつつもみんなはこの話題に飽きないらしい。

「今日なんて、私がお茶を淹れて差し上げたら『ありがとう』と言つて下さったのよ。それも笑顔でよ！もう、顔が真っ赤になってとるけそうだったわ」

メイド仲間のキャリアが、興奮して騒ぐ。そうか、本日のご子息様へのお茶出し権利争奪戦は、キャリアが勝利したのか。

何かをしてもらって、『ありがとう』と感謝の気持ちを口にするのは、人としてごく当たり前の事と、日本で育った私は思うけど、この世界では違うらしい。身分のある人は、身分が下のメイドなんて人とも思つて扱わない人もいるらしい。

その中で、ご子息様のラインはきちんと感謝の言葉など口にしてくれる。それでいて、あの容姿、それじゃあ人気が出るはずだな。

私も毎日食べてる焼き菓子に飽きる事なく、手を伸ばしつつ、ぼんやり考える。

「そう！ご子息様も素敵だけど、アデレイ様も負けてないわよ！」

同じメイド仲間が口を開く。きたきた。また、同じ話。

「えゝ、私はご子息様派だわ」

カリアが迷いなく答え始める。

「そりゃ、アデレイ様もご子息様に負けずに素敵な容姿だけど…。何だか、アデレイ様つてとっつきにくいつていうか、怖いんですもの。威圧感っていうか、強者のオーラみたいな。私達メイドなんて、視界にさえ入っていないみたいじゃない。ねえ？リツキ？」

「…んじつ？」

急に話をふられて、焼き菓子を口いっぱに含んでいた私は、答えようにも答えられない。

代わりに、他のメイド仲間が口を開く。

「そうかしら？私は、その人を寄せ付けない雰囲気もまた、貴族の持つ独特の威圧感でそれもまた魅力の一つだと思っわ」

焼き菓子を頬張りながら、心の中でツツコミを入れる。おいおいおいおい。

アデレイは、怖くも、威圧的オーラを身にまとっている訳でもないと思う。

人を寄せ付けないなどというイメージらしいが、私に言わせりゃ、アデレイは、早朝散歩を好み、毎朝畑へ顔だすような、老人体質だと思う。

なぜなら、あれから、しょっちゅう、私のトマト畑へ早朝顔を出す。しかも、私が行くと必ずといっていいほど先に来ている。

まったく、早く来ているのなら、先に水やりをしていてくれてもいいのに、ちつともそんな事を思いつかないらしい。

まあ、私も私で彼には期待をしてはいないが。そのくせ、ちょっと寝坊して遅れて畑に顔を出すと「遅い」などと文句を言う。

『あんた、何しに来てんですかい』

と、言ってやりたくもなるだろう。

まさか…

トマトを狙ってきているのではないだろうか。

盲点だったかもしれない。アデレイはトマトが食べたくて、畑に来ているのかもしれない。もし、そうなら、食べさせてやらない事もない。

だけど、早く言うてくれればいいのに、アデレイめ。しかし、「働かざるもの食うべからず」だ。私の丹精こめて育てたトマトは、アデレイが水やりを一回でも手伝ってくれたら、あげようかな。

うん、それが、いい。

毎朝毎朝、早朝から、トマトの観察に来ているとは、余程気にいったと思える。アデレイめ。もしや観察日記でもこっそりつけてるのか？

「聞いてる？リツキ？」

「あっ！ごめ…何？」

メイド仲間の楽しいおしゃべりを、まったくの上の空で聞いていた私は、正直に謝る。

「まったく！リツキってば！」

ちょっと拗ねた態度のカリアにえへへと笑って誤魔化す。

「そっいえば、アデレイ様って、どこのご出身なのかしら？誰か知

つてる？」

カリアの台詞に皆が一樣に知らないと言を振る。もちろん私もだ。

「アデレイ様に関しては、まったく情報がないの。ただ、ご子息様のご友人だっていうだけで」

きたー！ご友人説きたね。きっと、貴族の放蕩息子説が有望だと私は睨んだ。

「だけど、その謎なミステリアスな空気がまた素敵っていう子も多いのよ。あの容姿だしね」

そうかもしれない。アデレイは、口を開くと残念な人。だけど、美形だから許されている部分もあると思う。

「ねえリツキは、ご子息様とアデレイ様どっちが好み？」

「へ？」

幸いな事に、私が毎日アデレイのお茶を用意しているのは、彼女達は知らない。知っているのは、ごく一部のここを取りまとめている人達だけ。

それも、きつとご子息様の、ラインの計らいなんだろうなあ。このお屋敷に私が働きやすいように気を使ってくれてるんだろうな。

「どっち…って」

「そう！どっち？？ご子息様とアデレイ様」

カリアは興味津々の目を輝かせて聞いてくる。

ふと考える。そういえば私、恋愛対象で見た事一度もなかったな、あの2人の事。

自分とは、世界が違うってどうか……。いや、実際違うんだけどね。

「さあさあ、おしゃべりはここまでにして、仕事、仕事」

マーサさんの、お仕事再開の掛け声とともに、皆が一齐に、持ち場に戻るべく立ち上がる。カリアは

「えゝ残念。じゃ、リツキ、あとで聞かせてね」

につこり笑って、手を振って持ち場に戻るカリアに私も手を振って自分の持ち場に戻った。

美味しい紅茶を飲み、自分の持ち場に戻るべく庭園を歩いているとローディが私に気付いて近寄ってきてくれて、

「この前もらった果実のようなトマトはすごくうまかったよ」

そう言われて顔が嬉しさでばあぁぁと赤くなるのは私。

「しかし初めて見たよ。市場でもいろんな物、洋服とかアクセサリとか小物、それこそ野菜なんかも種類も豊富に売っているんだけどな」

…なんですと？

私はいきなりローディとの距離をつめて近づき、無理矢理、彼の片手を取り私の両手で掴み、彼の目を見つめて言う。

「お願いがあるの。ローディ」

離さないぞとばかりに握った手に力を込めた。

「あ…あ…ああ」

なんだか、ローディの顔が見る見る赤くなっていくような気がするのは気のせいかな。

「市場の場所を教えて欲しいの」

「そっ…それなら簡単だ。こっ…ここの伯爵様の土地から出て、丘を越えた向こうの街側だ。こっ…ここら辺の者なら誰でも知ってる

はずだ」

詳しく教えてくれたローディに感謝しながら、

「ありがとう！早速カリアでも誘って行ってみる！」

「え… いや… あの俺…」

私は感謝の気持ちを両手に込めてローディの手にさらに力を込めた。ローディの手は庭園を管理しているだけあって、日に焼けてこつこつしてまさに職人の手だと感じた。この手でこんなに綺麗で繊細な庭を造り出しているのね。

「じゃあ、もう行くね！お仕事まだ終わらないの」

「あ… 市場へは、なんなら…俺が…」

「大丈夫！気を使ってくれてありがとう！けど、お仕事忙しそうだし、邪魔しちゃ悪いわ」

「そ、そ、そんな…そんな事ないって！！」

ローディは、市場の場所だけじゃなくて、場所まで案内してくれようというのか。

なんて親切なんだ。だけど、彼の好意に甘え過ぎてはいけない。きっと彼も忙しいはずだろうから、

「本当にありがとう！カリアを早速誘ってみる！」

「え…あ…うん。…いやいやいや！俺と…！」

私は去り間際に手を振りながら笑顔でお礼を言って立ち去る。

「ありがとねー！ー！！」

さっそうと走り去る後ろ姿を見つめながらローディは、『待つてくれ』と言わんばかりに手を伸ばしたが

「あれ…俺と…俺と…俺と…」

「俺と…行こうぜ…」

その手を伸ばしたはずの彼女はもういない。

ローディの丹精込めて育てている薔薇だけが聞いていた。

18 正直者の私

部屋に漂う紅茶の葉っぱの香りに、満足したような顔を浮かべて飲む部屋の主に、私は先日のカリアの台詞を心の中で思っていた。

『ねえリツキは、ご子息様とアデレイ様どっちが好み？』

考えた事もなかった。元から恋愛偏差値は低いと言われてる私に、そんな事聞くほうが間違っていると思う。

窓辺から空を眺めながら、私の淹れた紅茶を飲んでいるアデレイは、私の思考はどこ吹く風と言った感じだ。

金の髪は、さらさらと光を浴びて輝き、蒼い瞳は宝石みたいだ。すつきりした鼻筋に、引き締まった唇。

身につけている洋服も、上品な着こなしの白い上着には刺繍が入り、腰をしめた黒いベルトの位置のなんて高い事か。足の長さがさらに際立つ。

改めて観察していたら、アデレイも私も見ていた。

「何を見ている？」

やばい、人間観察中、アデレイに気付かれた。

「えっと……。前に聞かれた事が気になって見ていたの」

一瞬不思議そうな顔をしたアデレイは

「何を聞かれたと？」

私は正直に、

「メイド仲間とお茶の時間にラインとアデレイのどっちが好みかって聞かれたから」

その言葉を聞いた瞬間、またもや愉快そうに笑うアデレイに、

「馬鹿正直だな」

「そうかな？」

とっさの事で正直に答えてしまった私。アデレイも笑っているし、まあいいか。

しかし、目の前で愉快そうに笑うアデレイを見ると、どこが、威圧的で怖いのか、私にはちっとも理解できない。ご子息様であるラインの友人であり、客人だという事で、本来なら私の態度は無礼にあたる。だけど、彼は、いつも楽しそうに笑っているし、今さら態度を改めるのもなんだかなあ…と正直少しの迷いはあったのだが、アデレイが『別に今のままでいい』と言ったので、あっさりそれに従った。

「それで、何と答えた？」

「え？」

「そっちの答えは、ぜひ、お聞かせ願いたいものだな」

そう言った瞬間、窓辺から離れ、アデレイが私に近づいてくる。

蒼い瞳は、私の瞳を見つめたまま、まるで獲物を捕獲するかのよう
に、じつくり私を追い詰めてくる。

なんだか、危険な香りがしてきた、まるで凶暴な肉食獣のようなア
デレイの雰囲気を一瞬で察知した私は、手にしたティーポットを迷
わず、ワゴンに乗せ

「では！私は忙しいので！失礼！」

片手でアデレイに向かって『来るなストップ！』とけん制しながら、
もう片方の手でワゴンを押し部屋から退室しようと試みる。

徐々に近づいてくるアデレイの気配を背後に感じながらも、必死で
お茶セットの用意されたワゴンを押しながら、扉へというゴール目
指して一直線。

なんとか、背後から獰猛な肉食獣が、迫ってくる空気に脅えながら
足を速める。だけど、このワゴンが重いつつ。

ゴールまで辿り着き、扉に手をかけた瞬間、肉食獣は、私の背後ま
で迫っていた。だけど、それに気付かないふりをしたまま

「失礼しました！」

そう扉に手をかけ、後ろを見ないまま退室しようとした時、扉に向
かって背後から一つの手が伸ばされて、必死にゴールの扉を開けよ

うとしていた私の行動は断念される。

オーマイガー！。

「こっちも見ないまま、部屋から出て行くのは、常識だと思うか？
それとまだ、質問に答えていないと思うが。お前は、いつも俺に常識とか、とやかく言うが、お前のその行動は、常識の範囲か？」

身長差のせいだろう、背後の、しかも頭上から声が降ってくる。

ハイ。そうです。いつもアデレイに常識とは何だとか、しつこく説教してしまいますが、そういう時は聞く耳もたないくせに、こーゆう場になると、常識という言葉を持ち出すのですね…あなたは…。

私が黙っていると、アデレイは、

「人と話す時は、きちんと相手を見る。いつもお前は言っていないかったか？」

扉を見つめたまま、背後のアデレイに振り向かない私に向かってアデレイは、言う。

この状況で後ろを向けてか？私の目の前には、扉。しかも、背後にはアデレイ。扉は、見事にアデレイの手で押さえられている。さて、問題です。ここで、私とアデレイとの距離は、どのくらいでしょう。

ピンポン。

はい、近い。

近いです。

めっちゃ近いです。近いというより、体がくっついてるんじゃないかと思うぐらいです。

なぜならその証拠に、アデレイの体温らしい熱が感じられ、なにやら良い香り、ベルガモット系の香水の香りがする。

アデレイは、後ろを向けと言うけど、今振り返ったら、アデレイがどんだけ至近距離まで近づいているのか、一瞬にしてわかるので、いやだ。

断固拒否する。しかも、この距離、絶対絶対セクハラじゃー！！

無理やり肩を掴まれ、アデレイのほうに向かせられる。私とアデレイの距離は、思った以上に近く、お互いの熱を感じとる事が出来る程だ。

頭一つ分、高いアデレイは、私を見下ろしながらも、扉にかけた手を離そうともしない。扉とアデレイに挟まれて身動きとれない私は絶対絶命のピンチだ。

そんな私の心境は、ちっとも気付いてないのか、おかまいなしなのか、私にすごく真剣に問う

「それで、お前はラインと俺のどっちだと答えた？」

まっすぐに見つめるアデレイの瞳は深く蒼い。まつげ長いなぁと、
内心思いつつアデレイの顔を見ながら質問の内容を自分の中で反芻
する。

ラインとアデレイのどっちが好みのタイプかって？答えは決まっ
ている。考えるまでもない。答えは一つ

「どっちもタイプじゃない」

「…」

正直に答えたら、さっきまでの蒼い瞳の真剣な眼差しに鋭い熱が宿
ったのを肌で感じた。

やばい、私、地雷を踏んだ！？

18 正直者の私（後書き）

しかし……リツキさん、正直者すぎます。

リップサービス、学びましょう。

19 正直者の結末（前書き）

19 正直者の結末

「どっちもタイプじゃない」

本人を目の前にして、あまりよく考えもせず思いつくまま言葉を発した瞬間、当の本人アデレイの蒼い空色の瞳は、真剣な眼差しの中、一瞬目を細めて不機嫌そうにゆがんだように見えた。

あれ？不機嫌？

もしかしたらの地雷スイッチオンに、私は慌てる。

アデレイは、無表情に何かを考えたまま、扉と私を相変わらずはさんだまま、その手をよけてくれない。

彼の爽やかでそれでいて力強い水しぶきをイメージさせる香水の香りは、彼と私の距離の近さを嫌でも認識させ私を落ち着かなくさせる。

アデレイは、私を見下ろしたまま何かを考えている風で動かない。この時初めてカリア達が言っていた威圧感とやらが少しわかった気がした。

いつものらしくないアデレイの様子に私は焦って

「あのさ、まずタイプじゃないっていうのにも理由があるのよ」

私は一気に弁解を始める。

「アデレイもラインも私には勿体ないっていうか。…まず、綺麗すぎる顔。そんなに綺麗で美形で一緒に歩いていたら絶対目立つですよ？」

そして街ですれ違う人、すれ違う人、皆が振り返るの。んで、『かっこいい』って思うの。

そしてそれから、隣にいる私を見て『男かっこいいのに、彼女は大事した事ないわね』って言われると思うの。下手すりゃ舌打ち食らうかも。

けど、これは、ごく自然でしょうがない事だとは思っただけさ、女としてプライドズタズタなのよ。ラインは、女の私より綺麗で可愛い顔立ちだし、それにアデレイの顔も整っていて美形な顔立ちだからさ」

…性格残念ですが。

私は早口にかつ、正直に考えを述べる。最後の一言は、言わずに心の中でだけ発した。

「だから、どっちもタイプじゃないわ」

威圧感を醸し出すアデレイは、私の答えに怒っているのかもしれない。

けど、これが、私の正直な感想。まっすぐに私を見つめる深い蒼い瞳は、私に対して怒っているのか、はっきりと感情は見えない。

「まったくお前は……」

そう言うときアデレイは笑いだした。あれ？ここ笑うところ？

「だから面白い」

そうですか。ありがとうございます。……ってか、笑うツボが違うアデレイに褒められてもなんとも微妙だけど。

「前から思っていたが、自分の考えをはっきりと言う。嫌なものは嫌で、好きな物は好きと、はっきりして見ていて心地よい。」

駄目なものは駄目と俺の目を見てはっきり物を言う。そんな奴はあまりいなかった」

…そつか。だからアデレイ性格そんなになっちゃったんだね。

これまた私の心の声ね。

「なぜそう堂々と自分の意見を言える？」

「それはきつと育った環境だと思うわ」

「お前の育った環境とはどんなだ？」

「基本的に身分の差はない。男女平等だし自由かな」

アデレイは、私の話に何だか興味を示したみたいだ。

そして、そのまま部屋中央にある上質の革張りソファを目で見て座るように訴えたので、そのまま従いソファに腰をかける。

アデレイも当り前のように私のすぐ隣のソファに腰をかけたので、

『なんでわざわざ隣なの？話す時は目の前じゃないの？』

という私の質問を全く無視して、

「さて、育った環境とは？」

と、こうきたもんだ。でたね、マイペース。

こうして私はアデレイに私のいた世界の事を話して聞かせる羽目になったのだった。

長々と話した気がする。

時間的に1時間ぐらい？

それは、やばい、それはやばいぞおお！

アデレイが、いろいろと質問をしてくるので、ついつい話しこんでしまったのだったけど、私の本来の業務をつっかり忘れていた。おおー掃除をせねばああ。アドマさんに怒られるうう！

「じゅめん。アデレイ。私もう行かなくちゃ」

いきなり席を立った私を見て、少し残念そうに眉をひそめて

「ああ…。続きは、また明日な」

軽く手を上げた。

ええー？また明日ですか？そんなに面白い話しをしましたか？私って？最初は、ただ、自分の産まれた国についてだった。ただそう難しい話じゃなかったし、普通の私の暮らしなど、生活の習慣とか、普通におしゃべりしていたっていう感じなだけで。ただ、そのうちアデレイのほうで、いろいろ質問をしてきたから、自然に答える形になっていたのだった。

「…ああ、そうだ」

何かを思い出したように、一人呟いたアデレイは、ソファに座る私より、先に立ちあがり、私に手を差し出す。

なんだ？私にも手を出せと？何かお菓子でもくれるのか？

そう思い、私もアデレイのようにアデレイに手の平を向けて差し出す。

「……………」

どうやら無言のアデレイの反応を見ると、この対応は違ったようだ。

「…手をとろう」

ああ！そういう事が！

手を差し出してくれるとは、アデレイもレディファーストだのう。そう思いながら、大人しくアデレイの手を取る。アデレイが私の手をすっぽりと包む込む。アデレイの手は想像より大きく、それでいて力強く握ってきたので、愚鈍な私でもドキドキしてしまった。

ふいにその手を一瞬、強い力で掴まれ、よろけて転びそうになる私を支えながら、アデレイは耳元で囁く。

「お前は俺をタイプじゃないとはつきり言いきったが、俺は決してそうではないからな。…覚えておけ」

ビックリして、弾かれたようにアデレイの顔を見ると、アデレイは、蒼い瞳を宝石みたいに輝かせて笑った。

19 正直者の結末（後書き）

しかし、アデレイ実は内心『ガーーン』とへこんでたのかもしれない。

見せないだけで（笑）

それなら愛い奴（笑）

20 女の子のお買い物

今日はお休み、カリアと共に市場へ来ていた。カリアに『市場に行きたい』ってお願いしてみたら、喜んで一緒について来てくれた。拳句の果てに『まだ行った事なかったの?!』って驚きもされたっけ。

すごい人ごみと立ち並ぶお店で活気づいていて、見ているだけでわくわくしてきて、テンションが上がってくるのが自分でもわかる。

「これかわいい!」

カリアがアクセサリのお店に入って、シルバーの花のブレスレットを見てはしゃいでる。細かい細工で出来ている可愛い花のブレスレットは、試しに身につけてみるカリアの細い腕によく似合っていた。

「私は、こっちのデザインも素敵だと思うわ」

私はシルバーでクローバーの模様のネックレスを見て、手に取って

みる。すかさずキャリアが

「そのネックレスもかわいい！」

私が目にとめたネックレスの可愛らしさに同意して、うなずいてくれる。そんなキャリアも花のブレスレットがよく似合っている。

「かわいいね。…ね？自分へのご褒美に買ってもいいんじゃない？そのブレスレットよく似合っているよ」

私の提案にキャリアは、少し悩んだ顔をした末、

「えー。でもちよつと高いなあ。もう少し考えてみる」

どうやら、キャリアは少しお財布と相談するみたい。そうだよ、いろいろ見て回ってから最終的に決めてもいいんじゃないかな。まだ時間はたっぷりあるしね。

私とカリアはとりあえずキープと決めて、他の店も見に行く事にした。

やっぱり買い物って女の子同士だよな。

同じものを見てはしゃいだりする事が出来るし、可愛くて綺麗なモノをみているだけでもストレス解消の場になるし、この感覚、男の人と分かち合うのって結構難しいと思う。

一通り市場を回ってみた後、私の足はすでに棒のようだ。

カリアと共に腰をおろして飲み物を買って飲んだ。新鮮な果実の絞りをたて100パーセントフレッシュな味がしてとても美味しい。

座りながら眺める市場の風景は、いろいろな人が行き交い活気に溢れていて、心が楽しくなってくる。

ひと休みした後、私とカリアはもう一度それぞれのお目当ての店に行くべく、別行動をする事にした。

「じゃあ、ちょっと別行動ね」

「うん、またここに集合ね」

私とカリアは、それぞれが気になっていたあのお店にさあ行こう。時計台で時間を確認し、待ち合わせ場所と時間を決めてそれぞれの目的の場所へと向かって行った。

「見て！ちょっと高かったけど、日頃の自分へのご褒美に勝っちゃった！」

カリアは腕に光るシルバーの花のブレスレットを嬉しそうにはしゃいで見せてくれた。

「うわ！かわいい！良い買い物したねっ！」

カリアの腕に光るシルバーのブレスレットは、とても可愛らしい細工でカリアによく似合っていた。

「リツキは結局何を買ったの？…その袋さっきから気になってるんだけど…？」

カリアは私が大きい袋を携えて現れたから気になっているみたいだ。

「あつ？これ？」

私は袋からガサガサと音を出して引つ張り出し、私の戦利品をカリアに自慢する

「じゃーん！野菜の肥料！特大サイズ買った！」

そうなのだ！この市場の一番のお目当てはコレ！愛しのトマトに捧げる肥料。これを購入するのが、今回の第一目的ともいえる品物。

呆れたような眼差しで見つめるカリアは

「…すごい得意げな顔して見せるから何だと思えば…」

「へっへっへー、ずっと欲しかったんだあ」

半ば呆れ気味のカリアに向かって満足気に笑う。

「で、ネックレスは買わないの？」

「うん、肥料買ったからお金なくなったからまた次回にするわ」

あっさりあきらめた私に

「…まあ、リツキがいいならいいけどね」

とカリアは呆れたように苦笑した。

「やあ！二人で買い物かい？」

カリアと購入品をお披露目しあい、お互いがご満悦気分に浸って市場を歩いていた所、後方から聞き覚えのある声が聞こえてきて、カリアと私は声の主を確認する。

あ…ローディだ、ローディがいた。

偶然の出会いにちょっと驚いていると、

「俺はこの市場に叔父が店を出しているから、今日はちょうど休みだし、ちょっと店を手伝いにきたんだ」

なんだか赤い顔したローディを見つめながら、あーそうなんだ。休みの日なのに働き者だなあ、そう思いカリアを見るとなぜかカリアが今度は赤くなってる。…なぜ！？

急にカリアがローディに気付かれないようにこっそりと耳打ちをした。

「ちょっとリツキ、いつの間にローディと仲良くなったのっ？」

「え…？いつも庭園に花を選びに行くというよ」

「そんな、あつさり『いるよ』みたいな、どこからか、わいて出たみたいな言い方して！」

「だっているんだもん」

「あー！もう！そんなだったら、私が毎回庭園に花を選びに行けばよかったー」

もしかして…カリアってば、ローディがお気に入り？ええええ。そうなんだ、と私はカリアとローディを慌てて見比べる。

カリアは、19歳で赤毛がふわふわしていて、本人は癖毛で嫌らしいけど、私的には、ボリユームがあって自然なパーマでうらやましい。

笑うとえくぼが出来て、そばかすなんか魅力的なチャームポイントだと思う。

性格は文句なくの明るくて面白いムードメーカー的存在だし。私が男なら文句なく『俺の嫁』宣言していたかもしれない。

カリアの視線の先のローディは…と言うと、

たくましい体つきで日焼けして健康的。なんだか人の良さがにじみ出ているような優しい顔つきだし、お礼を言った後などの、本当に嬉しそうに顔を赤らめて笑う顔はどこか可愛らしいと思う。

性格は何よりも優しい。何しろ、毎回庭園での花選びを付き合ってくれる。きっと面倒見のいいお兄さんタイプだと思う。

何だが、こうやって改めてローディを観察するのは初めてかもしれない。

こう改めて見ると、ローディもカッコイイと言われる部類の男性だという事に気づく。

日頃、アデレイやご子息様のラインを見ているので、私のイケメンセンサーはどこかマヒしていた事に改めて気付く。

ローディを改めて人間観察していると、ローディは、相変わらず顔を赤らめて提案してきた。

「もうご飯は食べた？この先にすっごい美味しい屋台のランデがあるんだ」

「え？ランデ？食べたい！ねっ？リツキ」

ローディの提案にカリアが目を輝かせて私に意見を求める。

「ランデって…？」

初めて聞くランデとう食べ物について二人は教えてくれた。

なんでも、羊肉を秘伝のソースにつけて焼いてから、新鮮な野菜をはさめて、またソースをかけて、パンで包んで焼き上げるという、こちらの伝統料理らしい。

たっ… 食べたいっ！

思わずヨダレが出そうになる程食べたい気持ちを抑えつつ私は、あの行動を取る事を決意する。

「あっ！私、買い忘れた物があるんだっ！」

思いだしたかのように、いきなり言い出す。

「じゃあ、それ買ってくるまで待ってるよ」

「いやいやいや大丈夫!」

相変わらずのローディの優しい申し出に、心配も無用とばかりに慌てて手を振る。

「あとは若い二人で楽しんで!」

「…そう変わらない年だと思っけど?」

何言ってるの?といぶかしむカリアに、なんだか、あわあわするローディに向かって私は

「じゃーね」

手を振って走りだす。途中ローディが手を伸ばし何かを言いかけたが、

『グッジョブ』

と、親指をたてた私なりの声援を眼力と共にローディに送って、そのまま市場の人ごみへと消えて行った。

21 私のいた世界について

窓から眺める外の世界は、珍しい事に雨が、ざあざあ降っている。この国に来て、雨とは非常に珍しい。基本天気は、晴天だ。

だから、この国では『恵みの雨』とも言うらしい。雨に当たって窓から見える外の木々も心なしかホツと一息ついているような印象にも見えなくてもいいかもしれない。

きつと喜びの歓喜の声を上げている事だろうな、

私のトマトちゃん達も。

「よく降るな」

私は、広い窓から、庭をぼんやり眺めていたらふいにアデレイが声をかけてきた。

あれから、私の国の話をアデレイにしたら、いたく興味が引かれたみたいで、毎日お茶の時間は、質問ぜめだ。

私の住んでいた国について、聞かせてくれ、と。

余程興味があるらしく、いろいろな事を聞きたがる。まあ、感覚的には、外国の事を聞くような感じなのかな。まあ気軽に旅行でも行ける場所でもないしな。

もつとも、そんな気軽に旅行に行ける距離なら、とつくに元の世界に帰っているわ！

という私の心の一人突っ込みをアデレイは知る事はなく、今日も私によるアデレイの為の『私のいた世界』について講義が始まる。

「お前の国では、雨はあまり降らないのか？」

「ううん。こっちの国よりはもっと降るよ。年間を通して雨季というのがある、その時期は、すごく降るよ」

「ほう。こっちでは恵みの雨とも言われるが、そんなに降るとありがたみもないか」

「そうだよ、あんまり雨が降ると川が氾濫したり災害起きるし！」

それに、あと雨が多いと洗濯物も乾かないんだよ、生乾きの臭いっ

て最低！と言ったら、アデレイはその綺麗な整った顔を一瞬『？』な顔したのち、軽くその話題についてはスルーされた。こんな調子で、毎回たわいもない会話だけど、日々のお茶の時間は過ぎて行く。

「リツキ、前にも聞いたな。お前の国には身分制度はないと」

窓辺で雨の雫を眺めていたアデレイは私に問う。アデレイの本日のお召し物は、黒のパンツに黒の長い上着を羽織っていて、中に着ている白いブラウスは、ボタンをラフに3個程開けていて、胸の肌の露出が多い。ハニーブロンドの柔らかそうな髪は、その首筋に絡んでいて、そうやって窓辺で雨の降る様子を眺めている姿も、なんとも言えない妖艶というか色気が漂っていると思う。

対する私はアデレイに勧められるがままソファに座り、焼き菓子をほおばっていた。

アデレイに焼き菓子を勧められて最初は、遠慮してたけど、アデレイはちつとも甘いお菓子を食べない。食べてもほんの一口とか。

そのまま破棄に回る事を知っている私は、もったいないのエコの気持ちでこうやって毎回食している。

「ん？ないよ。基本的に。人類皆平等を掲げている。…だけど、お金持ちと貧乏の差は、あるよ。やっぱりね。けど、お金持ちだろう

が、貧乏だろうが、人としての権利は平等をうたっているよ」

「婚姻関係は？」

「ああ結婚？それも自由だよ」

私は、手に持っていた焼き菓子の残りを口に頬張る。

「自由とは？」

私の返答を聞いた後、驚いた顔をした後、いたく興味がひかれたみたいで、アデレイが再度尋ねる。

「結婚するもしないも自由。相手を選ぶのも自由だよ」

お話しながらも、口は動かす。ちよつと行儀悪いけど、この焼き菓子、美味しくてやめられない、とまらない、その魅力はかっぱえびんみたいだ。

この、アデレイめ。いい焼き菓子食べてるなあ。

「自由に将来の伴侶を選べるのか」

「そうだよ。だって、結婚つてずっと自分が一緒にいたいから、明るい家庭を作りたいと思った人と一緒になるんじゃないの？この国の人はどういう考えか知らないけど、少なくとも私はそうだよ。誰かに決められて結婚するなんて、嫌だよ」

いちおうこんな私でも結婚に夢を持つというか、ちょっと語ってしまっただ。

だって、好きでもない人と何十年も一緒に暮らす事、あんな事やこんな事なんてして、おまけに子供まで作るなんて事、想像できないというより、嫌いな奴とそんな事しなきゃいけないなら、一生独身で通す！無理して結婚するよりも、逞しい老後を夢見て、貯蓄に励むわ。

アデレイは、私の話す『私のいた世界』について、その都度いたく感心し、興味を寄せる。こんな幸せそうな国でも、さすがに文化の違いは大きいだろうしな。

「あっそうそう。基本的には、結婚相手はもちろん一人だよ」

アデレイは窓辺から、私を見つめる。なんだか、いたく興味が沸いている模様で、胸元がはだけ気味な格好から、真っ直ぐに私を見つ

める蒼い瞳は、愚鈍な私でもドキリとした。
ちよ…その無駄にダダ漏れ色気を押さえてくれませんか？

私はアデレイの色気を見捨て、話を続ける。

「この国の貴族間では、一夫多妻制とか？政略結婚とかあるかもしれないけど、私のいたトコでは、夫一人に妻が一人。そして結婚するもしないも自由だよ」

「…自由な発想だな」

「そう？私的には、普通な感覚だよ。両親もそうだったし。むしろ、自分の結婚した相手を誰か他の女性と共有する事が私には耐えられないと思うわ」

ふと、思い出す。こつちの世界に来る前に夢中になって、読んでいた日本の大奥のお話の小説！

そこには、一人の殿の寵愛をめぐって、めくるめく愛憎入り乱れた世界！

おお怖い！小説のおもしろさに、最後まで一気読みしてしまったが、昔の日本の大奥もすごかったのだなあ。殿一人に、何十人という姫が集められて、まさに女の闘い。

小説の内容を思い出してビビりして自分の両腕をさすっていたら、ア

デレイは、黙って私を見つめていたのに気付く。

「…とにかく、私のいた国では、一夫一妻。そして、お互いが好きな相手だよ」

「…そうか」

「そうだよ。だって、それが一番お互いが幸せじゃない？」

そう言っ、私は焼き菓子片手にアデレイに向かってにっこり笑った。

さっきから窓辺で黙ったままのアデレイが、真剣に何かを考えている様子なので黙って見守る。
窓辺に手を添えて、片方の手で顎のあたりを押さえて考えこんでいる様子は真剣なご様子。

そんな真剣な何かを考えている顔つきも見てみると、そのうち、真剣に『日本に行ってみたい』とか言いだしそうな雰囲気な気がしないでもない。

そうして、浅草あたりに行つて、どこぞの外国人みたいに、写真を撮りまくり、レトロな模様の入ったＴシャツなんかも購入して『オー、スーシー』なんて、言いながら寿司を喜んで食べるのだろうか。おまけにレトロ模様なＴシャツを購入したあげく、ズボンにインしていたりしたらどうしよう。

アデレイの外見とのギャップとで、その様子を想像しただけでくらくらする。そして悲しすぎる。

私の視線に気付いたのか、アデレイは

「何だ？また何を一人で考えている？」

いぶかしげなアデレイのその視線を、私は哀れみを含んだ瞳で見つめ返す。

大丈夫、アデレイ。

もし日本に行く事があつたなら、私が観光案内してあげる。そして、レトロなＴシャツの購入も、はしゃいで寿司を食べる姿も阻止してあげよう。

道行く人の、強いては乙女の夢を壊してはいけない。なぜなら、アデレイは、見た目は美形、異国の王子様のようなだから。

私は心に固く誓ったまま、いぶかしげな顔のアデレイを部屋に残して、焼き菓子も美味しく頂いた事だし、今日の『私のいた世界』講座を終了した。

【番外編】 トマトと私とあのひと（前書き）

番外編です。

【番外編】トマトと私とあの人と

トマトトマト

ああ、私のかわいいトマトちゃんたち。真っ赤にプリプリの可愛いほっぺで、食べごろまであともうちよつと。

あれからトマトもだいぶ、実をつけて、大収穫の時までもうちよつと。今では、早朝の水やりはかせない仕事のひとつ。

成長期だもんね！もりもり食べないとね！お水だけどね！

そんな思いを抱きつつ、朝のお水やりに精を出す私。一面に広がる私のトマト畑、私の秘密の花園に実る赤い宝石達よ。

私は、我が子の成長を楽しみにするかのよう微笑ましい気持ちでトマト畑を見渡す。

「もう少しだな」

.....。

そうですけど、それが何か？

「どんな味がするのだろうか、楽しみだな」

……トマトですけど。

そして、あなたは何で楽しみと？そこで私はクルリと後方の声の主の方向に振り向くと、

「あげるなんて言っていないよ」

ちよつと意地悪を言ってみる。言われた本人は、ちつとも気にした風もなく、風になびく金の髪をかきあげて笑った。

ここは、毎朝恒例のトマト畑。いつもの水やり、いつものトマト。そしていつものアデレイ（なぜか）。

今日もアデレイは、何を手伝うでもなく私の水やりの時間にここに

来る。

「あのね、アデレイ。私の国にはね、『働かざる者食うべからず』
っていう言葉があるの」

アデレイに言ってみても、彼は何がおもしろいのか愉快に笑うだけ。
何がそんなに面白いのか全くわからないけど、私という時のアデレ
イは笑い上戸だと思う。

「だからね、アデレイ。欲しかったら、働かないと駄目なんだよ。
タダでは、手に入らないんだからね。物事はなんでも努力しないと
手に入らないんだからね」

笑っただけのアデレイにちょっと説教してみる。

「まあ、まったく聞いちゃあいないだろうから、こっちも真剣には
言っていないけど。」

どうせ言ったところで彼には無理無駄、馬の耳に念仏。アデレイの
耳に説教だ。

「…努力はしてるんだがな、手に入るように」

アデレイは、笑っていた顔をこちらに向け、不意に真剣な顔つきで言う。

アデレイの蒼い瞳は、真剣な眼差しで、私に真っ直ぐに向けられる。

「はー？アデレイなんて毎日見てるだけじゃん」

そんな真剣で熱を帯びたような瞳を急に向けられて、熱意を語られても私的には何の努力なのかちっともわからない。
私が反論すると、

「この時間が一番ゆっくりで誰にも邪魔されないからだ」

…全く、毎日毎日、トマトの成長見に来るぐらいならお世話してみれば良いのに。

もしかしてアレか？アデレイは、私の憶測どうりにトマトの観察日記でもつけていたりして。ありえなくもないトマトに対するご執着っぷりに私は納得した。

だけど、黙って見ていたって食べれるようにはなりませんからね！あきれ顔な私に、

「…だけど、まだその時ではないらしい」

微笑しながらも、ぼつりと漏らしたその言葉に

「そうだね、まだ先かなあ。もうちょっと赤くなってからね」

私は愛しのトマトを眺めて呟いたら、その様子を見ながらアデレイは苦笑した。

【番外編】 トマトと私とあの人と （後書き）

リツキさん、相変わらず激鈍です。

彼の言葉の深い意味を探ろうとも思わないご様子です。

22 来客対応

先日の恵みの雨とはうってかわって、本日は晴天なり。

やっぱり晴れてお日様が出ている日は心も軽くなる気がする。

そんなうきうき気分だった午後にとよとした事件は起きた。

本日、午後のお昼を済ませていつもの皆とのおしゃべりタイム。

そんな時に、事件はやってきたのだった。

いきなり女中頭のアドマさんが皆を食堂に集めて、話をしだした。
話を一言簡単にまとめると、

「本日午後から、急なお客様がいらっしゃるので、準備にとりかか
るように」

との事だった。その一声がまるで合図かのように、皆が一斉に持ち
場へと戻り、各自来客準備を開始した。

さすが、これだけの大きなお城では、急な来客にも手慣れた対応。
もつとも忙しいのは、このお城で開かれる夜会だそうだ。聞けば、
数百人とも集まるとか。

夜会なんて、まるでシンデレラの世界みたいだ。

初めての来客体験で、私は皆の足を引っ張らないように、カリアに
ついて行くので精いっぱい。

まずは、カリアと庭園に花を摘みに行く。今日は、いつもより多く
の場所に花を飾るそうなので、花の良い香りのする緑の庭園へ、カ
リアと二人出かけていく。

「なんでも今日のお客様は、女性らしいわよ」

カリアが仕入れてきた情報を聞く。さすが、カリア情報早いなあ。

「女性？」

「そうらしいわ。しかもわざわざ侍女付きでいらっしやるっていうから、ひょっとしたら、しばらく滞在なさるかもしれないわよ」

「ふうん」

誰のお客様かはわからないけど、何だか、少し大変そう。

「じゃあ、私は向こうで花を選んでくるから、リツキは、あっちね」

カリアは、私にそう指示してさっさと向こう側に行ってしまったので、私はカリアに言われたとおりの方向へと足をすすめて花を選抜する事にした。

さあ、どれにしようか。

ふと、庭園にいつもいるはずのローディの姿を探してしまう。
彼がいればお勧めの花を教えてくださいるので、一発なんだけど…。

自然に彼を目で探してしまう。

だけど、探してみても庭園のどこにも彼の姿はなかった。
いつも彼の方から、声をかけてくれて花の選別を手伝ってくれるけど、今日は忙しいのかもしれない。

ふと、彼の好意にいつも甘えてばかりの自分に気付く。

きつと彼は優しい人だから、私が困って悩んでいるに気付いて、見るに見かねてアドバイスをくれていただけなのだろうな。自分の仕事も忙しいのに、私の為に時間をさいていてくれたのだろう。
そんなローディの優しさに改めて感謝しなければ。

ローディを自然に目で探してしまう自分だったけど、今回はあきらめて自力で咲き頃の花を選ぶ事にして、庭園を探索していると、不意に前方の人影を確認する。

「やあ、リツキ」

思いもよらない人物と庭園でばったり出くわしたので、少々驚いた。

「こんにちわ。お散歩ですか？」

「ちよつとね。リツキはお仕事中？」

「お客様がいらっしゃるらしいのでその準備です」

「そうだね。急な来客だから、色々皆に迷惑もかけると思っけど、
よろしく頼むよ」

そんなご子息様であるラインのもったいないお言葉を聞き、初来客
の対応に頑張ろうと思う。

そそのないよう、伯爵様とラインに恥をかかせる事のないように、
精一杯振舞うでしょう。

…と言っても影の働きだけだ。

お客様に満足のいけるサービスを提供できるように努めます！

「そうそう、アデレイを見かけなかった？」

「え？見かけませんが… お探ですか？」

「…そっか。ちょっとね…探していたんだけど…まあいいか…」

独り言のようにつぶやくラインに、うつかり

「だけど、今朝は見かけましたよ」

と言った後で自分で気付いた。もしラインに

「どこで見かけたの？」

なんて聞かれたらどうしよう。

『いつものトマト畑でトマトを観察してました』

なんて言ったら最後、いろいろツッコミどころ満載だと思う。
すみません、すみません、伯爵の土地を無断で借用してます。
強いてはいずれは、ご子息であるラインの土地になると思いますが、
見逃して下さい。

ラインは不思議そうな顔をして、

「朝に？アデレイを見かける…？」

やばい！私やつぱり余計な事を言った！自分で自分の首を絞めてる
結末？冷や汗をかきながらも

「はい。毎朝見かけますが」

うおおおおお！

さらに余計な事を言った！『毎朝どこで見かけると？どこで？』

…なんて、質問されたらどうしよう。

というより、質問して下さい、と自ら言っているようなものじゃないか！

自慢じゃないけど、墓穴を掘るのは私得意なの！！

私の苦笑いを不思議そうな顔で見ていたラインは、一瞬、驚いた顔
をしてから、少し考え込んだ様子だ。

すみれ色の瞳は、穏やかに優しい色を浮かべつつも、まるで面白い
事を知ったかのような笑みを浮かべて

「アデレイを毎朝見かけるの？…へえ…」

なんだか、一人で思うところがあるのか、笑いを止められない様子のラインを見て、何が面白いのかちっともわからない。

「僕の知ってるアデレイは、ものすごく朝に弱い姿しか知らないけど」

愉快そうに言うラインは、なぜか嬉しそうだ。

「なんでだろうね？そんな彼が早起きする理由は」

そこで、まっすぐにラインは私を見つめる。スミレ色の瞳は、きらきらと輝きながら、私は問われて、少し考える。

誰が朝に弱いって？アデレイのどこが朝に弱いのだろう。私の中でアデレイは完璧朝型人間ですが。

… もしや、トマトか！？トマト効果か！？

食べるだけでなく、見ていても健康に良い新たな健康法か！アデレ

イ、身を持って実践か！

「とっても、興味のひかれる何かの為かもね…」

そう言つて、ふいにラインは一步私に近づく。ラインは私より身長が少し高いぐらいで、その顔が近づいてくる。

中性的とも言える男性にしては、かわいらしい顔立ちだと思う。やわらかな栗毛にスマイレ色の瞳は、優しくに輝き微笑んでいる。笑みをたたえた唇は、赤く小さめだ。

そのラインが、近付いてきたので、私は心臓がドキリとして反射的に後ずさりそうになる。

「髪についてるよ」

「え…？」

ラインは私の髪についていたらしい一枚の葉を取って、私の顔の前に持って来て、見せてくれた。

「ありがとうございます…」

お礼を言って顔をあげたら、顔を上げた視線のすぐ先にラインの顔があつてその近さにびっくりする。

ラインは私より、身長が少し高いぐらいなので、自然に顔の位置が近くなる。

その息遣いが、感じられる程の距離に私は顔を赤らめる。そしてそのまま私は下を向く。

距離の近さから感じられるのは、爽やかな甘めの香り。いつもはアデレイのベルガモット系の香りに慣れているので、いつもと違う香りに私の心臓は高鳴る。

ラインは、私の長い黒髪を一房掴み、

「流れる神秘的な黒髪に、意志の強そうな黒い瞳は、恐れを知らずに真っ直ぐに見つめ返してくる。異国の雰囲気を持つ美しさに興味をひかれるのは、彼じゃなくても理解できるよ」

そう言いながら私の髪を離し、そのまま私の頬を、その柔らかい手で撫でた。

あまりの出来事に私は、顔が真っ赤になってしまった。

こっちの世界は、こーゆう恥ずかしい事も余裕でしてしまうお国柄なんでしょうか！？

この場合、私の対応は、どうしと！？

もしやここはアメリカンスタイルで、これはごく普通の事なの！？

混乱していたら、ラインは笑って、

「リツキ、真っ赤だよ」

その言葉にますます真っ赤になる私。照れるに決まってるでしょう！
ラインは、笑って

「そんな、リツキもかわいいね」

更に、私の顔面はヒートアップ。ゆでダコ…ゆでダコにするつもり
なの？あなた様はっ？

その時、遠方から私を呼ぶ声が聞こえた。カリアだ。
助かった！神のお助け！

その声を聞いたラインは

「呼ばれてるね」

と、笑顔でちよっぴり残念そうに肩をすくめて言った。

カリアに呼ばれている旨を告げ、挨拶をして立ち去ろうとする際、

「アデレイに知られたら怒られちゃうかな」

何だか苦笑しつつも楽しげなラインと、なぜここでアデレイの名前が出るのか疑問に思いつつもカリアの元に駆けつける。

そして花も選ばずに、手ぶらでカリアの元に戻った私は、カリアからお説教を食らったのだった。

22 来客対応（後書き）

リツキ、初めての来客対応って、見事にアデレイをカウントスルーしてますね。

さてさてライン、久々です。

可愛い顔つきですが、彼はなかなかのやり手です。

23 客人到着と私の予感（前書き）

23 客人到着と私の予感

「早く、早く！リツキ、急いで」

「ちよつ、待って、待って！カリア」

カリアに、呆れられ、怒られながらも急いで花を選び、フロアの全
てに花を飾り終えた後、玄関に出迎えに行く。客人は、もうすでに
到着していた。

この屋敷に仕える人の皆が出迎えにあたっているかのように見え、
玄関のフロアは人ばかりだ。
皆が笑顔で客人を迎え入れている。

こんなビップ待遇、受けるお方はどんなお方なんだろうか！。

興味がそそられ、私も人の垣根から、顔を出す。そして、客人の姿
を確認する。はしたないと思いつつも、だって興味あるんだもん。

客人は女性という情報から、きっと貴族とか身分のある女性に違
いと思つて。

私の興味とは、アデレイといいラインといい、美形が多いこの世界
で、貴族の女子というものは、どんな美しさなのか、興味津々だっ

たのだ。

毎日が結婚式みたいなドレスきて、髪型は金髪でくるくるロールのリアルベルばらを想像した。

そして、羽のついた豪華なうちわ…違った、おうぎ？センス？

何て言うのかわからないけど、その豪華なうちわを風にゆるがせてオホホと笑うのだろうか。

人の垣根から、何とかこっさり首を伸ばし、そこにいらっしやった客人を見て、予感的中。

髪型はクルクルたて巻きロールではなかったけど、赤が強めの茶色の髪は柔らかく自然なウェーブで背中まで波打っていて、瞳は髪の毛と同じ赤茶色の瞳。

パツチリとした二重にやや釣り目な瞳は、勝気な性格を予想できる。透き通った白い肌に、すらりと通った鼻筋、口端を上げて微笑み、なんていうか、大人の美しさというよりは、かわいいタイプだと思う。

服装は、華美ではないけど、ふんわりとした形の白いドレスで、とてもよく似合っていて、彼女の可愛らしさをよく引き出していた。年齢は、きっと私と同じぐらいだろうか？それともまだ十代後半だろうか。気の強そうな可愛い顔した少女が、そこにいた。

ヒューストン伯爵が笑顔で迎える。

「長旅ご苦労でありました、しかしよく来てくださった。しばらくご自分の屋敷と思って滞在されるといい」

につこり微笑むヒューストン伯爵の笑顔に私までクラクラきそうになる。やっぱり素敵だ、ダンディ伯爵。対するお嬢様もにつこり笑って

「お言葉に甘えて、しばらくお世話になりますわ、ヒューストン伯爵」

二人は、一通りの挨拶を交わした後に、

「それより…」

お嬢様が、何かを質問したそうに口を開きかけた時に、

「やあ。久しぶりだね。アルメリア」

扉をあけ、まっすぐに階段下の玄関のフロアに降りて来たのは、ヒューストン伯爵のご息子のラインだ。

ご子息様とお嬢様は親しそうだけど…という事は、ご子息様の友人か？アデレイといい、このお嬢様といいラインはご友人が多い。

「ラインナルト様」

お嬢様は、ラインの姿を見つけると微笑む。

ふむふむ、お嬢様はアルメリアお嬢様というのか。これは覚えておかないと。メモメモ。

「…だけど、本当に来たんだね…」

苦笑まじりのラインに、

「いけませんの？」

キツと強気な眼差しをラインに向けるお嬢様に、ラインは、やれやれといったため息混じりの様子だ。

「まあ、別に僕は構わないよ。気のすむまで滞在するといいよ」

「最初から、そのつもりですわ。…で、今はどちらに？」

「…さあ？」

お嬢様の質問に笑顔でさらっとかわしたご子息様。

…もしかして、…もしかしてですけど…ちょっと苛立っていませんか？ほんのすこーし、ほんのすこーしですけど。

いつもの素敵な笑顔の裏には若干黒い影が見えるような気がします。私は、そのやり取りを、ひやひやしながらも、観察する。

「把握なんて出来やしないよ。…君も十分知っていると思うけど。
…まあ、気のすむまでやるといい」

「そのつもりですわ」

お嬢様は不敵に勝気に微笑む。対するご子息ラインも負けてはいないけど。

二人の会話の意味は、私にはちっとも理解できなかったが、まあ関係ないので、スルーする。だけど、お嬢様は、何かしら目的があつてこの城にいらっしゃったという事はわかった。そして、ラインが実は、あまり歓迎モードじゃないって事も、何となく空気を感じてしまった。

その時、もう一人お嬢様の側に立つ人影に気付いた。お嬢様観察ばかりして、その隣に立つ男の人の存在は、まったく眼中に入っていなかった！

アウトオブ眼中とは、まさにこの事さね！

視力があまりよくないので、眼をこらして、改めて観察してみる。

隣に立つ男の人… というより、年は私より年下かもしれない。お嬢様と同じ赤茶色の髪の色して、くせ毛まじりで柔らかそう。そして、お嬢様と同じ、瞳の色も赤茶色だ。

… もしや、姉弟？ そういえば、よく似ているかもしれない。

雰囲気とか、生意気… おっと！ 活発そうなところとか。
対するこちらは、美少年という感じかな！

こうしてお嬢様と美少年を並べてみると、よく似ている。

なんと美しい姉弟かな。

感心してしまう。

感心して見入っていたら、バチリと目があつた、美少年と。赤茶色の瞳は、真っ直ぐに私を見つめる。

ヤバイ。客人なのに、見いつてしまっていた。こんなに見つめてちや失礼に違いない。

慌てて眼をそらし、人の垣根から首を引っ込めるも、目が悪いので、睨んでいたかのように見えたかもしれない！

リツキ、初めての客人対応早くも失敗か？

先程、伯爵とラインの為に頑張ると心の中で誓ったばかりではないか！

「部屋に案内させるよ。ゆっくり紅茶でも飲もう」

ラインの声にうなずくお嬢様。その側に立つ美少年と共に、案内役の執事のメリーストさんの後に続く。
ほっとしながらも見送りの為、後ろ姿を見つめていると、お嬢様の隣に立つ美少年が、後ろを振り返る。
そして、また目がバチリとあつてしまった。

え…えっと！

戸惑いを感じていると、美少年は、しばらく私を見つめた後、まるで『嫌なものでも見てしまった』とでも言うように眉間に皺をよせた。あきらかに不快そうな顔をした後、顔をそむけてメリーストさんの後に続いて行った。

な…何だ…あの態度！

『フンッ！』という態度をあからさまにとられて、ショックというより驚いた。
『フンッ！』でなければ、『チッ！』と舌打ちが聞こえてきそうだった。

何あれ！感じ悪いよね！絶対悪いよね！

そりゃ、私だって、客人相手に観察してたのは悪かったかもしれないけどさ！

メリーストさんの後ろに続くお嬢様と美少年を見送りながら、何だか嫌な感じがする。ひと波乱でも起きそうな予感。

私の予感よ、どうか外れて欲しい。願わくば、私には関係ありませんように……！

保身を考え切実に願った。

なぜなら、行動が意味不明な客人は、アデレイ一人で十分だから！間に合ってますから！

【番外編】トマトと私とあの人と？（前書き）

アクセス数が100万PV超えてました！
ユニーク数も20万超えてました！

ありがたい気持ちの番外編用意しました。

【番外編】トマトと私とあの人と？

本日は一人収穫祭。

カゴを片手に新鮮トマトを、もいではカゴに入れていく。

ずっしりとくる重さに、大量収穫を感じる。

だんだん重くなってきたカゴを片手に中腰の姿勢はツライ。
腰を痛めるかもしれないこの姿勢。腰は男の命ですよっと、な。
なんて、男といわず、女性も腰痛には注意でしょう。

中腰の姿勢から、起き上がると、不意にカゴを持つ手が軽くなる。驚
いて周りを見るとアデレイだ。
視線の先のアデレイの右手には、私がさっきまで持っていたカゴだ。
もしかして、私の為にカゴを持ってくれたの？

「ありがとう」

急に軽くなって腰も楽になったので、お礼を言う。

正直びっくりした。

だって、いつも畑に来るけれど、本当に言葉通りに『畑に来る』だけだったアデレイが初めて手伝いらしき事をしてくれたのだから。

アデレイは、笑顔で一つうなずいたので、そのままトマトを採ることに没頭した。

アデレイの持つカゴがトマトでいっぱいになったので、今日の収穫は終了。

側でカゴを持つアデレイに向かってお礼を言う。

「ありがとうアデレイ。お礼といっちゃあなんだけど、…食べる？」

そうだ、今日は初めてアデレイがお手伝いした日。働かざるもの食うべからずの精神にのっとりて今までちょっと意地悪してあげなかったけど、トマトを一つつまんで差し出す。

初めてのおつかい並みに、アデレイの成長に喜びトマトを一つ指先でつまみ、アデレイに差し出す。

真っ赤に熟れたトマトは、つやつやぶくぶくしている。

アデレイに、笑顔で差し上げるべく指でつまんで差し出すと、急に手首を引っ張られる。

痛い！！

…って言うより何！？

驚いて、つまんだトマトを落っこしそうになるけど、何とか持ちこたえる。

何するの？という視線と共にアデレイを見上げる。トマトを掴んだ手は、アデレイに手首を捕まられている。

アデレイは見た目は線は細いのに、手は想像よりずっと大きくて力強く、私の手首は、簡単に捕まえられている。

私の、視線を感じて、笑みを浮かべたアデレイは、そのまま私の手首を自分の唇へと誘う。

え… ちょっと！

そうして、そのまま私が指先でつまんでいるトマトを私の指から食べる。
指先にアデレイの唇の柔らかさが伝わってきて、心臓の動悸が高まる。

アデレイは、トマトを食べると

「みずみずしくて美味しい」

と私に向かって微笑む。

「アデレイ……」

私は手首を掴んだままのアデレイに、呼びかける。
アデレイは、満足気な笑みを浮かべたまま私に微笑む。

「ふ……普通に食べなさいっ！」

なんだ、その色っばい食べ方はっ！私のほうがトマトのように真っ赤になるわ！

おかげで、ドキが胸^{ムネ}胸^{ムネ}しちゃったわ！

…違う。

胸がドキドキしたわ！

【番外編】トマトと私とあの人と？（後書き）

昨日から引き続きクリスマスイブのまさかの連続更新：

ベ…別に暇な訳じゃあないんだからねっ！

拍手も久々変更しました。クリスマスバージョンです。

ベ…別に暇な（以下同文）

お付き合いありがとうございました。

24 お嬢様とお花

「部屋に飾ってある花を全部換えるように」

開口一番に女中頭のアドマさんから言われた時は、意味がわからずポカーンとしてしまった。

なんだ、なんだ、お嬢様は花粉症か？と。

その私の呆けた顔を見てアドマさんは再度言う、

「アルメリア様のお部屋に飾ってあるお花を全部薔薇に交換するよ
うに」

申し訳なさそうに伝えるアドマさんの言葉の意味を考えて理解する。

今日、客人をお招きする部屋に飾ったお花は白いプリメリアや薄いピンクのブーゲンビリアだ。私的には、色も清潔感あふれる白と可愛らしいピンクだし、香りも甘い香りで気に入っている花なのに、どうやらお嬢様のお好みとは違うらしい。

しかし、さすがお嬢様。

そこにある花の美しさより、自分が気にいった花以外受付ないとは、なんという完璧ぶり！目の前の花を楽しめばいいのに…。

まあ私たち凡人とは感覚が違うのかな。さして気にもせず、

「はい、わかりました」

申し訳なさそうに言うアドマさんとは正反対に、私は調子よく声をだす。

さあ、もう一度庭園へ出掛けなくては。

「失礼します」

扉をノックする事3回、中から「お入り」とのお許しの声が聞こえたので、薔薇の飾られた花瓶をワゴンに乗せて部屋に入る。

部屋の主のお嬢様は、部屋の中央に置かれた椅子とテーブルに優雅に座り、素敵なティーカップで一息ついているティータイムのようだ。

…きつとカップを持つ手は、小指が立っているに違いない。

気にはなるけど、あまり見ちゃいけない、興味を持たれてはいけない。

…だって、このお嬢様に興味を持たれては、後あと面倒な事になりそう。

なんだか、知らないけど、根拠のない私の第六感がそう告げる。

私は、平穩に穩やかに毎日を過ごしたいのだ。
いつか帰る日を、心の中で待ちわびながらも、トマトがすくすく育つ成長を楽しみに過ごし、そしてある日、トマトの成長を見届けた記念すべき日に帰るのが私的理想ね。

部屋に入るとお嬢様に一礼をして、その顔をあまり拝見せず、早々と花瓶の交換作業に取り掛かろうとした。

くっ！花瓶め！重いつ！

水を入れた花瓶の重さは、まさにバーベル級。私一人でどうにか出来る重さではなかったわ。

腕がプルプル言いながらも花瓶を両腕で抱え、ワゴンに移動させていると、中央のテーブルから声がかかる。

「ねえ。ちょっと聞きたいのだけど」

お嬢様は、私の腕がプルプルいながら花瓶を抱えているのを気にもとめずに、というより、そんな事知ったこっちゃない様子でのんびり優雅に聞いてきた。

きつと、お嬢様が一生かけて持つ物の重さを全て足しても、この花瓶の重さ程にはなるまい。

「はい」

プルプルいう腕で花瓶を抱えながら、お嬢様に向き合う。花瓶の花でお嬢様のお顔が見えない。

「ここに、男の人がいるでしょう?」

男の人？つまりは誰の事を言っているのだ。男といえば、世界の半分は男な訳で。このお城にも男の人はいっぱいいますけど。

「はい、いらっしやいます」

「そう！やっぱりね！」

お嬢様は自分の予想が当たったのが、余程嬉しかったのか、心底嬉しそうな声ではしゃぐので、

「このお城では力仕事とかも多いですから、男の方も結構仕えていると思います」

と、答えた瞬間、

「！誰が使用人の事なんか聞くのよ！いるでしょ？この城に！人目をひく程の男の人が！」

ムツとした感じのお嬢様に瞬時に言い返される。

はて？

このお嬢様の言っている事の意味がいまいちよくわからないけど、
見目麗しい殿方達なら先程出迎えて会った気がするのだが。

「ああ！ヒューストン伯爵ですか！素敵ですよね」

あの歳の取り方はダンディだ。立派なお髭がなんとも言えずに紳士
で素敵なジェントルメンだ。

あんな父親がいたら、私は今頃ファザコンだ。結婚するなら、父親
みたいな人になりたい、と心底望んでいたに違いない。

「違うわよ！」

お嬢様は、私の答えが気に入らなかつたらしく高い声で叫ぶ。
やばい、怒らせたか。女の人は怒らせないに限る。めんどくさい。
しかし、短気でヒステリックなお嬢様だ。きっとカルシウムが足り
ないのかもしれない。

そんなに怒ってばかりじゃ一言アドバイスしたくなる、『短気は損気だぞ』っと。

お嬢様のお怒りの、意味がわからなかったが、とりあえず

「すみません」

一言謝罪の言葉を口にした。わがままお嬢様を怒らせたら、謝るのが一番。

花瓶の重さに腕をプルプル言わせながらも謝罪の言葉を口にする。お嬢様は、私の謝罪を耳にしたはずなのに、聞いちゃいない様子でティーカップを口に運ぶ。

私は運び終えた花瓶をワゴンに乗せ、新しく飾った薔薇の花の花瓶を配置する。薔薇の香りが部屋に充満する。先程まで飾っていた花の香りも混ざって、きつい香水のような感じた。もったいないな。このプリメリアとブーゲンビリアはもらって帰ろう。せつかくの花だもの。

「失礼します」

深々と頭を下げて、部屋を退室しよう。部屋の主、お嬢様は黙ったままだ。顔を覚えられないのが一番だ。さっさと退室する為、扉に手をかける。

「待つて」

部屋の中央のテーブルから、お嬢様の呼びとめる声が。なんだろう。私はため息をつきたくなりながらも、お嬢様に向かって振り向く。

そこには、髪も瞳も同じ赤茶色に輝き、気の強さがにじみ出ているような眼差しを、まっすぐこちらに向けている人形のような、可愛いらしい顔したお嬢様が私を見つめていた。

お嬢様は、私の顔を見ると、一瞬眉をひそめ、すごく驚いた顔をした。

あ、異世界人だって、ばれたかもしれない。これで覚えられてしまったかもしれない。

「あなた…」

その後に続く台詞が想像できたので、お嬢様より先に口を開く。

「はい、異世界から来まして、訳あってこちらでお世話になります」

深々と礼をする。ハイ、アウトー。これではすっかり顔を覚えられた。これでもう、変な事できない。…いや、するつもりはないが。

私の礼を怪訝なまなざしで見ていたお嬢様。

あれ？なんか私の顔についてますか？それとも異世界人で珍しいですか？だけでも、お嬢様と同じで目は2つに口も鼻も一つですよ！。

同じ人間ですよ！。

「…初めてみたわ」

呟くお嬢様に、ああ異世界人って初めてなんだ、と納得した。だから、こんなにまじまじ見たのね。穴が開くかと一瞬思ったわ。いいよ、いいよ、珍しいもんね。

…なんて、実際穴が開く訳がないのだけれど、もし本当なら毛穴が開くのは本気で勘弁したい。

25 戦う私

その後、お嬢様は、私の足の先から頭のとっぺんまで、遠慮なしにジロジロ見つめた。

なんだと言っのだろうか。

黙って観察されるがままにしていたが、お嬢様の目には、宇宙人かのように見えるのだろうか。しかも結構な時間を観察したあげく

「…ふうん」

…一言ですか。何ですか。感じ悪っ！その態度。いくら高貴なお嬢様でも人を見つめてそれはないんじゃないの。ちょっと怒っちゃうからね。そんな私の様子を見てお嬢様は、

「名前は？」

「はい…？」

お嬢様が、私の名前を聞いている。はっきりに言っただけのメイドの名前を聞いてどうするのだろうか。絶対良くない予感がする。どうする、いつそ偽名でも使うか？

「名前を聞いているのよ」

お嬢様は苛立った様子で声を荒げる。その様子に

「…リツキです」

うおー！つい答えちまったよおお！とつさに偽名が浮かばなかったよおお。

「…そう。黒い瞳に黒の髪。初めて見たわ。異世界人て皆そうなの？」

「私のいた国では、ほとんどそうですが…」

私は早く退室したくてたまらない。私の背後の扉の向こうには自由が待っている！そんな気持ちでチラチラと扉をチラ見していたら、扉が向こう側から先に開き驚く。

驚いた顔と同時に、扉の向こうから現れた人物は、先程の美少年だ。

あつ！と驚いた顔した私と美少年は、まっすぐに視線がぶつかる。視線は、私より少し高いぐらいの所で、赤茶色の瞳が私の存在を認識した瞬間、驚いた顔をする。

美少年は、大きい瞳を更に大きく見開き、赤茶色の瞳で私を見つめる。声こそ出さなかったけど、唇が少し開いたのでやはり驚いたの

だろう。

誰だって、扉を開けた先に人が立っていちや、驚くよね。
私だって、驚いたもの。

美少年が、扉を開けた瞬間に私の頭にぶつかって『ゴーン』とならなかったのが、救いだわ。

驚いた顔をしたけれど私は、即座に笑顔を作り、微笑みを美少年に向ける。

『お客様おもてなしモード…おもてなしモード…マクドナ　ドスマ
イル0円』

心の中で呪文を唱えながら、扉のすぐ側にいて、美少年を驚かせた事を謝罪しようと口を開きかけた時、

「ずいぶんと鈍そうなメイドだな。これをメイドとして雇っているのだから、ヒューстон伯爵の気がしれない」

は？

「まあ、見た目は悪くないから、使っているだけか」

はい？

目の前の美少年は、悪意のある言葉を私に突き刺す。

：おい、美少年。本人の目の前で堂々と言うなんて、その根性もなかなかあつぱれだな。

「もしかしてヒューストン伯爵のお手付きとか？」

美少年、あるうことか、私の顎を人差し指で持ち上げ、視線を合わせる。赤茶色の瞳は、ぶしつけに私の顔をのぞきこむ。

私はというと、会ったばかりの他人に顎を持ちあげられて顔を覗きこまれるという事態に思考回路は遮断されていた。

そして…

部屋の中を空気が裂く音と、何かがぶつかる音が響く。

心地よい音が部屋に響き渡り、美少年、一瞬何が起きたかわからなかったようだ。

そう、私は、美少年の手を叩いてのけたのだ。

「失礼しました。私の事はよくても、私の雇い主を侮辱する事だけは聞き捨てなりません」

何触っていやがんだああ！お姉さん、お痛がすぎる子には怒っちゃうよ！

しかもよりによって、私をヒュー斯顿伯爵のお手付きとは…！美少年、お手付きの意味がわかってる？失礼にも程がある。そこに、なおいれ！

「いぬ…」

美少年は、怒りで顔面がひきつっている。赤茶色の瞳は気性の激しさを表してるのは本当かもしれない。

もし、ここで怒りのあまり、この美少年から殴られたりしたらどうしよう。

この距離では、余程反射神経が良くなければ避けられない。

しかしどんな理由であるにしろ、女子供に手を上げるのは、ろくな奴じゃない。人でなしだ。私は暴力には決して屈しないのだ。

私は、怒った眼差しを私に向ける美少年に、それに負けない気迫で、視線を逸らす事なく睨む。

『いでよ、闇黒の獣たちよ！』という、今すぐ何だか魔獣でも召喚できそうな眼力で美少年を見つめる。

「しかし、ここの使用人は、客人に対する礼儀もなっていないのか」

「お言葉ですが、先に礼儀がなっていないのは、お客様のほうですと感じましたので、それ相応の態度に出させて頂きました」

私は、ツーンとそっぽを向いて抗議する。

「クビにしてやる！お前なんか」

顔を赤らめて怒る美少年に、私はあざけるように言う。

「私の雇い主は、お客様ではありません。ヒューストン伯爵です」

「そのヒューストン伯爵に言うからな！お前が逆らったと」

「それでしたら、私が逆らった理由は客人が主を侮辱したからだ、伯爵に伝えます」

…ああ、『あつかんべー』ともしてやりたい。

元から、身分の差など感じずに生きてきた私は、貴族だから敬うとかそんな気持ち、実際あんまりわかんない。

貴族でも人として駄目な事は駄目だと思うけど、この世界のルールにそって一応我慢はするようにはしているのだ。これでも。

だけど、人間我慢の限界ってあると思うんだ。

もし、これで、私がこのお城からお暇を出されたらと思うと、正直困るけど、そうなったら街に行って住み込みの場所で働くんだ。

その時は、この美少年にとび蹴りという置き土産を忘れないで行こう。そう決心も固まった時だった。

「おやめなさい！ジエネミー！」

「姉上」

「仮にもヒューストン伯爵のお屋敷で、彼の悪口は許しません。長旅で疲れているからといい、何をムキになっているのですか」

意外にもお嬢様は、冷静な判断を下したようだ。

お嬢様は、馬鹿じゃない。

そう思った。その分、弟は、だいぶ馬鹿かもしれないけど。残念だ。

「リツキ。尊敬する伯爵の文句を聞かされ、気分を害されたでしょう。それは謝罪するわ」

私は無言でお嬢様のほうを向き、黙って頭を下げる。美少年はシカトだ、スルーするに限ると決め込んでいた。

しかし、残念な美少年だ。

見た目は、美形でも、中身がこれでは、将来苦労するだろう。しかし、姉上であるお嬢様の言う事はきちんと聞くなんて、もしかしてシスコンかもしれない。

しかし、この美少年といい、なぜか、美形なんだけど、中身は残念な美形が多いなあと、ぼんやりアデレイの顔を思い出しつつ退室する。

25 戦う私（後書き）

『一緒にするな』 BY アデレイ
の聲がきこえてきそうですが、いやいや！アデレイ！
あんたも同じような事して、リツキにカウンター攻撃されてるから！
そんなあなたも、次回出番だよ！用意しておきなさい、アデレイ。

美少年の名前をいろいろ考えて下さった方々ありがとうございます！

今回は『ジェネミー』に決定です。

レイチエル様！ありがとうございます！

可愛くて生意気なヤツにしたいです。

あくまでも希望なので、途中で方向曲がる可能性無限大。

お付き合いありがとうございました。

【登場人物一覧】（前書き）

あけましておめでとございます。

新年一発目は登場人物まとめてみました。

【登場人物一覧】

【宮川 リツキ 莉月】

ある日、トマトと共に異世界にやってきた本編主人公。20歳。
20歳のわりには、恋愛偏差値低く激鈍。
黙っていれば綺麗な黒目黒髪を持つ美しい人という印象だけど、
中身は残念なぐらいオッサン＆男らしい。
共に異世界にやってきたトマトをヒューストン伯爵家の土地の一角
に内緒で畑を作り
日々ばれるのを恐れながらも栽培に励む日々。

【アデレイ】

トマト畑に毎朝とっていいほど現れる人物。
金髪のハニーブロンドに蒼い瞳に整った鼻筋は、綺麗な美形。
だけど、リツキの中では『口を開くと残念な人』認識。
ヒューストン伯爵家の客人でありラインナルトの友人らしい。結構
謎につつまれているが
そこは、さすが主人公、気にしていない。

【ラインナルト・ヒューストン】

ヒューストン伯爵のご子息様。通称ライン
スマイレ色の瞳に、男性にしてはどこか中性的な感じのする可愛らし
い容姿。
だけど、その実態はなかなか腹ぐり…

【アルメリア・ディラン】

貴族のお嬢様。20歳。赤茶色の腰まであるウェーブかった髪に赤茶色の瞳。

【ジェネミー・ディラン】

アルメリアの弟。18歳。赤茶色の瞳と髪を持つシスコンぎみな美少年。

【ローディ】

本当はとくに本編から場外のもりだったが作者が愛すべきヘタレキャラとして現場復帰。

リツキに恋するヒューストン伯爵家の庭師。
不憫フラグ。でも、かっこいい場面も用意…しているはずだ！

【ヒューストン伯爵】

リツキがお世話になっているお城の主人でラインの父。物腰といい容姿といい紳士。ジェントルメン。

リツキは、自分の周りにいる男性の中で一番素敵だと素で思っている。

【カリア】

メイドのお友達

【アドマ】

メイド頭

【マーサ】

最初に異世界に来た時に会った人物であり、マーサ宅で居候させてもらっているにも関わらず全く出番がないという作者的に、ホントスンマセンキャラ

【登場人物一覧】（後書き）

今後人物増えたら、ここも増やす予定です。

けど、今のトコ増える予定はないかな…？

お嬢様とシスコンは『ディラン』家の方々です。J a z z様ありがとう！

26 私の感情

「騒がしいな」

「アデレイ」

お嬢様のお部屋からの帰り道、ワゴンを押しながら廊下を進む私の背後からアデレイの声が聞こえて一瞬驚く。

もしや、私の『客人』残念な美形』思考がアデレイを引き寄せたのか？

「平穩に過ごしていたというのに、招かれざる客と言うのは厄介だな」

「？」

半分独り言のように一人でつぶやき、さりげなく私の手からワゴンを奪い、自然な形でワゴンを運んでくれるアデレイに

「ちょ…！アデレイ！大丈夫！それ私の仕事、仕事」

私は慌ててアデレイからワゴンを奪おうとするけれど

「俺の方が力はあると思うのだが…」

しれっと言いながら、アデレイはなかなかワゴンを奪わせてはくれない。なので諦めて隣を歩く事にしたのだが、傍からみたら、とても不思議な図だったと思う。

なにせ、一人のメイドが、身分が上であるお客様（しかも美形ときたもんだ！）に、ワゴンを押させて隣を歩いているんだもん。しかも、ワゴンにはプリメリアとブーケンビリアが飾られた花瓶があり、それを押す美形アデレイも絵になっているから不思議だ。

写真の一枚でも撮っておきたいぐらいだ。

タイトルは『花瓶の花々と萌えー』なんちゃって。

……なんか違う。

『花瓶の花々と美青年』

こんな感じかもしれないな。

しかし、花が飾られた花瓶のワゴンを押す様子だから、まだ絵になるが、これが雑巾の入ったバケツだったらシャレにならんから、そんな時は全力で拒否しようと思いに決める。ワゴンを押すアデレイの横顔を見つめながら、ふと思った事を口にする。

「アデレイも会った？今日のお客様のお嬢様」

「…お前は会ったのか？」

「うん。さっきも、お嬢様に言われてお部屋のお花を換えてきたところ。けどさあ、もうすごいね。生まれながらにしてお嬢様って感じだよな」

私の一人興奮にアデレイは黙ったまま耳を傾ける。

「手入れの行き届いた赤茶色のウェーブかった長い髪に、綺麗な肌に、可愛い顔して、お人形みたい。顔なんて、すごく小さいのっ」

私の興奮はまだまだ続く。無言で聞いているアデレイに向かって、一人舞台上でマシンガントークを続ける。

「綺麗なドレス着てさ、それもまた似合ってるんだよね。なんかちよっと悔しいような羨ましいようなけど。それでさあ、お嬢様は、まあおいといて、問題はその弟だよ！」

「…弟がどうかしたのか？」

おっ！アデレイ！私の会話に食い付いてきたね。なので、私は続ける。

「あれは完璧にシスコンだね！」

きつとシスコンの意味がわからないだろうアデレイに説明してやり

つつ、先程のムカつく一件についてアデレイに愚痴る。

「まったくさあ。疲れてるだか、どーだか知らんけど、初対面の相手に鈍そうとかいきなり言う？」

メイドだからと言って、何を言っても許されると思っているその人権を無視した行動が頭にくるのよね。言い返さないでも思っているのか、弱者に対するその考えがまたムカつくのよね。

いくら疲れているからと言ってさ、自分より弱い立場の人間にストレスぶつけるなんて最低」

私の愚痴をアデレイは黙って聞いていた。

…というより、勢いに口を挟めないってほうが正しいかな。

私の怒りは一人でヒートアップする。

「しかも、『伯爵のお手付きか？』とか、問題発言して、おまけに人の顎勝手に持ち上げて顔近すぎるし、セクハラだっていうの」

怒りを吐き出す私に、隣でいきなりアデレイが動きを止めたのがわかった。私は不思議に思っただけで立ち止まり、そこでアデレイの様子がおかしい事に気付く。

そこには、私の隣で私を静かに見下ろすアデレイの顔があった。いっなくなると神妙な顔つきにこっちがビビる。

なんだ、なんだ、どうしたアデレイ、腹でも痛くなったのか？

私の不安をよそにアデレイは

「…何かされたのか？」

「え…。されたというか…」

いきなりのアデレイの真剣な眼差しに、こっちがうつらえる。

「されたのか？」

再度確認するかのように聞く、強い口調のアデレイに

「伯爵様のお手付きなのかと言われて顔をのぞきこまれたけど…」

アデレイの迫力にこっちが押され気味になって、なんだかしどろもどろに答える私。

アデレイは眉間に珍しく皺よせていつになく真剣な顔をしている。その様子がちよつと怖い。アデレイの蒼い瞳は静かに凍えそうな冷たさを放っている気がした。いつもは、蒼い空色の瞳が、今日はアイスブルーな瞳で怖いです。

何とか、話題をそらさねば…！さすがにKYな私でも気付いた。

…空気重っ！

その空気が重いまま足取りも重く、長い廊下を二人で歩く。

沈黙が長く感じる…。

その間もアデレイは何かを考えているような様子で、眉間に皺寄せて前だけ見つめて歩いている。

私は、隣のアデレイをチラチラ見ながらも重たい空気のまま進む。

何か話題を…と思った時に、先程のお嬢様の様子を思い浮かべ、ふと、思い出す。

「そつえば、誰かを探しているみたいだったよ、お嬢様は。アデ

レイ知らない？」

首をかしげてアデレイを見るとアデレイは、もう元の顔つきに戻っていてホツとする。そうしていつもの涼しい顔で私を見つめ返した。だけど、その一瞬の隙を私は見逃さなかった。彼は、何か知っているような空気を醸し出し、そしてソレを誤魔化すような曖昧な笑顔を浮かべた。

アデレイの笑顔を見た瞬間、

『コイツは何かを知っている』

私の隠れた第六感、俗にいう女の感だろうか、働いてピーンときた。絶対アデレイに関係のある事だ…。

だけど、内心どうでもいい事だと思い、

「ふーん。そっか」

そう言い放ち、知らんふりをした。

お嬢様とアデレイがどんな関係だろうが、正直私には関係ないし、どうだっていいもんね。

しかもアデレイが話す気ないなら、こっちだって無理やり聞きだすもんか。だんだん意地になってきた。

…だけど、何で私は、こんなに意地になっているんだろうか。

自分でもよくわからないまま、廊下の突き当たり、左に曲がれば調理場という所で、アデレイとは別行動だ。

よく考えれば危なかった。

一応アデレイも客人という立場であり、その客人にメイドのワゴンを押させて、自分は呑気に隣を歩いていたなんて、ばれたら私のクビが飛ぶ。なので、ここから先は私の出番。

「ありがとう」

アデレイからワゴンをひったくる様に奪い去ってから笑顔でお礼を言い、後にした。

26 私の感情（後書き）

久々アデレイ来たなっ！

27 いつかの日の為に

「いっぱい実るのよね」

赤い実を人差し指で摘まんで太陽に照らして軽く見つめた後、会話の相手に差し出す。

「そつ…そうなんだ」

差し出された相手は、この赤い実と同じくらい赤い顔をしたまま返事をして、そのまま私が差し出した赤い実を手の平で受け取った。

「だから、皆に食べて欲しいの。何か良い方法ないかな？ローディ」

じつは、トマトになるわ、なるわ、の嬉しい悲鳴で私と職場の仲間内に配っているだけでは消費出来なくなってきたのだ。

そのまま食わずに腐ってしまうとしたら生産者としてとても悲しい事だ。

私は、庭園でトマトの今後について、ローディに相談を持ちかける。だって、ローディは私の知ってる男の人の中で一番親身に相談に乗ってくれそうだから。

アデレイは、トマトに興味しんしんな様子だけど、あのとおりだし……。
だいたいアデレイもラインも高い身分とやらなので、なんか、こう一般ピーポーの目線ではない気がする。

……いや、別にローディが庶民だとか、言ってる訳じゃなくて、一般人の生活に一番慣れ親しんでそうだって事で。

「じゃあ、市場で売るといい。俺が叔父貴に話をつけといてやるから、そこで試しに売ってみればいい」

「……えっ！……本当！？」

「ああ。こんだけ美味しかったら、売れるぜ、きっと。それに、うちの叔父貴も新し物好きだから、飛び付くと思うんだ」

ナイス アイディア ！！

思いもよらなかったローディの申し出に、喜ぶ私。
やった！その手があったか！これなら大勢の人に食べてもらえる。

「じゃあ、叔父貴の了解が出たら、早速市場に持って行くから、いろいろ準備しておいてくれ。価格も決めなきゃな」

そうか、売るとなると価格も決めないといけないな。いくらぐらいが妥当だろう。

…だけど、お金儲けが目的じゃない。

だから、お金とかあまり関係なく大勢の人に食べて欲しいという気持ちがあるんだよね。

だけど、さすがに無料配布と言う訳にはいかない。

私なら、見た事もない食べ物をいきなり『無料で差し上げます』っていきなり言われても断固として断る。

毒かもしれない、腹を壊すかもしれない、何か裏があるのかもしれない…

などなど疑ってしまう。

ただより怖いものはないと思うから。

だから、安値でいいので、値段をつけて売る事にする。

まあ、値段は購入してくれる人の安心の為みたいな感じですけど。

「で、実際のどのぐらいたくさんあるんだい？そして、どこで作っているんだい？」

ぐっ！　ぐっ！

ローディは答えにくい事を聞いてくる。

「あのね一株にたくさんなるの。だから、消費できなくなつて」

私は、なんだかローディの視線を真つ直ぐに見る事が出来ずに、逸らしながらも答える。

「小さい袋いっぱいに入れて、一袋１００セントぐらいで売ればいいかな？」

「安っ！そんな安ければ元はとれないんじゃないか？」

心配するローディ。だけど、元もなにもない。

土地は勝手に無断借用、水とお日様さえあれば勝手に育つようなも

のだし、

肥料だってそんなに大した金額じゃない。

人件費も私一人だし。…アデレイもいるが、あれはほぼ労働してないのでカウント外だし。

「安くてもいいの。皆に食べてもらえたら嬉しいし。ありがとうローディ」

心配してくれるローディに笑顔で返す。

翌日、ローディは早速叔父さんをお願いしてくれたみたいで、即日OKの返事をくれた。

なので、私は喜び勇んで畑へと行き収穫を始める。

「…売るのが」

「うん」

私はカゴいっぱい収穫したトマトを見つめながら、答える。

「どこで？」

「市場だよ」

売られていくトマトたちを袋に詰める。今日のところは10袋。

「…市場で？」

「うん。相談したら、聞いてくれたの」

あとは試食用に、たくさんのトマト。正直、試食用の方が量が多いが、これはこれでいいのだ。

あとは、美味しく食べてもらえよ…って祈るのみ。

「…相談？……誰に？」

「え？ローディだけど」

話をしながらも、手を休めない働き者の私は、手は休めているけど、口は休めないアデレイの質問に答える。

何だか、とてもトマトに興味がある様子ですが、そんなに気になるなら、手伝いなよねっ。

市場でトマトを売ると聞いた途端、眉間に皺寄せて、何だか不機嫌そうなオーラを出すアデレイだけど、そんなん知るか。まさかトマトを全部食べたい、とか一人占め思考じゃないでしょうね。

「腐らすよりもいいじゃない」

不機嫌アデレイに反論しながらも笑顔で、

「まあ、捨てるより大勢の人に食べてもらえたらなあって。値段は、安値にするし」

「…欲はないんだな」

つぶやくように言ったアデレイの声に瞬時に反応して、トマトを詰める手を休めて顔を上げる。

「何言ってるの！私ほどお金が大好きな人間も珍しいわよ！」

私は、アデレイの方を向き、大声を張り上げ堂々と宣言をする。

私的金融感覚を語っちゃうと、まずは、先立つものは金だと思う。それに、お金はいっぱいあっても困る事はない。

いっぱいありすぎて困っている人がいる、なんて聞いた事がない。いたら、私が助けてあげたいわ。

そんな『お金大好き』な私だけど、こつちの世界にきて、皆に本当に良くしてもらって、あげく私の相棒ともいえる、共に異世界へと渡ってきた運命共同体のトマトを、自分自身の欲の為にだけに商売するのは気がひける。

それも、よそ様の土地を無断で借用しての栽培だ。そんな商売してお金を手に入れても結局ね…

悪銭身につかず、ですよ。

「まあ、少しでもお金を貯めて、欲しい物でも買つよ」

「そうか」

「何を買おうっかな」

ウッフッフー と上機嫌に笑って見たが、実を言うと、お金の遣い先

はもう決めてある。

この伯爵の土地から少し先の、小高い丘の上には白くて歴史の感じられる造りの教会が建っている。

前にカリアと教会の前を通りかかったら美しい歌声の讃美歌が聞こえてきて、不思議に思ってたカリアに聞いたのだ。なんでも、教会のシスター達が、身寄りのない子を引き取って人々の寄付や善意で賄っているんだって。

だから、私はトマトの売り上げ金を寄付しようとか思っている。きつと大した額にはならないだろうけど。

だけど、この事はアデレイにもローディにも誰にも言つつもりはない。

別に内緒にするつもりはないけど、私のささやかながらの、こっちの世界の人々へのお返しかな。

だけど、なんだか恥ずかしいので、こっそり小金を貯めているって事にする。

恥ずかしさから、嘘をつくけど、これぐらいいいよね。

今の私は、ヒューストン伯爵家のメイドとしてのお給金も出るし、マーサさん宅に居候させてもらっていて、それもバカみたいに安い生活費で居候させてもらってる。初め、お給金を居候費で全部入れるって言ったら、恐ろしい勢いで拒否されたっけ。

『何かの為に取っておきなさい！』って。

だけど、それでは、こっちの気がすまないので、無理矢理、一定額の居候費をマーサさんに毎月渡してる。

そんな訳で現状は衣食住にあまり困っていない。

それに

いつか帰る。

そんな私にあまりお金は必要ないと思う。それよりも困っている誰かが使ってくれたらそれで嬉しい。

こんな気持ち元の世界にいた時は、考えた事もなかった。

お金はそれこそ生活していく上で必要不可欠で、欲しい物もそれこそたくさんあった。欲しい物リストなんて書いて、どこから購入するか悩んでいたぐらいだ。洋服も、カバンも化粧品も欲しいし、アクセサリーだって欲しい。物欲の塊だったと思う。

だけど、今は違う。

私がこの世界に來た事によって、誰かが少しでも助かる事があるなら、それでいい。

だって

いつか帰るから。

自分がここに來た事は、単なる事故か偶然かもしれない。
それでもいつか帰るその日まで、自分のやれる範囲で、この世界
の人達に何かを返す事が出来れば、私がこの世界に來た事も、無駄
じゃなかったと、いつか笑って言える気がする。

27 いつかの日の為に（後書き）

100セント＝120 130円ぐらい

今回、リツキは珍しく真面目に考えてましたね。
きつと最初で最後かも（笑）

トマトを想う気持ちの半分でもいいので、
男性群に気持ちを向けて行って欲しいです。

28 私の中で認識した日

「お客様はディラン伯爵家の姉弟なんですって」

お客様が来られた翌日からお城では、お客様の話題で持ち切りだった。だから嫌でも耳に入ってくる。

なんでも王都に近い場所に由緒代々続くディラン家という伯爵家があつてその姉弟らしい。

この土地は、比較的涼しくて過ごしやすい気候らしいのだ。緑が多く自然に恵まれて空気も美味しいけど、そんなド田舎でもなくそこそこ栄えている地方らしいので、身分の高い人達は、この土地に別荘など持っている人もいるらしい。

だから、あの姉弟は避暑がてらヒューストン伯爵を尋ねてきたのではないのだろうか。

はたまたただの旅行か。

などなど、いろいろ憶測の噂は飛び交っているが、結局のところ、どれが本気かわからない。

まあ、私としての予想は『姉の用事にシスコン弟がついてきた』に一票だ。あの様子は絶対シスコンだ。

「それでね、お嬢様のほうがアルメリア様で弟のほうがジェネミー様よ」

…知ってます。先日、到着したその日に訳あって、バトルしましたから…弟のほうと。

「ディラン伯爵家のお二人も美しい顔だちよね」

ため息とともに、カリアが吐きだす。

「姉弟共通の赤毛の髪に、赤茶色の瞳。綺麗な顔立ちよね。まあ、アルメリア様は気性が激しそうだから、怒らせないように注意しないかね」

弟のほうも、美少年だけど、気性は激しいと思うから要注意だ。

「だけど、私はやっぱりご子息様が一番だわ。可愛い顔立ちで優しいし」

「綺麗といえば、そうね、やっぱりアデレイ様よ。あの気品と醸し出す威圧感は並ではないわ。ジエネミー様はまだ幼さの残る少年が青年になりかけて感じて目が離せない感じよね！」

噂話に、耳を傾けつつ呑気に私は、黙ったままお茶をすする。

「湖ですか？」

「そうなんだ、ここの土地からちょっと先に行くとね、すごく澄んだ湖があるんだよ」

朝一に、モップを引きずりながら長い廊下を一人で歩いていたら、背後からご子息様に呼びとめられ、話を切り出された。なんでも、とても澄んだ湖があるらしいけど…。

「だから、デイルン家の客人を避暑も兼ねて、湖に案内しようと思うんだ。せっかくだから、食事も湖でしようかと思って、アドマに朝一で準備するよう伝えてある。そして湖に何人かメイドも連れて行って準備を手伝って欲しいんだ」

なるほど。メイドも現場待機ですか。

「けど、ディラン家のメイドの方々もいるのでは？」

「彼女たちには、アルメリア達が持ってきた荷物をほどく仕事をお願いしてある」

：「どんだけ、持ってきたんだ、荷物。そしてどんだけ滞在するつもりなんだろう、ディラン家の姉弟は。」

「だから、アドマの用意が出来たら出発したいのだけど、リツキも一緒に来て手伝ってくれる？」

「わ、わたしがですか？」

「てことは、またもやディラン家の姉弟とご対面って事だね。参ったなあ、先日の出来事もあるしヤバいなあ。なんとか断りたいこの空気。」

ラインを目の前にして、即答で断りたい気分になる。

「あの……」

「ん？」

おずおずと切り出すと、ご子息様の柔らかな微笑みとぶつかる。その瞳は優しいようで、力強く訴えているような気がする。

『もちろん、手伝ってくれるよね？』

と。優しい笑みを浮かべながらも、何だか強制的な気がするのはいけないうか。

「…わかりました…」

敗者、リツキは戦う前から白旗上げました。チーン。ご子息様であるラインの笑みの前には逆らえません。

「そう、良かった！じゃあ、早速準備を頼むよ」

私の気乗りしない気持ちとは裏腹にラインはすごく楽しそうだ。準備の為にすぐ退却しようとするが足取りは重い。そんな私にラインは、声をかける。

「実は、リツキにも見せてあげたいんだよね」

「私にですか？」

何だろう。湖にはネッシーでも住んでいるのだろうか。それなら見てみたい気がする。

「そう。とても綺麗な場所だと思うんだ」

そうなんだ、お勧めのポイントなのね。

「それに、異世界からこつちの世界に来て、この城からあまり出た事ないでしょ？だから、こつちの世界にも綺麗な所はたくさんあるんだって事、見せてあげたいんだ」

笑顔で微笑むラインの言葉に驚く。

なんてこつたい。

私は正直、『めんどくさいなあ、あの姉弟と顔会わせるの。特に弟のほう』なんて密かに思っていました。

だけど、ラインは私の事気遣ってくれていたのね。

「ありがとうございます」

「気に入ってくれると嬉しい。僕のお気に入りの場所だから」

ぐはあっ！私に対する心遣いとは裏腹に、面倒とか思っでごめんなさい。

「心遣い感謝します、ご子息様」

まっ… 眩しい… 可愛い顔つきに優しい笑み…。反則技でしよう、これは。

あまりの眩しい笑顔にたまらず礼を言っ頭を下げる。

「後さ、皆の前では、ご子息様でもいけど、二人の時は『ライン』って呼ぶって約束しなかった？」

「…はっ??」

「それに二人の時は、そんな堅苦しい言葉も使いつこなしたよ」

「はっ…はい」

そうだった。だけど、そんな事言われてもやっぱりいきなりは難しい訳でして…。

「そっかー。そんなんなら、次回はそうだねー」

ラインは手を自分の顎の下に置いて、少し考え事している様子。なんだ、何を言いだすのだろうと思っていると、

「次回から、間違った呼び方したらお仕置きするよ?」

「ぐっは!?!?」

いたずらっ子みたいに微笑みながら言うラインは、顔は笑っているけど、本気と書いてマジと読む目つきじゃないっすか?その目は。

やばいよ、やばい。それに…お仕置きってナンデス力?

伯爵家の敷地を何周走るとか、熱血スポコン系ですか?それとも伯爵家の地下牢に入れる監禁系ですか?それとも…

「なーんてね」

焦る私と違ってラインは、にこにこ嬉しそう。そして楽しそうだ。

「素直にクルクル表情が変わって本当に可愛い。考えている事が丸わかりだよ。…側においておきたくなる気持ちがあるなあ」

いや、私はラインのお仕置きの意味がまったくもってわかりません。どうすると!?!どうすると!?!

「なーんてね。じゃあ、アドマのお手伝いよろしく頼んだよ。たまに城の外も見ないとね。
…ああ、これぐらいにしておかないとね。…アデレイが怖いからね
ー」

「はい?」

最後にアデレイの名前が出てくる意味がわからず、首をかしげるが
ご子息様は実に楽しそうに笑顔で

「じゃあ、準備をよろしくね」

さっそうと素敵な笑顔を振りまきつつ去って行った。しばらく後ろ

姿を見送っていたら、急に思い出したように振り返る。その顔は眩しいばかりの笑顔のまま、

「あつ、そうだ。もし次回は、僕との約束破ったら、どんなお仕置きがいいのかリツキの考えたお仕置きの中で選ばせてあげるよ？ 考えといてね」

…ライン…。

可愛らしい中性的な外見とは裏腹に、隠れドSと認識したこの瞬間。

28 私の中で認識した日（後書き）

ああ… 何だか、ラインの性格が、だんだんクセのある方向に…。
最初は、ただの『可愛らしく優しいおぼっちゃま』ってキャラのつもりが…。

けど、クセのある方が書いてて楽しい気がする（おい）

29 湖での森林浴

「まあ、とても綺麗！」

お嬢様のアルメリア様は歓喜の声ではしゃぐ。それもそのはずだ。私も驚きで声が出ない程だ。アドマさんの手伝いをして昼食の荷物を用意し、デイラン家の客人を乗せた馬車の後ろの馬車に乗せられて、やって来たのは湖。馬車の扉を開けた瞬間、澄んだ空気に小鳥のさえずる声。

澄んだ空気をいつもより美味しいと感じるのは、ここは自然に恵まれているからなのか。

ラインがお気に入りの場所だと言うだけあってとても綺麗な湖に、花は咲き、小鳥は歌う。まるで地上の楽園。
緑の生き生きとした森林に、澄んだ湖。

なんてメルヘン。例えていうならシルバ アファミリ - 達がリアルで住んでいそうだ。

きつと、今、森の陰から、ウサギが洋服着て出てきても、私は驚かないかもしれない。

…いや、それはさすがに驚くか。

湖近くには、腰をおろして休む用の屋根つきのベンチなどもある。これは最高のピクニックロケーションだわ。私はその光景に感動する。

アルメリア様もはしゃいだ声を出して、きゃあきゃあ言っている。
やはり女性。きれいな景色に感動している。

そんなアルメリアお嬢様の今日のドレスは淡い黄色がベースで、レースで縁取りされた可愛い膝丈のドレスに、ドレスとおそろいの帽子をかぶっていて何とも可愛い。

おそろいの帽子は、レースの長いリボンがついていて風にそよぐ。

隣に並ぶラインは、薄手の白いブラウスにひざ下まである、ハーフパンツ丈のグレイのお召し物。

爽やかな二人組を見ていて、何て素敵だ二人なんだ！と感激してしまふ。

ラインも中性的な美形な顔立ちだし、横に並ぶお嬢様の髪は巻いてあって、クルクルしていてとても可愛い。

そして大きく開いたパッチリした瞳に、まつ毛も髪と同じにクルンクルン。そしてバツバサ。

そんだけまつ毛が長ければ、決して微塵のゴミでも目に入る事はないだろう。

なんて可愛い美形カップルなんだ！

バックの風景がまた、二人のカップル説に拍車をかける。もしかして、お嬢様は、ラインと何か特別なご関係が…？

なんて、思わず変な勘ぐりの一つもしたくなるような、美形カップルは風景に溶け込んでいた。

目の保養になる、美形カップルの組み合わせを見て私は、一人で微笑む。

…が、その隣にいる人物をみて、私は眉をひそめた。

忘れていたよ、その存在。

赤茶色の髪は日に照らされて、赤味を強く放ち、気性の激しさを表す、まるで炎のようだ。空色のブラウスに、短めのマントをはおつて、楽しくもないような顔立ちのその人物は、私を見ると顔をしかめた。

だけど、私も負けずに顔をしかめていたに違いない。自信はある。

お互い、しかめっつらのまま数秒見つ会う。…というより固まる。

何だか、その顔つきから言つて

『何でお前がここにいるんだよ』

って思っているような顔つきですね。ずばりそうでしょう。何でわ

かるかって？それはお互い様だからです。

メイド頭のアドマさんに促され、昼食の入ったバスケットを持ち、同じく飲み物を持ったカリアと3人で湖のベンチの周辺に場所を確保する。先程の赤毛のシスコンジェネミーの存在は無視だ、スルーだ。とりあえず、己の仕事を全うしよう。

そうして、いそいそと皆で昼食の準備を始める。ベンチの机を綺麗に拭き、ランチマットを敷く。そこに持参したお皿を置いて、バスケットを開けてサンドイッチ等の軽食を取り出す。

カリアが持っているのは、果物を絞ったフレッシュ果実ジュースだ。みずみずしくて美味しそう。

そうやって皆で協力し、バスケットの中味を並べ、ライン達の昼食準備完了。

ここまでで私たちのお仕事はいったんお終い。護衛の男の人に声をかけ、昼食準備完了を告げ、ライン達に昼食を召しあがって頂くよう、お伝えした。

「さて、私達も昼食頂こうかね」

アドマさんは、ご子息様達の昼食を持参する際に、ちゃっかり料理人をお願いして、私達の間も作ってもらっていたらしい。さすが、アドマさんは気がきくというか抜け目のない。

「じゃあ、あっちの湖畔の森の影になっているあたりまで行きましようか」

カリアも声が弾んでる。私もテンションが上がってうきうきだ。だって、ピクニックだもん、これって。

ライン、ありがとう、おまけでもいいからこんな素敵なお湖に連れてきてくれて。私は心から感謝した。

言われた時は面倒なんて、ちょっと思ってしまったって本当に申し訳ない。ネッシーもシルバ アファミリーもいないと思うけど、十分満足だよ。

美味しいサンドイッチとピーナツバターパンをお腹に収め、すっかり私は満足だ。湖は太陽の光を浴びて反射し、眩しい光を放っている。

木々の緑と上手く調和して、なんというマイナスイオン！素晴らしい森林浴。

「お腹いっぱいになったら、なんだか眠くなったね」

あくびをし始めたカリアとアドマさんに

「じゃあ、2人が休んでいる間に、私ちょっと散歩してくる」

私はつきつきしながら、木々の遊歩道の方を指を差す。

「ああ、まだ、片づけの聲がかからないから、自由にしていよ。だけど、あんまり、ふらふらして迷子になるんじゃないよ」

「大丈夫だよ」

私は笑って2人に手をふる。

「じゃあ、ちょっと散歩してくる」

「行つてらっしゃい」

私は湖を囲んでいる木々の遊歩道を歩き進む。さあ、マイナスイオンを浴びに行こう。

30 ある日森の中

太陽の光が木々の間からもれ、小鳥はさえずり、心地よい風がふく。私の髪は風にゆれ、太陽は天高く上機嫌なお天気なのに、立ち並ぶ木々のおかげで気温は決して暑すぎず、肌に心地よく感じる。

遊歩道らしき道を歩いていると、自然と足取りも軽くなり、スキップでもできそうな気がする。

木漏れ日の明るい遊歩道を歩き、湖のほうに近づくと湖は光に反射してキラキラしている。

なんだか、こんなにゆっくり自然と触れ合う時間って日本にいた時はなかったなあと、考えながらも足取りは軽い。

その時、前方から人影が見えた。その人物を確認した瞬間、思わず回れ右の体勢をとりたくなった。

いや、体はもう回る方向へと傾きかけていた。

「なんだ、お前か」

ふんつと、鼻で嘲笑い、私も見下すその視線に、気分は台無し。…
って言うか

なんでここにいるんだ

薄い水色のマントをはおったまま、私を見下ろす視線の持ち主は、ジエネミー様。あなた、あちらで昼食タイムじゃなかったの？
もう昼食食べたのか。もっとゆっくり食べないと、早食いは、体に悪いぞ肥満の元。余計なアドバイスをしたい気持ちを抑えつつも

「……こんにちは」

先日の出来事を思い出し、一瞬自分のとるべく態度に迷ったが、前方の人物に愛想笑いで微笑みかけ礼をする。

くっ！大人な自分を褒めてやりたい。

うわべだけの挨拶と礼をして、前方の人物の横を通り過ぎる。

「待て、お前」

その人物は口を開く。

ああ、清々しい気持ちでお散歩って最高ね。

「待てと言っているだろう」

うんうん、マイナスイオンを浴びて、日々のストレスを解消しなくちゃね。

「止まれ！」

聞こえるのは幻聴と決め込んで、この場を黙ってスルーしたかったのだが、先程通り過ぎた人物は、そうではないらしい。

「聞こえないのか！」

何度か聞こえた声をスルーしたが、相手はめげないらしい。仕方がないので、にっこり微笑んで謝る。

「難聴なんです、私。すみませんね、ジェネミー様」

「で？お前は何をしているんだ？」

「お散歩です。せっかく綺麗な湖に来たので」

「ふん。こんな田舎、散歩して楽しいか？お前？」

なんだか、ツンケンした態度ですが、そうゆうあなたも、散歩してるから、ここで私に会ったんじゃないの？

「私は散歩を楽しんでいるところです。ジェネミー様は田舎くさくてお嫌いかもしれませんが、私は自然な場所も大好きですので」

「…そうか。では、俺も暇だから一緒に行つてやろう」

上から目線のジェネミーに、

「いえ。結構です」

瞬殺する。

そして瞬殺でバツサリ切りつけた後、相手の出方も見ずに散歩を続行する。

先程までの清々しい気持ちよ、アゲイン！カムバック！戻ってこい！鳥よ！私の為にさえずっておくれ！さあ！

「待てお前」

「待てと言つてゐるだろう」

「お前は、どこに行く？」

「止まれ！！」

木漏れ日の中、ジェネミーを置き去りにし、散歩を続行する私に何やら、雑音が聞こえる。

いろんな声が聞こえるが、スルー。得意なスルー。完璧にスルー。

しかし、相手はいつまでも、あきらめる様子がないので、ため息一つと共に振り返る。

「では、一緒に行きますか…？」

こうなったら、根負けしたとばかりに思ってもいない言葉を口にする。

「お前が、ぜひにと言うなら、一緒に行ってやる」

…って…行くのかよっ！！

しかも相手は、なぜか上から目線。なぜここで上から目線なのだろうと不思議に思い首をひねるが、それは育ちのせいだろうか。

しょうがないので一緒に並んで歩く。

歩きながらも、隣のジェネミーを見ると、赤茶色の髪は木漏れ日を浴びて、赤味が強く感じる。

大きい瞳に、真っ直ぐな鼻筋、口をなぜか斜めに結んで、一般的に美少年と言われるだろう、その横顔は何だか不愉快そうだ。なんだよっ。

そして少し、頬が赤い気がするの、日差しが強いから熱いのか？

それとも大声出したらか、体温上昇でもしたのか？

なんだか、綺麗な顔を不機嫌そうに歪めて、赤い顔したジエネミーと無言で隣に並んで歩く。

「あっ！」

しばらくすると、私は、思わず声を出し、いきなり走り出す。隣のジエネミーが、私のいきなりの行動にビクツと驚いたようだが、気にしない。

そこは、遊歩道から湖に続く道の一角で、そこから見える景色は、最高だった。

太陽の光を浴びて輝く湖に、緑の木々が立ち並び、花が咲き誇っている。

私は目の前に広がる湖にただひたすら感動していた。

まさに絶景。ベストポジション、略してベスポジだ。

私は、靴を脱ぎ、ひざ下のスカートは少しまくしあげて、湖に足をつけると、ひんやりと冷たくて心地よい。そのままひざ下まで水につかる。

湖は透明度が高くて、そのままじっとしていると小魚達が寄ってきたりして、なんとも心をなごませる光景に、バシャバシャと足で水面で水を跳ねて遊んでいると、後ろの茂みから、気配を感じて、振り返る。

もしや、熊か！？

そう危機感を感じた私の目に飛び込んできた者の正体とは、

「お前！何でそんな格好をしている！」

あ…

ジェネミー…。

そういやいたんだった。あまりの絶景に存在を一瞬忘れていたよ。

彼は、何やら、真っ赤になって怒っているが、意味がわからないので、彼の視線の先を追ってみると…

「あ！もしかしてコレ？」

「そうだ！」

私は自分のひざ上まで、捲し上げたスカートを指差した。なんだ、なんだ、ひざ上スカート丈を怒っているのか。

これぐらいミニスカートとは言えないぐらいの長さだと思うけど。
はしたないとか言うなら見なきゃいいだろう、と思いながらも、し
ぶしぶスカート丈を膝まで下ろす。ひざ下まで戻すと濡れちゃうと
悪いもんね。

スカート丈を戻し、彼を見ると彼はまだ何かを言いたげだ。

「…何か？」

「お前には恥じらいってものがないのか!!」

なんだか、どつかの時代錯誤のお年寄りみたいな台詞に思わず噴き
出して、笑ってしまった。

「何がおかしい!」

その様子もちゃんと見逃さなかったらしい。

ジェネミーは、顔を赤くして真剣な眼差しで怒っている。

そんな私の膝上スカートぐらいで、そこまで怒らんでも…。

こんな様子で、もし私の世界に来たらどうするんだろう。

それこそ、こんな水辺では可愛くて若い女の子の水着がたくさん見
れる。

それにも一喝するのだろうか。もしそうなら私は、ジェネミーに一
言、言ってやりたくなる。

『自分に正直になれ』

と。

「いえ、失礼しました。あまりにも気持ちよさそうなので、つい」

彼は、フンと鼻を鳴らした後、

「ちょうど良かった、お前に聞きたい事がある」

「はい？」

彼が私に聞きたい事って一体なんだろうか。それこそ私でわかる事だろうか。

31 バトル アゲイン

ジェネミーは、私に向かって口を開く。

「あの屋敷には、我々のほかに客人がいるだろうか？」

他の客人？それって…もしや…私は、即座にピーンと来る。

「客人が一人いるはずなんだ。我々は、その客人に用事があったて王都からはるばるこの地にやってきた。…まあ、用事があるのは、姉上だな。こつちとしては早く会って用を済ませたいのだが、その客人は、我々を避けているのか、同じ城にいるというのに、一向に会わない。ヒューストン伯爵も曖昧な態度ではつきり物事を語らずだ。

…何か知らないか？」

「…」

少しぼんやり考える。客人ってアデレイの事？私が知ってる客人は、アデレイしか思い当たらない。

黙っている私に、ジェネミーは続ける。

「…いるはずだ。眉目秀麗な容貌に、気品に溢れ、知性に優れる人だから一度見たら忘れない」

ハイ。

前言撤回。

一瞬、アデレイかと思ったが、気品に溢れ、知性に優れるお人？

そんな人物知らんがな。

黙っている私を見て、ジェネミーは、隠し立てしてるとでも思ったのか、声を荒げてきた。

「…隠してるのか？」

私の沈黙を肯定と受け取ったのか、ジェネミーは声を一方的に荒げる。

「どんなに逃げて隠れようと思っても、逃げも隠れも出来ない立場なのに、いつまでもぐずぐずと往生際の悪い。なぜ、お前は肩を持ち、隠そうとするのか？」

ちょ…自己完結しすぎっ。

こっちは質問の意味の半分も理解するのに、精一杯なのに、勝手に

決めつけてお怒りモードにならないで欲しい。
やっぱり、ジェネミー短気は損気だぞ。

呆けた顔して、突っ立っていると、苛立ちを含んだ彼に、
手を強く引つ張られ、引き寄せられる。その赤茶の瞳は、炎のよう
に燃えていた。

まるでキャンプファイアー！

「この地にいる事は、わかっているから、わざわざこちらまで出向
いた。

それと同時に入ってきたのは、もう一つの噂、『あのお方は異世界
の毛色の違う娘にご執心らしい』と。

最初聞いた時は鼻で笑ったが、お前を見て噂が本当かもしれないと
思った」

至近距離で瞳を強く見つめられ、そらす事の出来ない彼の怒りを含
んだ真剣な眼差しに、動揺する。

「…確かに、お前の容姿では惹かれるのも無理はないかもしれない。
…で、お前は何なのだ？…どう思っている？」

問い詰めるような真剣な眼差しを向けられ、私は、何だか怒られて
いる気分。

…意味分かんない。

一人で勝手に、想像して、決めつけて、しかもなぜか怒りを向けられて、こっちの気分は、いいはずがない。

私は、ただ湖の散歩を楽しんでいただけですよっ！

そう思った瞬間、思いつきり、掴まれた手を振りほどき、

「さっきから、言ってる意味全然わかんない！」

大声で叫んでいる私がいた。

「だから、言っているだろう！お前は、あのお方をかばっているのだろう！そんなにかばいだてするとは…」

ジェネミーは、一息ついた後、真剣な眼差しを私に向けたまま声を荒げる。

「一体お前はどっと思っっているのだ！」

「だから、何の話！？」

また手を掴まれようとしたので、身をひるがえして逃げる。一瞬、逃げられた事によって彼は、ショックを受けて止まったように思えたが、止まったのは一瞬で、再度私の手を捕まえにかかった。

やばい、拒否した事で、本気で怒らせたかも。

彼はますます本気で私の腕をつかみにかかった。

まくしあげていたスカートも手を離して裾はビチョビチョだ。

私は必死に抵抗するが、再度思いつきり腕を掴まれて、引っ張られた。ジェネミーの顔が近い距離で、綺麗な細工の彼の顔は苛立ちを含み、私を見下ろす。真剣な眼差しを向けられたまま掴まれた腕が痛く、熱を持っている。

「どう思っているのだ、あのお方の事を！」

彼は、私の腕を力いっぱい無理矢理掴み、引き寄せた。

その瞬間、体のバランスを崩した私は、そこから先はスローモーション。

先程まで足を浸して遊んでいたはずの湖が私の顔面に近づく。

目の前で見える湖は透明度が半端ない程きれ……い……

盛大な水音が辺りに響き渡る。

周りの木々に止まって休んでいた小鳥たちも、湖でユラユラと漂っていた魚も、その水音の大きさに驚き、一目散に逃げ出した事だろう。

水音の出所は私。腕を思いっきり引つ張られ、バランスを崩して、水の中に前のめりになり転んでしまったのだ。

立ちつくすジエネミーと、湖に、這いつくばっている私。

見つめ合う二人はしばし、ぼーぜん…。

冷たい…。

あっけにとられている、目の前の彼の瞳は怒りというより驚きの色に変っていた。

だけど、今度、瞳に怒りの色をともすのは私の番。

「どーっしてくれるのよ！全身濡れちゃったじゃない！着替え持つて着てないのに！最低！！」

そう言い放ち、あつけにとられて茫然と立ちつくしていた、ジェネミーの片足を思いつきり力任せに引っ張った。不意な事だったので、踏ん張る事も出来なかった彼は、そのまま私に足元を持っていかれた。

また一つ、盛大な水音が辺りに響き渡る。

「本当に、ここの湖はとても綺麗。この美しさは心奪われますわね、ラインナルト様」

「ありがとう。アルメリアにそう言ってもらえると、僕も嬉しい。ここは僕の昔から大好きな場所なんだ」

「あら。ジェネミーの姿が見えないけど…」

「ああ。先程、何かを気にしたように森の中に歩いて行っただけ、そこら辺を散歩しているのかもしれないね」

「まあ、あの子ったら、フラフラと…」

「そうそう、ここの湖には、言い伝えがあるんだけど？」

「まあ、どんな言い伝えなの？」

「この湖には、あの美しいと有名な妖精のマデリーンがたまに水浴びにきて、その水浴びを見た者の心を奪うって言い伝えがあるんだ」

「まあ。マデリーンは水浴びが好きな妖精で有名ですものね。マデリンなら私もぜひ、お会いしたいですわ」

「今頃弟君も、美しい妖精に心を奪われている最中かもしれないね」

「まあ。では、私の義妹は妖精という事になるのかしら…？」

そこで二人は、顔を見合わせて笑った。

び

び

ビエッーーーーークショーーーーン!!

ちくしょうめえ!

寒い!くしゃみが出る!さあ、どうしてくれようか?この始末。

私は私と同じく濡れネズミになったまま湖の中、腰を下ろすジェネミーを睨みつけた。

31 バトル アゲイン（後書き）

やっぱりリツキは気が強い。

32 バトル エンド

私は、私が足を引っ張ったせいで湖ですっ転んだ、目の前のずぶ濡れジエネミーを強気な眼で見つめる。

対する私も全身濡れている。

元はといえば、ジエネミーが悪い。

か弱い乙女の腕を力いっぱい引っ張るなどとは、転べと言っているようなものだ。

見事にすっ転んで、濡れてしまった報復をして何が悪い！これで二人は全身ずぶ濡れ、おあいこだ。

今の状況がすぐに理解出来ないのか、言葉も発せず私を見ているジエネミーに

「これで、おあいこ！お互い様！」

びしっと一発言ってやった。

「だいたい何の事だかわかんないけど、いつまでもうだうだと！私には理解不可能！」

そうだ、少しはこの水につかって頭を冷やせばいいんだわ。私は、ジエネミーに向かって言い放つ。

ジェネシーは、頭から水をかぶったようで、前髪から濡れている。全身を包んでいたマントも、ずぶ濡れだ。

まあ、あれだけ派手にすっ転んだら当り前か。湖に転んだ時のままの体勢、尻もちをついたまま私を見つめてる。自分の今の状況、メイドの私にすっ転ばされた事態が、余程信じられないのか、放心状態かのようにも見えた。

したたる水滴は、彼の前髪を長く見せ、均整のとれた美しい顔も水滴がしたたっている。

まさに水もしたたるいい男（古っ）ちょっと一瞬見とれてしまった自分がいるが、私は頭を振る。

ダメダメ、顔は良いけど、この人シスコン。そして、私を湖にすっ転ばした張本人。

こんな場所に長居は無用だ。

私はそう思いつつ、転んだ湖からやっと立ち上がり、丘に上がろうと背を向けた瞬間、いきなり視界が揺れて反転した。

右腕が何かに力強く引つ張られる感覚、

バランスを崩す、

……あーっ!!

と思った瞬間と同時に響く水音また一つ。

「な……何すんのー！ー！！」

背後から腕を掴まれ転ばされ、不覚にも水を飲んでしまつてゴホゴホ言いながらも「最低」「か弱い乙女に何をする!」「女の敵」と散々わめき悪態をつく。

はっ…鼻から水を飲んでしまったではないか!地味に痛いんですけど!!

「これで、お互い様だろう」

「先にやったのは、そっちでしょう!」

ギャーギャーわめきながら、手で水を相手にかける。相手も負けずに反戦する。

「だいたい、そっちが正直に答えないからだろう!」

「だから意味不明だつて言ってるでしょ」

「全く、ああ言えばこう言う、どうして素直じゃない!」

「それは、こっちの台詞だあ!少しは相手の話を聞く耳持ったらどうなんだっ!その耳は飾りかつ!」

私は、小馬鹿にしたようにあっかんべーと舌を出しながら、水をかける手を休めない。案の定、ジエネミーは更にびしょ濡れだ。ただ、かまうもんか。

私だつて全身濡れネズミだ。

しばらく、ギヤーギヤーとお互い罵りあい、水を掛け合った後、体力の消耗を感じて、肩で息をする。

敵を観察すると、敵も疲れたようで、肩で息をしている。しばらく、お互いにらみ合い、肩で息をする。

ジエネミーの髪は濡れて、顔や首に張り付いている。赤い髪は濡れ

てもなお、火のように赤い。瞳もまた、火の色をもち、私をきつい眼差しで見つめている。髪からしたたる水滴が、整った顔に落ち、そのまま湖へと滑り落ちる。

ふと、自分の格好を見てみると、髪はびしょ濡れ、服もちろんそう。水を吸って重たいいったらありやしない。よくもまあ、ここまで濡れる事が出来たなあと思ったら、自分自身に呆れて笑ってしまった。

「何がおかしい?!」

私の笑いにめざとく気付いた彼は怒りながら聞いてくる。

「何だか、ここまで濡れた自分が面白くて…」

ジェネミーは、自分の格好をまじまじと見下ろした後、

「…それも、そうだな」

力なく脱力気味に、認めた。その様子を見てなんだか、笑ってしまった。

笑った瞬間、相手からきつく睨まれたが、その様子もおかしくて、また笑ってしまった。

「お互い水に濡れて頭も冷えたと言う事で、オッケーです、ケンカ両成敗ですね」

勝手に自己完結して、笑って告げる。

「…お前は、勝手に何を納得して…！…って！お前何してるんだ！」

慌てた様子のジェネミーに、私は呑気に答える。

「え？何って、見てのとおりですけど。ここまで濡れたので、せつかくなので、ちよつと泳ごうかと。ガチでクロールしてみます」

しかし、悲しいかな。ひざ下程の深さしかないので、浅い。泳ごうと思ったが、浅すぎて泳げない。

「うーん。残念だ」

「…何がだ？」

「いえ、ちよつとせつかくなので、泳ぎを披露しようかと思って。それでも泳ぐのは得意でしたので」

「…別に披露などしなくてもいい」

「そんな事言つて、ちょっと見たいんでしょ？私これでも元の世界で水泳大会で好タイム出して、つけられたあだ名が『カッパ』でしたから」

「…お前の言う『カッパ』とやらがわからんが、何かよからんものだと言う事は理解した」

「よからんものじゃないですよ！ちゃんとした空想上の生き物ですよ！じゃあ、これなら、わかるかな？『人魚』です！マーメイド！わかります？」

カッパと人魚じゃイメージ的に一緒かどうか微妙なところだが、とりあえず水に住む生き物だし、泳ぎがうまそうなので、よしとしよう。

私の必死な説明をジエネミーは横目で聞いていたが、ふと思い出したかのように顔をそらした後、

「…泳ぎが得意な空想上の生き物といえば、こちらでは、マデリンという生き物がいる…」

「あ、そんな感じかな？よくわからないけど、泳ぎが得意で人ではない空想上の生き物ですね」

なんだか知らんが、どこの世界にも空想上の生き物ってのはいるものなんだな。

カップとマデリーンか。

こっちのマデリーンとやらも、頭に皿がのっついてきゅうりが好物なんだろうか。

泳ぎたいけど、浅いため、泳ぎを諦めた私は水を手ですくい、顔を洗う。

「あー！気持ちいい！」

もうここまで濡れたら、半分やけっぱち！どうせなら、湖を満喫する方向で行く。

…後の事は、考えない！

髪からしたたる雫も、顔をぬらす水も全て手で振り払い、それをつの間にみつめていたジェネミーに気付いて、笑顔を向ける。

「…マデリーンか」

ぽつりとつぶやいた彼に、あえてその意味を聞かなかったが、何だろつ。

きつとカッパ的センスな私の泳ぎが見たくて残念だった眩きだろう。私は勝手にそうとらえて、彼の燃えるような瞳を見つめて笑った。

32 バトル エンド（後書き）

ジエネミーと精神年齢一緒かも。ケンカ友達的感覺ですね。
マデリーン（美しい妖精）とカップが同じ部類なんて…。

33 湖での再会

無言で私を見つめ、一瞬躊躇するような表情を見せた後、そっぽを向いたまま手を差し出すジエネミー。

私は黙ったまま、ジエネミーの手を取ると、その手は、予想と反して温かった。

そして無言のまま強く手を握り返す彼と一緒に水から身を引き上げた。

丘に上がった私とジエネミーは、二人で全身濡れている。さて、皆に言い訳をどうしよう。

一時的な雷雨に見舞われたとでもいうべきか？そりゃ無理だ。

というより、着替えもないがどうすれば。

最悪、この格好のまま帰りの馬車に揺られるしかないのかな。いろいろ考えながら、水を含んだスカートを絞り、水を出す。最初は靴を脱いで湖に足をつけて遊ぶだけのつもりで靴を脱いでいたのに、幸いにして靴は濡れていない。

だけど、靴だけが濡れていないって、この状況でどうよ。それもうける。全身濡れていて靴だけが無事だなんて。

黙々とスカートを絞る私をジエネミーは黙って見ている。ちよつとジエネミー、自分もちやんと絞ないと風邪ひくよ、そう言いかけた時だった。

不意に何かの気配と視線を感じて、下を向いて絞っていた私は顔を上げると、私を見つめるジェネミーと目が合う。

ジェネミーは、なぜか、私の顔を驚いたように真っ直ぐ見詰め、赤茶色の瞳は大きく見開いている。

声こそ出さないが、少し口を開きかけて何かに驚いているかの様子に私は首をかしげる。

どうやら、私の背後に視線がいつているみたいだと気付いたのは、数秒彼を見つめた後。

なあんだ、私が見つめられているのかと思って勘違いしちゃったじゃないかよー

……

って…

まさか今度こそ、本物の熊かつ！

私の脳裏によぎったその可能性に、瞬時にジェネミーの視線の先、私の後方の木々の間に視線を向ける。

私の背後の木々の間にいたのは毛がモサモサの熊ではなかった。だけど、何だか、他の動物っぽい…？

よくよく眼を凝らして木々の間を見ると馬のようだ。何でこんな所に馬？

そしてそこにいるはずのない人物を見かけて

「あ」

思わず、指をさして声を漏らす。

『人様を指で差してはいけません』小さい頃に、親からそう教わって育ったのに、いざという時は忘れてしまうものなんだな。

いかん、いかん。

私に指を差された人物は、指を差されてる事など、少しも気にした風でもなく、近づいてくる、

「リツキ」

落ち着いた感じの低めの声で私の名を呼ぶその人物は、薄手の純白のマントを身につけ、ハニーブロンドの金色の髪を光に照らして輝かせ、風に揺らしながらこちらを見て真っ直ぐに近づいてくる。

声の主はアデレイだ、アデレイ。

てか、アデレイなんでここに？

あゝ、アデレイ…と片手を上げて声をかけようとした瞬間、ジェネミーが

「アーデレイド様！」

声を上げ、すばやく腰を折ろうとした瞬間、アデレイが片手でそれを制した。

あれ？この二人知り合いなのか？

「リツキ、何をしていた？」

心なしか、アデレイの声は笑っていない気がスル…。むしろ少し怖い。なんだろう。顔は一見、笑顔のように見えるのに、声も瞳もちつとも笑っていない気がする。むしろ底冷えするような冷たさすら感じる。

なんだろう、水につかって私の体は冷えてしまったのか？

「えっと、散歩」

「ただの散歩なのに、なぜ濡れてる？」

「それは…泳いだから」

「泳ぐって服のままか？」

アデレイの瞳は、よりいっそう険しい瞳に代わっていく。なんだろう、ここは正直に言わないほうがよさそうだと本能で判断した。

「えっと、湖に足つけて遊んでいたら、転んで滑ってもがいていたところをジェネミー様に助けてもらったの」

本当は、ジェネミーにすっ転ばされたけど、私もお返しにすっ転ばしたので、先程の件は、おあいこだから言わないでおく。

それに何だか、正直に言わない方が、身の為のような気がしたから。…私にとってもジェネミーにとっても。

「ふうん」

私の答えにまったく納得していない風なアデレイは、そのままゆっくりと視線をジェネミーに向けた。

何だか、一瞬の緊張が空気に走ったような気がする。

ジェネミーは驚きと動揺を隠せないまま、

「アーデレイド様、お久しぶりです」

「ああ。久しぶりだな」

「ヒューストン伯爵のお屋敷に休暇として伺っていると聞き、我が姉と駆けつけましたが、お会い出来て光栄です」

ジェネミーとアデレイの顔を見比べて、ここでやっと私の中で繋がった。

ジェネミーとアルメリアお嬢様が探していたのは、アデレイだったのだ。なんだ、なんだ、アデレイめ。私とは無駄に毎朝顔合わせているのに、なんで、ジェネミー姉弟には、会ってやらないんだ。自分をわざわざ訪ねてきたっていうのに、感じ悪っ。

非難めいた視線をアデレイに向けると、アデレイは気付いて『ん？』と涼しい顔して目で聞いてきた。

だあゝ相変わらず空気の読めない男、アデレイめ。

ジェネミーは、あんたをずっと探していたんじゃないかあ。

アデレイが、ひよこひよこジェネミーの前に姿を現していればこんな事にならなかったのでは…。

…だとすれば、私はアデレイのせいでこんなに水に濡れてるんじゃないのか？

なんだか、八つ当たり場所を私は見つけた気がする。

そして何だか、アデレイとジェネミーの間に漂う空気も微妙だと感じとった私は、

「アデレイはどうしてここに？」

そう尋ねるとアデレイは私に向かって首をかしげて笑顔を向ける。そして、

「寒くないか？」

出た出た、自分に都合の悪い事(?)は答えない男アデレイめ。早速私の質問はスルーで自分の質問か。
まあ、いいけど。そんなアデレイに慣れた風に私も答える。

「平気。今は涼しいけど、湖は冷たくて気持ち良かったよ」

「そうか」

「気持ちよかったから、アデレイも今度泳ぐ事をお勧めするよ」

「……………今回は一緒に…な」

アデレイは、爽やかな笑顔で笑った。

なんだ、なんだ、アデレイも興味があるらしいな、私のカップ伝説に。

それなら、そうと次回披露してやらん事もないぞ。

すっかり機嫌を直した私も濡れたまま微笑み返す。笑っていたら、そのまま私の頭に何かがフワリと覆いかぶさって、驚いた。

「風邪引くと悪いから、とりあえず、これを被れ」

そう言うなりアデレイは、私に自分の羽織っていた純白のマントをかけていた。アデレイの薄手のマントは、高級そうな柔らかな手触りとそれに加えてベルガモットの爽やかな香りが私を包んだ。

「え…いいよ、アデレイ！マント濡れちゃうし！」

「濡れたって平気だ。乾かせばいいだけだ」

「でも…！」

「…そのまま帰る訳にはいかないだろ」

私は自分の姿を見つめなおし、再度考えてから

「…では、ご遠慮なくお借りします…」

「珍しく素直だな」

ここはご好意に甘える事にした。だって全身濡れネズミ。だけど、珍しいって何さ。失礼しちゃうわ。一言余計だわ。

「さて、いこうか」

「ほえ？」

手を差し出すアデレイに意味がわからず、首をかしげる私に、アデレイは微笑む

「その格好では皆と一緒に帰れないだろう。だから、一緒に帰ろう」

って、アデレイ、あんたは一体何しに来たの？

「…と、いう訳で先に連れて帰るから、後は皆に伝えておいてくれ」

「アーデレイド様…！」

弾かれたように叫ぶジェネミーを尻目に私を引っ張りぐいぐい歩いていく。

「ちょ…もう帰っていいの？てか、アデレイは何しにきたの？」

「いいんだ。もう目的のモノは見つけた」

軽く笑顔で微笑まれ、突っ込む隙も与えないアデレイは、乗ってきたであろう馬にまたがると、私においてと目配せをして手を差し出す。

34 白馬とご対面

「いいんだ。もう目的のモノは見つけた」

そう言ったアデレイの何が目的のモノだったのか、私にはさっぱり見当もつかない。
だってアデレイ手ぶらだし。

当の本人アデレイは、軽く笑顔で微笑み、そのまま乗ってきたであろう馬にいと簡単にまたがると、私においでと目配せをして手を差し出す。

「…しかも白馬…」

思わずポツリとつぶやいた私の台詞をアデレイはよく聞き取れなかったみたいで、

「…何か言ったか？」

と尋ねるが、いや言っていないと首を振る。

金髪碧眼に加えて白馬ときたら、童話に出てくる王子様の定番ではないか。

これでかぼちゃパンツに巻き髪ヘアーに白いタイツならそのまま童話の王子様になれる気がする。

白馬は立派なたてがみに毛並みも良さそうで、これまた立派で頑丈そうな鞍をつけて、主人であるアデレイを乗せたまま私を静かに見下ろしている。

何だか、そんな白馬の様子を見ると、選ばれた人しか乗ってはいけない気がしてくる。

そんな白馬に選ばれた馬上の主の、ハニーブロンドの髪は、光を受けて輝き、綺麗な空色の蒼い瞳は真っ直ぐに、そして口元は優しい微笑みをたたえている。

アデレイは、見かけだけは完璧なので、白馬に乗る姿も何とも絵になる、ビューティホー。

それに比べて私は、借り物の男物のマントに身を包む、全身濡れネズミ。

『ヒッヒーン。小娘乗るんでないよ！この一般庶民のパンピーちゃん！』

白馬が、こんな事を言っているような気持ちになるが、錯覚か。私の心の曇りで聞こえる幻聴か。
恐る恐る近づくと、白馬がいきなり尻尾を揺らしたので、その様子に驚いて、後ずさってしまった。
白馬は私を乗馬拒否か？と心配になった。もしかしたら動物の勘でわかるのだろうか。

実は、馬刺しが好きだって事を。

「…リツキ」

私の心配をよそに私の名を呼び、手を差し出すアデレイは、どこか余裕そうな顔して笑っている。

おいでと言われて、はい、とそう簡単に手を出して乗れる乗り物でもないだろうに…。相手は馬である生き物だ。生まれてこのかた、乗馬なんて経験した事もない。乗り方もわからないので躊躇する。そんな私の様子を悟ったアデレイは、目を細めて笑い、

「大丈夫だ。側にいる」

なんとも頼もしい台詞を吐いてくれる。

それでは、お言葉に甘えまして…と、思わず「ヨイシヨ」っと、気合一発の掛け声を掛けそうになった瞬間、私が差し出した手をアデレイの手が包み込み、そのまま力強く引き寄せられる。

その見かけからは、想像もつかないような、力の強さ、アデレイの手の大きさ、そして包みこまれる感触に、ドキツとする。

そうしてアデレイは、簡単に私を馬上へと上げてくれた。

初めて乗る馬は、想像していたより堅い座り心地で、最初は少し緊張した。だけど、この馬が走り出したらどんな速さなんだろうと段々と興味がわいてきた。

初めての乗馬経験で、ちよつと興奮気味になってきていた私は、

「うわぁ。すごい！初めて乗ったよ！ねえ？アデレイー」

ハイになりながらも後ろを振り向くと、なんともご満悦で微笑み満点、蒼い瞳を細めて笑うアデレイの顔が私の顔のすぐ真上にあり、その近さにビツクリした。

「うわ！ちよっ！」

慌てて後ろを振り向くのを止めて前方に視線を戻す。

やばい、アデレイのドアップを近くで見ってしまった…！

なんたる、まつ毛の長さ…！シミ一つないきめ細かく綺麗なお肌…！私に何ポイントの、乙女としての精神的ダメージを与えれば、気がすむのだろうか、この男は。

「落ちないように、しっかり捕まってる」

そう言うと、白馬はゆっくりと走りだした。

私はというと、後ろに座り手綱を引くアデレイの体温を感じて、正直落ち着かない。だって、想像していたよりも、ずっとアデレイとの距離が近い。こんなにも体が密着するものなんだとは、考えてもいなかった…！

私が借りたマントからは、アデレイのベルガモット系の香りがして私の全身を包む。その香りは、マントから香るのか、それとも後ろ

にいるアデレイ本人から香るのかもわからない程の至近距離。

透明感と力強さを併せ持つ香りに包まれながら、

駄目よ、駄目よ！このドキドキ！これはただのつり橋効果よ！

自分自身に言い聞かせながら、走る馬の上で前だけ見て進む。

35 問いかけ

風が頬を横切り、肌に心地良く感じる。後方から感じる人肌の体温と、爽やかで、それでいて鼻をくすぐる香りに私の心臓は鼓動がいつもより3割増しスピードで高鳴っている気がする。

『これは、きっと初めての乗馬体験だからっ！』

自分自身に言い聞かせながら、目を閉じる。

…駄目だ。

目を閉じたところで、私を包むアデレイ爽やかで心地よい香りに酔いそうだ。加えてアデレイの体温に、嫌でも距離の近さを感じさせられる。

私の後方、頭の上から、アデレイの吐息が時々感じられて、くすぐったい。

なんだか、いつもはふざけている人だと思っていたけど、私を乗せて馬にまたがるアデレイは、嫌でも男の人だと感じさせられる。

だって、アデレイの胸にすっぽり収まってしまっているように、馬

にまたがつている自分がなんとも言えずに照れくさい。

なんだか、心臓によくない乗馬体験も、どれくらい走って進んだの
だろうか。

ふと馬の走るスピードが減速する。

不思議に思っ てアデレイに問いかけようと後方に少し顔を向けると
アデレイは、微笑み

「馬を休ませる為、少し休憩する」

「…うん」

なんだか、ドキドキしてしまっ て素直に返事をしてしまっ た自分が
妙に照れくさい。

相手はアデレイだから！毎朝、顔を会わせているじゃない！あのア
デレイだから！
早朝散歩が趣味なアデレイだから！きつと、トマトを密かに狙っ
ているに違いないアデレイだから！

だから静まれ心臓！と自分自身に言い聞かせる。
心情的には、うーっと言って頭をかきむしりたくなるが、我慢する。

アデレイは休む場所を決めたらしく馬を減速させ、先に馬から降りる。

そして馬上に残されたままの私に下から手を差しだし、降りるように笑顔で催促した。

いつも、アデレイの方が背が高いので私は自然に見上げる姿勢になるが、今回は逆だ。

私を下から見上げて見つめるアデレイに、馬上からアデレイを見下ろす私。

白馬に乗った美形キャラに紳士的な態度で手を差し出される私。お姫様じゃなくてごめんね。

そしてアデレイの手を取ろうとした瞬間、馬がちよつと体を揺らしたので、驚いた私はアデレイの手を取るところか、あわや落馬の危機である。

「わわわっ」

馬から落ちそうになり、バランスを崩した瞬間、アデレイに力強く手を引かれ、体を支えられて、そのまま馬の上からアデレイに引き下ろされる姿勢になった。またもや感じるアデレイの香りに、私は慌てて、アデレイから離れる。

「びっ…びっくりしたー！馬から落ちるかと思った！」

「…落ちはしないさ。…俺がいると言っただろう」

私の落馬の危機を救い上げたアデレイは、何だか嬉しそうに笑っている。

休憩場所としてアデレイが選んだ場所は、近くに小川が流れ、木々が立ち並び木陰を作り、休憩するには絶好のポイントだった。

私は、一番大きい木の下に行き、腰を下ろす。アデレイは、馬を小川の側まで連れて行き水を飲ませている。

馬も喉が渴いていたようで、嬉しそうに水を飲んでいる。アデレイだけではなく、私まで背に乘せているのだから、馬も疲れるのは当たり前だ。

こんな白馬の似合わない容姿の一般庶民の私でも、背中に乗せてくれるなんて、何て心の広い白馬だ。

何だか、初めて馬に乗ってみて、意外に馬が可愛いと思ったりして。そうになると、今まで『馬刺し最高ー！』とか言っただけで食べてた過去の自分を反省する。

馬刺し断ちを今ここに決意する。

一人考えていると、アデレイは小川から馬を引き上げ、近くの木々の木陰まで馬を連れて行き、手綱を一番太い木にくくりつける。

その慣れた作業を、木陰から見守る。アデレイは慣れた手つきで馬のたてがみを撫で、馬を休ませている。馬の扱いに慣れている様子を見るとアデレイは常日頃から馬に乗っているのだろう。慣れた動作と洗練された手つきのアデレイを木陰から観察する。

日の光を受け金色に輝く髪に、蒼い瞳は深い海のようなようだ。

馬の扱いなれた手さばきでも、その手が荒れている事は決してなく、動作の一つ一つが品のある。

すらりと伸びた足は、まぎれもない八頭身。顔立ちには、美麗。

本当にいい男だよ、アデレイは。…口を開かなければだけど。

観察している私の視線に気づいたのか、アデレイが蒼い瞳を輝かせた笑顔でこっちに向かってくる。

「服が濡れている」

「え？ああ…だいぶ乾いたけどね」

心地よい風と強い日差しで、服もだいぶ乾いてきていたので、そう
気にならない程だ。

「風邪をひくと悪いから脱いで乾かしたほうがいい」

「は？」

「脱いで日差しの下に置いて、そして俺の上着を羽織っていればいい」

「そうだね。じゃあ、いっちょ脱ぎますか……って脱ぐか!」

「…俺しかいないから気にする事など何もないのに」

「遠慮します」

何を考えているのだ、この男。やっぱりアデレイだ。

あんたがいるから、ご遠慮すると言っているのですが。

自分の存在は問題ないとも言うのだろうか。いや、いくら私でも人がいないからと言って、外で裸になる趣味はない。

そんな公然わいせつ行為、捕まってしまうわ。

「俺なら脱ぐが。濡れた服は気持ち悪い」

まるでそれが当たり前かのように、平然と言う。

いやいやいや、アデレイ、それは、側にいる方の気持ちになってみなさいよ？

目のやり場に困るのですが。

本当にまっ裸は勘弁して。せめてアダムを見習って葉っぱで隠して欲しい。

私の呆れた顔を見るなり、クツと笑って、アデレイは言う。

「…まあ冗談だな」

「冗談かよっ！！！」

冗談なら真顔で言っちなよ！相変わらずアデレイの冗談は、区別がない。

まったく、元はと言えば誰のせいで濡れたと思っているの？

私は、楽しそうに笑顔を浮かべるアデレイに、湖からの疑問を投げつける事にした。

「アデレイ、あのジェネミーとアルメリア様はアデレイを探していたんだね」

そう問いかける私にアデレイは、「イエス」とも「ノー」とも言わぬあいまいな笑みを浮かべたままだ。

「なんで同じ城に滞在しているのに会わないの？あの人達と友達じゃないの??」

ふと前々から感じていた疑問、きつと出会った当初から心の奥底にあった疑問をアデレイに問いかけてみる。

言葉にするのは初めてだけれども。私の隣に腰をおろしたアデレイの深い蒼の瞳を真っ直ぐに見つめて問いかける。

「アデレイは、何者なの？」

36 私の出した答え

「アデレイは、何者なの？」

今までずっと、どこか疑問に思っていたけれど、心に蓋をしていた事を口にしてみる。

蒼い瞳は私の問いかけに揺らぐ事もなく、真っ直ぐな瞳で見つめ返した後、私に微笑みかける。

「何者だと思う？」

：おおっと！そうきましたか。こっちが質問したのに、逆に問いかけできましたか。ずるい男ですね。

しかもヒントも何もなしですか。ならばここは正直に、

「よくわかんない」

真っ直ぐに見つめる蒼い瞳を見つめ返して、自分の考えている事を正直に言う。アデレイは太陽を背にして座っているので、私の位置からは、太陽を眩しく感じてあまり直視できない。太陽を背にする

アデレイのハニーブロンドは黄金色に輝き、そのいつにも増して眩しい輝きと、蒼い瞳は、快晴の空の色にも負けていない。

太陽のせいか、アデレイの神々しいまでの存在感を眩しく感じて、右手で自分の顔に手をかざしながらも答える。

「よくわかんないけど、私の知ってるアデレイは早朝散歩が好きでトマトに興味があつて…」

身なりや容姿等、ラインの友人であるという時点で高い身分なんだろうと、こっちの世界の常識に疎いおバカな私でも想像がつく。

本来ならメイドという私が口をきく事さえも出来ない高い身分かもしれない。

だけど、今まで接してきてアデレイは私の態度をちっとも怒る事もしないし、いつも静かに笑って楽しそうだ。

だから、今までも、質問する機会があつたはずだけど、なんとなく聞きそびれていた。

アデレイは何者なの？

って。

そこで、ふと思ひ出す。

私が、この世界に來た時に、よく『異世界人』って呼ばれて噂されていた。

それは、しょうがない事なのかもしれないけど、同じ人間なのに…と悲しくなったのも事実。

リツキという私個人という人物よりも、『異世界人』という目で見られていた。

それは、何だか、壁を作られている様で、『異世界人』というひとくくりでまとめられているかの様で何だか、少し寂しかったのだ。

私は、私なのに…。

そこでふと思う。

今、私がアデレイにぶつけた質問、『何者なの？』って聞かれて、自分が何者か答えられる人はいるのだろうか。

私だって『何者なの？』って聞かれたら「私はリツキ」って答える。

私は、私。

例え異世界から來た事が事実でも、私は、リツキという個人であり、それ以外の何者でもないわ。

そう思った瞬間、

「やっぱり、アデレイはアデレイだわ」

自分のした間抜けな質問に、私はケラケラ笑いながらアデレイに答える。

一瞬、瞳を大きく見開き、驚いたような表情をしたアデレイは、その直後に私を見つめて口の端を上げて静かに笑った。

その表情が、何とも嬉しそうに良い表情だったので、私もつられて笑顔で微笑み返す。

アデレイってば、いつもは、どっかかというと無表情なタイプに見られがちだけど、

ごくたまに、すごく嬉しそうに笑う時があるんだよねあ…。

ぼんやり、と呑気に思って笑っていたら、いきなり力強く腕をひかれるのを感じて驚きで息がとまる。

それは、一瞬の出来事で、私はなぜか、先程まで私の目の前で笑っていたアデレイの腕の中にいる自分に思考停止していた。

いきなりの事だったので、私は心臓が高鳴るより前に、心臓が素手でわしづかみされた感覚で、心臓が止まるかと思った。

逆らう事も身をゆだねる事も出来ずに、ただアデレイのなすがままに力強く抱きしめられていた。時間にしてほんの数秒だったのかもしれないけど、私にはすごく長い時間に思えた。

現に呼吸をする事を忘れてしまっていた自分がいる。そのまま力強く抱きしめられ耳元で囁かれる、

「…そうか。リツキから見て、俺は俺なのだな」

そう小声で囁かれた瞬間、ふわりとアデレイの香りが舞い、アデレイが私をその見かけよりもずっと厚い胸板から解放する。

思考停止していた私の嗅覚が、透明感と力強さを感じさせるベルガモットの香りを感じて我にかえる。

私を胸元から解放したけれど、アデレイの両手は私の両腕を掴んだまま、真剣な眼差しを私に向ける。

「…リツキには頼みがある。これから先、リツキの力を借りたい事が出てくるかもしれない。その時は力を貸して欲しい」

急なアデレイの申し込みに、一瞬、何を言われたのか理解出来ずに考えこむ。

は…？私…？私の力…？

…いや、そんなに目立って力持ちではないとは思うけど…。

しかも、アデレイでも持てないような重い物は私でも無理だと思うけど…。

それとも、私がそんなに力持ちに見える？それはそれで心外ですが…。

怪訝な顔した私にアデレイは蒼い瞳を揺らして静かに笑い、即座に訂正する。

「…ただ、側にいて力を貸してくれるだけでいいんだ」

アデレイは、意味不明な事を言う。

私かというと、先程アデレイに抱きしめられた意味がわからずに、思考停止からまだ完璧に立ち直っていないプチフリーズ状態だ。そんな私に考える暇も与えないままお願いとは、アデレイも策略家だ。心の中は、全然整理できていないと言うのに。

アデレイは、きつと意味不明で間抜け顔をしている私に優しい声で、

「…そう深く考える事ではない」

ん？そうか……。

…まあ、私で出来るレベルなら協力を惜しまない事にしよう。

そう一人で納得して頷き、うつむいて考えていた顔を上げ、

「…わかったわ、アデ…」

「リツキ…」

返事をしてアデレイの方を向いた瞬間、目の前に飛び込んできたのは、艶やかな蒼い瞳を潤ませたアデレイの顔だった。

何だか蒼い瞳は潤んでいて、唇からは吐息が漏れるのが感じられそうなる程の距離の近さ、そして、その顔が徐々に近づいて来る事実には私の動きは止まる。

甘ったるい声で私の名を呼び、瞳は優しく見開いて潤みを運び、唇からの吐息を感じる。

綺麗に整った顔と私の顔の距離が徐々に近づくのを、熱を帯びたアデレイの体温で感じる。

そして、そのまま、アデレイの動きの一つ一つを、まるでスローモーションのように感じて見つめている私がいる。

アデレイの放つ、透明感と力強さを感じさせるベルガモットの香り

が私に近づいてきた瞬間我にかえる。
そして、先程包みこむように抱きしめられた事を思い出して、顔が赤くなると同時に…

「近いっ！」

ギリギリセーフでアデレイの顔を右手で制する。

ダメダメ！一度目は油断したけど、過剰なスキンシップは禁止じゃ！
全く、何をするつもりだ！こちらは、アメリカン方式の抱擁に慣れてないんだから、そんな過剰なスキンシップは勘弁してくれ！感謝の気持ちはハグではなくて、せめて握手で十分だ。

右手で制したアデレイの顔から、ため息が漏れたような気がしたのは、気のせいだろうか。

そして、その後、アデレイと共に白馬に揺られて無事に帰ってきた。
お手伝いのつもりが、濡れて皆より先に帰ってくるといって、出来事に

『私…何しに行っただ…』

と一人後悔の念に苛まれた。
せっかくラインにお願いされたのに…。上手く最後までお手伝い出
来ずにごめんなさい…。そして…

お願いだから、お仕置きはしないでええええー！。

と祈りながらも、眠りについた。

37 ブラックな回想（前書き）

腹黒さん視点です

37 ブラックな回想

「どういっつもりだ」

「どういっつもりもないよ」

目の前にいる幼少の頃からの友人の苛立った声に動じずに、紅茶を飲みながら答える。まるで僕の決定事項が全て彼の意志に反するのだろう。苛立っているのがわかる。

「だから、湖に行くよ。アルメリアとジェネミーと」

最初、さして興味もなさそうに聞いていた彼は次の台詞を聞いた途端に、顔色をかえた。

「リツキも連れて行こうと思って」

その言葉を聞いた瞬間、美麗な顔を歪めて明らかに不満そうに聞いた。

「なぜだ？」

「彼女にお手伝いをお願いしようと思つて。それに自然が綺麗なトコだしね、見せてあげたいじゃない」

僕は、彼の怒りなどちつとも気付いていない風に紅茶をティースプーンでかきまわしながら答える。彼の表情は苛立ちを浮かべて、その美麗な顔の眉間に皺を寄せながら、何かを考えている。

「…だから、君も来ればいいと誘っているのさ、アデレイ」

僕の言葉などまるで耳に入っていないかのように、眉間に皺を寄せたまま僕の言葉を見無視しているアデレイにため息を一つつきながら、

「だって、いつまでもこのままじゃいけないのは、わかっているでしょ？」

僕の言葉に過剰に反応してにらみを利かせるアデレイは凶星だったのだろう。

「…」

その沈黙こそが彼の答えだった。僕はその答えに気付かない振りをしたまま

「じゃあ、先に行ってるから」

最高の笑顔で笑って、部屋を後にする。

部屋を出て角を曲がるとちょうどよくお目当ての人物が現れた。今日も元気に楽しそうに華やいだ空気を出している。先程まで一緒にいたアデレイの空気とは違ってかわって癒される空気だ。僕は彼女を見つけた瞬間、ほっと一息ついた。そして僕が近づくと、大きい目を見開いて驚き、すぐに笑顔を向け、にこやかに挨拶してくれる。

「湖ですか？」

「そうなんだ、ここの土地からちょっと先に行くとね、すごく澄んだ湖があるんだよ」

リツキに先程の件をお願いする。何ごとにも興味津々な態度を示す彼女の黒い瞳は、興味深そうに輝いて、ただ話すだけでも、こっちも楽しい気分になってくる。

「だから、デイラン家の客人を避暑も兼ねて、湖に案内しようと思うんだ。せっかくだから、食事も湖でしようかと思って、アドマに朝一で準備するよう伝えてある。そして湖に何人かメイドも連れて行って準備を手伝って欲しいんだ」

彼女は一瞬輝くような笑顔に向けたけど、何か心配事でもあるかのように、顔を曇らせ心配そうな顔になった。

内心あれ？って思ったけど、それは気付かないそぶりを見せ、こちららも精一杯の笑顔で対応する。

「だから、アドマの用意が出来たら出発したいのだけど、リツキも一緒に来て手伝ってくれる？」

「わ、わたしがですか？」

そう何よりも君に、リツキにも来て欲しいのだ。湖を見せてあげたいし、この城の外の空気も吸わせてやりたい。そして、何より親友を公の場に引き出す為にはリツキという存在が必要不可欠だ。

「あの…」

「ん？」

おずおずと心配ごとがあるかのように自然と上目遣いでこちらも見上げるリツキに、

『これは何かあったな』

と僕の直感がそう告げる。大方、ディラン家のジェネミーとひと悶着あったのだろう。

でも、そんな気持ちをリツキには見せずに、見せるのは精一杯の笑顔と

『もちろん、手伝ってくれるよね？』

という気持ちを込めての眼力パワー。

「…わかりました…」

案の定、リツキは納得してくれた。

「そう、良かった！じゃあ、早速準備を頼むよ」

僕もホッと一安心。

「それに、異世界からこつちの世界に来て、この城からあまり出た事ないでしょ？だから、こつちの世界にも綺麗な所はたくさんあるんだって事、見せてあげたいんだ」

この言葉は本当。縁あってこの世界にやってきた彼女に、この世界のいいトコを少しでも知って欲しいんだ。

いつか、帰ってしまうかもしれないのなら、なおさらだ。この世界の事は、忘れないでいて欲しいから。

…まあ、そう簡単に帰るなんて、彼がどんな行動に出るのか、想像しただけで恐ろしいから、今はその時を考えないでおく。

「心遣い感謝します、ご子息様」

赤く色づいた小さい唇から、素直に感謝の言葉を口にする彼女があまりにも可愛らしくて、つかまってしまいたくなるのが僕の悪い癖。

「次回から、間違った呼び方したらお仕置きするよ?」

大きい瞳を、更に大きく見開き一瞬固まってしまった彼女の頭の中は、きつとお仕置きの事で一杯だろう。

「なーんてね。じゃあ、アドマのお手伝いよろしく頼んだよ。たまに城の外も見ないとね。」

「ああ、これぐらいにしておかないとね。…アデレイが怖いからね」

「はい?」

なぜそこに彼の名が出てくるのか、意味がわからないように不思議そうな顔をするリツキに僕は笑ってしまった。

これは、相手ごわいぞ、アデレイ。

見る者全てを魅了する容姿を持つ彼の魅力が、リツキには効果を発揮しているのか、いないのか。振り回されているかもしれない様子が想像ついて笑ってしまった。

「じゃあ、準備をよろしくね」

さっそうと笑顔を振りまきつつも去り際に、

「あつ、そうだ。もし次回は、僕との約束破ったら、どんなお仕置
きがいいのかリツキの考えたお仕置きの中で選ばせてあげるよ？考
えといてね」

リツキの固まったまま引きつる顔に笑顔で答えてその場を去った。

…ああ楽しい。

一体どんなお仕置きを想像したのやら。リツキの表情を見て笑って
しまった。

言っておくけど、僕はそんなに口で言う程、意地悪ではないつもり。
もちろん人を痛めつける事なんて嫌いだし、ましてや自分より弱い
女の子を痛めつける事なんて想像すら出来やしない。

…だから、僕はすごく優しいつもり。傷つかないように、壊れない
ようにそっと丁寧に触れるつもりだよ？

だいたい、いつまでもこのままの状況では、何も変わらない。

例えリツキが興味を持っていなくても、彼に興味をもたれた時点で将来的に確実に巻き込まれると思うし、そうなる前に知る権利はあると思う。

それに彼女は異世界の人間だし？こっちの世界の常識とか知らない
と不利だろうし。

傍で見ていると、彼はきちんと自分の意志は固まっている。昔から一度言いだしたら、自分の考えを曲げない性格だ。ただ時期を見ているだけで。

心配なのは彼女だ。

実際彼女は、とてもよく働いてくれている。人望もあるし、他のメイドとも仲良くやっていて皆に慕われて可愛がられている。
暮らしていた世界は高い教育が一般的らしく、彼女の一般常識的考えも多少の国の違いはあるが基本しっかりしていると思う。

何よりも彼女は媚びない、真っ直ぐな性格だ。加えてその容姿。

ストレートに伸びた黒髪に、黒曜石色の瞳は、何事にも一生懸命でいつも輝いていて、その輝きを失わない。

白い肌に、小さく赤い唇に、物おじしないその態度。彼が興味を持つのも十分わかる。

いや、彼以外にも魅かれている人はたくさんいるだろう。現にこの僕も魅かれているのは認めざるを得ない。

なんだか、リツキの先程の表情からみて、ジェネミーとひと悶着あったようだけど、ジェネミーが彼女を気にするのはしょうがない事。

だってリツキはとても魅力的だから。ジェネミーは、メイドの姿を見かけると常に眼で追っている。

まるでお目当ての人物を探しているかのように。そしてティータイムの時間が近づくと、そわそわし始めるんだ。…お目当ての彼女が来るのを心待ちにしているのが丸わかり。

だけど、アデレイだって負けてはいない。あの超がつくほど低血圧の人間が、毎朝早朝嬉々としてこっそり城を抜け出しているのを僕は知っている。

あんなに爽やかに早朝に起きるアデレイを、付き合いの長いはずの僕でも初めてみたよ。

ああ、そうそう。

アデレイはやっぱり湖からリツキを連れて帰ったけど、まあこれも予想どおり。

僕としては、ライバルに花を持たせた感じでもあるけど、アデレイには、一つ貸しだな。

まあ、これはこれで彼女に『先に帰るなんてお仕置きかな』って言うて遊べるしね。

…ああ、彼女の引きつった拳句、困って固まった様子を想像すると、思わず笑みがこぼれそうになるぐらい、たまらなく可愛く感じてしまふ。

大きい瞳を更に大きく見開き、固まったまま僕の顔を少し見上げる表情を想像すると、自分の中の隠された加虐精神が刺激される。

このまま、本気で彼女を困らせて、追い詰めてみたい！。

そんな気分にはさえなってしまう。

だけど、彼女がそれで、もしも泣いたり本気で困ったりしたら、すぐさま救いの優しい手を差し伸べるだろう、僕は。

彼女は、笑った顔と少し困った顔が一番可愛い。

もし彼女が泣く事があるならば、僕はそれを許さないだろう。

誰かが彼女を困らせるのも内心おもしろくない、…僕以外の誰かが彼女を困らせるなんて。

なんなら、この城にずっといればいいのに。……僕の元に。

なんて、うつすら考える。

さあ、アデレイ、ライバルは多そうだよ。

うかうかしていると、誰かにとられちゃうかもよ。それがジエネミ―だったり…僕だったりして？

その可能性も完全否定はしないまま僕は一人で笑った。

37 ブラックな回想（後書き）

ド
S
ッ
!

38 トマトとキッチンボーイ

「では、ここで冷えるまで待ちまーす」

私は、テキパキと周りに指示をする。

…と、言っても私とローディの2人だけです。

今日は、トマトの有効活用と、美味しく頂く為の工夫をしようとお料理教室を開いてみました。

事の発端は、最近、ローディの叔父さんにお世話になって、市場の方へトマトを出品させてもらっているのだけれど、それが、最近は好調でよく売れるようになって来たのだ。

トマトに興味を持ってくれる人もいて、自分で育ててみたいと言う嬉しいお客様もいるらしいので、最近ではトマトの苗をミニカップに入れて売っていたりもする。

それと同時に「お勧めの食べ方は？」なんて結構聞かれるらしくて、それをローディの叔父さんから言われたローディは私に

「何か、いい料理があるか考えないか？……ふ……ふっ……、二人でっ

」！

と誘ってくれたので、喜んで即答OKを出して本日の作業に至る。

まずは、トマトを半分にカットしてへたを取り、ボールに入れて、つぶしてつぶしてトロトロにしたら網目の荒いこし器でこす。

続いて細かい目のこし器でさらにこす。これで種や種の碎けたものの皮が綺麗に取りきれはらず。この手間をきちんと行くと舌触りが全然違うはずだ。

2度こしでトロトロの混ざりっけなしの100パーセントトマトジュースの出来上がり。

まずは、試食をする。一口飲んでみて

「美味しい〜!!」

太陽の熱を全部集めて凝縮した甘さに、驚きと喜びの声を上げる。
ローディと二人で、その美味しさに感動する。

だけど、ここで全部飲んではいけない。

ここでひと手間加えるのだ。全部飲みほしたい欲望のまま突き進んではいけない。

まずは、トマトジュースを軽く火で加熱して、温める。
そして、『タメラー』という粉を火にかけてトロトロに溶かす。

このタメラーの粉は、甘く、その上ゼラチンと同じで固める性質があるらしいので、こっちの世界では、いろいろなお菓子や料理に使われているんだとか。

すごいぞ、タメラー。まさに一粒で二度美味しい、なんてグツジョブ、イカス。

そしてタメラーを溶かした後に、加熱したトマトジュースとタメラ

ーを混ぜ合わせて、その後は小さいカップに入れて冷やす。

…と、いつ以上の工程をローディが手際よくやってくれた。

私はただ指示したり、意見を言うだけ。何だか、ローディは器用な手つきで、テキパキと動くので、私は、見守りながらも試食役に徹する事に決めたのだ。

ローディがすごく楽しそうに作業するので、余計な手出しをして邪魔するのも気がひけたので、お願いする形にしてサポート役に回る。

「出来た　！！」

彼女が、興奮気味な声を出して叫ぶ。

冷やして固めている間、上手く固まるかな？味は美味しいのかな？と心配する彼女はまるでオヤツを楽しみにしている子供みたいで、そんな様子がまた可愛くて微笑ましくて、つい笑ってしまう。

ああ…俺って結構重症かも。

出来上がったばかりの冷たい赤いゼリーを、緊張しながらカップから皿にうつすのは俺。

白い皿にプルプルと揺れながらも、ちょこんとたたずむゼリーを見て彼女は眼を輝かせる。

「なんて真っ赤でキレイなゼリー…」

うつとりとゼリーを眺める彼女の横顔を見ると、黒い髪が邪魔にならないように、一つにまとめられ、白い頬は興奮からか、赤く染まっていた。まとめ髪から出る、さりげないおくれ毛が、何だか色っぽくてつい見つめてしまう。

そして真っ直ぐに真剣な瞳で俺の手元のゼリーを見つめる、輝くよ

うな黒い瞳、そのまつげの長さに驚く事、透き通ってキメの細かい白い肌、ゼリーに負けないぐらいのつやつやして赤く小さい唇。

彼女の瞳は真剣に、俺の手元にあるゼリーを見つめている。

あまりにも真剣なその様子に、ドキドキと胸の鼓動が高まる自分がいる。

ああ…俺…今、このゼリーになりたいかも。

一瞬、そんなバカな事を思った自分がいるが正直な気持ちだ。

そんなバカな考えを我ながら恥ずかしく思いながらも声をかける。

「味見してみようか」

喜んでうなずいてから、用意していたスプーンでたった今完成したばかりのゼリーを口に運ぶ彼女。

その小さく赤い唇の可愛らしいこと。そして

「味見だ〜！」

そう言いながら、口にスプーンを運ぶ彼女の豪快に開いた口の大きさに思わず見とれる。

あんなに小さく赤い唇が、どうやったら、あんなに大きく開くのか。

「美味しい！トマトの濃厚な味がギュツと濃縮されていて、舌触りもツルンと滑って心地よくて！」

彼女は、興奮しながらも話してくれる。良かった、どうやら美味しく出来たみたいだ。

俺もゼリーを一口、口に入れると、ヒンヤリとしてなめらかな舌触りと、フルーツのような甘みと優しい酸味を感じて思わず笑顔になる。

その横で彼女は、興奮気味に話し続ける。

「まるで宝石箱や〜！」

38 トマトとキッチンボーイ（後書き）

リツキ、まさかの彦摩呂発言

39 頑張れ俺

彼女がすごく喜ぶので、まだ何個か冷やしてあったゼリーを食べるように彼女に勧める。

最初は遠慮していたけど、まだ材料はあるし、何ならまた次回作ればいい、そう告げると目を輝かせて俺の隣に腰を下ろして上機嫌で食べ始めた彼女。

「私、このゼリー、バケツ一杯分ぐらい食べたいわ」

冗談にしては、目が本気な輝きを見せる彼女に、

「いや、それはさすがに飽きると思うよ」

苦笑して言う俺に彼女は、

「そうか。この入れ物ぐらいの少ない量で、もっと食べたいと思わせるからいいのか」

俺の言った事に素直に納得している彼女だけど、結局、彼女の試食した全部の量を合わせるとバケツ一杯分ぐらいにはなってる気がし

たけど、黙っていた。

笑顔で口にゼリーを運ぶ彼女を横目で見て思う。

ああ…。俺…。今、幸せかもしれない。

好きな子と二人で、台所に立って料理して、彼女が俺に話をしながら指示をしてくれて、俺は手を動かす。
そんな作業をしている間も彼女は、楽しみにしてくれているようで、わくわくした様子で見ている。

期待に満ちた表情を浮かべながら、大きい瞳を更に大きく見開いて俺の作業を見ている様子がまた可愛くて、俺はその期待に答えたくて、そして彼女の喜ぶ顔が見たくて、張り切って頑張ってしまった。

そして、俺が作ったゼリーを彼女が美味しい、美味しいって褒めながら笑顔で食べてくれる。

こんな傍から見たら何てことはない事でも、俺からすれば、すっげー幸せに感じる。

こんな毎日が続けばいいのにな…

と、思ってしまう。

彼女がふと食べる手を休めて口を開く。

「…最初さあ、こっちの世界に来た時」

俺は黙って彼女の声に耳を傾ける。

「もう、どうしたらいいかわかんなくてさ、パニックでさー」

彼女は真剣な顔で手に持つゼリーから視線を外さないまま続ける。

「地面に寝転がって泣いたもん。私」

そこで照れたように、でへへと笑う彼女のできるべくぼがまた可愛らしくて、胸がキュンとなる。

「だけど、最初に出会ったマーサさんにお世話になって、そこから皆が親切で優しくてさ。皆のお陰でここまでこれたと思うの。雇ってくれたヒューストン伯爵に、カリアにアドマさんにメリーストさんや、お城の仲間たち……」

彼女の、話を聞きながらうなづく。ああ、皆がリツキに優しいのは、リツキも皆に優しいから。

人は、優しくされると優しさで返そうと思う。

彼女は、噂になるぐらい美人なのに、自分で美人であると自覚してて、それを鼻にかけるような態度は決して取らない。

むしろ、勝気な気性でさっぱりしている。そして、飾らないありのままの自分をさらけ出してくれる。
一緒にいて楽しいと思えるし、彼女が人気があるのも当然の結果だと思う。

「本当に、やって来たのがこの地で良かった、って思うの」

そこで、俺を見てニコツと笑う彼女に、俺は心臓が高鳴り始める。

…もしかして、今、結構いい感じなんじゃ…。

俺の胸の鼓動が一気に高まる。ヤバい。彼女に、俺の心臓の音が聞こえたらどうしよう…。
だけど、止まらないこの高鳴る動悸。

「あ！もちろん！ローディも！ローディにも出会えて良かったと本当に感謝しているよ！」

照れて頬をほんのり赤く染めながらも言う彼女の顔を見たとき、俺に稲妻が落ちたような衝撃が走る。

…もしかして、俺は今、絶好のチャンスなんじゃないか…？

そうだ、彼女と二人きり。気持ちを伝えるなら今じゃないのか？緊張しながらも、自分から溢れ出るこの想いを伝えるなら、今しかないと決断する。

頑張れ！ローディ！頑張れ俺！今が人生のチャンスなんじゃないか？！
いけ！いってしまえ！いくんだ俺！！そうして彼女に、

『俺もそう思っているし、できればこの先もずっと一緒にいたい』
って伝えるんだ。

俺はありったけの勇気を振り絞り、震える声で

「あつ…俺…俺も…っ…!!」

「だから、ずーっとな友達でいてね!? ローディ」

にっこり笑う彼女に俺は、

「あつ…ああ…、もっ…もちろんさ!」

とっさに条件反射で返事をしてしまい、力なくうなずいていた自分がいる。

.....

.....

.....

いつ...いいさ！チャンスはこれから、一回限りという訳ではないし！

そっ...それに、友情は愛情へと変わるかもしれない第一歩だもんな
っ...！！！！

.....チクシヨーーーー！！！！

40 お仕置きデスカ

は…

は…

はっ…

「はっくしょん」

「あら、リツキ風邪？」

カリアの心配する声に首をふりながら、風邪とは違っくしゃみに一瞬身ぶるいをする。

これはきつと誰かが私の噂話をしているに違いない。ズズズツと鼻をすする。その音にアドマさんは顔をしかめながら

「こらこら、リツキ。年頃の娘が鼻なんてすすっちゃいけないよ。それとくしゃみをする時もきちんと手で口を覆って」

アドマさんは、こちらの世界の私のお母さんのような存在なので、

大人しくはいと言う事を聞く。

「まったく、可愛い顔が台無しだよ」

あきれたように言うアダマさんに、笑って誤魔化す。

ジェネミーと共に湖に落ちて、なぜか現れたアデレイと一緒に皆より先に帰ってきて、あれから一週間。

一緒にお手伝いとして行ったアダマさんやカリア達には、ラインが上手く言ってくれたらしく、湖に落ちた事をすごく心配された。

『昼食後に、散歩をしていて湖に近寄ったら転んでしまって、全身濡れてしまったから、

見張りの人と一緒に先に帰らせた』という設定で皆に言ってくれたらしい。

ど…

どんだけマヌケな私。その設定は悲しすぎる。

けど、半分以上は事実なので、黙っていた。

ラインの優しさに感謝すると同時に、借りを一つ作ったようで、それはそれで後が怖い。

そんな気がするのは、私の勘ぐりすぎか？

あの湖に出かけた翌日、紅茶を運んで行ったラインの部屋で、笑顔で距離を縮めながら一歩一歩近づくラインに、私の顔はひきつっていたに違いない。

先にアデレイと帰ったから、お仕置きか？お仕置き発言が発動か？

ラインが一歩近づく。

「ああ。皆には上手く言っておいたから、話を合わせてね？」

優しい笑顔のラインの裏の部分を知る私は、何を言われのかビクビクして、本能で危険を察知して一歩後退する。

「あれから、ジェネミーは一人で濡れて帰ってきたまま機嫌は悪いし、リツキの姿は見えないし大変だったんだよ。けど、ジェネミーから聞いたよ、アデレイが迎えに来たんでしょ？」

後退した私に、また一步と近づくラインが、

「だけど、湖に落ちたのは本当に心配したんだよ。大丈夫だった？」

はっ、はい…！大丈夫！

との意味あいを眼力に込めて、うなずきながら、そして後退しながらも返事をする。

部屋の中心で話をしていたはずが、いつの間にか、部屋の隅まで追いやられてもう一步も下がれない。

まるで追い詰められた獲物みたいな私と、かわいい顔して実は、めっさ肉食獣を思わせるラインとの距離は近い。

隅まで追い詰められた私を、ラインは、壁に手をかけて更に私の逃げ場を失う。

私はその手に閉じ込められた体勢で、何だかラインに捕まった気分だ。

スミレ色の瞳は、優しく微笑んでいて、栗毛の髪の毛は思わず触れてみたくなる程、やわらかそうだ。

中性的な可愛らしさの中にも、ふとした仕草や表情が時々男らしくて、見かけとのギャップに驚く事もある。

これがギャップ萌えというものだろうか。

しかし、ラインは可愛らしいバンビちゃんを思わせる容姿なのに、なぜか中身は人食い熊グリズリーを思いだすのはなぜだろう。きつと私の本能の呼びかけかもしれない。

「まったく心配させて悪い子だね、リツキは」

ラインのスマイレ色の瞳を見つめたまま、呑気に考え事をしていた私はラインの一言で我にかえる。

「もし次に湖に落ちて濡れたらその場で服を脱がないとね」

は？なんですと？

「だって、濡れて風邪ひいちゃ困るじゃない。」

しれっと言うラインに先日アデレイに言われた『俺しかないから脱げばいい』と言われた台詞を思いだし、『お前もか』と、心の中

でツツコミをいれる。

なんだって、人を脱がせたがるのか、この二人。余程、私にストリ
ーキングをさせたいのか。

広い部屋の隅で、何だかラインに責められている気分な私。

この部屋はこんなに広いのに、なぜか隅に固まる2人。

こんな隅に2人でいる必要はないはず！

もつと部屋を中心に移動する事を提案したい。

そこでふと、私はある事を思いだし、すぐにそれを口にする。

「…あの、ライン。結果的に先に帰ってしまったけど、緑の景色は
綺麗だし、湖もすごく綺麗だった。…だから、ありがとう」

きちんとお礼を言ってなかった事を思いだし、お礼を口にする。

ラインは、一瞬スミレ色の瞳を大きく開いた後、可愛らしい顔が笑
顔全開になる。

「リツキにそう言って貰えると僕も連れていったかいがあるよ」

微笑むラインは、まるで性別不詳の天使のようにも見える。

素直に喜ぶラインの姿を見て、やはりきちんとお礼を言つて良かったと思った。

思つていても言葉にしなければ伝わらない事であるもんね。

「ありがとう、リツキ。そう言つてくれて」

私も何だか照れてしまつて、顔が少し赤くなりながら照れ笑いで誤魔化す。

ラインも嬉しい、私も嬉しい。

そして、私の照れて赤くなつた顔を見たラインは、まるで何か面白い事を見つけたかのように、スミレ色の瞳がキラキラと輝きを増す。口元には喜びの笑みさえ浮かべている。

そして、いきなり声のトーンを上げ、まるで感動したように

「ああ……！もうかわいいなあ！そんな顔しないでよ、リツキ！もっといじめたくなるじゃない……！」

この台詞を輝くような天使様の微笑みで言われた瞬間、私はドン引きした。

41 拉致連行

本日の紅茶の時間、慣れた手つきで用意を手伝ってくれるアドマさんとは逆に、何だか気の進まない私。だって、あの湖の一件、あれからアデレイにもジエネミーにも会っていない。

なんだかんだと用事を見つけては裏方に回っていたのも事実だ。だってジエネミーは、結果的には足を引っ張って転ばした訳だし、私的にはお互い様だと思うのだけれど、恨まれていたら困るし。内心、罰則を受けるかもしれないとドキドキしていた小心者でもある訳で。

もし罰則がラインによる『お仕置き』だったら早々に逃げだすわ！私！

アデレイはアデレイで何だか…。

正直恥ずかしい。

だって、よくよく考えるといきなり抱きしめられたんだよね。あの香りに包まれて。

彼が何を思っただんな行動に出たのかはいたって謎だが、それもあのアデレイだ。

相変わらず意味不明なのだろうがないが、そんな彼の行動に顔を赤らめる自分に少し腹が立つ。

アデレイめ、状況が状況だけに、あつけにとられたが、もし次回そんな事があつたら、アッパーカットでもお見舞いしてやらないといけないな。うむ。これ、軽くないマイポリシー。

色々考えているうちに、カートを押し進んで歩いていたら、いつの間にもやら立派な扉の前だ。

なんだか、緊張するが、そこは仕事なので、嫌だとは言っていられない。

深呼吸の一つをしてから、扉をノックしようと手を握ると、

『だから…で…そうだ…』

扉の向こうから声が聞こえる。どうやらアデレイには来客がいるらしい。一瞬悩むが、来客がいるならお茶の時間にちょうどいい。焼き菓子も紅茶の葉っぱも余分にカートに入れてあるはずだから。そう思いつつ扉にノックのグーを押しつけようとしたら

『リツキに…』

ん？呼んだか？誰かが？私を？

空耳かと思って周りを見回しても誰もいない。
だけど、確かに聞こえた気がする。自分と呼ぶ声が。気を取り直し
てもう一度グーと握った瞬間、

『だから…リツキを…』

んんん？待てよ。やっぱり空耳じゃない。扉の向こうでは私の話題
だ。

なんだ？私の事？

なんだろう、本人不在の間に話すとは、人はそれを噂話という。

一瞬、行動を静止して、ここ最近の自分の行動を振り返ってみると、
確かに話題になってもおかしくはないと思う。

『リツキが湖でジェネミーの足を引っ張って転ばしたらしいよ』

『そしたら逆に転ばされたんだって』

『そして最後に逆ギレして泳いだらしいよ。浅いのに』

『なんでも元の世界では『カップ』と呼ばれていたらしいよ』

などなど自分の噂話になりそうな部分を自分の中でいくつか上げてみたけど、どうでしょう。

…しかし、アレだわ。

いい話題だろうが何だろうが、まあ、悪い話題なら特にだけど、自分の話題の最中に、その場所に飛び込んで行くのって割と勇気がいるな。

何も知らない振りして、部屋に入っていけばいいのだろうけど、その後の空気が微妙。

扉の前で、うーんと悩む。悩んでいても仕方ないので、私は決意する。

やっぱり今はやめよう。

だってアレイが自室で誰かと大事な話をしていたら、悪いし、それが自分の話題だったら、なおさら聞きたくないのが本音だし。

立派な扉のまん前で、後から出直して来る事を決め、まずは自分の持ち場に戻る決意をした私が回れ右をした瞬間、固い何かに顔面を打った。

「…っ！…痛っ！」

固い何かに勢いよくあたり、顔を思いっきりぶつけた。
さして高くもない鼻がこれ以上潰れたら困る。鼻血ブーも、もちろん困る。

鼻を心配してさすりながら、ぶつかった何かを確かめようと顔をあげたら、私を見下ろす二つの赤い炎を灯した瞳。

『あ…ジェネミー』

今一番会いたくない人物ランキングの首位争いをしている人物がそこにいた。うげっ。

ジェネミーもなぜか痛みに耐えるような顔したまま自身の顎を片手で押さえて、私の事を見ている。
そして、忌々しげに口を開く。

「…お前は何をしているんだ、こんなところで」

どうやら私の鼻をつぶしそうになった原因はジェネミーの顎だったらしい。

なんだ、痛み分けですね。お互い様です。

しかし、アレです。あなたとは痛み分けな状況が多いですね。ドローが多い気がします。

お互い様なのでそんな睨まないで欲しい。

カートを指さし、まだ痛む鼻をさすりながら身振り手振りの、ジェスチャーで答える。

失礼と思いつつも今回は鼻が痛むので、許して欲しい。

私がジェスチャーで説明を終えると、

「……聞かれた事も満足に答えられないんだな」

鼻でバカにしたように笑われたので、カッチーンときた。誰にぶつかって痛い思いをしていると思ってるんだ！

「それは、今、鼻をぶつけたからです。……………なんかヘンなのがあったので」

へラっと笑って小声でケンカを売ると、

「何だ？今何と言った？」

後半部分は聞こえないはずと、小声で言っただつたのに、どうやら文句を言われたと瞬時に悟ったらしい。人間、文句を言われるとすぐ気がつくのはなぜだろう。

よせば良いのに、不用意な言葉で相手をつい怒らせてしまう。こんな自分の性格って損だと常日頃から自覚している。このチャレンジャー精神、無駄に余計だわ。

声を荒げ反論しようとするジェネミーに、『しまった』と思い、指先で『しーっ』として扉を指さしながら、小声で

「今、お客様がいらしているみたいなので、紅茶は後からにしようかと」

まずい、こんな場所で騒いでは客人と部屋の主、アデレイに気付かれてしまう。

だから、こんな扉の前でケンカしている場合ではないのだよ。

「そうか」

にやりと笑ったジェネミーに、何やら嫌な予感。

「では、急ぎますので…」

「待て」

立ち去ろうとする私を呼びとめるジェネミー。

「では、俺の部屋にきて、そのお茶をもらおう」

「はい？」

「ちょうど良かった。お前には聞きたい事がいっぱいあるからな」

不敵な笑みを浮かべるジェネミーを見て、もしや、前回の仕返しかな？ 体罰か？

恐れおののく私を尻目にジェネミーは、私の腕を引っ張り強引に廊下を進む。

ちょ…、待て！ 痛いぞ！ ジェネミー！

42 連行後

私の腕を掴みながら、前だけ見て進むジェネミーに引きずられる形で、赤いじゅうたんの敷かれた廊下を進む。

その間、最初は力で抵抗を試みたが、途中で早々諦めた。

無理だ。腕を取られて引きずられては、力の差では到底かなわない。逆らうだけエネルギーの無駄使いと悟った。いくら細身で年下といえども、相手は男だし。

強引な引つ張りに引きずられていき、ジェネミーは部屋につき荒々しく扉をあけるなり、私の掴んでいた腕を離れた。

「……痛っ」

顔をしかめる私の様子を、驚いた顔してジェネミーは見つめる。まるで、私の腕を強く掴んで痛いだろうとか、今気付いたような、『しまった』みたいな顔だね。

ジェネミー、アンタあれだね。

夢中になると周りが見えなくなるタイプだね。

非難めいた目つきで彼を見ると、

「…痛かったか？」

急に素直に私を気遣う様子の彼を見て、少し驚いた。

「…少し。けど、大丈夫です」

彼も素直に私を心配する声色を出してきたので、まあ許しましょう。
悪気があってした訳じゃなからうし。

そんな広い寛大な心でジェネミーを見つめていると、すぐさま

「一体お前は、どういった関係だ？あのお方と」

…またその話題ですか。

「この間の湖での出来事といい、何かの関係があるのだろう」

…はあ、いい加減疲れたよ、その質問。どこか余裕のない彼の態度
に諦めに似たため息を吐き、

「……とりあえずお茶にしませんか？」

まずは、お茶と甘いスイーツでも食べて落ち着きませんか？疲れていると甘いモノ食べたくなるでしょう？といわんばかりに業務用メイド笑顔を作りジェネミーに向けて微笑む。

「まずは、ご用意いたしますから、お掛けになって下さい」

やんわりと余裕の笑みを浮かべながら、ソファに腰かけるように勧める。

ここは年上の余裕な態度を見せてやらないと。私の方が年齢的にはお姉さんなのだから。

ジェネミーは、私の態度に少し我に返ったのか、ソファに目をやる。

「では、お茶のご用意を…」

ここまでは、良かったが、ここである重要な事に気が付いた。

「…って、カートがない！」

お茶セットもろもろの入っているカートが、ないのだ。急いでジェ

ネミーに引きずられてここまで来たので、途中でカートを置き去りにしてきたに違いない。

年上の余裕で…なんて、落ち着いたトコをみせようと優しく微笑んでみたが、なんてこったい。

自分の失敗を、恥ずかしくなるとともに、ジェネミーのせいだと責任をなすりつけたくなったが、平常心を保ちつつ笑って誤魔化すと、

「お前はどこか抜けてるな」

人の失敗をなぜか楽しそうに笑うジェネミーに、

「…誰のせいですか」

「俺のせいだと言いたいのか」

「そうですよ、責任とって持って来て下さいよ」

いくらなんでも、アデレイの部屋の前にカート放置はやバいだろっ。そして、ジェネミーに持って来てくれと言ってはみたけれど、立場的には何か違う気がするので、自分の失敗としてため息一つをつき、あきらめる。

「…カートを持ってきますので、お待ちください」

頭を下げ、部屋を出て行こうとすると

「お茶はいい。まずは、隣に座れ」

自分の腰かけたソファの隣に腰をおろせといわんばかりに、隣のソファを指さすジェネミーに

「無理です。今は勤務中！」

そう辞退する旨を伝えるが

「いいから、座れ」

無理矢理腕を掴んで座らせられたので、ジェネミーから一番離れた席にちょこんと腰を下ろす。

今度は加減をしたのか、力強く握られたけど、痛くはなかった。

何だか気まずい…。

言われるがままに、ソファに腰掛けたが、一体ジェネミーはどうゆうつもりだろう。微妙な沈黙の後、ジェネミーを覗き見ると、ジェネミーもこっちを見ていた。

「今日は大人しいんだな」

今日は？今日はってどういう意味？と突っ込みを心の中でいれつつあいまいに微笑む。

「この間の俺を転ばした時の威勢はどこに行ったんだろうな」

やっぱり根に持っていたのか…（当たり前か）ここは大人しく

「この間はすみませんでした」

丁寧な口調と共に頭を下げる。

「…別にいい。あれは、こっちも悪かった」

意外な言葉に驚きを隠せずに、顔を上げるとジェネミーと目があつた。

「なんだよ、その意外な顔は」

「意外です」

やべっ！間髪いれずに突っ込んでしまった。自分の口に蓋をするかのように手で押さえるが、もう遅し。ジエネミーにジロリと睨まれた。あわわわわ。

「まったくお前は、言いたい事を好き勝手に言ってくれるな！」

すみません、性分です。

「すみません」

頭を下げると、今度ジエネミーは眉間に皺をよせ、

「あとその態度、今はやめろ。勤務中だとか何だとかお前は言うと思うが、その調子ではこっちの調子が狂う」

はあ。業務用態度は気にいらなくて事だな。そーゆう事なら、了解しました。

「とりあえず、お茶でも飲みましょう。カート持ってくる」

ずっとそらしていたジェネミーの話に、とことん付き合う事にした私は、立ち上がり、カートを取りに行った。

43 勝手に同盟

「さあ、お待たせしました、紅茶をどうぞ」

淹れたての上品な香りを放つ紅茶と、今日の焼き菓子は、ガトーシヨコラとマドレーヌなど。とても美味しそうで、見ているだけで心ときめく。そんな焼き菓子詰め合わせをお皿に飾り、ソファの前のテーブルに並べて、ジェネミーに勧める。

「お前も飲め」

ジェネミーに勧められたので、遠慮はせずに、自分の分の紅茶も淹れる。

こんな高級な葉っぱの紅茶、飲める事はめったにないので、ゆつくり味わいながら飲まなくては。ティーポットでしばらく蒸らした紅茶をティーカップに注ぐ。ああいい香り。紅茶のこの香りだけでもリラックス効果があるんじゃないだろうか。

そのまま香りよい紅茶のカップを持ち、ソファに腰掛ける。…ジェネミーから一番離れてだけど。そして遠慮なく紅茶を口にして、その美味しさにビックリする。

「美味しい！」

自分で淹れた紅茶だけど文句なしに美味しいと思う。
自然に口から出た台詞を黙って聞いていたジェネミーは

「…そうか」

ただ一言つぶやいて、ソファの前のテーブルに置いてある焼き菓子の皿を、私の目の前に差しだした。

「…え??」

これは、食えって事なのか?それとも見せびらかしてるだけなのか?その真意がわからず、戸惑う。

「俺は、甘い物は嫌いだ」

そう言い放ったジェネミーに驚きの声をあげる。

「ええ?甘いものが嫌いなんて信じられない。勿体ないよ!」

甘いお菓子が嫌いだなんて、人生損をしていると私は思う。

そのまま無言で焼き菓子の皿を私に押しつけてきたジェネミーにビ

ツクリしながら、遠慮なく頂く事にした。一口、口にした途端、口の中に広がる甘い焼き菓子、バターの上品でまろやかな風味は口の中でとろけてしまいそうだった。

「美味しい！」

そう言いながら、私の口はノンストップ。次から次へと休む間もなく口に入れる。そして最後の一つのガトーショコラに手を伸ばした瞬間、何となく視線を感じてジェネミーを見てみると真っ直ぐに私を見ていた事に気がついた。

ソファに肘をつき、片手で頬づえをついて赤茶色の瞳は私の動作を見つめていた。

何だか、まるで興味ないようなそぶりで私を見ているが、私は気付いてしまった。

一瞬、彼の口元は優しく微笑んでいたことに。

私と目が合うと、口元は瞬時に引き締められたけれども。

私は、最後の一つのガトーショコラを手に持ったまま、ああそうかと自分の中で気付いてしまった。

気付いてしまったら、そのまま知らない振りは出来ない。そこで

「いる？」

と最後のガトーショコラを差し出して聞いてみた。その直後にジェネミーは

「嫌いだと言つたろ」

と、眉間に皺をよせて嫌そうに、たった一言、吐き捨てた。

なんだよ、そんな物欲しそうな情熱的な瞳で見つめているからさあ、本当は欲しいんじゃないかなと思うたじゃん。じゃあ、いいよ、あげないもんね。ジェネミーの気が変わる前に早く食べてしまわないと。

「まったく、よくそんなに食べるな」

「…本当は、欲しかったんじゃないか……？」

「…食べるか！見ているこっちまで胸やけがしそうだ」

「私の体の約8割は甘い物で出来ています」

「…なんだ、それは」

意味がわからない、とでもいいたげなジェネミーは

「お前は俺の前でも……。誰の前でも変わらないんだな」

一言つぶやいた後、

「俺は姉上と一緒に、はるばる王都から、このヒューストン伯爵の城まできた。姉上は有力な候補者だからな。…それに、ずっとお慕いしていたのだ、あのお方を」

語り始めるジェネミーに、黙って聞く私。

「それが、最初、俺はおるか姉上にもお会いなさろうとはしなかった。まるで興味がないうような、どこ吹く風だ。やっとお会い出来たと思ったら、なぜかお前が側にいる」

そこでジェネミーは、私を真っ直ぐに見つめて問う。

「お前は、一体アーデレイド様とどういった関係なのだ？」

「私は、ただの異世界人だよ。アデレイとは…」

そこで一瞬言葉に詰まる。

アデレイとは…？

ただの顔見知り？

友達？

それとも…

おなじ趣味を持つ畑仲間？

私達の関係は何て言うのだろう。そして、言葉にして表わす事は、なぜか難しく思う。

「そもそも、あのお方を愛称で呼びになっている…。それ自体が珍しい。ごくわずかの人間にしか許可していないものの…」

「私にとってはアデレイはアデレイだわ。そもそも本名が何ていう

かも知らないわ」

そう考えてみると、私はアデレイの事を何も知らない。そう思いながら、最後の焼き菓子を入れた、紅茶で喉をうるおす。その間もジェネミーは私の事をずっと見つめていた。

なんだなんだ、やっぱり欲しかったんかい？この焼き菓子。だけど、もうないよ、完食しちゃったし。

私のあつさりとした態度に、ようやく嘘がないと思ったらしいジェネミーは、少し笑顔になり態度が柔らかくなるのを感じた。何だか、さっきより空気が和らいだ気がするし、私も少し安心した。

そこで今度は逆に私の方が質問を投げかけてみた。

「ね？ジェネミーは王都のほうから来たっていったけど、王都はどんな感じ？ここの土地よりも賑やかか？」

好奇心丸出しで聞いた私に、

「王都は、文化が華やかで賑わっているし、数千年の歴史を持つ都華やかな王都であるから人々や商人が集まる商業の街としても、栄えているこの国の中心だ」

そうか。王都というだけあってやはり栄えているらしい。

「そうなんだ。何だか華やかで楽しそうだね。少し懂れるわ」

ここの土地からあまり離れた事のない私は、好奇心からちょっと見てみたい。

自然溢れるこの土地も好きだけど、王都とは華やかなんだろうな。私には想像もつかないわ。

「……いつか連れて行ってやる」

「え」

ぼつりとつぶやいたジェネミーに、一瞬驚いて言葉の意味を考えながらジェネミーを見つめると、

「いつか一緒に連れて行ってやるよ」

はつきりと再度、そう告げた。

ジェネミーは綺麗な顔を私に向け、どこか投げやりで、そしてなぜか面倒くさそうな言い方をする。

彼の真意を確かめる為、顔を覗き込むと、赤茶色の瞳は真剣な眼差しだったので、本心から言ってくれているのだと勝手に解釈する。合わせた眼も、すぐに逸らされてしまったけれど。

それでは、ジェネミーのお言葉に甘えちゃってもいいのだろうか。

…てことは、アレか。ジェネミーは王都を観光案内してくれると言う事だな。

きつとアドマさんやカリアも皆で行ったら楽しいに違いない。こうなったら、王都まで団体旅行と決め込むしかないな。観光馬車ならぬ、ハト馬車か。いいかもしれない。

一人で旅行プランなるモノを考えていると、ふいにジェネミーの手が伸びてきて、私の髪の毛を軽く引っ張る。

え？ゴミでもついていた？

不思議に思っ、ジェネミーにされるがままに髪をいじらせていると

「…この黒い髪というのも珍しい」

「え？そうなの？」

私の世界では一般的だけど、そういえば私と同じ黒髪の人を見た事がない。

「お前のような異世界から来た人間も王都では、何人が存在すると聞く」

「……は!？」

その台詞を聞いた瞬間、『なんですってえ!』と叫んで思わずジェネミーを掴んで揺さぶりたくなった。

その話は本当なの? ああ今すぐ、呑気に私の髪を触るジェネミーの肩を掴んでガクガク揺さぶって問い詰めたい。しかし、私は驚きのあまり声も出ないし、思考回路はパニックだ。

「その異世界から来た人間も黒髪だと聞く」

私は、常日頃から、自分のように異世界に来た人と会って話がいとずっと思っていた。だって、私だってできれば帰りたい訳だし、いつどうやってどういう経路でこの世界に来たのか知りたい。そうする事で帰る事の糸口が見つかるかもしれないし、人間希望は捨て

ちやいけないよね。

「ぜひ、その人達に会ってみたいわ!!」

面会希望！同志よ！今、まさにここに集結するとき！集え！異世界
迷い人同盟！

勝手に同盟を結成し、期待を込めて力強く叫ぶと、急にジエネミー
は押し黙る。

何かを考えているように、黙った後、急に低い声で聞いてきた。

「…会ってどうするつもりなんだ？」

44 微妙な空気

「…会ってどうするつもりなんだ？」

「そりゃー、もちろん、元の世界に戻る手段を考えるのよ！」

そうだ、情報交換はとても貴重だ。三人寄れば文殊の知恵とは昔からよく言ったものだ。この際、何人でもいいけど、私以外にこの世界にやってきた異世界人と呼ばれる人がいる…。そして王都に行けば会えるかもしれない！その事実には私は興奮した。それこそ興奮マックスで鼻血を吹きそうぐらいに。

私の興奮とは逆に、押し黙って考え事をしている様子のジェネミーに視線を戻すと、ジェネミーは目を細めて私をみている。そして

「…………やめた」

「はい？」

冷たい一声が聞こえてきて一瞬、聞き間違えかと思って、間抜けな声で聞き返す。

「お前には、この田舎がお似合いだ。王都なんて、行かなくてもいいだろう」

「は？」

何、その手のひらを返したような変わりよう。あんた、人を期待させるだけさせといて、その変わり身の早さは何ね？！

「いやいやいやいや、ちょっと待ってくださいよ？」

「何？」

ぶっくらぼつに返事をするジェネミーに私は焦りと苛立ちを隠せない。

「何で、期待持たせるような事を言った後で突き放すわけ？意味わかんないし。さっき連れて行ってくれるって言ったじゃない！」

「気が変わった」

ぷいと顔を反らすジェネミーに、拳を握りかためる。思わず赤毛の頭を殴りたくもなるが、我慢我慢。

「そう……。でも良い事聞いたわ！王都には私みたいな人もいるって。あなたが連れて行ってくれなくても、いずれどうにかして行くわ」

そうだ、ジェネミーを頼らなくても、いずれ自分の力で行けばいいのだ。簡単な事だ。道案内とか不安だけど……そこで、ふいに思いついた考えに、深く考えもせずに口にする。

「案内ならアデレイに、頼んでもいいわけだし！」

だって、アデレイ毎日暇そうだし！プラプラしてそうだし！そう言いかけた瞬間、

「お前は、すぐにそうやって、あのお方ばかりを頼りにしようとする。……なぜだ」

急にむきになって反論してくるジェネミーに私も負けてはいられない。

「だって、案内してくれるのやめたって言ったじゃない。だったらアデレイに頼むわよ！」

「それは、お前が元の世界に戻る手段を探すとか言いだすからだ！」

「だって帰りたいもの！誰でも、自分の家が一番居心地いいでしょ！それとおんなじよ」

私とジェネミーの口ケンカが始まる。毎度顔をあわせりゃこのパターンだけど、もう慣れた感じがする。

「私だって……ここの人達は皆良い人達で、いきなり異世界から来た私を優しく迎えてくれた。その事については、感謝しているし、恵まれてるって思ってる。」

「だけど、やっぱり帰りたいって思うのが、本音だわ。私が生まれてからずっと過ごしていた場所だもの。戻りたいと思うのは当然でしょ！？」

真剣にジェネミーの目を見て訴える。私の剣幕に押され気味な様子のジェネミーの赤茶色の瞳を見つめながら、再度叫ぶ。

「だから、帰るわよ！」

「……………っ！」

「絶対に帰るんだから……！」

私は、声を大にして部屋の中心で叫ぶ。念じればいつか叶うはず！
いや、絶対何か方法はあるはずだ！

『あきらめる』なんてそんな言葉、私の辞書には載ってない。

拳を天に突き上げて、決意を叫ぶ。

「……それは…帰ってほしくはないと言ってもか…？」

は？

どういう意味だ、今のは。

熱弁をふるい、熱い女と化した私に、戸惑うような声かけられる。

声の相手のジェネシーを見ると、眉間にしわを寄せて唇をかみしめていて、何だか苦しそうな様子だ。

赤茶色の瞳はせつなさうに揺れているようにも見える。
よく事態が飲み込めずに考えていると…。

「ここにいたのか」

考えこんでいた私の背後から、不意によく聞きなれた声が聞こえてきたので、驚く。

その声のする方を振り向くと、部屋の扉が開いていて、扉の向こうには聞きなれた声の主のアデレイがいた。

そのアデレイの後ろにはラインもいて、その側にはジェネミーにそっくりな美少女なお姉さまのアルメリア様までもいた。

うお！皆さまおそろいですね！

「アデレイ」

どうしてここに？と聞いてみようと思いつくと口を開く前に、アデレイが口を開く。

「今日の紅茶を楽しみにしていたのに、なかなか来ないから探しにきた」

…そうか、アデレイ、そんなに喉が渴いていたのか。すまぬ。
けど、いくら喉が渴いていても、ここはジェネミーの部屋だよ。ノ

ツクぐらいしようよ。

今更ながらアデレイに常識をくどくど言ってもしょうがないので、黙っていたけど。

「時間になつてもリツキが来ないから、アデレイは待ちきれなかったみたいで…」

ラインが苦笑しながら言うその側には、何だか浮かないような不機嫌な顔したアルメリア様の姿が…。

あれ？あれれ？何だか私の顔を睨んでみえる気がするのは気のせいでしょうか…？

それとも、アルメリア様も喉が渴いて我慢できなかったのでしょうか？

アデレイは、考え込む私に笑顔を向けた後、ジェネミーの方を向き、目を細める。一瞬、空気が凍った気がするのは私の気のせいでしょうか。すぐさま、お茶の時間が遅れた理由を言い訳する。

「お部屋の側まで行っただけど、立て込んだ話をしていたみたいだったから、もう少し待とうと思って引き返す途中だったの」

アデレイは優しい笑みを口元に浮かべて

「立て込んでなんかいない。ラインと話をしていただけだ。リツキがなかなか来ないから、部屋を出て歩いていたら、廊下まで大きな声が聞こえたから何事かと思って」

「あー…」

聞こえていたんだ、ジェネミーとの口ケンカ。恥ずかしい。

「大丈夫か？」

「え？」

真剣な瞳で聞いて来るアデレイに、何の事が？と首をかしげて聞くと

「嫌な事とかされなかったか？」

え？何かって？そこにいるジェネミーにですか？

…てか、そこに本人いるのに、本人の目の前で聞くと云う事は、わざわざケンカを売ってると思えないんですけど。私は焦って、

「え、え、してないよ！何にも！」

「そうか？」

「うん、本当だよ！ね、ジェネミー……」

ジェネミーの同意を得ようと、ジェネミーを振り返るとジェネミーは険しい顔つきでアデレイを見ていた。

あれ？あれ？

二人の間の空気が怪しい雲行きだと思っるのは私の気のせいでしょうか。

44 微妙な空気（後書き）

アルメリア様の存在忘れていた人、手えあげてー！

ハイ！（作者）

今後、出していきたいキャラです。

45 判明した事実

どこか苛立ちを隠せない様子のジェネミーが、早口で問いつめる。

「アーデレイド様、失礼かと思いますが、この娘は何も知らない異世界から来た娘。あなた様がそこまで気にかける理由もないと思いますが」

「ジェネミー！」

姉のアルメリア様が弟の苛立つ様子をたしなめ、押さえようと声を張り上げるが、ジェネミーは聞く耳もたずだ。

急に私の方に、顔を向けたが、怒りを抑えたような顔つきで、赤茶色の瞳はその感情に揺れていた。

「リツキ」

え？私？まさかの八つ当たり攻撃？んな訳ないよね？と思いつつ呼ばれたので、背筋を伸ばしてジェネミーに向き合つと、

「お前が、アデレイ様と慕うお方は、この国の王位第一継承者であり、我が姉の婚約者でもあるアーデレイド」セイロディウス・カールディア様だ」

え…？

えっ…？！

「その様子じゃ何も知らなかったな」

いきなりネタばらしをしたジェネミーに、私は驚きのあまり、口を開けたまま固まる。

な…

な…

「名前………長っ………」

思わずポツリと漏らした本音に、周りの空気が変わったのを肌で感じて、愚鈍な私でも『しまった』と思い、慌てて自分の口に手をあてるも、時すでに遅し。私の発言は、かなり場違いだったらしい。周りの人物をただで探ってみるが、何だか誰もが動かない。フリーズです。石像化です。

…なっ…

何なのっ。

まさかのKY発言に皆固まる事ないでしょ。しょうがないじゃん、正直な本音がついポロリと出てしまったんだからさあ！それとも何？『ひかえおろーこの黄門が目に入らぬかー』な台詞に、『ははーーー参りましたー』
みたいな反応でもすれば良かった訳？

なんだか、この空気の悪さに、一人逆ギレするしかない私の気持ちを考えてくれっていうの！

「…………クッ！」

もうこうなりや、人間開き直りが肝心と、逆ギレ態度を決めかけた瞬間、誰かの吹き出す声が聞こえてきたのでその人物に顔を向ける。

「アッハツハ！！」

その人物は、私と目が合った瞬間、今まで我慢していたかのように、盛大に笑い出した。

…アデレイだよ。

よりによつて当の本人だよ。しかし、この笑いのおかげで私が肌で感じていた空気の重さが一気に軽くなった。…ちよつと、良かった、安心した。

今のでアデレイに対して好感度が3ポイントぐらいはアップしたかも。やつと50ポイント到達ぐらいにはなったかもしれない。1000ポイント満タン計算として。

盛大に笑うアデレイに、安心しつつ、

「なっ…何よー！そんなに笑う事ないじゃない！だいたいそんなに名前長いなんて、聞いてないよ！覚えられないじゃない！」

そして私の反論を、聞いたアデレイは、ますます笑いだした。…ツボにはまったな。

どこが面白いのかちっともわからないけど、アデレイとはツボが違うと認識しているので放置するに限る。

そうだ、だいたい横文字になんて慣れてない、苦手分野だ。
しかし、今聞いたアデレイの本名を忘れないように、心の中で反復する。

アーデレイド・セイ……

セイ……

セイ…ロ…？

セイロガン！？

まさかの正露丸？そんな訳あるまい。しかし、なんだっけ？もう忘れた。ソラで言える自信がないので、メモ紙必要だ。

ラインはと言うと、これもまた肩を震わせて笑っているし、アデレイと同じ反応だ。

だけど、アルメリア様とジェネミーの姉弟の反応は少し違った。
アルメリア様は私の事を、まるで『信じられない』とでもいう風な
眼で見つめているし、ジェネミーはなぜか、きつい眼差しを向けて
くるし。

おい。何なのこの反応の差は。

それに、ジェネミーの言った事が本当なら、アデレイは次期国王さ
ま？
リアルで王子さま？カボチャパンツと白タイツを舞踊会で着用して
る？？

しかし、実は職業王子さまだなんて、どうりで白馬の似合う素敵なお容
姿なはずだよ。

私は貴族の道楽息子かと思ったよ。プラプラしている放蕩息子系ね。
でも、それなら尚の事、毎朝畑でトマトを見つめてる暇なんてない
んじゃないの！？

楽しそうに笑っているアデレイを横目で見ながら、真剣にこの国の
未来を心配してしまった自分がいる。

今日の仕事が無事終了し、寝る前のベットの中で改めて今日一日の出来事を考えてみる。

アデレイが王子だったなんて、やっぱり驚きの新事実だ。しかしアデレイめ、王子という立場なら、こんなところでいつまでも、遊んでないで皇帝学とか勉強しなくてはいけないのではないか？

アルメリア様やジェネミーが、こうやって会いに来るあたり、アデレイの自由に遊んでる時間も終了する時なんじゃないかなあ、と思う。しかし、そうするとアデレイはアルメリア様とジェネミーと王都に帰るのかもしれないな。

アデレイが、王都に帰るのか…。

何ぜか、もやもやした気分になり、すっきりしない気持ちのまま眠りについた。

46 お誘い

早朝、いつもの畑に行ってみると、

また来てた。

ほぼ毎朝、頻繁に畑に来る、目の前の人物は、このカールディア王国の王位第一継承者、つまり『王子さま』と最近判明したアデレイだ。

この国の次期国王になるかもしれないというのに、また今朝も来るよ。

何だか、この間は微妙な感じの別れだったけど、あえて気にせず、声をかける。

「…おはよ、アデレイ」

アデレイは、私の挨拶にいつものように軽く手をあげ、笑顔で答える。

「…お前はやはり変わらないのだな」

どこか安心したような様子の台詞に、頬を緩めているアデレイに、私は顔をしかめながら

「昨日、今日で、そんなに変わる程、私成長期じゃないわ」

ほぼ毎日会ってる人物に『変わったな』なんて言われたら逆に驚くわ。

そんなに私太った？身長伸びた？身長は伸びても良いが、横に育つのは勘弁してくれ。

何だか、前回判明した出来事に、少し心配もしたけど、いつものアデレイだ。王位第一継承者だろうが何だろうが、アデレイはアデレイだもんな。余計な心配して損をした、と気分も軽くなり私はいつものように、完熟トマトを試食しながら苗に水をやったりトマトを摘んだりした。

太陽も高くなってきたので、そろそろ城に戻ろうとしたところ、アデレイに声をかけられた。

「ラインの父：ヒューストン伯爵が、近々、アルメリア達と近隣の伯爵を招いて舞踏会なるものを開催するそうだ」

「舞踏会？」

「そうだ」

舞踏会？それって私の中で咄嗟に出てきたイメージはシンデレラ。シンデレラがカボチャとネズミを使ってまで行きたかったアレね。

「一応、こっちはお忍びの休暇という名目だったが、アルメリア達がたずねて来た時点で、お忍びではあるまい」

事実、この国の王子という話は、一瞬にして城に知れ渡っていた。まあ逆に今まで隠し通せていただけ奇跡なのかもしれない。メイド仲間の間でも、いろいろな噂や憶測が飛び交っていたけれど、まさか王子さまとは思わなんだ。

「そうか舞踏会か…」

それは、さぞ忙しくなる事だろうな。それじゃあ、私は裏方として精一杯お手伝いしよう。トマトを口の中で味わいながら考える。

「…それで一緒に出席しないか？」

あまりの突拍子もない申し出を聞いた瞬間、私は口に含んでいたトマトを盛大にむせた。

ゴホゴホ言いながら、喉に詰まったトマトを何とか、飲み込む。

こ…

殺す気かっー！！

そんな私の様子をアデレイは、涼しい顔して見つめながら笑顔で

「焦って食べるのは良くない」

あんたに言われたかないわ。心の中でツッコミを入れた後、先程の突拍子もないお誘いの返答をする。

「無理。お断りする」

「なぜ？」

私の出した答えが気にいらないとしても言うように眉間に皺寄せて、明らかに不満そうですが、一言言わせて頂きたいと思う。

なぜってこっちが聞きたいわ！あなた様は何を考えていると？

「私が出る幕じゃないでしょ」

「豪華な料理に甘い菓子も出るし、喜ぶと思ったが」

は？

豪華な料理も甘いお菓子も大好物だけど、そんな料理にホイホイ釣られて出席するアホどこにいる。

「一緒に出席する意味がわからないわ。第一アデレイと私じゃ立場が違うでしょ？私メイドであなた客人で主賓でしょ。それともメイド服着てアデレイの専属メイドとして側に仕えていればいい訳？」

そんな訳にもいかんだろうと、言ってみるが、

「…専属か。…それもいい案だな」

「……って、いいんかいっ！」

良い案を聞いた、と言わんばかりに顔を輝かせるアデレイに鋭くつつこむ。

「…だいたい、私個人を側においていたら、誤解されるわよ」

「何を誤解？」

全く、話の通じないアデレイに私の方が頭が痛いわ。

「もう行くよ。… 舞踏会は、精一杯、裏で私は私の仕事を頑張るから、アデレイも頑張って」

アデレイやアルメリア様やジェネミーをもてなす為の舞踏会でしょ。アデレイの仕事は貴族達の相手でしょうに。私は私の仕事を頑張るから、アデレイも自身の仕事を全うしなさい、お互い頑張りましょう、そんな意味を込めて告げ、城に向かおうとする私にアデレイは何かを言いたそうに重い口を開けた。

「…………… アルメリアは、婚約者の第一候補だ」

「……………？」

「だが、候補であつて、決定ではない。第一俺の意志ではない」

淡々と話し始めるアデレイの言葉に、黙って耳をかたむけていた。

「アルメリアは、幼い頃から、俺ではなくこのカールディア王国の王妃になるべく周りに育てられて来た。それは刷り込みであると思う」

恋愛の価値観の違いに、思わず口を出してしまう。

「… 大変なんだね。自由恋愛が出来ないなんて、身分が高すぎるって言つのも善し悪しだね」

「この国のある程度の身分の者は、だいたい政略結婚だった。だけど、俺自身の考えは…」

そこでいったん言葉を切り、真っ直ぐに私を見つめるアデレイの瞳は真剣そのもの。

蒼い瞳は、静かな空の蒼色でいながら、熱い熱を帯びているかのようにも見える。

何かを言いかけたアデレイの言葉をさえぎって、

「私なら、自分の一生の相手ぐらい自分で選びたいわ。例えどんなに身分が高くなってもそこだけは譲れないわ」

育ってきた環境や感覚の違いだろうけど、いきなり『婚約者だよ』って連れてこられた相手がもし、デブでハゲでチビだったらどうよ？…いや、容姿はしょうがないとしても、性格でカバーしよう。

だけど、その性格が、もしどうしようもない人だったら？

すごく根性悪かったり、価値観が合わなくて側にいるだけで苦痛だったら？

結婚どころか、同じ部屋にいるのも嫌かも。それなのに、あんな事やこんな事して子孫繁栄しなきゃいけないなんて……

ヒーツ、私出家させて頂きます。

じゃなければ、そんな相手と一生添い遂げるぐらいなら、トマトに愛をそそいで一生を終えたい。

…いや、それは極端すぎるけど。

「自分の相手は自分で選ぶ…か…」

「そうよ、それが一番よ」

「…なぜそう言いきれる？」

ラブ&ピースだからだよっ！！

何だか、いつまでも食い下がるアデレイに叫んでやりたくもなかったが、いつもより真剣に何かを考えている風だったので、

「人を『好きになる』って言う感情って、自分の損得を考えない自然にわきでる感情だと思うんだけど」

人の考えはそれぞれだと思うので、何のアドバイスにもならないと思うけど、自分の考えを言ってみる。

普通に自分の考えを述べた私に、いつの間にやらアデレイは、側に来て、優しい微笑みを贈っていた。そっと、人差し指で私の頬をなぞりながら、蒼い瞳を嬉しそうに輝かせ、

「俺も、今ならわかる。損得の考えない相手を想う感情の名を。それはお前に出会っ…」

「ちょっと！アデレイ！足元！トマトの苗踏んでるっ！」

近づいてきていたアデレイの胸板を勢いよく押し返す。

これで何回目だろうか。

畑にいる時、いきなり近寄ってくる事がたびたびあるのだが、そのたびにアデレイは足元の苗を踏みつぶす。

もっと足元に注意しろっ！毎回言っているのに、効果はナシで今に至る。

「もうアデレイ！これ以上、苗踏んだら、罰としてしばらく出入り禁止にするよ！？わかった？！」

「……………」

私に怒られたせいなのか、何だか、眉間にしわを寄せたまま明らかに不機嫌な態度になったアデレイは、返事の一つもしない。

もっとラブ&ピースの精神でトマトに接しろっていうの！

まったく！

【番外編】くアルメリアお嬢様く

アルメリア

アルメリア

お前は、あのお方の花嫁になるのだよ。

幼い頃から、そう言われ続けてきたこれまでの人生。
もちろん、私もそのつもりできたわ。

だって、私以上にあの人の側が似合う女性はいない。

あの人の側でいつか隣に立つ日が来る……。その日の為に、私は自分
自身を磨く努力を惜しまないつもり。

今までも、これから先も。

あの人はいつも堂々としていらして、生まれ持った王者の気品に合
わせもつ威圧感。

それにハニーブロンドの輝くような金の髪に、蒼い空色の瞳で、見
る者全てを魅了するような容姿。

憧れている人は男女問わずに大勢いるわ。

あのお方は、その気持ちをあまり顔に出す事はなく、いつも冷静沈
着。

王となる者は、あまり考えを表情に出してはいけないからなのだろ
う。

…そう思っていた。

あの時まで。

ヒューストン伯爵家の元まで尋ねてきて、やっと面会する事が出来たのは、何日かたってから。

きっとアーデレイド様はお忙しい方だから時間がとれなかっただけなのよ。

面会が許されたアーデレイド様のお部屋の机の上には綺麗な小さいガラスの皿が置いてあり、その皿の上に置かれている物がふと目にとまる。それは、飾りのつもりなのか、それとも大事な物なの…？いつも余計な物を置かずに、シンプルな様子を好むアーデレイド様にしては少し意外な気がして、尋ねてみる。

「それはなんですか？」

「……………トマトという」

数秒の沈黙をした後、たった一言素っ気なく呟いてから、軽く微笑みながらまるで愛おしそうに見ているその赤い実に嫉妬すらした。

私が側にいるのに、なぜその赤い実をそんな目で見ているの？

次にお見かけしたのは、ヒューストン伯爵に与えられた部屋の一室でのこと。

基本、眠りの浅い私は、その日もふと喉の渴きを覚えて早朝に一人で目覚めた。

寝台の脇の水差しから水を飲み、もうひと眠りしようと思って、ふと目をやった窓辺から見えたのはアーデレイド様のお姿。

意外な場所でお見かけしたので、声をかけようと窓辺に近づいて、その足をとめたわ。

だって、アーデレイド様が楽しそうな顔してどこかに歩いていけたから。

もしかして早朝にご散歩かしら。

いえ、それはないわ。と瞬時に自分の考えを否定する。アーデレイド様は、毎日の業務等でお忙しい方。毎日、業務は深夜までわたり、朝は得意ではなかったはず。

しかし、何だか、妙な胸騒ぎを覚えたので、私はそっとバルコニーから部屋を抜け出し、アーデレイド様の後をつけてみる事にした。はしたない事していると自分でも思ってたけれど、何だかそうしなければいけない気がして。

気付かれないように、こっそり進む私に、アーデレイド様の足取りは確かなもので、はつきりとした目的があって進んでいるのだらうと確信する。

気付かれないように、一定の距離を保ちながら、木々の間を進んで行く。

木々の間を進んで行くと、突然視界がひらけた。視界がひらけたその先で、私を迎え出たのは、赤く色づいた赤い実の大群。

これは…いつかアーデレイド様の机の上でお見かけした、トマトと
かいう実だわ。

そのトマトが一面に赤く色づいている。

誰かが手入れしているのだろう、赤いトマトとやらが、きれいに一
定間隔に植えられている。

その光景を『なぜこんな場所に？』と不思議に思い見つめていたら、
不意に誰かの話し声が聞こえてきた。

とつさに木々の間に身を隠し、その話し声に耳をかたむけるように、
そつと木々の間から顔をのぞかせる。

そつと木の陰からのぞき見た私の視界に入ってきたのは、アーデレ
イド様とその隣に立つ一人の女性。

黒い髪に白い肌。赤く色づいた上向きの唇は、アーデレイド様の部
屋でみた赤いトマトと同じ色をしていた。

彼女は確か…この地に初めて来たときに見た『異世界からきた娘』

彼女の透き通つてる白い肌に、神秘的で美しく珍しいと言われている
黒い髪に黒い瞳。ぱつちりとした瞳は吸いこまれそうに大きく開
いて輝いている。赤い上向きの唇に、笑った顔が更に、彼女の美し
さをひきたてる。

彼女の美しい容姿に、私の中で燃え上がるこの気持ちは、何だとい
うのだろうか。

そして何より驚いたのは、アーデレイド様が笑って、彼女と会話し
ている。

アーデレイド様の金の髪は太陽の光を浴びて、尚いっそう輝き、溢

れんばかりのその存在感。

王者の気品を放つオーラに、臆する事なく、横で笑いかけて会話を
する異世界の娘に驚きと、感じる焦り。

今まで、アーデレイド様が笑顔で楽しそうに自分から進んで話しか
けている姿はあまり見た事がない。

その会話の相手を見て、私はいよいよの焦りと危機感を感じる。

私にだって、あんな笑顔を向けてはくださらないのに。

そこでふと、目についた違和感。

彼女のあの頭は、何だろう…。

美しい彼女の、その様子の意味がわからず、また、そんな彼女に優
しく微笑みかけるアーデレイド様をこれ以上見たくはなくて、その
場からそっと立ち去る。

「あ？これ？この頭の事？」

今日も来てるのね、早朝に。

そして、私の『その頭は何だ』ときたもんだの、アデレイに教えて
しんぜよう。ふっふっふ。

「この頭は『ほっかむり』というのだよ、アデレイ君」

偉そうに胸を張って教えてやるが、なぜかアデレイはそんな私を見
つめたまま苦笑している。

「いや、日差しも強いじゃない？今更だけど、日焼けもしたくないしさ、だからこれで直射日光をガードしてるのさ」

私は、ほっかむりを作っている布を指さして教える。対するアデレイは、相変わらず苦笑したまま。

あれ？

やっぱりダメ？この頭？

やっぱり、ただの布じゃだめか！

ほっかむりは手ぬぐいでやらないとね、いまいちインパクトに欠けるのよね。 酒店とか××工務店とか書いてあったら、私のほっかむり度がアップする気がする。

「だって、頭にかぶるのもってないんだもん！」

逆切れして言うと、アデレイは笑ったまま

「……今度、頭にかぶる物を贈ろう」

何だか、同情されちゃったみたい。まあ、いいや。ラッキー！とばかりにありがたくその申し出を受けるとする。

「そっかー！楽しみにしてるわ！」

こっちの世界に、手ぬぐいと言う物があるのか知らないけれど、アデレイがプレゼントしてくれるって事だもの。ありがたく頂戴しよう

う。

「じゃあ、こっちの列のトマトが収穫時だから、こっちから収穫始めるね」

相変わらず手伝う気があるのか、ないのかわからんアデレイに、一応本日の作業内容を伝える。最近は前にも増してローディの叔父さんの市場でも売れ行き好調で、苗もトマトもよく売れる。時には、『明日もって来てほしい』などリクエストされる事も。市場で買ってくれる人達も喜んでくれているみたいで生産者としてはこの上ない幸せだ。

こうなりゃ、元の世界に戻った日には、都会のオフィスガールなんて辞めて、田舎に行つて自給自足の生活でもしようかしら。

いつか戻る日を想像しながら、赤く実ったトマトをカゴに摘んでいく。

空は青く澄み渡り、鳥たちはさえずり、きっと今日も良い天気。

明るく眩しい日の光に、目を細めつつも、太陽の恵みに感謝しながら今日も収穫をするのだ。

私は笑顔で、頭に布を巻いたほっかむり頭のまま作業を進めた。

47 舞踏会の始まり

舞踏会。

今夜は私がこの城に来て初めての舞踏会が行われる。

なんだか、朝から全員フル稼働で働いている。もちろん私も例外ではない。

朝から、庭園で花を選んで飾り、また庭園に花を選びに行く…という城中を花でいっぱい飾るのが私の使命。ローディお勧めの花をセンスよく飾るのが私の役目。

しかし舞踏会って何が行われるんだろう。

それこそ、小さい頃、童話で見たシンデレラが憧れる乙女の夢の舞踏会なのだろうか。

…まあ私は裏方だけど、裏方バンザイ。

どんな様子か、影からこっそりのぞき見したい。きつときらびやかで華やかな世界なんだろうなあ。

紳士と淑女の集まりで、レディー アーンド ジェントルメン

何だか、城の皆の慌ただしい空気がとても新鮮に感じられて、私もわくわくしてしまう。

太陽が沈み、夜の気配が近づくにつれ、城は、華やかな夜の灯りに包まれ、着飾った貴族達が集まってくる。

招待客が集まってくる前は、カリアと一緒にホールの準備をしたり、皿などグラスの用意にてんやわんやの大忙し。

招待客達がようやく集まってきたはじめて、我ら裏方部隊が一息ついているとカリアが急に

「ねえ、リツキ。こっち、こっち」

調理場を出て長い廊下から不意に手招きしてくる。
何だろうと思ってカリアの側に行くと、こっちよ、と目配せと手招きで合図される。

不思議に思ってたについていくと、長い廊下を右にまわって、突き当たりまで進んだ先の小さい階段を上って行った。

おおおっ！

こんな所に隠し階段発見！チャラララン！

と、鼻息も荒く興奮した。やはりこの城は広すぎて、私はいまだに把握が出来ていない。

カリアは、周囲に人がいないのを確認してから、階段を上っていったので、私も後に続く。そうして階段を登って行った先は、なんと大ホールの天井に通じる回路だった。下の大ホールでは、今まさに舞踏会が始まったばかり。

何このベストポジション。ベスポジで眺める光景は、豪華で一瞬目が眩んだ。

「ねっ？すごいでしょ。ここからならホールの様子を誰にも気付か
れずに眺める事ができるわ」

得意げなカリアに、ここは、ホールの上窓など天井付近を掃除する
時に、使用する通路だと教えてもらった。

なるほど。ここなら、上からホールの様子をじっくり眺める事が出
来るわ。

ホールは数十人もの男女が集まり、輝くシャンデリアの下、貴族達
は着飾り、楽師たちは音楽を奏で、料理をつまみながら雑談を楽し
んでいる。

その中でも、ひととき目立つ存在が目についた。

その人物は、長いマントをはおり、いくつもの勲章のついた白い正
装に、手足の長さが際立つ。

「アデレイだ。

「すごい。この下に広がる世界は私達とは別世界ね」

カリアが興奮したように口を開く。

「ええ、そうね」

「しかも、見て！アーデレイド様の周りに集まる令嬢の数！」

アデレイの周囲では貴族の令嬢達が集まり、皆、一定の距離を保ちながらも、アデレイに視線が集中しているのがわかった。

着飾った令嬢達は、頬を染め、はにかんだ様子でアデレイを遠巻きに見つめている。対するアデレイは別段気にもしない様子で、そのままニコリともせず無表情で隣のラインと雑談している。

隣のラインは、貴族の令嬢達に負けないくらい可愛らしく、かつ中性的で、まるで天使のような微笑みを浮かべながらアデレイと話している。

そんな様子のラインとまるで正反対で心配になるのが、アデレイだ。

ちよっ、ちよっと！アデレイってば、もう少し愛想よくしなさいって！。

貴族の美女達が、熱い視線を投げてるよ！

あの愛想のなさば、見ているこっちが心配になってしまっわ。

… もしや鈍感？

そうか、アデレイは色恋系に鈍感なのか！

「さすが王位第一継承者だけあってアデレイ様の気品は別格ね」

感心するカリアと、盗み見している立場でいながら、アデレイの愛想のなさが心配になり、天井裏から、『もつとニコニコしろ!』と注意したくもなる。せつかくの乙女の夢の舞踏会なのだから。

しばらく下に広がる華やかで、それでいて自分には無関係のきらびやかな世界を眺めていたけれど、私は卓上の料理が気になってしょうがない。

なぜなら、とても美味しそうだから。

…ではなくて。

実は、こっそり仕掛けをしておいたのだ。さまざまな料理の中、こっそり忍ばせておいたトマトのジュレ。

上品なワイングラスに入れて固めてジュレを造り、砂糖漬けにしたトマトを一つ飾る。真っ赤なジュレ。

ワイングラスに入れて造った出来はなかなか綺麗に出来たと思う。私のちょっとしたイタズラ心だ。それに、

誰か、食べてくれたら嬉しい。

ただ、それだけの思いで、こっそり忍ばせておいたトマトのジュレ。誰かの目に止まり、食べてくれる人はいるかしら。

しばらく観察していると、ホールの中央に立つアデレイが料理のテーブル付近に移動する。

きつとワインでも飲むだろう。アデレイは、料理は興味ないように見つめていたが、ふと視線が止まったようだった。そしてそのままずっと一か所を見つめている。そして、急にワイングラスのトマトのジュレを手にとった。

おっ！アデレイ！もしか気付いたか？

いたずらがばれた時のように、私はドキドキした。

そりゃーアデレイが、毎朝早朝にご執心になっておられるトマトですものねー。

気付きますよねー。

トマトの原型とは姿形も変えてるけど、トマトに対する想い、その愛は本物らしい。その愛は半端じゃないって事が今ここで証明されたよ。

ふとアデレイが天井付近を見上げたので、私はどきりとして、反射的に、その身をひいて陰に隠れる。

のぞいて見てるのがばれた？

いやいや、そんなはずあるまい。ここは天井に続く通路隅の一角。まさかここから見られているとは誰も気づくまい、見える訳がない。もし気づいたら、その人は超人的な視力、オスマンサンコンだつてびっくりだよ。

自分の小心者具合に笑いつつも、気を取り直してまた華やかな世界

を見る為に身を乗り出すと、

アデレイが見ていた。

視線が交わり合った気がしたのは、私だけだろうか。驚いて瞬時にまた身を隠す。

いやいやただの偶然さ、と気を取り直して、再度のぞき見ると、先程までの無表情はどこへいったのやら、口の端を上げて微笑している気がした。

もしや… ば れ て る？

いやいや、まさかね、とばかりに乾いた笑いを一人でしていると、

「ん？どうしたの？リツキ？何か面白い物でも見つけた？」

カリアに不思議そうに聞かれた。いやいや、まさか視線が合った気がするの私の勘違いだろう。

しかし、まったくアデレイめ！一人で笑ってる怪しい人物に認定されたではないか！

完全なる八つ当たり思考の後、

「なんでもない。ねえ？そろそろ戻らないと」

「そうね」

そうして私とカリアは階段を下がって戻っていく。先程見た光景は、私とは無縁の世界。少しの間だけでも、見る事が出来て幸せだね。あとは、私のトマトのジュレが誰かの口に入りますように…。ドキドキしながら祈る気持ちで階段を下りた。

階段を下り、カリアとは離れて自分の持ち場に戻った後、

「あつ！いたいた、リツキ！」

アドマさんに会った瞬間に大声で呼ばれてびっくりする。

「どこに行つてたんだい！探してたんだよ」

「ごめんなさい！」

サボって舞踏会をのぞき見してきた私は、どうにもバツが悪い。何だか、慌てている様子のアドマさんに、謝ると

「ほらほら、早く！向こうのお部屋でライン坊っちゃんが、お呼びだよ！早く！」

え？なぜラインが？そんな疑問が頭に浮かんだまま、アドマさんに引きずられる形で連行された。

私、何かしたっけな？

47 舞踏会の始まり（後書き）

どうでもいい知識

オスマンサンコンさん 昔、視力は6・0だったらしい

48 衣装選び

アドマさんから呼ばれ、引きずられるような格好で別室へと一人連れて行かれた。

別室に連行された私と、先に部屋の中にいたのは、執事頭のメリーストさん。

そしてその部屋の豪華さに驚きで目を見開く。

衣裳部屋だろうと容易に想像がつく、大きいクローゼットがいくつもあって、全身をうつす事の出来る大きい鏡が何枚も。

何だか自分がこの場所にいる不思議と、場違いな雰囲気、そわそわして落ちつかない。そんな私にメリーストさんは、静かに口を開く。

「ライナルト様がりツキをお呼びなので、ここで用意をして待機しているように」

「はい？」

理解不可能で聞き返した私に、メリーストさんは微笑みながら、再度静かに口を開く。

「りツキに公式の場で用があるので、ここで準備をさせて待機するように仰せつかった。この部屋の物は全て自由に使ってくれてかまわないので、アドマにも手伝ってもらい用意するように」

そうメリーストさんがアドマさんに告げるとアドマさんは、全て理

解しているかの様に頭を下げてうなづく。

「え？用事？え」

対する私は一人テンパる。

そんな、用事なら次回会った時にしてくれ。

なぜわざわざ、公式の場に引っ張りだす必要があると???

部屋を出て行くメリーストさんの後ろ姿を見ると、意味がわからず不安で涙が出そうになった。

アドマさんは

「馬鹿だね、リツキ。泣くんじゃないよ。こんなに光栄な事があるかい？

きつとあんたは何か褒められる事をしたんだよ。じゃなきゃ、一人のメイドにここまでの事をするかね？

それに、ライン坊っちゃまの性格を知っているだろ？あの優しく慈悲深いお方があんたをわざわざ皆の前に出して意味もないじめるもんかね」

うっうっ、でもあの人、実は隠れDSなんですー！。

「堂々としていき！」

アドマさんの励ましの声に、逆にびびって、涙が出そうになった。

「ほら、この衣装なんてどう？絶対リツキに似合つと思うんだ」

彼がたくさんある衣装の中から、迷いもせずに選んで手に持ってきた衣装は、華やかなデザインの白いドレスだった。

…てか、ライン…あなたがなぜここにいる？

「リツキが綺麗な格好をするって想像したら、いてもたってもいれなくてねー」

だからと言って、女性^{レディ}の着替えの部屋に、堂々と単身乗り込んでくる、そのゴーイング・マイウェイさは勘弁して欲しい。

ラインが手に持ってきたドレスを見ると、体にぴったりとした形の白いドレスで、膝下付近から裾が豪華に広がっているマーメイドラインのとても素敵なドレスだった。

生地の肌触りから見て、一流品だと庶民の私にもわかる。デザインもしっかりしていて、派手すぎず、女性らしさを引き出す形だと思う。

それなのでなおさら無理！無理！メイドの私が、こんな素晴らしいドレス、着れる訳がない。

慌てて手を振り、無理だ、という意志表示をすると、ラインは眉を

下げて悲しそうな顔になる。

それを見た私は『やばいつ！』と、焦ってしまった。だってラインがせつかく私の為に似合うドレスを探してくれたのに、その気持ちだけでもありがたい。だけど、やっぱり着る訳にはいかない。

「…そっか…。リツキはこのドレスじゃ嫌かあ…」

ラインの声のテンションが下がってきているのに気付いて慌ててフオーする。

「嫌という訳ではなくて、私にはもったいなくて！」

ラインは悲しそうにドレスを持ったまま何かを考えている様子で、うつむいている。

栗毛で柔らかそうな髪に、大きい瞳はふせていて、何ともそのうつむき加減も絵になること。

悲しそうな顔をするラインに、申し訳なく思うと同時に、その男性にしては可愛らしい顔立ちに見とれてしまったのも事実。

うつむいていたラインが、何か急に吹っ切れた様子で、顔を上げたのち、

「わかった。リツキが嫌なら無理強いは出来ないしね」

悲しい気持ちを押し隠した様子で無理にラインが微笑む。その様子を見て、胸がチクリと痛んだけど、ラインが折れてくれた…。良かった、安心した…。とホッと胸をなでおろした。

ラインはそのままドレスをしまう為に、クローゼットに進んでいく。

後ろ姿も何だかさびしそう…。これじゃあ、こっちがすごく彼を傷つけた気分になる。

私が罪悪感を感じ始めた時、

「じゃあ、次は、こっちのドレスか、このドレス！どちらか好きな方を選んで！」

クローゼットから輝きに溢れた笑顔で戻って来て、これまた迷いなく2着のドレスを選んで持ってくるラインの様子に

ねえ？あなた、さっきの悲しそうな顔は嘘だったのかしら？演技？それ演技なの？

と心の中でツツコミをいれざるえない。

あきらめないラインの持ってきたドレスに目をやった瞬間、私は体がフリーズした。

一着目は可愛らしいミニ丈のドレス。

…フリフリの全身総レースに、色はど・ピンク。ほんのり色づくピンクではなく、ど・ピンク。目に優しくない色合いで、見ていると目がチカチカしてくる。

しかも、明らかに膝上ミニ丈ドレスでフリフリのフリルが満載だ。

まあ！なんて可愛らしい！似合うかもしれない！

…私が5歳児だったならだけど。

二着目は大人っぽい体のラインを強調したドレス。

…ドレスというには、極端に布が少なすぎる、情熱の赤ドレス。胸なんてこれで、どう隠せと？

まさにセクシーダイナマイツ。

こんなドレス着ていたら『歩く露出狂』というあだながつく。間違いない。

瞳を輝かせ自分チヨイスのドレスを勧めてくるラインに私は力なく、

「……………一番最初に見せてもらったドレスでお願いします…」

こう答えるのが精いっぱいだった。

「えー！こっちの2着も素敵なのに！」

素で言っていると！？どうしろと！？これを私にどうしろと！？

引きつり笑顔の私にラインは、ふふふと笑って

「…だけど、最初に見せた白いドレスが一番リツキの魅力を引き出

すかもね。楽しみにしているよ」

耳元で囁く。

そうして、アドマさん呼びながら、

「さぁリツキ。着替えて、着替えて。用意が出来たら僕を呼んで。ホールまでエスコートするのが僕の役目。それとも、着替えも僕に手伝って欲しい？」

不敵に微笑むラインをアドマさんが

「さぁさぁ、紳士は外に出て下さいね」

そう言つて軽く流す。ナイスだ、アドマさん！

「じゃあね、リツキ」

上機嫌な様子で部屋を出て行くラインの後ろ姿を見送っていると、急に振り返り、すごく真面目な顔をして口を開く。

「…やっぱり、さつき見せた2着は、絶対着ては駄目」

その件はご安心ください。

例え『着ろ』と命令されても断固拒否する。

「だってさ、僕以外の人の目にも触れる訳でしょ？それっておもしろくないじゃない」

…そんな理由ですか。あくまでも自分中心の意見なのですね。

「だから、今度リツキが何かしたら『お仕置き』として2人っきりの時にでも、着替えてもらおっかなー」

そう一人で楽しそうに言い、部屋から出て行った微笑む天使様の顔は、墮天使だ。間違いない。

そうして意味もわからず泣きなくなっていた私は、次の瞬間アドマさんにより身ぐるみをはがされた。

キヤー。

白いドレスは、マーメイドラインで体の線に沿っていて、嫌でも体系がわかる。

首の後ろで一つのリボンでまとめている形のドレスで、胸元は膨らみが強調され、背中はずっきりと開いている。

髪は、まとめてアップにして上げてもらい、白い小さい花のついた

ピンで止めている。なんだかうなじがスースーする。

いつもとは違う、ベースからしつかりした化粧をしてもらい、何だか嫌でもこれから引っ張り出される公式の場を想像して身震いしてしまう。

全身が写る鏡を見せられて、まるで結婚式のドレスみたいと思う。

というか、結婚前にドレス着ると婚期が遅れるっていうジンクスあるんですけどー。

「本当に綺麗だよ、リツキ。よく似合っている」

感心したように言うアドマさんの褒め言葉にこれで行き遅れ決定だと思った。

私の複雑な気持ちとは裏腹にアドマさんは、何だか満足気に得意げだ。

「じゃあ準備はいいね。今ライン坊ちゃん、呼んでくるから待って」

いや、服の準備はいいのですが、私の心の準備の方が間に合いません。

そんな訴えもアドマさんは聞こえない振りをしてラインを呼びに行った。

49 覚悟

ラインを呼びに部屋を出て行ったアドマさんの後ろ姿を、恨みがましく見つめた後、鏡の中の自分の姿と向き合う。

綺麗なドレスに、丁寧なされた化粧。まるで自分じゃないみたい。

いつものメイド服の私じゃなくて、白いマーメイドラインのドレスは、肩や背中を出すデザインで、髪もアップにしているので、何だかうなじがスースーする。

私だって、一応女の子なのでこんな格好をして、まるで嬉しくない訳ではない。

なんだか鏡に写る自分が、自分じゃないみたいで、鏡の前で思わず笑顔を作ってみる。

一人で照れながらもスカートの端を持ち、鏡の前で回ってみたりもしちゃったりして…。

そこで、ハッ！と気づく。

やばい。

このままでは相手の思うツボではないか…。

というより、誰だ！私をあの場合にわざわざ引っ張りだそうなどと思う輩は！

そんな輩は、思い当たる事もなくはないが、後で文句を言ってやる。

アドマさんを見送った後、いつもと違う自分に一瞬テンションが上

がりがけたが、しばらくして我に帰って何とか、対策を練る事にする。

さあどうする？

今なら部屋には私一人。逃げだしたいけど、逃げだす訳にはいかないこの状況。

本当は本音はすつごく、すつごく逃げだしたいけれど。

一人部屋で待つ緊張に耐えられなくて、どうにか救いの手はないものかと、部屋の扉を開けてキョロキョロする。この衣装部屋も初めて入る部屋だし、第一この衣裳部屋も、この城のどこに位置するのか、私はわかっていない。

しばらく茫然と廊下を見つめていたら、廊下の端の向こうに、見慣れた人影を見つけた気がして、我に帰る。

そうして目を凝らしてしばらく見つめ、その人物を確認した瞬間、私の中でターゲット、ロックオン。

その後は安堵のあまり部屋を走って抜け出し、その人物に救いを求める。

「……………?!……………え!？」

私は上品なドレス姿とは思えぬ、マツハな走りでお目当ての人物に近づく。その人物は、私の勢いに驚いたのか、上手く声を発する事も出来ずに、私の姿にただただ驚いていた。

そりゃそうだ。ドレス姿の女が自分目がけて一直線、必死の形相で

近づいて来るんだもの。

驚くどころか、私なら怖くて回れ右して逃げるかも。

「……えっ？！ ……え？ ……えっ？？！！」

「……ロ……ローディ！」

「……えっ？！ ……リツキ！」

私は、見知った顔を見つけて安堵のあまりローディへと駆け寄ったが、なにぶん全速力疾走だ。息が切れる。

しかもこのドレス重いし、何だか体に張り付くし、足元が邪魔だ。

こんな服装を常日頃からしている貴族のお嬢様達を心の底から尊敬する。私はこのドレスを恨めしく思いながら、息を切らして、

「ローディ……！お願い！助けて！」

「え？！ え！？ ……ってリツキ！？」

「お願い力をかしてほしいの！」

私は、ローディにすぎるような目力で懇願する。

何だか、ローディはいつになく赤くなった顔でまごまごしている。

何だか今にも爆発しそう。いや、気のせいかな。

私も全速力疾走で息も切れ切れで顔も赤いだろう。

「私を連れてここから逃げて！」

そう！今なら逃げだすチャンス！

建前はこの場から逃げ出す訳にはいかないってわかってはいても、本音は嫌なのだ。

例え、口では『覚悟を決めるしかない。逃げる訳にはいかない』そう言うてはいても、心の底では苦痛なのだ。

あの場に行くのは緊張するし、何より意味がわからないし。

それが、よく知るローディの顔を見た瞬間爆発した。彼は私の頼れる兄貴分って感じだから、気持ちが甘えてしまったのかもしれない。

あとは皆にどう言い訳をしようか考える。お手洗いに行こうと部屋を出たら、城の中で迷ってしまいました設定でゴー！

その後は、舞踏会が終わった後、ひょっこり顔を出して、こっそり絞られる。

用事があるなら舞踏会が終わってから、聞きに行こう。

そんな都合のいい事をローディの手を取りながら考えていた。

彼女が潤んだ瞳で俺を見つめる。彼女は、白い肌によく似合う白いドレスで彼女の美しさを際立たせている。

腕や体の細さがよくわかり、胸の膨らみも強調されていて、動揺してしまいつい拳動不審になってしまう。

『まるで花嫁衣装みたいだ』

彼女の美しい姿を見た俺は、あまりのキャパオーバーに意識が幼少の頃に飛んだ。

- - - - -

あれは、俺がまだ小さい子供だった頃。

俺の隣の家のマゼナ姉ちゃんの結婚が決まった。相手は、親子程の年も違う高利貸しのオヤジだった。

なんでも、マゼナ姉ちゃんの父親が借金を多額に作ったらしい。俺は子供だったから、意味も理解出来ずに、初めて出席する結婚式をただ楽しみにしていた。結婚が決まってから、マゼナ姉ちゃんはため息ばかりついていたのは、何となくだけ覚えている。

結婚式当日。

マゼナ姉ちゃんは白い花嫁衣装にとても綺麗だったのを子供心に覚えていた。そしてなぜか悲しそうな顔だった事も。マゼナ姉ちゃんが高利貸しのオヤジと誓いの言葉を口にしようとした瞬間、響き渡る一人の若い男の声。

「行くな！マゼナ！」

「マルセン！」

現れたのは、マゼナ姉ちゃんの幼馴染のマルセン兄ちゃんだった。そうしてあれよ、あれよと、マゼナ姉ちゃんは白い花嫁衣装のままマルセン兄ちゃんの手を取り、二人で愛の逃避行へと走っていった。

当時、俺は子供だったから、『あー…結婚式の料理どうすんだろっ』とか呑気に考えていたが、今ならわかる、マルセン兄ちゃんの気持ち。惚れた女をさらいに来たその勇氣。

あれから、二人は、一緒になって、二人で働いて借金も全て返した。あの時、綺麗と感じたマゼナ姉ちゃんは、子供を4人も産んで、当時より体は2倍ほど大きくなった。身も心もビクな女になったのだ。

俺の記憶の中では、マルセン兄ちゃんに手を取られて幸せそうに走り去るマゼナ姉ちゃんの顔が忘れられない。

- - - - -

きつと…

リツキは、今この現状から逃げたいんじゃないのか？

俺と手を取り合って行きたいんじゃないのか？

今が、そのチャンスなんじゃないのか？

俺の心臓が高鳴る。

行け！行っちゃえ！

俺の頭の中で、あの日のマゼナ姉ちゃんの笑顔が鮮明に浮かぶ。手と手を取って、第二のマゼナ姉ちゃんとマルセン兄ちゃんを目指すんだ。

「おっ… 俺！ 俺と…！」

一緒に、生きてくれ！

そう喉まで出かかった瞬間、

「馬鹿な事考えでないよ！」

響き渡る大きな怒声。その声で我にかえる。

聞こえて来た方向を見ると女中頭のアドマさんが仁王立ちしていた。

リツキを見ると、頭を押さえてその場でうずくまっている。

リツキ… アドマさんから正義の鉄拳くらったようだね…。

それは、イタイ。そりやもうイタイ。

俺も小さい頃、いたずらしてはアドマさんから、ゲンコツくらったから、よくわかるよ、その気持ち。

さすがに大人になってからはないけれど。

「いい加減覚悟を決めておしまい！」

怒られながらもアドマさんに引きずられていく彼女を茫然と見送る。

「な……………なんだったんだ……………俺……………」

今の一瞬の出来事は、夢か幻か俺の妄想か？
人気のなくなつた廊下でしばらく考え込むが、

「……………まあ……………いつか」

俺は一人でポツリとこぼす。

よく似合つてたもんな、あの白いドレス。
そしていつか、俺の隣で今度は本物の花嫁衣装でも着てくれたら最
高だろうなあ…。

取り残された廊下で、一人そんな想像をして、赤くなつた。

50 演技と頭痛のタネ

ラインに手をひかれて、中央までゆっくりと歩いて進む。

明るい広間、大きくて豪華なシャンデリアに華やかに着飾った人々。自分とは住む世界が違ふと感じる。この場に足を踏み入れてる事はとても場違いだと感じる。

その証拠に人々の視線が突き刺すように痛い。

この痛みは気のせいではないはずだ。だって、何だか皆に見られている。この広間に入った瞬間から私は感じていた。

うおー。ますます私は逃げ出したい。猛ダッシュ、Bダッシュで。

きつと皆が

『得体の知れない平凡顔の娘』

『豪華なドレスに負けてる田舎娘』

『無理してよせて上げてるなんちゃってCカップ娘』

なんて囁き合ってるに違いない。

それを証拠に見て。

あそこの柱の隅に固まってる3人のお嬢様方の突き刺すような視線の痛いこと。

なんだか、好意的な視線ではない事を肌で感じる。その中でアルメリアお嬢様の姿を見つけた。

なんだか、特に彼女の視線が一番きつい気がする。かわいい顔に眉間に皺よせて、にらまれてる気がするのは私の気のせい？女が数人集まると怖い。これは、どこの世界でも共通なんだな、と実感する。

何だか自分はとっても場違いだと感じてるけど、ラインのエスコートは完璧で、スマート。

こんな場に慣れていない私でも、側でエスコートしてくれる人が完璧なので少しだけ自信が満ち溢れてくる。

ラインのエスコートに恥をかかせないように、せめて私は真っ直ぐに、姿勢を正しく、前だけ見て進む。

しかし、わざわざこの場に駆り出されるなんて、いったい何を考えているの？何の為？

人の波をかきわけ、進むラインについていくと、どうやらお目当ての人物にたどりついたらしい。

大勢の人に囲まれたその人物は、ゆっくりと近づいてくる私から視線を外す事なく、見つめていた。

やっぱり、黒幕はお前かつ！

アデレイ！

目標の人物の蒼い視線を外す事なく、私も真っ直ぐに彼を見つめていた。

「アーデレイド様」

エスコート役のラインが、礼儀正しく腰を折り、挨拶をする。

「我が城にてその身を預かっている、異世界からの娘です」

義務的な挨拶と共に、私にも目配せをする。なので、

「リツキと言います」

簡単な自己紹介をして頭を下げる。正直、アデレイ相手に名前を名乗るなんて、今更何言ってるの？

今朝も畑で会ったじゃないか！と言ってやりたくなるが、ここは公式の場合なので我慢我慢。

社会人として、会社で習った『マナー講座』を思い出す。

「リツキが…」

アデレイは目を細めて口端を少し上げ、美しい顔で余裕ありげに微笑んだ。

はー？

何、その初めて会いました、みたいなニュアンスの言い方。そっちがその気なら、こっちだって猫かぶるもんね。

「ヒューストン伯爵のご好意により、この地に身を置かせて頂いております」

深々と礼を取る私と、私を見下ろすアデレイと、私達を注目しているであろう周囲の視線。

そんな周囲の視線を気にする風でもなく、アデレイは続ける。

「…質問なのだが」

「はい」

私を見つめながら口を開くアデレイの手には、私がこっそり忍ばせたワイングラスのジュレが握られていた。

「この赤いワイングラスの中味は？」

「はい、それは、私の世界から持ち込んだ食糧の一種でトマトと言います。そのトマトをつぶしてジュレにしたものです」

「そうか。最近、国の市場に出回っているという珍しい赤い食糧はトマトというのか」

感心したように言うアデレイだけど、あなた、毎朝観察しに来るぐらいトマトに惚れこんでるんじゃないの？それこそ観察日記書ける勢いで毎朝来てるじゃないの！つまみ食いだってしててでしょう？

今更何言ってるの？その演技は何の為？

しかし、アデレイはその演技にほころびは見せない。

「異世界人とは、時として我々の知らぬ知識でこの国にとって、富をもたらしてくれる存在だ。よって深く感謝をする」

蒼い瞳を優しく細め、口端を上げて感謝の台詞を言うアデレイ。周囲を囲んでいた貴族達は、そんな私達の会話を興味深そうに聞いている。

それに貴族のお嬢様達は、そんなアデレイを遠巻きながら見とれて

いる。

そりゃそうだ。

正装に身を包み、見た目も麗しく、いずれこの国の最高権力者になる予定の人物。堂々として強者のオーラを放ち、ひととき目立つその存在感とその魅力にひかれる人は男女問わず多いだろうと思う。

顔良し、体つき良し、身長良し、身分良し、の高クオリティ。

しかし、性格と頭だけは、いまいちよくわからん。性格は、悪くはないと思うけど、考えてる事がいまいちわからない。

しかも、感謝の台詞のはずなのに、上から目線でもって偉そう。けど、当たり前か。

実際偉い人なんだもんね。

「異世界人の知識は役に立つ。これから、その豊富な知識で、この国の繁栄に力を貸してくれ」

その上から目線な言い方、人に物を言うのに、昔から慣れている人の言い方だね、こりゃ。

「はい。もったいないお言葉、ありがとうございます」

私は礼をする。

だけど、実際褒められると悪い気はしない。緊張しながらも、やはり嬉しさを隠しきれなくて、自然に笑顔になっていたと思う。

礼をしていた頭を上げた時、微笑しているアデレイが私の目の前すぐ側に近寄っていて、驚く。

距離の近さに驚いたと同時に、私の視界に入ってきたのは大きくて広いアデレイの手。

そして、頭の上に何かが乗った感触がした。

「いつまでも、この世界にいて、これからこの国の繁栄に力を貸して欲しい」

目前で微笑むアデレイと、囲む貴族達は何やら、どよめき、続いて沸き上がった盛大な拍手。

そして一人意味がわからず、周囲を見渡し、挙動不審になる私。何だ、何が起こった？そして私の頭の上には今何が起きている？私の頭上に何かがのっている…。

今すぐ確かめたくて、頭上に手をやり確かめたくても、あまりに多い人数に囲まれてるのでそんな不自然な行動をとれない自分がいた。心の中では、相当動揺していたけど、それを隠して笑顔でアデレイに返答する。

「いつか元の世界に帰るその時まで、全力を尽くしたいと思います」

そう言った後、つい今まで微笑んでいたアデレイの視線が鋭くなったような気がした。あれ？

不穏な空気を感じ取った私は、アデレイを見つめると、私を鋭い視線で見つめたまま瞳を動かさないアデレイがいた。先程までの優しい蒼い瞳が、一瞬で鋭く冷たい瞳に変わった気がした。

あれ？私、何か変な事言った？

しかし、そんな事よりも、私の頭の上の重さの理由は何かを知りたくて、礼をすると、ラインと共にその場を立ち去った。

「すごいよ、リツキ」

「何だか、頭が重い気がするのだけど…。気のせいかしら…」

「いや？頭にのってるよ？銀のティアラ…」

「ギャー！聞きたくない、きっとこの頭の重さはストレス性の頭痛…！」

私は本気でしゃがみこんで耳を塞ぎたくなった。そんな私にラインは優しく微笑むと

「似合っているよ？この国に貢献してくれた人達に、王族から贈られる名誉の証であるシルバーティアラが見事に輝いてるよ？」

ライン…。爽やかな笑顔と共に、簡潔に説明ありがとう…。

しかし、アデレイ！なんちゅう物をくれたのだ！こんな高価な物！こっちは、高い物に免疫がないんだぞ！

リアルな世界で現金10万でも持って歩いてると嫌な汗かくぐらい庶民な私に、こんなセレクトアイテム銀のティアラだと？！何だ、こ

れは！これをどうすればいいと言うのだ！自宅保管すれと？

そんな事になったら、どこかで聞きつけた泥棒が来るかもしれないじゃないか！そしたら夜も眠れないし、居候の身でマーサさんに迷惑もかかる。セコムしなきゃ安眠できない！

ティアラを手に取り確認したいが、私の指紋がついたらどうすれば？正直、今すぐ返品希望、心臓に悪い。

一人青くなっておろする私にラインはクスリと微笑むと、瞳を輝かせ始めた。

なんだか近頃ラインの瞳が輝きだすと、私はろくな事を言われないと気が付き始めた。

私だっていい加減ただのバカじゃないし、学習能力だってつく。身構えた私にラインは、

「しかし、今日のリツキはいつも増してすごく綺麗で見違えたよ。あの広間で皆の視線がリツキに集中したのわかった？僕はエスコート役として鼻が高いよ」

おや？ラインにしては、普通に褒め言葉？

私の勘違だったかと安心して素直にお礼を言おうとしたら、

「だけど、あのトマトってどこで栽培していたのかな？何ならこの土地を使って栽培していても全然かまわないのだけど…」

うつ！優しいお気遣いもつたない。ありがとうございます。

そのお言葉に甘える前に勝手に土地の有効活用…違った、無断借用してました。

今こそ、ラインに無断借用を詫びて改めてお願いするチャンス！

「あのね、ラ…」

「この土地を使っていたとしても僕は全然構わないし、むしろ応援したいけど、けど、リツキはきつと僕に一言相談するよね？相談もしないで、使っていたら、そこは信頼关系的な意味でショックだな。

まあ、リツキの事だから、そんな事しないで、僕に一言相談してくれるって信じているけどね。

もし黙っていたなら、温厚な僕だって、ちょっとヘソ曲げちゃうかなあ。

それなら、僕の機嫌をなだめてもらう為にも、いろいろな事をしてもらわないとね。いろいろとね？」

うふふふ、と天使の様な無垢な笑顔で優しい眼差しを私に向けるけど、私は知っている。

このお方は、天使のような見かけとは裏腹に腹黒DSだと。

きつと知っている。

私がどこでトマトを栽培しているのか。

そして知ってて私の反応を見て楽しんでいると言うことを。

私の口から、言わせたいのだろうが、私はそのラインの言う『いろいろな事』がとても怖くて

引きつりながらも首をフルフルと横に振り、乾いた笑みが出る。

頭の中には、どちらを選んでも究極の選択になる先程のラインお勧めドレス2着を思い浮かべながら。

51 ティアラ

ラインに、『何だか精神的頭痛がするので退散します』と告げ、一人早々と先程の衣裳部屋に戻ると、一人になった安堵からか、どつと疲れが出てきた。

鏡面台の前の椅子に腰かけ、恐る恐る鏡を見ると、私の頭上には銀のティアラが輝いていた。

ぎゃー。

やっぱり私の頭痛は気のせいではなかったのね。鏡ごしに見つめる自分の姿にしばらく固まる。

その頭痛の元のティアラは、私の頭上できらめき、輝きをはなっていた。

まったくアデレイめ。やる事がいちいちスケール大きくないか？ 畑にいる時に『この世界にトマトを持って来てくれてありがとう』の一言ですませればいいのに。

あんな貴族に囲まれる中で話しかけられて、こっちも緊張するっていうの。

そもそも皆の前に引っ張りだしてまでこのティアラをくれるなんて、注目の的じゃん。

「まったく！アデレイめ！」

「呼んだか？」

私のひとり言の他に不意に、聞きなれた声が聞こえたので、反射的に後方の扉を振り向くと金の髪をなびかせて蒼い瞳を輝かせながら、私に精神的疲労と頭痛を与えた王子様がいた……って、

「ノックぐらいしろ……！！！！」

私がお着替え最中だったらどうするのだ！レディの着替え部屋に単身乗り込んでくるとは、ゴーイングマイウェイなところはラインとそっくり！さすが生まれもつての王子様！だけど一言いいたい。言わないと気が済まない。

「私が着替えてる最中だったら、どうするのよ！」

「それを狙ってきたのだ」

「げ！この変態！」

思わず表情に出てしまったら、それを見てアデレイは愉快そうに笑った。そしてそのまま部屋の中まで歩いて進み、こちらに近づいてきた。

「ずっと後ろから追いかけていたのに、気付かなかったか？」

「知らないし！だって私、後ろに目がないもの！」

私の返事を聞いてますます愉快そうに笑うアデレイは、先程の広間で見た態度とは打って違っていつもの畑にいるアデレイだ。

私には、こつちのアデレイの方がしっくりくる。先程のアデレイは『王子様』今のアデレイは『アデレイ』なんだか、少し安心した。

…って、いやいや違うダロ。

ノックもせずに入って来た事をうやむやにしてはいけない。

「それはそうと、ノックぐらいして入ってよ！」

少し強めに主張するとアデレイは不思議そうに首をかしげた。金の髪がさらりと落ちる。

「…俺が許可を得なければ入れない部屋などないはずだが」

「……………！」

その答えを聞いた途端、私は目が点。

かーっ！ やっぱりコイツにや、話が通じん！ 何この俺様隊長。我が道をゆくタイプ。

私のがつくり肩を落とした様子を見てアデレイは、

「それは冗談だが…」

冗談か！ 相変わらず見分けがつかん！

「ノックならしたぞ、1回」

たった一回か！ しかもなぜか偉そうな言い方！

「ノックと同時に部屋に入ったのは認めるが」

してないと同じじゃんか！

「だけど、私にこんな立派なティアラなんて…。どうして急に？」

訳がわからないという風に聞く私にアデレイは、

「前に畑で約束しただろう？」

「…って！何て？」

「今度、『頭にかぶる物を贈る』と約束したはずだが…」

アデレイの言葉に私は記憶を遡る。

そう言えは、以前、タオルで頭をほっかむりにしていたら、アデレイがそんな私に同情して『今度あたまにかぶる物を贈る』と言ったような言わないような…。

しかし、どこをどう間違ったら、ほっかむり頭から銀のティアラになるんだああああ。

私が欲してお願ひしたのは、手ぬぐい手ぬぐい手ぬぐい手ぬぐい手ぬぐい手ぬぐい…！

「……このティアラをかぶって畑仕事しろと?!」

「それもいいだろう」

「わーい。次、畑で仕事するのがすごく楽しみー！………の訳あるかっ!!」

何が楽しくて畑にティアラかぶっていくのか。
そんなイタイ人物にはなりたくない。

「…冗談だ」

毎回思うがアデレイの冗談と本気の区別が私にはつかない。

「畑でティアラをかぶるのは冗談にしても、この世界に新しい食材を広めてくれた事は感謝する。その敬意をはらったの事だ。新しい食糧が増えるという事は、それだけ人々の暮らしも豊かになるだろう？ティアラ一つでは安いものだ」

そんな、最初はただの気晴らしで、今では趣味の一つとして好きでやっていた事なのに、そこまで感謝されるのも気が引ける。まあ嬉しい気持ちも大きいけど。

「このティアラは、国にとって有益な事をしてくれた人物に授けているのだ」

それって『国民名誉賞』みたい感じですが…。そんな恐れ多いティアラを本当にもらっちゃっていいんでしょうか！？これ！？
しばらく一人で考えこんでいると、

「ティアラでは不服なら、もっと別の…」

「いえ、ティアラ最高！イヤッホー　　！！」

隣に立つこのお方は、畑でいきなりティアラをあげる事を思いつくお方だ。不服だなんて言ったら次回、何を持ってくるのかわからな

い。そんな思考回路の持ち主だ。

「でも、それならそうと、わざわざ公式の場に引つ張りだす必要はなかったんじゃないの？」

そう言うとアデレイは、口の端を上げて微笑んだ。私を優しく見つめる蒼い瞳が揺れる。

「……………綺麗に着飾った姿が見て見たかったのだ」

率直な言葉を言われて私は照れて赤くなった。

「そのドレスもよく似合っている。気づいていたか？あの広間の者がお前に注目していたのを」

鏡台の椅子に腰掛ける私のすぐ隣に立つアデレイは、蒼い瞳で私を見下ろしている。

私は鏡越しにアデレイを見つめる。

鏡越しに見えるアデレイは横顔で、その整った顔を私に向けたまま口を開く。

「そんなお前を誇らしく自慢したい気持ちと、閉じこめて誰の目にも触れさせたくない気持ちにもなったがな」

なんだか、熱の入った蒼い瞳でさらりと言われて私は何と返したらいいのかわからず、黙ってしまふ。

そうした沈黙の後、その空気に耐えられなくなった私は

「アデレイ、もう戻らなくていいの？抜け出して。主役でしょう」

「…すぐ戻る」

そう言つて、さつきからずっと隣にいるアデレイに私は苦笑する。先程の広間で話した時、アデレイとは距離を感じ緊張もしたけれど、今はこうやつて隣に立ち、普通に会話が出来る。先程よりリラックスした関係に私は、安心してアデレイの蒼い瞳を見つめ、微笑みかける。

「何だ？」

「うっん」

私は首を横にふる。

やっぱりアデレイはアデレイだ。

この国の王子である彼とは、時には距離を感じる事もあるけれど、私の中では出会った頃のまま変わらない。

一人で納得して笑顔になる私をしばらく見つめていた彼は、その後、に扉の方を向き、何かを考えている様子で扉を見つめていた。

どうやらアデレイは、やつと広間に戻る事にしたらしい。ふー、やれやれ。やつと、この窮屈なドレスを脱げると安心して息を吐く。

アデレイは無言で私の隣から扉の方へと歩いて行く。

アデレイ、バイバイ。…ってか、挨拶ぐらいしなさいよ！

そう言おうと思つて口を開くと、金属の擦れるような音が部屋に響く。

アデレイは扉の側に立っていて、その音の正体は鍵だったと気づく。

どうやらアデレイはこの部屋の内側から鍵をかけたらしい。

そう気付いたのは、私の隣へと戻ってきたアデレイの笑顔を見た時だった。

52 動揺

か、か、か、

かぎ ！？？

なぜそこで鍵をかけるの？

そうしてゆっくりと、微笑みながら私の隣に戻って来たあなた様は一体だあれ？！

その微笑みの理由はどうしてなのかしら？！

しかも微笑みながらも、瞳は真剣と感じるのは私の気のせいかしら？！

周りの人達に『鈍い』と言われ続けてきた私だけど、この部屋に二人きりという状況は鈍い私にでさえ、いろいろと想像をさせる。

ただ鍵をかけたただけなのに、閉じ込められた気分がして落ち着かない。

だけど、そんな気持ちを相手に悟られるのも癪に障るので、表面上は平静を装い、余裕の態度を取る。

心臓は正直で、鼓動が早くなる。

顔が赤くなってきたのか、熱いと感じる。

手の位置は決まらずせわしなく動き、目が泳ぐ。

…こんな状態で平静を装っていると誰が信じようか。

もう！私のバカ！このバカ正直者め！

どっから見ても挙動不審人物。見事にキョドってるじゃん！

『閉じこめて誰の目にも触れさせたくない気持ちにもなったがな』

先程のアデレイの台詞を思い出す。

…まさか、あなたこの部屋で私を飼う気じゃないでしょうね？

やめてよ！私は人間よ！ペットじゃなければ珍獣でもないわ。

そんな私の動揺を知ってか知らずか、アデレイは長めの髪をうっとおしそうにかき上げながら、微笑んだ。そうして私の隣でゆつくりと向き合う。

「一度ゆつくりと話をする時間が欲しかったんだ」

アデレイはそう言つと両手を組み、鏡台に寄りかかる姿勢で私の前に立つ。

その台詞を聞いて、ちょっと安心した自分がいる。良かった、話があるだけかあ。

だけど、鍵をかける必要がどこにある？余程誰かに聞かれたくない話なのか。

「話つて…？」

改めて話とは一体何だろうか。

「いつか、元の世界とやらの帰るのか？」

「帰るよ」

あっさりケロリンパと言う私にアデレイは、一瞬眉をひそめる。そんな彼にごく当たり前かのように言う。

「だって私の本来住む世界は向こうだもの」

「…それでどうするつもりだ？」

「何が？」

「このままヒューストン伯爵の城に元の世界とやらの帰るまでいるのか？」

「…そのつもりだけど？」

だって、他に行く場所もなければあてもない。いきなり何を言い出すのだろう。

「…俺はいずれ王都に戻る」

「……………えっ!？」

唐突に聞かされた台詞に私は言葉を失う。そんな私の様子と違ってアデレイは淡々としてすごく冷静だった。眉ひとつ動かさず、言葉を吐きだす。

「…元よりこの城へは長期休暇でお忍びという名目だった。次にこ

の地を訪れるのはいつになるのか、俺にもわからない」

急に聞かされた事実には私は一瞬、頭の中が真っ白になった。

それって、もうすぐアデレイとはさよならって事？

お忍び休暇だったけどアルメリアお嬢様とジェネミーがアデレイを迎えに来たのだろうか。

だから帰ってしまうというの？

何だか、頭の中をいろんな事がぐるぐる回って何から考えていいのやらわからない。

二人の間を沈黙が包む。

私はアデレイを真っ直ぐ見つめ、彼もまた私を見つめる。

沈黙に耐えきれず先に口を開いたのは私のほう。

「……………そう」

アデレイは、何も言わずに私を見つめる。

「…そっか……………。アデレイは……………」

帰ってしまうんだね…。

そこから先は言葉にする事が出来ない私。

例えここでアデレイを引きとめる言葉を吐いたとしても、そんな権限私にはない。

それに彼の立場から言っていていつまでも、ここにいられる訳ではないだろう。

普通に考えればわかるはずだけど、私はなぜか、いつまでもアデレイがこの場所にいる気になっていた。

毎朝畑に来るものだとばかり思っていた。

もしや、この私の頭上で輝くティアラはお別れのプレゼントって事で私にくれたのだろうか。

鏡にうつる私の頭上に輝くティアラ。なんだかその輝きが眩しく、そして少し悲しくうつる気がするのは私の気のせいだろうか。

「…………アデレイは忙しい立場なんだもんね」

「…………」

再び沈黙。

気まずい。ものすごく気まずい。この微妙な空気。

だけど、その後にかける言葉が見つからない。

だってアデレイはアデレイの住む世界があつて、私にも私の住む世界がある。

そしていつか元の世界に帰りたいと願う私。

私が帰りたいようにアデレイも本来の居場所に帰りたいのかもしれない。

そんな私がアデレイを引きとめてどうする？引きとめられる立場ではないはず。

そもそも私は引きとめたいの…？

じゃあ…その理由は…？

なんだか、急な出来事で頭の中が上手くまとまらない。

元の世界に帰りたい私と本来の居場所がここではない彼と。お互い、住む世界が違うつて事なのだろうか。

…もしそうなら遅かれ早かれ別れは来るのだ。

けど、いつか来る時と、ぼんやりとは思っていたけれど、

こんなに現実味を帯びたのは初めてで。

どういった態度を取っていいのやらもわからずで。

虚勢をはるのが精一杯で。

本来の勝気な性格の私は強がる事しか出来ない。うつむいていた顔を上げ、努めて明るい声を出す。

「……………じゃあ！王都に戻る時には、トマトの苗あげるわ。頑張つて育ててよ！」

いつもと変わらない笑顔を無理に作りアデレイに向き合う。

「……………」

アデレイは眉ひとつ動かさず、私を無表情のまま見つめる。
その表情からは感情が読み取れない。

「お別れのプレゼントよ！」

から元気とも思えるような声で精一杯の作り笑顔で言う私。

その時、私を冷静な顔でずっと見ていたアデレイが口端を歪めてふつと笑った。

アデレイのその笑顔を見た瞬間、私に衝撃が走る。

アデレイの蒼い瞳は冷たさを帯び、鋭さが加わる。今までのような優しい眼差しの様子など微塵も感じられない。

一見笑っているように見えるけど、絶対違う……！その様子は……！

その異様なまでの視線の変わりように、私はたじろぐ。

「……そうか。その態度か……」

自嘲気味に笑うアデレイが何だか、怒っているように感じられて……。正直、アデレイに対して初めて『怖い』と思ってしまった。

張り詰めた空気のなか、目をそらす事も出来ずにアデレイを見つめていた。

アデレイは、腰を折り鏡台の椅子に座る私にゆっくりと視線を合わ

せる。

アデレイの顔が至近距離で私の瞳にうつる。

そうして、激情に揺れている蒼い瞳を私に真っ直ぐに力強くぶつけながら言った。

「ならば、俺はもう遠慮はしない」

その台詞を聞いた瞬間、アデレイの瞳がまるで、今にも掴みかかってきそうな鋭い目つきになっていたので、その様子にたじろぐ。

私の動揺と同時にいつもの香りが鼻腔をくすぐる。

弾ける水しぶきのような爽快感を思わせるベルガモット系の香りは、透明感と力強さを併せ持つ香りで、

アデレイの香りだ。

そう感じたと同時に、私は彼の腕の中に閉じ込められていて、唇が重ねられていた。

53 空気

噛みつくように激しく捕らわれた唇

熱い吐息

私を包む逞しい体

私の頭の中は真っ白だ。

重ねられた唇と、腰と背中に回された逞しい腕によって私の体は完全に固定されていた。

驚き目を見張る私に飛び込んできたのは、アデレイの整った顔。そうして透明感と力強さを併せ持つベルガモット系のアデレイの香りに全身包まれる。

まるで噛みつくように激しく私の唇を奪った後、アデレイは一瞬唇を離して私を見つめる。

私を見下ろすその蒼い瞳は激しく熱を持っていた。

その瞳を見た瞬間、私の本能が危険が察知して警告音を鳴らすのが聞こえた。

まずは落ち着け!!

そう言いかけた唇もまた、彼の唇によってふさがれた。

先程までの噛みつくように奪われた唇とは違って、今度は優しく奪われる。

ゆっくりと確かめるかのように、私の唇に何度も口づけを繰り返す。

何だか、頭の中がぼんやりしてきた、私やばいかもしれない……。

いやいやいや！

激しかろうが、優しくろうが、奪われてるのは一緒だから！

合意の元ではないのは同じだから！

流されちゃダメダメよ！

なんとかこの状況から逃れようと胸に閉じこめられた私は手を突っぱねて押し離そうと

力を入れるが、全然びくともしない。

以前からよく、畑で突き飛ばしたりしたけど、あの時とは全然違う。今までは力加減をしてくれていたんだと、この時理解した。

やはり男性なのだ。

腰にまわされた腕は、細く見えても力強く逞しく、身をよじって逃れる事もできない。

優しい様で強引な口づけは私の思考回路を停止させる。

唇の中にアデレイが容赦なく侵入してくる。

思わず体に力が入り逃げようとするが、逃げることなど叶わない。

包まれるアデレイの香りが媚薬のようにも感じられ、酔いそうだ。

足元はふらつき、体に力が入らなくなってくるー。

しばらくするとアデレイは唇を離して私を見つめる。私は呼吸が乱れ、赤い顔なのは確実で、もうそれ以上自分がどんな状態なのかすらわからないままアデレイを見上げる。

息も絶え絶えな私に、

「…そんな目で見るな。止まらなくなる…」

いや、止まれ！

そう言おうと思ったが、私の体が酸素を求めていたため、上手く言葉が出ない。

「リツキ…」

私が上手く話せない状態なのに、追い打ちをかけるかのようにアデレイは私をきつく抱きしめてきた。

私の右肩に顔をうずめて、腰には両手をまわされてしっかりと掴まれている。

右肩にはアデレイの吐息を感じて、くすぐったく、そして熱い。

あ

あ

あ

圧死しそうです……。

窮屈なドレスにその下に身につけているコルセット。先程の口づけと、加えてアデレイからの抱きしめ圧力。なんだか、視界にもやがかり、意識がもろろうとしてきたのは気のせいでしょうか……。

そんな私の首筋にアデレイは唇を一つ落とした。その瞬間、背筋がぞくりと震え我にかえる。

いかん。この場で意識を手放してはいかん！
おきろ！私！落ちてはだめだ！起きろ——！寝るな——！
気分は雪山遭難隊。

私の精神の格闘も知らずに、アデレイは私の首筋にまた一つ唇を落とす。

アデレイの髪が私の肩にサラサラと当たる。いつもの香水とは違う香りのするアデレイの髪がくすぐったく背筋に震えが走る。

そうしてアデレイは私の首の後ろでドレスをまとめているリボンに優しく触れ始めた。

ちょ……

ちょ…っと

な…何するつもり…？

何だか、先程から首の後ろのリボンに触れているアデレイに嫌な予感しかない。

まさか…！

そのリボン…！

ほどく気じゃないでしょうねえええええ！？

私の脳内で警告音がピーピー鳴りまくっていたその時、部屋に響き渡ったのは扉をノックする音。

『トントン』

救世主来た

！！！！

私はノック音のした扉の方を向く。アデレイは扉を忌々しそうに見つめる。私はアデレイの腕の力が緩んだ隙に、彼の腕の中から抜け出す事に成功する。

距離を取って、乱れた呼吸のままアデレイの顔を見ると、アデレイ

も私を見ていた。

アデレイは、ふと手で自分の唇をぬぐう。その手には私の口紅の色がついて、私はその色を見た瞬間赤くなった。彼はその手を見つめると、薄いピンクに色づいた口紅の色を見て笑みを浮かべた。

何だ、その笑顔。

そのかわりに私の頭の中は大混乱。

「な…何を…」

「何をつて？俺はもう遠慮はしないと云ったはずだが」

悪びれもせずに言う目の前のこのお方が心底理解不可能。

「…お前が悪い」

「は？」

どこをどう変換したら私が悪い事になるのでしょうか。誰か教えて。

その時、再度扉をノックする音と共に聞こえてきたのが、可愛らしい鈴を鳴らしたような声。

『アーデレイド様、いらっしゃいますの？』

聞こえてきたのはアルメリアお嬢様の声。
その声を聞いた瞬間、アデレイはため息一つつき、扉へと向かい鍵を開けて彼女を招き入れる。

扉を開け、入ってきたのはアルメリアお嬢様。

彼女の赤毛はウェーブで綺麗に波打っていてオレンジ色のドレスは可愛らしくよく似合っていた。

なんだか、ふわふわした砂糖菓子みたいなお嬢様だ。

彼女は、私とアデレイを交互に見た後、アデレイに向かって微笑みながら、

「さあ、アデレイ様。行きましょう」

可愛らしい声をしたアルメリアお嬢様がアデレイの腕にそっと手をよせる。その手を一瞬見つめたアデレイだが彼女の手を振り払うでもなく、腕に手を寄せられたまま部屋を出て行くこととする。

私の事は振り返りもしない。

な…

何、その態度…！？

どうして私がそんな態度をとられないといけない訳？

あっけに取られてお口はポカーン状態な私。

そんな呆け気味でアホ面した私をアルメリアお嬢様は横目でチラリと見ると、まるで勝ち誇ったかのように微笑みアデレイの腕に寄せていた手をそのまま、アデレイの腕に絡める。

は？何それ？

まるで2人の世界みたいですが…。

空気。

私、空気と化してない？

「さあアーデレイド様。皆がお待ちかねよ」

アルメリアお嬢様に腕を取られたまま、私に退室する旨の一言もなく、そのまま部屋を出て行く二人。
それを空気になり、静かに見送った後、残された私は少し冷静になって状況を整理しようと試みる。

あのアルメリアお嬢様の勝ち誇ったような笑顔の意味はわからないけれど、何より一番頭にくるのはアデレイ！何だ、その態度！いきなりベロチューしてきて人を圧死のごとくしめ上げたあげく、自分は迎えにきたアルメリアお嬢様とさっさと退散ですか。

しかも私の事は無視ですか！？シカトですか！？スルーですか！？ベロチューの弁解は一言もなしですか！？

しかもアルメリアお嬢様が来なければ、そのままどうしようと思っ

ていたのだ？

だいたいアルメリアお嬢様は婚約者でしょう！前に「俺の意志ではない」とかなんとか良いながら、

人の唇奪っただけ奪ったら、自分は婚約者とさあ退散。そんな都合のいい話あるかつ！

冷静に考えたらどうしようもない怒りが沸き上がり今にも噴火しそうになっていた。

怒りが溢れ出てきて自分で自分が止められなくなった時！。

気が付くと私は立ちあがり部屋を飛び出していた。重いドレスを身にまとい走って駆けつける。

裾を引きずる程、長いドレスは両手でまくし上げ、走りやすい格好で、先程部屋を出て行った2人を探す。

はしたなくてもかまうもんか。

「アデレイ！！」

前方で並んで歩いていた2人は、私の呼びかけに気づいたらしく、アデレイとアルメリアお嬢様は私の方をゆっくりと振り返ろうとする。

その瞬間。

振り返る前のアデレイの背中に跳び蹴りキックを食らわした。

両手を口元にあてて驚きのあまり何やら叫んだアルメリアお嬢様と、前につんのめるアデレイ。

そして、怒り心頭の私は、アデレイの白いマントのど真ん中に私の足跡が見事綺麗にうつっていたのを確認した。

54 調子の出ない私

本日も晴天なり。太陽は晴れ晴れと、雲ひとつなく、照りつける太陽の暑さに、喉が水分を欲する。

眩しすぎて直視出来ない太陽の光の強さに目を細めながらも、つい見つめてしまう。

こんな晴れた日は最高だ。

…しかし、私の心は曇り時々雨、場合により雷雨。そんな一向に晴れない気分。

その原因は、アレ。そう先日のこととしたあの事件だ。

私的には、ちょっとというよりはなんともビックな事件、人生において3本の指に入るぐらいの事件をしでかしたかもしれない。

やっちまったよ、私…。

回想にふけつつも、今日はお休みなので、私は朝早くからいつもの畑に来て草むしりに没頭していた。

頭にはもちろんかぶっている、先日貰った銀のティアラ。…ではなくて、いつものほっかむりですけど。

あの舞踊会から10日たった。

あの後、標的に鮮やかにとび蹴りキックを食らわれ、マントについた足形を確認し、一瞬すっきりして爽快な気分になったものの、すぐに自分のしでかした事の重大さに気付き慌てた。そしてつんのめったアデレイが振り返ろうとした瞬間、その顔と対面する前に恐れ

をなし、マツハでその場から走って逃げだした私。
普段は強気なくせに、こうゆう時に臆病者の面が出る。

そうして、全速力疾走後、息も切れ切れに衣裳部屋へとたどり着き、呼吸も荒いまま急いで内側から力ギをかけた。

その後、アデレイが逆襲しに来たらどうしようかと心臓をバクバク言わせながらも、とりあえず動きやすい格好を求めて窮屈なドレスを脱いでいつものメイド服を着用。慣れないハイヒールも脱ぎ捨てた。

だって、こんな動きにくいドレスじゃ戦えないし！

…ってか、戦う気満々ですけど、何か？

しかし、着替えを済ませて来るべく逆襲に備えていても、アデレイが一向に逆襲に来る気配が感じられなかった。しびれを切らした私は、鍵を開け、そーっと廊下を確認した。だけでも人気がないので、なんだかホツとした。逆襲に備えて用意はしていたけれど、先程アデレイにがんじがらめに腕の中に閉じ込められた時に感じた事は、圧倒的な力の差だ。やはり男性なのだ。私なんか本気を出してもかなう相手じゃない。

しかしアデレイが逆襲に来ないなら、ここにいる意味もないと思い、そのまま衣裳部屋を抜け出し、何とか元のメイドとしての持ち場に戻ったって訳。

しかし、今思い出すとアレはまずかったかしら…。
この国の王子であるアデレイに後ろからとび蹴りなど、どう考えても不敬罪に値すると思う…。

いつそ正々堂々と、前からなら良かったか？

いやいやいやいや違うダロ。そうゆう問題じゃない。

しかし、相当なダメージをくらわせた自信はある。

何せ、ハイヒールでジャンピングキックだ。用心していなかった隙だらけの背中を狙ってクリティカルヒットを叩きだしたと思う。

しかし、あれで格好悪くすっ転ぶ計算だったのに、つんのめるだけで終わりとは標的の主、アデレイもなかなかやるな。

しかし一国の王子を足蹴にするなどと、処刑されたらどうしよう。

こうみえても私は暴力反対の人間だ！……どの口が言う。

だけど、基本カツとなりやすい性質なので、いろいろと後悔する事が多い。短気は損気。わかつちやいるけど止まらない性分なのだ、はあ。

ため息をつきながらも、手は休めずに、生き生きと伸び放題の雑草を抜きながら考える。

…しかし、アレはアデレイも悪い。

そうだ、私は自分の行いばかりを後悔しているけど、思い出せ！私がつび蹴りを行うまでに至った経路を。

私だって何もしない相手にいきなりとび蹴りをくらわすなど、そんな真似はしない。

そもそも元の原因はアデレイが、

いきなり抱きしめてきて…

それから急にキスをしてきて…

しかもベロチューで…

何だか、激しくて……

いや、優しいような……

……！！！！

いやいや！何を思い出している！私のバカ！

思い出さなくてもいいような事柄まで思い出してきて、私は一人で赤面する。

耐えられなくて、抜いた草を集めた雑草の山に寝転がり、悶える。思い出してはもだえて転がる、あれからそんな日々が続いている。

「はあ……」

ため息も出るっていうの。

しかし、次回会ったらどんな顔をしよう。彼も何か思うところがあるのか、あれから顔を合わせてはいない。

その証拠に畑へは来ない。あれだけ毎日頼んでもいないのに、畑へ来ていたのに、音沙汰なしもいいところだ。毎日のお茶の時間にも呼ばれないし、あれ以来パツタリだ。

「……まあいいけどね……別に」

別にアデレイが畑に来なくても困る事なんてないし？

どうせこの畑に来ても見てるだけだし〜

別に何か用事ある訳でもないし〜

別に一人でも収穫出来るし〜

別にいいし〜

……勝手にしてろ！

私は勢いよく起き上がると、ぶつぶつ言いながら、畑の雑草を抜いていく。心を無にするべく、何も考えずに緑の草に手を伸ばしては引っっこ抜いていた。

「……おおおっ!？」

手元が狂って雑草と間違っつて、植えたばかりの小さいトマトの苗まで抜いてしまったではないか！

私とした事が、心を無にしてしまいすぎた！

大切な苗を雑草と間違えるなんて、私の目は曇ってしまったようだ。私の今の心を表しているのだろうか。

「まったく！これも全部アデレイのせいだ！」

はあ…。

ため息一つついて、空を見上げる。何だかいつもの調子が出ない。

こんな感じで最近の私の調子はいまいちなのだ。

もう、いいやとばかりに抜いたばかりの雑草の山に寝転がる。多少ちくちくするが、別に気にならない。

このまま寝転がってゴロゴロしていたいが、太陽がまぶしすぎるし、それに暑い。

早朝の涼しいうちに終わらせるつもりが、何時の間にかだいぶ時間は過ぎたように感じる。

せつかくの休みだし、このまま草むしりで終わらせるのももったいないしな…。

ぼんやりと考え事をしていた時に、

「何をぶつくさと一人ごとを言っているんだ？」

急に後方から声が聞こえてきた。

私は寝ころんだまま声のする方を反射的に振り返り、そこにいた人物の出現に驚いて目を見開いた。

55 気分転換

私は寝ころんだまま声のする方を反射的に振り返り、声を掛けてきた人物を確認して驚く。

その場にいたのは、ここにいるはずは無かった人。

なぜ？どうしてここに？

びっくりすると同時に、心のどこかでアデレイじゃない事に驚く。

…いや今会っても微妙だけど…。

「ジェネミー…」

少しくせ毛混じりの柔らかかそうな赤茶色の髪は太陽の光を浴びて、なおいつそう赤味が強く輝き、同系色の瞳は大きく見開き私を真っ直ぐに見つめていた。

ジェネミーがこの場所にいる事に驚いて、どうしてここに？と尋ねる前に

「…まずは起きろ！地面に寝転がるなんてはしたない！」

口調はきつく、説教じみていたけれど、雑草の山に寝転がる野猿のような私に優しく手を差し伸べてくれた。
どうやら手を貸してくれらしい。

私はその手を遠慮なくとり、起き上る事にする。

…よっこらしょ、っと。

気合の掛け声を一つかけたら、ジェネミーは心底呆れたような顔をした。

「なぜここが？」

どうしてわかったの？この場所が。広大なヒューストン伯爵の土地の片隅にあるこの一角の畑、偶然にもここまでにたどり着くとは考えにくい。

「ラインナルト様が教えて下さったのだ」

その名をジェネミーの口から聞いた瞬間、私の背中を嫌な汗が流れた。

「ラ、ラ、ラ、ラインがあ？」

「…声が上ずっているぞ」

やっぱりラインは知っている。私がこの地で勝手にトマト栽培をしている事を。

最初は、ほんの趣味程度、家庭菜園レベルだったのに、何時の間にやら本格的なトマト畑へと変貌を遂げたこの土地をラインはどんな思いで見っていたのだろう。きっと、ラインの事だから初期の家庭菜園レベルの頃から気付いていたけれども、ここまでトマト畑が広がるのを黙って見ていたのかもしれない。

私が楽しそうにトマトを育てているから黙認してくれていたんだと思う。

そんな優しい気持ちを持つているラインだとは思っけど、何より私をいじるネタの為、ここまで黙認して泳がせておいたような気がする。後者の方にファイナルアンサー。

ああ、次回お会いするのが怖い。ついに今度こそお仕置き決定な予感がする。

優しい色合いの薄紫の瞳を潤ませ、とろける砂糖菓子のような笑みを浮かべながら

『今までの黙っていた罰として、どうしようかな？』

なんて、嬉々として言いそうな姿が目につかぶ。天使の笑顔の裏に隠しもつ本性は、さっ気たっぷりだ。

私は、次回ラインに会った時を考えるとグツタリだ。そんな私の動揺を知らずにジェネミーは私の自慢の畑を見つめている。列をなして赤く実るトマトの大群を感じたように眺めていた。

どうぞ、どうぞ、よく見て行って、私の力作を。…無断借用地だけだ。

「…しかし見事なものだな」

いつもは素直じゃないジェネミーが、珍しく褒めてくれたので、私は純粹に嬉しくなる。

「ありがとう」

「舞踊会で、聞いた時から気になっていた。それに最近世間でも出回っていると聞き、どんな物なのか、実物に興味があったんだ」

「え？そうなの？」

私はまさかのジェネミーの発言にビックリする。だって貴族のおぼっちゃまが興味を示すなんて。

「アーデレイド様の発言力の強さは、お前が思っている以上にあるんだ。しかもあんな貴族に囲まれた場での事だ。噂になるのは当然だし、あのお方の取り巻きの貴族や、取り入ろうとする貴族が今後、この実に興味を示してくる事もあるだろう」

「そうなの？」

「アーデレイド様の身分を考えれば当然だろう。あのティアラをアーデレイド様から直々に授かった事は、とても名誉ある事なんだ。……だから……よっ……よかったな」

最後はつぶやくように小声で言ったジェネミー。

視線をそらしてぶっきらぼうな物言いだけど、彼なりに私の事褒めてくれたんだなあ、と感じる。

しかし……だ！

そんな発言力のあるお方に、あの後とび蹴りくらわした事、あなた知らないでしょ？

一国の王子が、つんのめったのよ？自慢のマントに、私の足跡くっ

きりよ？

…それを知っても、私の事そんなに褒められる？

何だか、アデレイの名前を聞いた瞬間、一気に現実に戻ってきた。褒めてくれたジェネミーには『ありがとう』と一言告げる。

しかし、もう今日は面倒な事を考えるのが嫌になってきた。せつかくのお休みなんだから、もう、やめ！やめ！

「私はこれから、市場へ買い物に行く事にするわ」

ここは自分のテンションを上げる為にも、買い物に出かける事にする。

そうだ、今日はお休みなのだ、市場へひとりショッピングでも出かけよう。見てるだけでも、テンション上がるよね、可愛いアクセサリーとか、素敵な服、あとは肥料とか肥料とか肥料とか…。

そう考えたら何だか気分が上がってきた。よし！行くぞ！そうとなったら、ここは作業は中断して着替えに帰ろう。

「…俺も市場に用事がある」

「へ？」

一人、自分自身に気合を入れていた私は唐突のジェネミーの台詞に驚く。

まさか貴族のお坊ちゃんが市場という庶民的な場所に用事があるとはビックリだ。

そう思ったけど、適当に相槌を打っておく。

「そうなんだ」

「ああ」

「……」

何この沈黙。

「じゃあ、もう行くね」

手を振って立ち去り際に、

「待て。俺は市場へ行くのは初めてだから、お前が案内してもいいぞ」

「…その場合は『俺を市場へ案内して下さい。お願いします』という言い方が正しいと思うのだけれど」

「…うつ！」

素直じゃなく、凶星指されて、たじろいだ様子のジェネミーに、まあいいや、と微笑みかけ、

「そっか。じゃあ一緒に行こうか、市場へ。ジェネミー慣れてないだろうし」

私が誘うと、彼は一瞬笑顔になりかけたようだが、すぐにムツとしたように睨んだ後、

「そんな迷子になるような子供扱いをするな！」

と言って怒られた。だけど、実際私より年下じゃん！

その後、私は畑から出て、市場へ行く用意をする為一旦はジェネミーと別れた。

いくらなんでも、ほつかむりに寝転がったせいで土だらけの服で買物に行くのは気がひけたし。

そうして私は、膝下スカートに薄い水色のブラウス、日差しが強い為、お出かけ用にと買った帽子を着用して待ち合わせ場所に行き、ジェネミーと合流した。

ジェネミーの格好は、丈の短めのブラウンのパンツ姿に、上は白いブラウス。

足元は皮のブーツを履きこなし、一見してラフなスタイルなのだけど、着ている物の質は上等だとわかる。

貴族である事を悟られないような格好をしてきたのだろうけど、やはり育ちの良さがにじみ出ている。

「これなら、市場へ行ってもなじむだろう」

自信満々に言うジェネミーだけど、

くっ！このお坊ちゃまめ！

市場ツ子はねえ、そんなシミ一つない服きてないから。

棒きれもって、鼻水垂らしてトンボおっかけて真っ黒に日焼けして
いないとダメだから。

…って、何ソレ、いつの時代よ？

「まあいつか。…では、行こう」

「ああ」

「フラフラして迷子にならないでね」

「それはこっちの台詞だ！」

私の冗談をすぐに真に受けてムツとして強がるジェネミーを何だか
可愛らしく思い、つい笑ってしまふ。

「迷子にならないように、手をつないであげようか？」

私が冗談で差し出した手をジェネミーは、一瞬驚いた顔をした後じ
っと見つめている。

あれ？ここで『いらん！』とか言って手を叩かれる展開だと想像し
ただけど…。

私の差し出した手を見つめたまま何かを考えてる風なジェネミーが、
いきなり顔を上げる。

「お前がそこまで言うなら…」

『グ~~~~ッ』

いきなり地響きのような音が聞こえてきたので、私は慌てた。それも自分のお腹から聞こえてきたと知った時は、さすがに私も照れくさかったので、慌ててお腹をさすりながら、

「今、お腹が鳴ったよ！お腹空いたってお腹が催促してるわ！ねえ？早く行こうか？」

恥ずかしさと、照れ隠しの為に一気にまくしたて、市場の方向に足を向ける。

ジェネミーはなぜか付いて来ずに、その場で立ち止まっている。

「？」

私は、後ろを振り返りながらも、なかなか付いてこないジェネミーを見ていた。

「もう！来ないと置いて行くよ！」

まったく世話のやける。迷子になんてならない宣言したけれど、この時点で迷子になりそうな予感がビシバシするわ。

なんだか、ジェネミーは、憎まれ口をたたいてばかりいる弟みたいな感じ。弟がいたら、きつとこんな感じなのかな。まあ、しょうがない。私の方がお姉さんという事で、広い心で接してあげよう。

「行くよー！」

「全く！お前という女は、本当に頭にくる！」

いきなり怒りだしたジェネミーに私も前言撤回する。

やっぱりこんな怒りっぱい弟じゃないわ。

56 市場にいく

ジェネミーとギャーギャー言いながらも無事に到着すると、市場は相変わらずの熱気と人々の活気にあふれていた。

やっぱり一人で、ウジウジと考えているよりも、こうやって外に出ている方が気分も晴れる。

それに、来るまでの道中、ジェネミーと何だかんだで、ギャーギャー言い争っていたのも、結果としてはすごく気晴らしになった気がする。

市場の活気にあてられて、体の中から自然とエネルギーが沸いて出てくるような感じがする。

「まずは腹ごしらえ！」

ジェネミーとの毎度の口喧嘩も一時休戦して、

「そつだ！アレを食べようか！」

不意に思いついた唐突な私の申し出に、

「アレ…って何だ？」

不思議そうな顔をしたジェネミーに

「そうそう！市場に来たらアレ食べないとねー」

「だからお前は人の話を聞け！」

騒ぐジェネミーだけど、説明するより、実際実物見てもらったほうが早いだろうと思い、ジェネミーの後方にある柵の、ちょうど日かげになっている場所で待つように告げ、急いでお目当ての場所に行く。

私に言われた通り素直に、柵の日かげになっている場所で、大人しく座って待っていたジェネミーに笑いかけながら、先程の会話のアレを差し出す。

「これは…？」

紙にくるまれて熱い蒸気のたつソレを不思議そうな眼差しで見つめるジェネミーに

「これは、ランデだよ！肉を秘伝のソースにつけて焼いてから、新鮮な野菜と包んで、またソースをかけて、パンで包んで焼き上げるという、ここらの伝統料理らしいよ！」

市場に来たらまずはコレを食べないとね。

しかしナイフとフォークを使わないランデに、どうかじりつくのだろうか。多少戸惑いの色を隠せない様子のジェネミーに、

「まあ、騙されたと思って食べてみなよ」

ほれほれ、遠慮なさらずに…と勧めてみると、一瞬迷った様子を見

せたものの、ジェネミーはランデに勢いよくかじりついた。
味わうように、噛みしめている様子のジェネミーに声をかける。

「ねっ?! 美味しいでしょ?」

そう尋ねると、ジェネミーは

「...まあ、悪くはない」

まったく素直じゃないんだから。だけど、黙々と食べすすめているのが美味しいって証拠だと思うんだ。

そんな様子のジェネミーを横目で見ながら、彼の隣に腰かけて、二人並んで私も自分のランデを一口かじる。

一口食べた後、今までと違う何かを感じた。

そこで、私はランデを手で割って中味を確認してみる。

確認後、私はそのランデをはやる気持ちで一気食いした。

それこそ、先に食べ始めたジェネミーがまだ半分程しか食べてない頃に完食した。

「...おまえ...」

早すぎるだろう、どれだけ腹空かせてたんだ、と驚き、ドン引き気味なジェネミーだったけれど、いいのだ、早食いは私の自慢にならない特技の一つなのだ。

早々完食し、口についたソースをぬぐうと、

「ちょっと行ってくるから、ランデ食べて待ってて!」

呆氣にとられるジェネシーをその場所に残すと、私はお目当ての場所に行く為、再び駆け出した。

「おばさん！おばさん！」

「おや？さっきランデを買って行ってくれたお嬢さんじゃないかい？息切らしてどうかしたかい？」

「さっき買ったランデに……！今までと違う……」

私は走ってきた為に、呼吸が苦しくて上手く説明ができない。けれども、全てを説明する前に気付いたおばさんは、ああと、うなずきながら

「昔からいろんな野菜を入れているんだけどね、最近この市場を中心に回りはじめたトマトを入れてみたんだよ。甘いソースと絡んで抜群だろ？」

しかし、あんた良く気付いたねえ、と豪快に笑うおばさん。

やっぱりそうなんだ。

ランデの中には、沢山の野菜が包まれていて、その中にはトマトが薄く切られてサンドされていた。

ほのかに酸っぱくもあるトマトの酸味が甘辛いソースとほどよくマッチしてランデの美味しさとよく合っていた。

一口食べた後、いつものランデと一味違うと気付いたのだ。そうして早速中味を割ってみるとトマトが出てきたのをこの目で確認した。それから、はやる気持ちを抑えて完食し、真相を確かめに走ってきたのだ。

ああ、私の作ったトマトがこの市場を中心に広がっている。

もしかしたら、ローディのおじさんから苗を購入してくれて、栽培してから販売している人もいるかもしれない。

今この瞬間にも、誰かに美味しいと言われて食べられているかもしれない。

どういった形であれ、広がっていつてるのだ。この市場から。そして私の手元から。

「ちょっと……！どうしたんだい？まさかトマトが泣くほど嫌いかい？」

私は知らずに涙ぐんでいたみたい。

私の事情を知らずにビックリしている屋台のおばさんを見て、笑ってしまう。

「うっん。違うの。トマトが大好きだから嬉しくて泣いているの」

そうなのかい、変わった子だねえと、おばさんに豪快に笑われた。その笑顔を見て私も涙を流しながらつられて笑った。

ねえ、私、この世界に来た事で、少しは役にたったのかな…

ランデのおばさんに手を振って別れて、再びジェネミーと合流して市場を見て回る事にした。

「あつ！あのお店みたい！」

私はいつも見ている雑貨系のお店に飛び込む。それからすぐに、

「あつ！あちの服屋も見たい！」

かわいいお洋服達の誘惑に誘われて足を向けると

「あっち行ったりこっち行ったりと、まずは落ち着け！」

あきれ顔のジェネミーに怒られる。

しかし、目の前に興味ひかれる物があると見たい気持ちが抑えられないのだ。

あっちふらふら、こっちふらふらで飛び回ってしまうのだ。

「頼むから迷子になるような行動はとらないでくれ…！」

… 今度はお願いされてしまった。

だいぶ、いろんなお店を見てまわったので、少し休憩する事にした。喉が渴いたし、足も疲れてきたし。

それに、だいぶジェネミーを連れまわしたという自覚もあるし…。

しかしジェネミーは自分も市場に用事がある、と言っていたけれど、用事なんてないように思える。だって、ジェネミーは文句を言いながらもずつと側にくっついてくるし。

ボーっと考え事をしながら、足を休めていたら、ジェネミーは私に無言で飲み物を差し出してきた。

「え？これ…？」

もしかして買ってきてくれたの？私がボーっと休んでいる間に気を使って？

「ありがとう」

ちょうど喉が渴いていたので、こうゆう気遣いはすごく嬉しい。素直にお礼を言い、飲み物を受け取って、ベンチに腰を下ろす。

そういえば、先程から市場で働く売り子の娘さん達が、休憩時間なのか集まってジェネミーをちらちら見ている。

そうしてその娘さん達は、キャアキャア言って、なにやらはしゃいでいる様子だ。

その中の一人が私に近づいてきた。彼女は確か、キャンディ屋で働く子だったはず。

私と彼女は、そう親しくもないけれど、何となくの顔見知りで挨拶とか軽い会話程度はする関係。

「彼、すごい綺麗な子ね！どういった関係？」

こっそり耳打ちしてきたキャンディに言われて、（名前は知らない）ので勝手に命名。てか、そのまんま）彼女の視線の先のジェネミーを見る。

いきなり娘集団に近づかれたジェネミーは興味なさそうに、そして面倒くさそうに一歩下がって、木陰に入り、そしてその木に寄りかかって市場を眺めている。

確かに、柔らかそうな赤茶色の毛に同じ赤茶色の瞳、体格は成人した男というよりは、まだ線の細さも残っているジェネミーは、一般的に気の強そうな美少年。美少年ゆえに、ヒゲもない。そしてツルツルお肌。ひよつとしたら、すね毛もないんじゃないだろうか。

しかし性格は、生意気ざかり！口答えしてばかり！って感じだけだね。

ここで正直に貴族の坊ちゃんと呼ばれる訳にはいかなかったので曖昧に答える事にした。

「…そうだね。うん、まあ…弟…みたいな感じなのかな？」

キヤーと黄色い声と共に、娘さん達は次から次へと、紹介してくれ、だの、あんなに綺麗な顔の少年見た事ないなど、騒いで質問ぜめだ。

市場の娘さん達は積極的に、若いだけあって、行け行けゴーゴーだ。紹介してくれと言われて、断る訳にも行かないので、後方の日かげで木に寄りかかって休んでいるジエネミーの名を呼ぶ。

ジエネミーは黄色い声達に、面倒くさそうにけだるそうに顔を上げる。その様子も、けだるげな美少年の囃として高く売れそうだ。

そんなジエネミーに、キャンディが近づいていき声をかける。

近づいてきたキャンディに気付き、市場を眺めていた視線をゆっくりとキャンディに持っていくジエネミー。

ジエネミーの視線を受け止めたキャンディは、頬を真っ赤に染めながらジエネミーの前に立つ。

ちょ…溶けるぞ！キャンディ！

今にも溶けてベッタベタになりそうなキャンディが、

「ねえねえ、リツキの弟分って本当？」

それを聞いた瞬間、ジエネミーは赤い顔して私を睨むと、

「誰が誰の弟だ！お前みたいな姉などいらん！」

と、すごい剣幕で怒られた。

…この…！やっぱり可愛くない！

57 攻防戦

市場からの帰り道、なんだかムツとした感じのジェネミーの顔をチラチラ横目で見ながらご機嫌伺うのは私。

もしかして…もしかしなくても…何か…不機嫌…？だよね…。

「ごめんね、ジェネミー」

2人っきりの帰り道、この微妙な空気が嫌で私は口を開く。立ち止まると、真っ直ぐにジェネミーを見て素直に謝罪の言葉を口にする。

「……………」

ジェネミーは無言で赤茶色の瞳を私に向ける。なんだかどこか非難めいた色を含んでいる気がするのは、決して気のせいではないはずだ。

私は自分の何も考えなかったゆえの行動を後悔して、唇をかむ。

「……………」

ジェネミーは、そんな私の謝罪に一応耳を傾けてはいる様子のまま、無言で私を見つめる。

「……………」

その無言に堪えられなくなった私は、ついに声を荒げる。

「勝手に肥料三袋も買った挙句、ジェネミーに持たせている私を責めているんでしょ!？」

そうなのだ。

私ときたら、後先考えずに肥料を三袋も買ってしまったのだ。これぞ、ザ・衝動買い。

なじみの店に入った瞬間、思わず欲しくなり、それを背中に担いでジェネミーの前に現れた時の彼の顔ったら…。

きつと心底呆れていたと思う。私の事バカだっと思ったと思う。だって、口を少し開けて『アポーン』と呆れた顔をしていたもの！

いつものジェネミーの態度から考えて、『返品してこい』とか『もう少し考える』と即座に怒られると思ったけれど、予想に反して無言で私から奪い取ると、全部自分の肩に担いで持ってくれているのだ。

美少年でヒゲ跡の一本もないけれど、さすがは男の子！私は背中に担いでヒーヒー言っただけで登場したけれど、ジェネミーは軽く肩に担いで歩いている。その袋には『肥料』とデカデカ書いてあるから、『美少年、肥料を担ぐ』という、なんだか似合わない残念な図にはなっているけれど…。

「……違う」

ジェネミーはポツリと呟く。

違うつて何さー。何が違うのさー。だったら、何でそんなに不機嫌なのさー。

開き直った私に向かって

「これは欲しかったんだろ？だから別にいい…」

帰り道を真っ直ぐに見つめながら肩に担いでいる肥料を手で軽く叩くと、

いつもと違い静かな声で話すジエネミーに何だか心がドキツとした。

「…俺が不機嫌な理由わかるか？」

いや、今あなた様に持たせている肥料三袋以外は思いつきませんが、フルフルと首を横に振る。

「…俺はお前を姉だと思って扱った事など一度もない」

ああ、そうなのか。それで何だか不機嫌なのか。

「まさか…！」

私は彼の言いたい事に気付いてしまった。

ジエネミーは私を真っ直ぐ見つめる。視線は私の視線より少し、ほんの少しだけ高い程度。

ほとんど目線の変わらない赤茶色の瞳を、私も逸らす事なく見つめる。

「ジエネミーは、私の兄貴分のつもりなの！？」

おいおい、それは年齢の順番から言っただろう！
そもそもいくら頼りない私でも、それはとても心外だ！
と、すかさず抗議の声をあげたら、

「……！！お前みたいな姉も妹もごめんだって事だ！」

ジェネミーからもすかさず抗議の声上がる。

そうして帰り道、市場へ来た時と同じようにギャーギャー言いながらも、二人で並んで歩いて帰った。

やっぱり私達は、大人しく静かに歩いて行く事は出来ない運命らしい。

市場でのお買い物も無事終了し、帰宅途中の私とジェネミーなのだけれども、
今日は、いっぱい歩いていい運動にもなったし、満足のいく買い物も出来たし、何よりいい気分転換になったので、本当に行って良かった。

私の隣に並んで、私の市場での戦利品を持ってここまで歩いて来てくれたジェネミーに最後に笑って声をかける。

「今日はありがとう」

市場に行く前に、集合場所にしたヒューストン伯爵家の庭園の前までは、あとほんの少しの距離。

行く前はうじうじ悩んだりもしたけれど、今日はいいい気分転換になった。

ほら、気分が軽くなると足取りも軽くなって、スキップなんてできちゃうし。

こうなったら、スキップしながら鼻歌なんか歌っちゃう。

ジェネミーを追い越し、スキップのまま進んで庭園前までたどり着くと、クルリと振り返り、

「楽しかったね」

私の荷物を持って歩いて来てくれたジェネミーに声をかける。

いつもより素直にお礼を言える事が出来た気がする。

「…お前が、行きたいのならまた連れて行ってもいいし」

「何それ？案内したのは私でしょー」

口をとがらせながら言うジェネミーの憎まれ口も、今では少し可愛く感じる。

楽しかったけど、足が少し疲れたから、私はこれからうちに帰ってお茶を飲んでから、昼寝でもするよ。

昼寝は私の至福の時間。

じゃあね、とサヨナラを告げようとしたその時、

「ジェネミー？」

庭園の方からジェネミーを呼ぶ声が聞こえたので、声の聞こえた方向に顔を向ける。

庭園の入り口は、見事な色とりどりの薔薇と緑のアーチでお出迎えになっている。

ローデイが一生懸命造り出しているその薔薇のアーチは、いつ見ても美しさに目を奪われる。

そして、その声をかけてきた人物を見て、少し驚く。

その人物は、柔らかいほほ笑みを浮かべて、

「やぁリツキ！」

私に声をかける。

「…ライン」

……ビツクリした。

ジェネミーが呼ばれるまで、まるで気配に気付かなかった事も驚きだけ、

ラインのその天使様のようなほほ笑み、そして、中性的なお姿を見たその一瞬、

見事な薔薇のアーチから飛び出してきた、『薔薇の妖精（属性ドS）』かと思っちゃったよー！

薔薇の妖精もどきラインは、にこやかに笑いかけながら、

「今日は天気が良くて風が気持ちいいから、庭園でお茶会をしていたんだ。そこで、ジェネミーにも声をかけようと思って探したんだ

けど、どこに行っていたの？」

「ちょっと用事で……」

少し言葉を濁し気味なジェネミーにラインは驚いたように、

「用事って？リツキと一緒に？」

「……ええ」

ふうん、と私とジェネミーの顔を交互に見比べるラインの瞳が輝き始めた気がする。

「そうなんだ。けれど、ここで会ったなら丁度良かった！リツキもジェネミーも一緒にお茶会に混じろうよ。向こうにみんないるから！」

「……え……？みんなって？」

微笑むラインに嫌な予感がする。

「アデレイとアルメリアだよ」

NOおおおおお——！予感的中——！

「いえ、せっかくのお誘いですが、私具合が悪いのでご遠慮させて

頂きます」

すかさず辞退を告げると、

「さつき、スキップしてたよね？」

ぐはっ！どこから見ていたんだ、この人。

「いえ！何だか急に腹痛が…！」

「大丈夫？何か変なの拾って食べたかしら？」

おいおい私は拾い食いしそうな程、食い意地がはってるように見えますか？

心配して私の顔を覗きこむラインだけれど、その瞳は輝いている。輝きに満ち溢れているし！

そしてその顔は絶対楽しんでる顔だし！

「私はただのメイドですし、恐れ多くも混じる事などできません」

アイ アム 一般ピーポー！ピーポー！！を主張する！

「今更何を言ってるの？」

クスリと笑った後、ラインは続ける。

「名譽の証であるティアラを王族から授かって、なおかつ僕の友人でもあるリツキがなぜ混じる事が出来ないというの？」

今更ながらですが、そんな重要な肩書を持つティアラなら返品したい。

「隣国から取り寄せた美味しいお菓子もあるからおいでよ」

手招きまでして誘うラインだけでも、さすがにお菓子に釣られてホイホイ行ける程、私は脳天気ではない。

目の前に広がる広大な庭園の彩られた薔薇と緑のアーチの奥には、あの2人がいると思うと一刻も早くこの場から立ち去りたい気持ちに駆られた。

頑張れ私、負けるな私。

「今日、私はお休みです。つまり労働日ではないのです！」

そつだそつだ、労働者としての権利をここに主張する。今日は完璧オフだよ。

お休みなんだから、自由に過ごしてもいい権利があるはずだよ。雇い主のご子息様の無理も今日は聞かないよ！

「そつなんだ。じゃあ、別な日に一日お休みあげるよ」

ハイ、雇い主のご子息様は、即答です。

私が返事に困り口を閉じて黙っていると、

「どうしても嫌？」

「…困ります」

足早に立ち去りたい私と引きとめたいラインとの攻防戦。
今日だけは負ける訳には行かないの…！

ラインとの攻防戦に夢中になっていたら、急にラインが私を見て、
『おや？』と不思議そうな顔をする。

そのラインの不思議顔の視線の先は、私の背後。

その時、初めて自分の背後に感じる人の気配に気付く。

ラインは目の前、ジエネミーは隣で困惑顔。

…と、いう事は…。

何時の間にやら自分の背後から立つ影の存在に気付き、恐る恐るその影を作っている人物に視線をやると、私は驚きのあまり卒倒しそうになった。

ラインが影の人物へと微笑みかける。

「アデレイも来たの？」

ラインとの攻防戦の間に、いつのまにやらアデレイ登場 ！来た

！

いきなりのラスボス登場に、私はいったいどうすれば…。

58 氷の視線

背後に立つであろう人物を確認し、はつきりと目を合わせる事が出来ない私は、ラインを見つめながらも背中から感じる気配に顔が引きつっていたに違いない。

問題の人物は私のすぐ後ろに立っているはず。

だって、何だか視線を感じている。主に視線はつむじ部分に集中しているような…。

いや、これは身長差のせいだろうけど。

「ジェネミーの姿が見えないと思ったら、リツキと市場に行ってたんだって」

この空気の中、軽くすねたような声色を出すラインは、やっぱり大物だと思う。

しかし、そんなたいした事でもないのに、わざわざ告げ口するなー！

「…一緒に…？」

ラインの明るい声とは対象的に問いつめるような低音の声が、私のつむじ周辺から聞こえる。

「そうみたいだよ。リツキのいつものメイド服も素敵だけれど、今日の服装も似合ってるよね。しかし、ジェネミーずるいなあ」

背後から何だか不穏な空気が漂いはじめた気がする…。

その空気に気付いているのか、いないのか、相変わらず呑気に軽くすねたような声色を出すラインは、やっぱり大物、あんたが大将。

「……二人で？」

しかも背後の人物もなかなかしつこく聞いているし。

「そうなんだって！」

明るく呑気なラインとは真逆に、空気が益々怪しい方向になってきている気がする。

何だか、責められているような雰囲気だが、怒られる理由なんてないはずだ。

いかん！ここで流れを変えなくては！

私は勇気を振り絞り握った拳に力を込め、自分の背後を振り返る事に決めた。

そうして、無理矢理でも何でも笑顔を作り、こう言うのだ。

「……アデレイ！」

ひっ…

久しぶり　　！！！！

そんな能天気な声をかけようと思い、勇気を振り絞り背後を向いた私は、その人物の視線に凍りついた。

振り向いた私を待っていたのは、蒼色の瞳の冷たく刺すような険しい視線。

眉間にしわを寄せつつも無表情に、目を細めて私から視線をそらさない。

な…なんか…怒ってるし！！

いつもの蒼い空色の爽やかな瞳が、氷だ、吹雪だ、アイスブルーだ！私がその視線にとまどっていると、

「さあ！さあ！こんな所で立ち話も何だし、皆でお茶しうか」

ラインの能天気な発言が固まったままの私の耳に届く。

その後、私は先程の氷の視線によって固まったままなぜかお茶会に連行された。

アデレイは目から人を凍らせる吹雪を出す事が出来るに違いない。

庭園は花が咲き乱れ、緑に包まれている空間だ。

その庭園を歩いて進んでいくと、緑の芝生の上に豪華なテーブルと椅子と紅茶セットが用意されていた。

その椅子に可愛らしく、腰をかけている人物を見て、私はフリーズ化から、やっと我にかえる。

豪華な椅子にその小さくて可愛らしいお尻を、ちょこんと乗せて座っている人物。

その人物は、近づいてきた私達に気付いたらしく、手に持っていたティーカップをテーブルに置く。

その可愛らしいお顔、やや釣り目のこぼれそうな程大きい瞳に長いまつげ。

赤い唇は上向きでほほ笑んでいる。

ほほ笑んだ瞬間なんて、最高！可愛い！シャッターチャンス！！

そんなアルメリアお嬢様は、私の姿を見た瞬間、眉をひそめて怪訝そうな顔をし、顔から笑みが消えた。

……

………ですよねー！！

先日の私のとび蹴りを目の当たりにしたんですもの。その反応は普通ですよー！！

可愛らしい笑顔のシャッターチャンスなんて、今後私にはやってきませんよね、当たり前ですよね。

そこでお嬢様らしく

『わたくし、こんな野蛮な方とは席を一緒にできません』
なんて言って私を解放して欲しい。

期待を込めて視線を送るけど、
ところがどっこい、お嬢様は私の方をまったく見ない。
スルー作戦を決めこんだらしい。

まさに『嫌なモノは見ない』作戦ですかね…。

しかし、なんたるメンバーだ。

私の左隣にはアデレイ。その隣に座っているアルメリアお嬢様に、
右隣にはジェネミーに、ラインは立ったままほほ笑んでいる。そして
引きつり顔の私と。

自分以外の豪華フルメンバーに、気疲れと精神的疲労を感じてひそかにため息をつく。

ため息と同時に先程から気になる点が一つ。それは隣の席のあの
方。

庭園の入り口で、氷漬けにされ、薔薇のアーチをくぐってここまで
連行されたはいいいけれど私達はまともな口を効いていない。

テーブルについたものの、黙って私に腰をかけるように椅子を引いて
くれたので、私も黙ったまま椅子に座る。

そうして自分は、私の隣の席に座った。

その後のアデレイはというと、テーブルに肘をつき、手のひらに自身の顔をのせ、無表情にずっとこっちを見ている。まさにガン見。
横を見るな、前を見る…！なんて今この場では言いたくても言えな

い。

先日の事もあるので、私は大人しくしている事に決めたのだ。

私はその視線に気付いてはいるけれど、彼の方は見ない、いや、見れない。

だって睨まれそうでなんか怖いし！

ああ、本当なら、ジエネミーとあの場で別れて帰宅して一息ついてから、ゴロゴロと愛用抱き枕を抱いて昼寝をするつもりだったのに、何がどうしてこうなった。

ぼけーとしながらも、愛用抱き枕の手触りを恋しく思い、その抱き心地に思いを寄せていると、

「それで市場で買い物はどうだったの？」

ラインに不意に話を振られて、慌てる。

「あ、楽しかったです…よ…。ね？ジエネミー？」

ジエネミーに相槌を求めるのと同時に、その台詞を聞いた瞬間、頬杖をついていたアデレイが何かを言うつもりだったのか、口を開きかけた。しかし、私は気付かない振りをする。

そんな調子で私はアデレイの視線をずっと無視し続けて庭園を見ていた。

せめて緑で癒されたい。体と心も疲れた私に癒しを。

そんな中、アデレイが急に椅子から立ち上がる。

その瞬間、体が反応してビクツと驚く。急に立ち上がるなんて、驚くじゃないか。

非難する視線を送るつもりで顔を向けようとすると、

「こっちを見る」

あろう事か、アデレイは私の顔を両手でグイッと掴んで無理矢理に視線を自分に持っていく。

いでででで！痛い、痛い！

こら！無理矢理引っ張るな！首がもげる！いきなり何するんだ！

「あはは。アデレイってば強引だね。リツキが痛そうだよ」

紅茶を自ら率先して淹れてくれていたラインが、愉快そうに声を出して笑うけれど、笑うところじゃない！

それにアルメリアお嬢様も目を細めて、こっちを見ているし。その視線こそ、刺さりそうで痛そうで怖い。

「ずっとこっちを見ないから見るようにしただけだ」

なにその、手加減なしの力技は。

ハニーブロンドに輝く髪に、吸い込まれそうな程に蒼く深い瞳。

その瞳の中に、先程感じた冷たさはもう感じられなかった。

：こうして視線を合わせると、何だか久しぶりに会ったと今更ながら実感した。

私は大きくて温かい両手に、顔を掴まれて身動き出来ない姿勢だ。いきなりのアデレイの行動に反抗したくても力じゃかなわないのは

わかってるので、

せめて思いっきり睨んでみた。

「…相変わらず元気そうだな」

ふつと笑うと、手を離してくれた。全く、顎外れるかと思ったわ。
いきなり何すんねん。

元気かどうか何て、顔をのぞきこまなくても確認出来るでしょうに
！

59 シュガーポット

アデレイに両手で掴まれ、持ち上げられた顔を解放された後、私は首を振って姿勢を直す。

急に掴まれたので、地味に首が痛い。生身の人間なので、もっともっと優しく扱って欲しい。

「あ！もう、シュガーポットが空になっちゃったね」

私が首を回して首体操をしていたら、ラインがおしゃれなガラス細工のシュガーポットを持ちながら、砂糖がなくなった事を残念そうに告げる。こじやれた細工のシュガーポットの中は、もうわずかしが入っていない。

空になりそうなシュガーポットを見た途端、私の目が光る。

そのチャンスもらったー！

「ぜひ！私が取ってきます！」

このチャンス逃すまい！意気込んで名乗り出て立ち上がる私。

砂糖を取りに行く任務を仰せつかったら、私はちんたらちんたら遠まわりして砂糖を取りに行き、

帰り道はゆっくりゆっくり、砂糖をこぼさないように慎重に慎重に歩いてこの場に帰ってくるのだ、そうしよう。たとえ遅くなろうと時間稼ぎと思われようが、いいのだ。この場にいる苦痛を考えたら、のろまと言われた方がマシだ。シュガーポットを持つラインに勢いよく両手を差し出す。

さあ！私にちょうだい！そのシュガーポットを！

ヘイ！カモン！

私の申し出を聞いた後、ラインはにつこり笑い、ジェネミーの方を向くと

「じゃあ、ジェネミー、申し訳ないけれど、もらってきてくれる？」

「……は？いや……私が！」

ラインの持つシュガーポットを受け取ろうと更に手を伸ばすも、ラインは笑顔でやんわり拒否をする。

「いいよ、リツキ。いつもはリツキが動いて紅茶を淹れる役でしょ？今日は特別にゆっくりしてなよ」

「でも……！」

「だって、お休みなんでしょう？今日は」

につこり優しく微笑みながら、私を気遣う素振りを見せるラインだけれど、

私をいたわったの発言なのか、いたぶったの発言なのか、ラインの真意はわからない。

けど、きっと後者。

ジェネミーに向かって

「ごめんね、厨房のアドマに言って砂糖をもらってきてくれる？ リツキも市場で歩き疲れていると思うからね。それに疲れた時は甘い物が一番って言うでしょ？ だから甘い紅茶でも飲ませて疲れを取ってもらいたいしね」

ラインに頼まれたジェネミーは、私を見て「まったく、お前はしょうがないな」と嫌そうに呟きながらも、すぐさま席を立ち上がり、ガラス細工のシュガーポットを手に厨房に向かい歩いて行く。

ちよ…なんでこんな時ばかり素直なの？

いや…！私が行くし！むしろ行かせてお願い！

こうなりや強行突破で、ジェネミーの手からひったくって走って行くか？

そんな考えが頭をよぎった。

「良かったねえ、リツキ。とりあえず座って待ってたら？」

いや、良くないし！

そのまま追いかけようか悩む私に、やんわり座るように強要する。

ライン…。私をどうやっても解放しないつもりだな…。あなた、この場を楽しんでるでしょ…。

私の態度を見て、拒否してるって、勘のいいラインの事だから気付いていないはずはない。

もしかして『リツキは何をそんなに拒否しているんだろう』と思い、様子を見ているのかもしれない。

それか…まさか…。あの背後からとび蹴り事件を知っているんじゃない

ないのかと、疑いたくなった。

だから、私の動揺を楽しんでいるのかもしれない。

もしや…どこから見ていた？私の華麗なる蹴り技を。確かあの時、周囲に私達以外、人はいなかったはず。

しかし、私も夢中になると周りが見えない性格なのでいまいち自信がないけれど…。

もしや、柱のかけ、ドアの隙間、壁の間からこっそり見ていたとか…。

『ご子息様は見た！』シリーズかよ！！

一人心の中で突っ込む。

いろいろな憶測が頭をよぎるが、ここで下手な事を口に出しては自分の首をしめる結果になりかねないと判断し、黙ってる事に決めた。下手なツツコミは危険だ。口は災いの元とは、昔の人はよく言った。

紅茶を淹れてもらい、砂糖もミルクもなしに、まずはストレートティーのまま一口飲むと、

紅茶の葉っぱの渋みと香りが口の中に広がる。

…おいしい。

やはり喉が渴いていた私は、もう一口続けて飲む。

ストレートティーでも、紅茶そのままの味が味わえて私は好きだ。

確かに疲れている時とか、ちょっと砂糖が欲しいけれど、このままでも十分美味しく感じる。

喉を潤し椅子に座って庭園を見渡すと、緑に囲まれ、色とりどりの花が咲き乱れていて、その綺麗な花の数々に見とれてしまう。

風が肌に心地よく、近くの噴水の水は太陽に反射して水しぶきは輝

いている。

きつと手や足を噴水に浸すと気持ちいいだろう。

そんな庭園を見ていると自然と心が落ち着いてくるのを感じる。

そうだよね。

いくら気まずくて避けていたって、いつまでも避けれる訳でもないし。

私一人が焦って動揺していても、しょうがないし。

なるようになるわ。

それに、アデレイもアルメリアお嬢様も、この場では、何もあの時の事に触れてこない。

きつと子供じゃないんだから、過去の事は蒸し返すつもりはないのかもしれない。

最初はアデレイが怒ったような雰囲気だったけれど、その後はアデレイの態度がいつもより違つとか、そんなの感じられないし。

もし、ここで会つたのが一対一だったら……と想像すると、私はどんな態度をとつたのだろう。

例えば前方から一人で歩いてくるアデレイがいたとする。

私は、きつとその場で回れ右をして引き返したい衝動に駆られただろう。

いや、実行して走り出すかもしれない。

そうして、その後はお決まりの、自分の行動に後悔して悩むパターン。

そう考えると、逆に今この場で、大人数で会つたから良かったのか

もしれない。

ただ、アルメリアお嬢様は私の事、快く思っていないのはわかる。そりゃあ、愛しい婚約者に目の前でとび蹴りくらわした女だもんね。もし、私が逆の立場で、自分の婚約者にとび蹴りくらわした人がいたら、

私もその相手にとび蹴りしちゃうかも。カウンター、これ発動。

そう考えると、アルメリアお嬢様が私を嫌う理由は理解できる。むしろ好きになれ、って言うほうが無理よね。

しかし、こんなに可愛らしい女の子に嫌われるって、やっぱりチト悲しい…。

しかし私なりに、あの蹴りにも理由があるのだ。

そもそも、アルメリアお嬢様という婚約者がいるくせに！

アデレイ、コヤツは何をやってるんじゃないー！

一連の出来事を考えていると、思いだして頬が赤くなってきた。

婚約者がいるくせに！この浮気者！

隣のアデレイをジロリと睨むがアデレイは涼しい顔して見つめ返すのみだ。

そこで、ふと、ある記憶がよみがえる。……………あれ？

そう言えば、以前『アルメリアは婚約者の第一候補であって決定ではない』って言ってたような…。

……と、いう事は、まだまだいっぱいいるのか？婚約者候補達…。

そもそも、この国って何人と結婚出来るの？

一夫一妻？それとも一夫多妻制？

一人考え事をしていたけれど、隣の席のあのお方の視線を相変わらず感じるので、その視線の主のアデレイをまた睨む。

このスケベ！

心の中で悪態をつき、次回、私に無断であんな事をしたら、蹴りは蹴りでも後ろからではなく、前からにしようと心に決め、また紅茶を一口飲む。

そんな血の気の多い事を考えながら、薔薇の香りが強く、緑と花々が色鮮やかな庭園を眺めていた。

60 青い薔薇と万年筆

薔薇の香りが強く、緑と花々が色鮮やかな庭園を眺めながら

「本当に綺麗な庭園」

ポツリとつぶやくと、

「気にいつてくれた？」

ラインが嬉しそうにほほ笑む。

仕事でよく庭園へは来ているけれども、休みの日にゆったりと椅子に座って紅茶を飲みながら、こうやって庭園を眺める事は初めてだ。

「アルメリアのディラン家の庭園も見事なんだよね」

その後、ラインとアルメリアお嬢様の二人で、庭園の話題で会話が弾んでいたみたいだけど、私は会話には入らずに庭の花々を眺めていた。そもそも私の家には庭園なんてなかったし。まあ、いち庶民なので当り前なだけ。自慢出来る事といえば、こっちの世界のトマト畑ぐらい。人様の土地だが、あのトマト畑は私の自信作。あの場所は、私の癒しの庭園、いや赤い楽園だ。

「そう言えば、庭園に新種の薔薇を植えたって聞いたな」

「まあ！何色かしら？」

おおっ！

アルメリアお嬢様、薔薇の話題にがつつきました。

アルメリアお嬢様は、興味津々と瞳を輝かせている。

そう言えば、ヒューストン伯爵家に来た初日、部屋に飾ってある花を全部薔薇にかえるよう言われたな。

余程、薔薇が好きなんだろう。私がトマトを好きなのと同じくらい好きなのかな。

「深い青色の薔薇だって聞いたけど、僕もまだ見ていないんだ」

「それは珍しいわ！ぜひ、一緒に拝見させて頂きたいですわ！」

興奮気味に立ち上がるアルメリアお嬢様の赤茶色の瞳は輝いている。赤が強めの茶色の髪は柔らかく自然なウェーブで流れるように風に吹かれている。

ラインは庭園の右側にある柵の奥を指さして、

「じゃあ行こうか。薔薇は向こうの柵の奥だよ」

「ええ！……あつ！でも……」

つい先程まで、わくわくして瞳を輝かせていた様子のアルメリアお嬢様は、ふと何かに気付いた様子で躊躇する様子を見せる。何だろう？どうしたのだろうか？

その時、不安そうな目をしたアルメリアお嬢様と目が合った。

『あ、このお茶会に参加してから、初めて目が合った』

赤茶色の瞳はまるでビー玉みたいに輝いて綺麗。そんな呑気に考えていると、

「さあ、行こうか」

アルメリアお嬢様の躊躇する様子を気付いていないのか、それとも気付かないふりなのかはわからないけれど、ラインは少し強引に、躊躇する様子のアルメリアお嬢様の手を引いて進む。

「でも…アーデレイド様が…」

心配そうな声色を出すアルメリアお嬢様に

「アデレイなら、ここで待ってるって」

ラインがアデレイに視線を送ると、アデレイは軽く目で合図してうなずく。

そんな様子のアデレイを黙ったまま不安そうな瞳で見つめているアルメリアお嬢様。

そうして、チラリと私の方を見る。あ、また目が合った。

もしや、アルメリアお嬢様は私とアデレイを二人つきりにするのが不安だとか…？

もしかして、また私がアデレイに蹴りをくらわすかもしれない不安に駆られているとか…？

大丈夫！それはない！……………多分…。

……アデレイが変な事をしなければ…。

だから、安心して薔薇を見に行くといいよ！

いささか強引なラインの様子に、はじめは戸惑う様子で後ろを振り返りながら歩いて進むアルメリアお嬢様だったけれども、途中で観念したらしく、大人しくラインについて歩いて行く。

青い薔薇か……。実は、私も見た事がないので興味があるのだ。
すごい珍しい色だと思う。薔薇と言えば、赤やピンクや黄色が一般的だと思うの。

そう言えば、カリアが休憩時間に『神秘的な青い薔薇を見た！』と興奮気味に話していたのを思い出した。

どうしよう。私も見たいかも。今ならまだ間に合うかな、ラインとアルメリアお嬢様にくつついて見に行く事も出来るよね。

歩いて行く二人を追いかけてようか少し迷った揚句、

『やっぱり私も行くー！』

心の中で叫び、椅子から立ち上がったその時、左手首が何かに掴まれ、急に力強く引かれるのを感じた。

おおおっとー！！！！

力強く引かれた私の手首を無言で見ると、掴まれて拘束されていた。もちろん、左隣の席に座るお方の手によって。

「……………」

「……………」

掴まれた自分の手首とアデレイの顔を交互に無言で見つめ、視線で意図を伝えようとすが伝わらないみたいで、私の手首から手を離す様子は見られない。なので、

「……………手」

「……………」

簡潔に一言告げる。しかしそれも無視かよっ！ならば、

「手首を離して欲しいのだけれど？」

「……………」

低姿勢でお願いしてみるも、またもや無視される。

椅子に座ったまま私の手首を掴んでるアデレイを、私は側に立ったまま見下ろす。

頬杖ついた姿勢で、右手はしっかりと私の左手首を掴んでいる。

こうなりや、ストレートに

「なんで手首を掴んでるの？」

私も青い薔薇が見たい。早くしないとライン達が先に行ってしまう。だから離して欲しいのに。

「…離せば行ってしまうだろう？」

瞬間、手首により一層力が込められた気がする。

頬杖をついたまま私を下から見つめるアデレイの瞳は蒼い。きっと薔薇に負けないぐらい綺麗な蒼い色だと思う。

けれども、まず行きたいから離してっば。力を込めて引いてみても、離す気配は一向にない。手首を振ってみても、離れやしない。

……もう、いいや……。面倒だし。

何が面倒かって、それはもちろん、アデレイを説得するのが面倒だって事。

きつと、話を通じにくくなる上に、彼はきつと譲らない。

アデレイと付き合っていくうちに、彼には譲らない頑固な一面もある、って事に気付いてきた。

それで不毛な会話を続けるぐらいなら、大人しくこの場に残る方を選ぶ事にする。

今回は、私が引いてあきらめ、大人しく椅子に座りなোস。

しばらくするとラインが、アルメリアお嬢様に何かを告げ、その場に少し待たせてこつちに走って戻ってきた。何だろつ、何か忘れ物？アルメリアお嬢様は、その場でたたずみ、そんなラインの様子を見守っていた。

ラインは走ってテーブルに戻ってくると、すぐさまアデレイに向かって、

「アデレイ、君が愛用している万年筆があつただろつ。…アレが欲しいな」

笑顔で催促するラインと、それに対するアデレイは少し考える様子を見せた後、

「……………ああ」

といい、『了解』とばかりに片手を上げてサインを送る。

そのサインを受け取つた後のラインは、私達に手を振りながら笑顔

で、待たせているアルメリアお嬢様の元へと駆けて行く。

「何？今の？？」

ラインのおねだり？

欲しがったからと言って、愛用品をそんなにあっさりとあげちゃうの？このお金持ちめ。

欲しがるからと言って、何でも物をホイホイあげていてはダメなんだぞ。

アデレイに説教じみた非難の視線を送るけど、別に気にした風もなくその視線を受け止めながら、

「交換条件だ、って事だろう」

「…交換条件？何と？？」

私は、一瞬意味がわからなくて、きょとんとした後、キョロキョロと周囲を見渡す。

庭園の風景は、先程と別段変った所もなく、花美しく緑鮮やかに癒される空間。

風が心地よく、私の髪が風になびくのを感じながら庭園を見渡した後、

隣の席のアデレイを見ると、豪華なテーブルに頬杖ついたまま、静かにこつちを見ている。

不思議顔の私は、彼を無言のまま見つめる。

アデレイも無言のまま。

私と彼はしばらく音のないまま見つめ合う。

ハニーブロンドの髪は、光を受けていつそうと輝き、蒼く深い瞳をこちらに真っ直ぐに向けていた。

気付けば、庭園に二人っきりの状況だ。

あれ…。

もしや…。

もしかすると……。

ラインめー！！私の事売ったな

！！

私はその事実気付き目を見開くと、頬杖をついて無表情のままこちらを見ていたアデレイは、口端をかすかに上げて笑った。

ラインの策略に、はまった事に今更ながら気が付く。

しかし愛用万年筆と交換してまで私と二人っきりの状況になりたいなんて、何で？どうして？

私は少し身構える。

「そう固くなるな」

苦笑しながらもアデレイは、

「ラインは、ラインで気をきかせたつもりなんだろう」

何の気だ！どんな気だ！気になる木！

「まあ、万年筆を持ってかれたのは、少し予想外だったが…」

相変わらず抜け目のない奴だと、目を細めて楽しそうに笑うアデレイは

まあ、あれはラインの照れ隠しでもあるがな、と付け加えた。

「けど、大事にしていた万年筆なのでしょう？」

「昔、自らデザインして職人に造らせた万年筆ではあるが…」

おいおい、それはオーダーメイドと言うのだよ、アデレイ君。私は慌てる。

「そんな高そうな物いいの！？あげちゃって！？」

「この時間に比べれば惜しくはないだろう」

目を細めて楽しそうに笑うアデレイは、どうやら本当に万年筆をあげちゃうみたい。

お金持ちの感覚はいまいちわからない。

そうして薔薇の妖精はちゃっかり万年筆を手に入れた。

それと…

そろそろ手首を離してくれませんか？？

61 穏やかな時間

ラインとアルメリアお嬢様の後ろ姿を見送った後、とりあえずアデレイに掴まれて拘束されていた左手首を無理矢理引っぺがし、紅茶を淹れる為に立ち上がる。

まだジエネミーが砂糖を取りに行ったまま戻らないけれど、ストリートでも十分美味しいから大丈夫。私は喉が渴いたし、アデレイのカップも空になってる事を確認すると、紅茶の用意を始める。

紅茶をセツトし、蒸らす時間、沸き立つ紅茶の香り。

「あつ！そうだ！私ね、今日市場に行っただけで、『ランデ』って言う一般的な伝統料理の中にトマトがサンドされて入っていたの！もう感激して嬉しくって、思わず涙が出た」

興奮して身振り手振りで話す私に、アデレイは黙って耳を傾けている様子なので、私は続ける。

「それで、市場のおじさんの所にも顔を出したんだけど、売れ行きは好調で、苗もトマトも足りなくなる事もあるらしいの」

私は得意げに、

「誰かが喜んでくれるなら、それだけで私も嬉しい」

これぞ生産者の喜びってやつね。

少しずつ少しずつ世間に出て、この世界になじんできたトマトに、自分の姿を重ねる。

こっちの世界で、初めは居場所がなかった私。だけど、周囲の人達、皆に助けられてここまでできた。

『居場所がなければ作るまでよおお!』

そんな思いで畑の土を耕した事もあった。

私はアデレイからティーカップを受け取り、紅茶を注ぎ入ると、紅茶の香りがティーポットから沸き立つ。

風が心地よい庭園で、のどかな時間が流れる。

「……それで畑には、ティアラをかぶって行ってるのか?」

「うん、そう。……って、そんな訳ないでしょ!」

アデレイと軽口を叩いて笑いながら穏やかに時が流れる。

何だか、昨日の私からは想像出来なかったな、こうやってアデレイと普通に会話してバカな話で笑うとか。アデレイも大人なので、あの一連の出来事は水に流す気なんだろうか。

それなら、それで私も水に流そう。しっかり蹴りもくわしたし。

自分の中で上手くまとめて、淹れたての紅茶を穏やかな気持ちで口に運ぶ。

「…舞踊会のアレは痛かったな…」

ぶっほー。

聞いた瞬間、私は口に入れた紅茶を思わず盛大に吹きだした。

今、この平穏で穏やかな時が流れているこの時に、そんな話題出す? もう少し空気読もうよ!?

しかし、忘れていた訳ではなかったのだと思い知った。
もしかして、この2人っきりの時のチャンスを狙っていた？
それとも偶然思いだしたの???どっちだよー!

それや、忘れてくても忘れられない経験かもしれないけど、忘れる
事も大事だぞ!?

それか水に流す事も。

前回の出来事は、忘れても人生になんら支障はない!

「強烈な体験だったな」

人生何事も経験よ。しかし、どうぞ忘れてくれたまえ!

「女性からあの様に攻撃されるとは」

てゆうかむしろ忘れて。

「祖父から譲り受けた公式の場で着用する白いマントに、堂々と足
跡が付いていたな」

……忘れて下さいお願いします。

やっぱり忘れる訳がないか……。そんな都合の良い事ある訳ないだろ
うと腹を決め、顔を上げると

「わかった。蹴りは謝る、ごめんなさい」

暴力はよくない。それはわかる。

場合によっては、罰せられる事もあると思う。私のいた世界でもそ
うだったし、こっちの世界ではアデレイは高い身分なんだし、下手

すれば不敬罪として牢屋に入れられていたかもしれない。
だけど…

「だけど、あれはアデレイも悪いわ」

「…俺が？」

「そうだよ。私は謝ったわ。だから…」

「……………」

「アデレイも私に謝って！」

そうだ、そうだ。蹴りに至るまでの経緯を思い出して！そうして私に謝って！

乙女の唇ベロチュー事件。もしやアレをただの『挨拶だ』などと言って済ます訳ではないでしょうね。そんな言い訳納得しないし、もしそんな事言ったら、その口縫ってやる。

アデレイは、一瞬不思議そうな顔をした後、頬杖をやめて私に向き合う。

そして椅子に座りながらも姿勢を正すと、私の視線よりずっと高い位置に視線がいく。

無表情に見つめられているが、ここで視線をそらしたら負けなような気がして、私も負けずに見つめ返す。

「確かに背後から蹴られて驚きはしたが、俺は怒っていない」

「……………え？」

怒ってないの？私のクリティカルヒットを受けたのに！？
アデレイ、もしやそっちの趣味の人？それは、それでドン引きだけ
ど。

「あの時、驚いて後ろを振り向いたらもう姿がなかった」

「だってあれは、アデレイが…」

そりゃ、そうですよ。一目散に逃げ出しましたから。

仕返しされるかと思っ たんだもん。その反撃の為の準備をしに行っ
たんだもの。

「…あれはすまなかった」

その時アデレイが、予想と違いあまりにもあっさり謝罪してきたの
で私は何だか拍子抜けした。何だかんだと的外れなことを言いそう
な予感がして、覚悟していたのに。もしそうだったら、今回ばかり
は私も引く訳にはいけないので、話し合おうと思っていたのに。

「もう、二度としないと、約束する」

「…そっ、そうよ」

いつになく真剣に謝罪するアデレイに、逆にどういった態度を取っ
ていいのかわからなくなった。

まずい…。こんな態度は予想していなかったから、逆にこっちが動
揺してしまう。

「リツキ一人を置いて部屋から出て行く事はもうしない」

…ちょっと違う。

「言い訳になるが、アルメリアとあの場で鉢合わせしてしまって、お前が下手に目をつけられたら、あとあとまずいだろう。側にいる時には、かばう事も出来るが、離れている時に何かあったら守る事も出来ない。だから、早々に冷たく無関心を装って立ち去ったのだ」

アデレイの言い訳とやらは、わかったが、私が謝罪を求めている部分と根本的に違うような…。

しかもアルメリアお嬢様には、もうとつくに目をつけられている気がする。マーク済みな気がするわ。

伝えようかどうかしようか視線をさ迷わせる私を、アデレイはほほ笑みながら見つめて、

「…あの時の続きの催促だったら、俺はいつでもいいぞ」

私をからかうような口調で言うアデレイはやっぱり、懲りてないし、わかっていない。

「な、な…何言ってるのよ!」

私は一瞬にして赤い顔になり、文句を言う。

アデレイは、そんな私を見て、口端を上げて楽しそうに目を細めて笑う。

この…! まだまだ蹴られ足りないのか!

私が赤い顔してもっと文句を言おうと口を開きかけたら、アデレイは急に真面目な顔つきになり、私に顔を近づけてきた。驚き、身を

引こうとする私に耳元でささやくように小声で

「…あの時は、多少強引で悪かった。自分の事ながら、俺も余裕がなかったのだ」

驚く程、素直に謝ってきたアデレイに私はとっさに言葉が出なかった。

そうして弾かれたようにアデレイの顔を見つめる。至近距離にあるアデレイの顔立ちは整っていて、薔薇の香りが強い庭園で、アデレイの香りが私の鼻腔をくすぐる。

「俺は王都に帰らねばならん。だから…」

何かを決意したように、力強い口調で話すアデレイから目が離す事が出来ない。

力強い蒼い瞳の輝きに、目が奪われる。

「ア－デレイドさま！」

その時、足早く戻ってきたアルメリアお嬢様の姿が見えた。

彼女は、去っていった時よりも駆け足でこちらに向かってくる。

名を呼ばれたアデレイはその姿に、一度視線をやるも、再び私に視線を向けると、

「…大事な話がある。今度時間をあけてくれ」

真剣な蒼い瞳から視線をそらす事が出来ずに、見つめ返す事しか出来なかった。

-
-
-
-
-
-
-

そうして、翌日の事だったのだ。

私が呼び出されたのは。

62 呼び出し

翌日、朝一にアドマさんから、午前のお茶の時間に名指しで使命されたので用意して部屋に出向くように命じられた。

ご指名で、つてところが嫌な予感がしてくるのですが…。
取り越し苦労だといいいのだけれど。

…つて、そんな訳ない、それは甘い考えだつて自分でもわかつている。

行きたくないけど、行かなければ。だつてこれは仕事。
重い足取りで、紅茶セツトの入ったカートを押して目的の部屋へと進む。

目的の部屋に到着し、ノックを3回して入ると、私を名指しで呼んだ張本人がソファアーに腰かけ優雅に座っていた。
その姿を確認すると、何だか私にも緊張が走る。
けれども、仕事と割り切つてソファアーの人物に礼をして、早速紅茶の準備に取り掛かる。

紅茶の葉をティーポットに入れてからお湯を注ぎ入れ、蒸らしている間に焼き菓子を皿に用意して、温めたティーカップを取り出す。
そんないつもの慣れた作業だけれど、視線をずっと感じていた私は落ち着かない。

紅茶をティーカップに注ぎ、焼き菓子の皿をトレイにのせ、準備は完了。

淹れたての紅茶の香りと焼き菓子の甘い香りを届ける為に、ソファ
ーに腰掛ける人物に近寄る。

赤茶色のウェーブで波立つ髪と、同系色の瞳を持つアルメリアお嬢
様は、そんな私の様子をずっと見ていた。

私を紅茶の時間に名指しで指名したアルメリアお嬢様は、先程から
何も言わずにずっと私の動きを観察している。

正直、気まずい…。

名指しで呼ばれたからには、何か理由があるに違いないと身構えて
きたが、特に何を言われるでもなく用意した紅茶を口に運んでいる。

しばらく無言で紅茶を口に運んでいたのも、私も傍らにつかえたま
ま部屋の窓から見える景色を眺めていた。

ふと、窓際に飾られていた大きくて白いガラスの花瓶が目に入る。

今日飾られている花は、薔薇だ。正確には今日も薔薇だ。

アルメリアお嬢様は薔薇が一番好きなので、毎日部屋には薔薇の花
を飾っている。今日飾られている薔薇の花は淡いピンク色の薔薇だ
った。

「あなたに一つ聞いておきたいのだけれど」

ソファーに腰掛けたアルメリアお嬢様が急に口を開いたので、私は
上の空だった意識を元に戻し集中する。アルメリアお嬢様の感情の
こもらない冷たい印象を与える口調は、部屋の空気を更に重いもの
とする。

先程まで、口に運んでいたティーカップをテーブルの上に置くと、

「アーデレイド様とどういった関係なの？」

畑仲間です。

…そんな事言えやしない。そもそも何と言えば良いのだろうか。何
と言えば納得するのだろうか。

明確な言葉が見つからない。考えている間のこの沈黙が怖い。少し
間をおいてから、

「えっと、アデレイとは……」

畑仲間です。

…いやいや無理無理。そんな事言えないってば。私が言葉を濁して
いると、アルメリアお嬢様は私の言葉を聞きつけて

「だからなぜアーデレイド様を愛称でお呼びになるの？それ自体お
かしいわ！あの人をそう呼ぶのは、ごく親しい人達だけよ！」

いきなりのアルメリアお嬢様の剣幕に驚いて、手に持っていたトレ
イを落つことしそうになった。

だって、アデレイが自分でそう呼べって言ったんだもん。

そもそも本名知ったのなんて最近だし。…長すぎてフルネームを完
壁に言える自信がないのは秘密だが。

それに、他にどう呼べばいいのかわからなかったし！次回から『王
子さま』とでも呼べば、アルメリアお嬢様は満足するのか？

急に、ヒステリックに叫ばれた私は、驚きつつもそれでも黙って聞

いていた。このヒステリック具合から言って、何を言っても今は聞く耳は持たないだろう。

アルメリアお嬢様は立ち上がると、私に赤茶色の瞳を向けて激しい剣幕で叫ぶ。

「私はね、ずっと生まれた時からこのカールディア王国の王になる人と生涯を共にするんだと言われ続けたわ。それが、私の使命だと思っただけ。何人もいる婚約者候補達の中でも、第一候補と言われてきたし、幼い頃からあの方の側に寄り添うべく、礼儀作法も勉強も努力してきたわ。あの方の側にも恥ずかしくない、釣り合うレベルになるよう努力してきた」

私の真正面に立つアルメリアお嬢様は、激情のまま私に言い放つ。その様子を黙って受け止めて聞いていた。

「それなのに、あの方は婚約者候補達には目もくれない。…私も含めて」

最後はどこか自嘲気味に吐きだすような言い方をしたのに気付いた私は、何と返答すればいいのかわからず口を開きかけたが言葉が見つかからない。

その様子に気付いたアルメリアお嬢様は、そんな私をきつい眼差しで睨むと、

「それなのに、あの方の側にはいつもあなたがいる。気がつけばアーデレイド様を愛称で呼び、あなたの側ではいつも笑っている。なぜなの?！」

アルメリアお嬢様は、怒ってはいるけれど、泣いている風にも見えて、そんな様子がどこか痛々しくも感じる。うつすら赤茶色の瞳に

涙が浮かんでいるのは、気のせいではないと思う。

「もしあなたを気に入ったとしても、ただの一時のきまぐれな遊びよ。あなたなんかには本気になる訳がないわ！婚約者にでもなれると思っただけ大間違い。よくて愛人どまりよ」

赤茶色の瞳に怒りをにじませて、目を吊り上げて叫ぶお嬢様に、最初はポカーンとして開いた口が塞がらなかったが、お嬢様の言葉を頭の中でもう一度リピートかけると、怒りがふつふつをマグマのように沸いて出てきた。

黙って…

聞いていれば…

好き勝手に……

私だって言わせてもらっわー！！！！

まくしたてる一方的な剣幕に、私だって負けてはいられない。

直前まで頭の中で『相手はお客様、ここは我慢よ』『言い返して機嫌を損ねたら下手すりゃ首が飛ぶ。明日から異世界でもハローワーク通わねば』など、身の保証を考えて黙っていたけれど、さすがに『きまぐれな遊び相手』とか『よくても愛人』とか言われるのは、ブチッとキレた。

だって、私の言い分なんて聞いちゃあいない。

こうなったら、もうどうにでもなれ！と、捨て身で目を吊り上げるのは、今度は私の番だ。

「一言、言わせてもらいますが、冗談じゃないです！一方的に怒られて、遊び相手だとか愛人だとか！言っておきますが、遊び相手も愛人関係もどっちもお断りです！」

アルメリアお嬢様は、私の反逆に目を見開く。

もしかして、あまり人から反逆された事などないのかもしれない。そりゃ、そうだよね、お嬢様だもん。

…だけど、私は言うよ！もう止まらないし！

こっちの世界で、何の身分もない私だけど、言われて我慢出来ない事ってある。

「それに私は、婚約するなら、私一人を愛してくれる人として！遊びも愛人も公認の婚約者なんて誰がいるかー！」

私は誰かの遊び相手になるつもりも、愛人になるつもりも、これっぽっちもない。

例え相手がどんなに顔が良くても身分が高くても、私一人を愛してくれる人じゃなきゃ嫌だ。その他大勢の女なんて嫌。オンリーワン、これ当たり前だし、譲れない。

アルメリアお嬢様は唇をきつく結び、赤茶色の瞳を吊り上げ私を見ている。

その瞳に怒りの色が見えるのは、決して気のせいではないはずだ。対する私だって、怒りモードの顔つきをしているに違いない。昔から『考えてる事が顔に出るタイプ』と言われた私だもの。ちよつとは顔に出さずに隠せよ、私！……いや無理、今回ばかりは隠せない。

じりじりと無言のまま視線が交差し、空気が凍る。
ほんの数秒の睨みあい、はたまた数分の睨みあいなのか、わか
らないけれども時間が長く感じられた。

その時、部屋にノック音が響き渡る。そのノック音は優雅にゆつ
りではなく、どこか焦っているような音の大きさと速さで部屋に響
き渡る。そのノック音に二人我にかえると、アルメリアお嬢様はノ
ック音のした扉に視線を投げると、一言「どうぞ」と扉向こうの人
物に声をかけた。

「失礼するよ」

ノック音の主が、このギスギスした空気の場合に似合わない爽やかな
笑顔で部屋に入ってくる。

「急にごめんね。だけど…」

ラインは突然の入室をまずは謝る。そうして、次に薄紫のすみれ色
の瞳を困惑ぎみに、口元を言いくそうに歪めて

「廊下まで響いていたから、気になって…」

あ…

やば…

……………。

そうね。そうよね。聞こえたわよね。廊下までつつめけよね。けど…

かまっもんか！

63 おとぎ話が言い伝え

「一体どうしたの？二人とも」

「……………」

「……………」

事情を尋ねるラインに私とアルメリアお嬢様は、二人共黙ったままだ。

どうしたもこうしたも！空気を読めば察してと思うけど、バトル中です。

とんだ言いがかりを受けてる最中！

けれども、この場でラインに言うのも何だか告げ口な様な気がして私は黙ったまま立っていた。

「…立場をわきまえた方がよろしいと忠告していただけですわ」

しばらく沈黙が続いた後、先に口を開いたのは彼女の方だった。

「アーデレイド様の立場も考えずに、側をうるうるしていらつしゃるから、迷惑を考えた方がよろしいかと、忠告してたんですわ」

それは、誤解。うるちよろしてくるのはアデレイの方だ！

反論したくなり、口を開きかけるが、ぐっところえる。そんな事を言ったら、ますますアルメリアお嬢様の目はつり上がるだろう。まさに火に油をそそぐ結果になるのは目に見えている。火、ボツ！！

それに、今はラインが事情を聞いているのだ。
側で言い争う訳にもいけないので、ぐっところえて黙って聞いている。

「へえ…そうなんだ」

ラインは、なぜか納得した顔でアルメリアお嬢様の話を聞いて頷いている。

「そうですね。アーデレイド様はお忙しいお方ですもの」

アルメリアお嬢様は、多少落ち着いてきた様子で、そう言うけれど、私から見てアデレイのどこが忙しいのかわからない。
毎朝畑に来て、トマトを観察する程時間を持て余しているように思える。

「そう。……確かに迷惑はかけちゃいけないよね」

ラインは、私に視線を投げた後、笑顔でやりわり言う。

「……え？わたし？」

私はラインの言葉と向けられた視線の意味を考える。

はいー？

私、悪者？？

決定！？

完全に出遅れたー！私の言い分どこー？

黙っている事が美德とされる日本人な私だけど、やはりここは自己主張ガンガンにいくべき、と考え直し口を開きかけた瞬間、

「けど、友人の僕からも一言、言わせて欲しいな。アデレイは、王都での日々の忙しさに疲れてここには避暑を兼ねて長期休暇に来たんだよ。自分の身分も最初は隠して、日々の業務から離れてただのアデレイ個人としての時間を過ごす為に」

ラインは私から視線をアルメリアお嬢様に移動させて、まるで小さい子に言い聞かせるかのように、声色は優しいまま話し続ける。

「その為に、必死になって自分の業務を前倒しで片づけて、ここに来たんだよ。ゆっくり体も心も休める為にね。それなのに、いきなり王都から押し掛けて、アデレイを個人の都合で連れ帰ろうとする我がままお嬢様に、正直めんどくさいと思うのが本音だと思うんだよね」

瞬間、アルメリアお嬢様の顔つきが変わった。
それでもラインは、なおも続ける。

「これを迷惑といわなければ、何を迷惑というのだろうね？」

爽やかな顔で言われたけど、この言葉の意味にはアルメリアお嬢様に対するお説教でもあると気づく。

「……でも！だってそれは…。私の友人が夜会を開く事になったから、アデレイ様のエスコートと一緒に出席して欲しくて…！」

アルメリアお嬢様は、ひるむ様子を見せながらもラインに自分の意見を言う。

この意見を聞いていて思った。

『ああ、自分が中心の生まれながらのお嬢様だわ』と。

いるんだよね、自分の都合のためなら、相手の都合はお構いなしの自己中心的な人。

どこの世界にも、どこの国にもいるもんだな。これも万国共通ね。生まれながらのお嬢様なので、それが当然で当り前の感覚なのかもしれない。

でも、人付き合いする上で相手の気持ちに立って物事を考えられるようになる、人間関係がぐっと円満になる気がする。

「エスコートだけなら、誰でも出来るだろう。それに一緒に出席したい理由は、他の婚約者候補への牽制の為だろう？それこそ、君を一回だけでもエスコートしたいと名乗りを上げる紳士はたくさんいるはずだろう」

「…それでも私はアーデレイド様にエスコートして欲しくて…。休暇中でも会って頼めば何とかなると思っ」

ラインは、首を横に振りながら、少し残念そうな声色でつぶやく。

「アルメリア…。アデレイは、そういう所が疲れてここに来たのに。…君は何にもわかっていない」

アデレイの立場になって考えてみたらさ、そりゃ、誰だつてのんびりの休暇中に、たった一回の夜会にエスコートして欲しいが為に、休暇先まで押し掛けられ、連れ戻しに来られたら迷惑だわ。

最初はアデレイが、なかなかアルメリアお嬢様に会おうとしなかった理由がわからずに、

『会ってあげばいいのに！』なんて思っていたけれど、理由も知らずにアデレイを責めてしまっていた過去の自分を反省し、アデレイごめんと、心の中で謝る。……よし、反省終わり。

「彼がこの地に、そして……魅かれるのは無理はないだろう」

ゆっくりとラインとアルメリアお嬢様は視線を合わせた後、アルメリアお嬢様が問いかける。

「…ラインナルト様は……誰の味方なの？」

「僕？僕は誰の味方とかは特にないけれど……あえて言えば……」

ラインは、宙を見上げて少し考えた後、

「親友の味方……と言えばわかるかな？」

そして、薄紫のすみれ色の瞳で私を横目で見ると、小声でつぶやく。

「あとは、面白い事が好きだから、楽しくなりそうな展開の味方」

ちよ……

…サラッと言ったが聞き逃さなかったぞ。今、何て言った？

アルメリアお嬢様はそんな私達の様子を見て、悔しそうに唇を噛んだ後、

「異世界からの娘だから、もの珍しくて皆が同情しているだけでしよう。実際、元の世界に戻る手段も、時期もわからないんですね！」

「アルメリア！！」

その時、ラインが今まで聞いた事もないような声を張り上げて彼女を止めに入る。

けれどラインが声が止めに入ると、アルメリアお嬢様は益々いきりたつ様子で

「本当の事でしょう！元の世界に確実に戻れる保証はどこにもないって事は！私としては、いい迷惑な事だけでも！」

アルメリアお嬢様は、目を吊り上げて私を睨みつけるが、肝心の私は動けないでいた。

彼女の鋭い視線も怒りの叫び声もはや私の心に届かない。

今この場所に立っている事が出来るのが不思議なぐらい足元がふらついた感覚におちいる。

彼女の台詞を聞いた瞬間、私の心の中で何かが壊れ始める予感がする。

え… 確実に元の世界に戻る保証は…ない…の？

彼女の台詞をリピートするも、すぐさま否定する。

そんな事はないはず。だって、この世界には、たまたに異世界人が紛れ込むって…

そして時期がきたら、帰るって…アドマさんもマーサさんも皆がそう言っていたし…

けれどここで私は気付いてしまったのだ。
ずっと心の中で疑問に思っていた事だけれど、改めて向き合って考える事をやめていた疑問。

この世界に異世界人がたまに紛れ込むって、
まるでおとぎ話か、言い伝えかのように誰もが知っていてそう言うけれど

具体的に、どこに、どんな人が来て、いつ頃元の世界に帰る事が出来たのか、
そんな具体的な話は一つも聞いた事がないという事。

言い伝えではあるけれど、はっきりとした事は誰にもわからないんじゃないのか…って。

もしかしたら、帰れる保証は誰にもわからないんじゃないの…って。
心の奥にあった疑問に、向き合ってしまった瞬間呼吸が苦しくなる。
胸が、まるで何かの病気のように苦しくなって顔をゆがめる。

けれども誰かに、『そんな事ないから大丈夫だよ』って言って欲しくて、
すぐるような目で周りを見つめると、ラインと目があった。
いつもみたいに笑って『そんな事ないよ、リツキ』と言ってくれるのだと思っ
て期待を込めた目で見つめる。

けれど、その顔は、苦痛にゆがんだ表情だった。まるで、急な出来事に
笑顔を取り繕う暇もなかったような、そんな顔つきだった。そうして、
ラインは私の視線を逸らした。…今まで一度だって逸らした事などなかつたのに。

…ねえ違うよね？

…違つて言つてくれるんですよ？

64 涙

「…嘘でしょう…。だって、この世界に来て帰った人だっているでしょ？」

声が震えて、けれどその震えを隠すように平静を装ってラインに尋ねたつもりだけど……駄目だ。声の震えが止まらない。

「…この国には確かに異世界からの迷い人がたまに紛れこむ事があるけれど…」

そこでラインは、眉をひそめてすごく言いにくそうに一旦口を閉じた。

そして視線を床に落として少し考えた後、何かを決心したかのように顔を上げて再度口を開きかけた。

やっぱり、やめて！自分で聞いておいて勝手だけど、その先は聞きたくない！

もう嫌な予感しかない。今すぐ耳を塞いでしまいたい気分な私にラインは続けた。

「……過去に帰った事例は、ほんの数件だと聞く」

そこで私は瞳を見開き息を飲む。

私の質問に観念したように口を開くラインは、それに詳しい事は誰にもわからないんだ、と小声で付け加えた。

嘘だ、嘘だ。

時期が来たら私だって帰るんだ

ほんの数件？だったら、その数件のうちに入ればいいんだよね？

目の前に叩きつけられた現実をすぐさま飲み込む事が出来なくて、身動きが取れない。

心臓が、どくどくと鼓動を増し、そして痛い！。

胸が苦しくて、自分で胸を押さえるも、何とか立ち続ける事が今の私には精一杯。

そんな私にラインは、すごく悲しそうに、そして心配そうな顔をする。

そして、そつと手を差し伸ばし、

「…リツキ」

私の肩に触れようとした瞬間、

「触らないで！」

声を張り上げて、ラインの手を突き放す。

拒絶されたラインは瞳を大きく見開き、差しだされた手は、行き場を失って、だらりと下がる。

「私…！大丈夫だから…！心配なんてされなくても平気だから！だって、何人かは帰る事が出来たんでしょ？だったら、そのうちの一人になればいいだけだと思うから、だから、だから…」

精一杯の笑顔のつもりで声を張り上げて言ってるけど、強がりだっ
て自分で一番よくわかってる。だって、涙は頬をとめどなく伝っ
て流れる、止める事なんて出来やしない。だけど、今支えられたり、
優しくされたら、私はその手にすがってしまう。相手が困るぐらい

に取り乱して泣きわめいて暴れると思うから、だから今は優しくしないで。

自分を奮い立たせないといけない時だから。

目の前の視界がぼやける、ラインもアルメリアお嬢様も皆がぼやける。けれど、ラインが私を苦痛の表情で見ているのをすごく感じる。

今まで皆がすごく優しくかったのは、私が帰る事は出来ないかもしれないから、同情していて優しくかったの？

『時期が来たら帰る』という嘘をついた罪悪感から、親切にしてくれたの？

「絶対帰るから心配しないで!!」

号泣しながらの、最大限の作り笑いを皆に向ける。これが強がりだと思われててもいい。

あきらめて下を向いて泣いて過ごすより前向きに考えたい私は思う。

ただ、今は流れる涙は止める事は出来ないと思うけど。

「...じゃあ.....もう失礼します!」

空気が重く凍りついていた部屋から、逃げるように退散して、廊下を小走りで走って進む。

ラインが私に声をかけようとしたのはわかったけど、それに気付かない振りをして誰とも目を合わせずに部屋から足早に走り出る。

幸い誰も追いかけては来ない。けど、それでいい。

誰も来るな、同情なんてしないでほしい。

みじめになるから。

人気のない廊下を進み、普段あまり使われていない部屋の前まで来ると、その扉にもたれて、ずるずるとしゃがみ込む。

先程の聞いた台詞が頭の中でこだまする。

帰れる保証はどこにもないと。

叩きつけられた現実には、涙がまた溢れてきた。だけど、幸いにもここは一人。

声を押し殺しながらも、それでも漏れてしまう鳴声を響かせて、扉にもたれてしゃがみこみ、しばらくは泣いた。

~~~~~

扉に背をもたれて声を殺してひとしきり泣いた後、そろそろ業務に戻らなくてはいけないと思い始めた頃、長い廊下の向こう側から歩いて来る人影が見えた。

いつもの余裕げな爽やかな微笑みと違って、ひどく心配した顔のラインが足早に私に近づいてくる。

「あはっ。大丈夫。なんか余計な心配かけちゃったみたいだね」

私は、から元気な声を出して立ち上がる。

「…リッキ」



私の強がりか痛々しいのか、ラインの顔も悲しそうに見えた。そんな顔されると、また泣きたくなってくる。

「ちょっといいかな？」

そうしてそのままラインに部屋の一室に連れていかれた。

革張りのソファーと大理石のテーブルに、豪華な調度品の飾られたその部屋に通されると、まずは座って、と即されたので遠慮がちに座った。そうして私がソファーに座るのを見届けると、ラインは「ちょっと待ってて」と言い残し、部屋から出て行った。

改めて一息ついて、部屋全体を見渡すと高級そうな家具や本棚が置かれていた。

きっとここはラインの私室の一室であって、書斎部屋なのかもしれない。

ぼーっとした頭で考えていると、部屋の壁に鏡が飾られているのに気が付く。

そこで私は立ち上がり、鏡をおそるおそる覗き込むと、そこには、泣き晴らした真っ赤な目の私がいた。

…うおっ！

ブス！ブスだわ！

我ながら、ぶっさいくな顔になってるわ！

傷心な私だったが、自分のブサイク度にビックリしながらも笑ってしまった。

目は真つ赤で、熱を持って腫れている。誰が見たって一目瞭然、泣いたって。

こんな顔で、仕事に戻ったら、皆に心配されるに決まっている。

良かった、ラインが声をかけてくれて。

泣いた後も、無理矢理擦ったから、ヒリヒリするし。

鏡を見ながら、目をそつと触ると熱を持っていて少し熱い。

あちゃー、こんなじゃ、明日にはもつと腫れるかなあ。

しかし、こんなに泣いたのはいつぐらいぶりだろうか。この世界に來たばかりの時も泣いたなあ、そう言えば。

「お待たせ、リツキ」

そうこうしている内にラインが部屋に戻ってきた。しかも、先程私がアルメリアお嬢様の部屋に忘れたお茶のカートを持って。

「…あ…ごめんなさい」

ご子息様自らカートを持って来てくれるなんて。本当、メイド失格だね、私。

カートを見ながら、お礼を言って、カートと共に去ろうとすると、ラインはいつもの爽やかな笑顔を浮かべて、

「ああ、これは違うよ。たまには、僕が紅茶を淹れてあげようと思っ  
つてね」

「いえいえ！そんな！紅茶だったら、私が……！」

「いいんだよ。僕だって、自分で淹れる時もあるんだから。まあ座ってて。こう見えても『紅茶を淹れるのが上手い』って言われてたんだから」

言いだすやいなや、早速ティーポットを持ちながら、準備を始めるラインに、どうしようと戸惑っていると、

「さあさあ、お嬢様、まずはお座り下さいな」

ラインは、そう言うのと、につこりと微笑んだ。その微笑みを見た瞬間、クラリとくる。

何この、執事萌え。アゲイン。

偽造お嬢様と執事萌えフラグが再び立った気がした、リアル執事力フェ再開。

私は、さっきまでの鳴いたカラスはどこに？の状態で何だかドキドキしている。なんて現金な私。

以前、アデレイとラインの二人にお茶の時間に対応してもらって、かなりドキドキした事を思い出す。

いやいや、ただラインは紅茶を淹れてくれようとしているだけで、私が勝手に執事力フェとか想像しているだけなのだ。なんたる腐れた妄想するヤツなのだ、私ってヤツは。

そんな私の相手をするライン執事様は、なるほど、慣れた手つきで紅茶を淹れ始めた。

その慣れた手さばきの元、紅茶の香りにプラスされて何やら甘い香りが漂ってくる。

その香りは何だか泣いて疲れきった私を優しく包み込むような心地よい甘い香り。

ラインの慣れた手つきと、部屋に漂うその香りを心地よく感じていると、白い陶器で出来た花柄のティーカップを私に差し出す。

「はい、紅茶に甘いフラリーエッセンスをほんの少し混ぜた僕のオリジナルだよ」

手渡された紅茶のティーカップから沸き立つ湯気は甘い香りがする。

「…すごい、甘い香り」

「そう？良かった。では、どうぞ、ご堪能あれ、お嬢様」

面白がって丁寧に礼までする、リアルすぎるラインの執事ぶりに、やっぱりこんな執事喫茶があったらはまる、絶対に。

元の世界にあつたら給料つき込んでるに決まってる、そんな気持ちで再認識する。

手渡された紅茶を一口飲むと、口の中に広がる花の蜜のような味と香り。

一口飲んだだけで甘味が広がり、それと同時に心が満たされるような気持ちで、本当に美味しかった。

「美味しい…！」

ラインは、

「そう言ってもらえて良かった。フワリーエッセンスは、甘い味と香りで、気持ちを落ち着ける作用もあるんだよ」

そう言いながら、私の目の前のソファーに腰掛け、向かい合わせでティータイム。

体が温まって、甘い香りに包まれたら、なんだかとても気持ちが落ち着いてきて、さっきよりも冷静に考える事が出来る。目の前のラインも紅茶を優雅に飲んでいて、先程の出来事は彼の方からは一言も聞いてこない。

「ライン…」

「ん？」

「あの…ありがとう」

「うん」

優しく目を細めてほほ笑むラインに、思い切って尋ねてみる。

「そして聞きたい事があるのだけど…」

「いいよ」

ラインは、持っていたティーカップをテーブルに置くと、そのまま私の隣のソファーへと移動する。

「リツキが望む事は全て答えるよ」

まるで私がそう切り出す事を待っていたかのように真剣な顔つきになり私と向き合ってくれた。

そうして私は自分の聞きたい事の全てをラインに聞いたでした。

## 65 迷い人たち

「このカールディア国には、時たま、異世界からの迷い人が現れるってのは本当。だけど、僕もこんなに身近なこの地に現れたのは、リツキが初めてなんだ。正直、僕も王都に行くまでは、話にしか聞いた事はなかったんだ」

ラインは、静かに話しながらも続ける。

「だけど、王都にはいろんな人達が集まるからね。僕が聞いた話では…確か二人ほど王宮に仕えてるって聞いたな。

だけど、実際はもっと存在しているかもしれないし、何らかの事情で異世界から来た事を隠している人もいるかもしれないから、実際の所は、何人いるのか見当もつかないんだ」

ラインの言葉の一つ一つを聞き逃さないように、黙ったまま聞いている私。

「昔からこのカールディア国は『異世界からの迷い人は保護して面倒をみる』っていう考えが根づいているんだ。

だから、かなり昔から迷い人はいたと思うんだ。実際、昔から異世界からの迷い人達の知識は、カールディア国にとって有益になる事が多かったらしいし。

『迷い人は時期がきたら帰る』というのも、ある意味あやふやであって、真相はわからないのが本当の所なんだ」

ラインが話してくれた事実を、私は頭の中で整理する為、少しうつむいて考え込む。

本当の事は誰にもわからない…。

そして王都には私と同じ『迷い人』と言われる人が存在する…。

ラインの言葉が私の頭の中をぐるぐる回って反芻する。

そんな私を下から心配そうに覗きこんだラインは、顔を近づけると、

「……………だけど嫌？」

「え？何が？」

唐突な質問と、その顔の近さにドキツとした。

薄紫の瞳は、いつもの茶化すようなどこか黒い物を含んだほほ笑みではなく、

心の底から私を心配しているような、そしてどこか不安そうなスミレ色だった。

不安そうな瞳で瞬き一つすると、

「僕はリツキがこの国に、そしてこの地に来てくれた事をとて嬉しく思っているよ」

真正面から投げかけられた赤面モノの台詞に、照れてしまう。

そこで私も正直な自分の気持ちを伝える。

「私もそれはすごく皆に感謝しているの。この城の人達は私みたいな得体の知れない人間に優しくしてくれた。

それが例え同情が混じっていたとしても感謝している。

……………だから、迷い込んだのがこの地で良かったと心から思うの」

この感謝の気持ちだけは、本物。帰りたい気持ちとは別物。



ラインは、ホッとしたような安心したような表情を浮かべた後、満  
足気に微笑むと、

「それは良かった。それにトマト畑も立派に育ってるしね」

「そうそう！トマトもよく実って！……………て、え？」

あっけにとられた私の顔を見たラインは吹きだして、

「あはは。僕が知らない訳ないでしょー」

「……………ですよね」

はい、白旗あげました。その説はどうもすみません、ってか、お世  
話になっています。

私のバツの悪そうな顔を見たラインは、

「畑の事は別にかまわないよ。なんかすごい事やってるなあ、と思  
つてずっと見てたよ。よくあれだけの畑を作ったね。立派だし、本  
当尊敬するよ！」

いや、そんな所で尊敬されても…。

もつと人としてこう、尊敬されたい気もするが、褒められればやは  
り単純に嬉しい。

しかし、良かった。土地の無断借用ではなくなった今この瞬間、ホ  
ッとした。

ラインはその後興味深そうに聞いてくる。

「…で、あの畑はアデレイと作ったの？二人の共同作業？」

いやいや私の一人、単独作業。

アデレイは見てただけ  
！

「王都で、その『迷い人』は生活しているんだ……」

話を元に戻して、ラインに聞き返すと、彼は静かに頷いた。

そうか。現在もいるって事はまだ、帰っていないって事だね。

私みたいな迷い人がいる…。

どうやって、どんな経路でこの世界に来たのか。また、この世界に来て何年たつのか、いろいろと聞いてみたい。

何か共通点でもあるかもしれないし。それによって帰る手段が見つかるかも知れないし…。

王都か…。

名前からして国の中心部だという事はわかる。

何だか都会で華やかなイメージだわ。

ここヒューストン伯爵の土地は、自然がたくさん残っていて、人ごみでごみごみしているのは、市場の活気ぐらいだけど、私的にはこの程々の田舎加減が好きだ。

空気は美味しいし、緑は色鮮やかに優しいし、何より水も土もいいのかトマトもよく育つし。

そんな私が王都と言われても、いまいちピンとこないし想像つかない

い。

しかし、そんな王都には私以外にも迷い人が存在する。その事実に興味が沸かない訳がない。

帰れないかもしれない現実をどう受け止めているのだろう。

私みたいに、『いつか帰れるだろう』と思い込み、のほほんと生きてる？

それとも、帰る手段を必死になって探しているのだろうか。

考え込んで沈黙になっていたけれど、いつまでもソファーに座って考えこんでいる訳にもいけないので、とりあえず自分のやるべき事に戻らなくては。

「ライン、美味しい紅茶、ありがとう」

「いいや、どういたしまして。ちょっとは元気でした？」

「うん、さっきは動揺してパニックになっちゃったけど、ラインのおかげで元気がでたわ。だから、…ありがとう」

私はラインの目を真っ直ぐに見つめてお礼を言う。

ラインは軽く微笑み、そして薄紫の瞳で私を見つめ返しながら優しく静かな声色を出す。

「…リツキはもっと人に頼ってもいいんだよ」

「…うん」

「僕はリツキが泣いても怒っても受け止めるつもり。…だから」

静かで、それでいて力強い意志を感じさせる声のトーンと、薄紫の瞳に吸い込まれそうに魅入ってしまいそうだ。

「もつと甘えてくれてもいいのに」

ああ、この人は私をすでに十分甘やかしている事に気付いていない。そう、彼はいつもは私をからかうような言葉や行動が多くて、私の困る様子や動揺を楽しんでいる素振りを見せるちょっぴり困った部分もあるけれど、本当のところは優しいのだ。

ラインは、私が本当に困っている時には、絶対意地悪なんかしないし、こうやって助けてくれる。

そんな彼の優しさに、今度は違う意味で泣きそうだ。

「…ありがとう」

潤んだ瞳で照れ笑いをしながらお礼を言った私に、ラインは目を細めて笑った。

ラインと話した後、そろそろ仕事に戻らなくては…と、重い腰を上げる。

いくらひどい顔してるってわかっていても、いつまでも業務を怠ってはいけないわ。

お給金だつて貰っているんだし。

座り心地の良い革張りソファから立ちあがると、ラインは慌てて制止する。

「ああ、待ってリツキ。その事なんだけど、今日は僕の書棚の整理をお願いしたいんだけど」

急な業務変更の申し出に私は聞き返す。

「…書棚？」

「うん、そう。分野も種類もごっちゃになってるからさ、整理をお願いしたいんだけど」

それなら私でも出来るだろうと、即座に返事をする、

「あと、今から書棚の整理を始めても、結構時間もかかると思うんだよね。だから、終わるのは夜になると思うから、今日は、一室部屋を用意するから、そこに泊まるといいよ」

「いえ、そんな！帰れますよ！」

「駄目駄目。夜も遅くなるから、泊まりなよ。それに、その顔をマ―サに見せたら僕が叱られるよ、『泣かせたな』って。質問攻めは勘弁して欲しいしね」

ラインの書棚の整理って事は、私が皆に会わなくても良いようにとの気遣いだと、さすがに鈍い私でも気付いたわ。

ラインの優しさに、心が温かくなってくるのを感じる。まったく、どうしてこんなに優しいのか。

気持ちを切り替え、書棚の整理を行う為に、腕まくりをする。

ラインは、用事があると言い、部屋から出て行ったので、一人になった私は、ふと、壁に飾られた鏡が目に入る。

その鏡に映る自分の姿をみて驚愕。さっきよりも目が腫れて、二重まぶたのはずが一重まぶたにまで腫れている…。

瞳は赤く潤んでいるが、その瞳すらいつもの半分の大きさになっている。

『これは…ラインが誰にも会わせられないと判断したのもわかるわ…』

鏡の向こうに映っていたのはまるでアンパン

あんこのつまっていないアンパンマ

我が顔ながら、『ジャ　おじさん、新しい顔持ってきて！』と思っ  
たが、そうはいくまい。

鏡を見つめ、そのむくみ具合に力なく笑う。  
そうしていると、ラインの言葉が頭の中でよみがえってくる。

王都には、私以外の『迷い人』がいる。

鏡を見つめて、ぼーっとしながらも、私の心の中は先程の言葉を何  
度も何度も繰り返し返していた。

## 66 月光

眠れない。

なぜか、今夜は眠れない。

ラインが用意してくれた部屋は、客間にあたる一室で広くて豪華すぎて落ち着かない。

わざわざこんな豪華な部屋を用意してくれたラインに、最初は遠慮したのだけれど『せっかくだからいい部屋に泊まりなよ』というラインに押し切られてしまった。

きつと彼なりに気を使ってくれたのだと思うけど、広すぎる部屋に豪華に飾られた調度品の数々に、私が5人程寝れそうな広いベッドに、何だか落ち着かないし、一向に眠気が来ない。

きつと枕が変わったからだと思う。ただそれだけの事なのよ。

昼間の出来事は、もう私は気にしていない。

気にしていないし、大丈夫。

自分自身に言い聞かせるように繰り返し、ベッドから抜け出し、そっと窓辺に立つ。

窓辺からは大きな満月の月明かりが入ってくる。

真夜中だというのに明るくて、窓辺は月光で溢れている。

月の光に誘われるように、バルコニーへと足を進める。そうしてバルコニーへとつながる窓を開くと、

風が吹いた。

夜の匂いを運び、少し肌寒い風が私の肌を冷やす。

バルコニーは思ったよりも広くて、月明かりを浴びて明るい空間を作っていた。

月明かりに誘われるかのようにそのまま足を進め、外の空気を吸う為に外のバルコニーに出る。

バルコニーの手すりに手をかけ、身を乗り出して月を眺める。

こっちの世界で見つめる月と、私のいた世界で見つめる月は同じ。生活も習慣も異なっているのに、空に浮かぶ月は同じ色に同じ形だなんて、不思議だな。

ぼんやりと満月の月光を浴びながら、月を見る。

今、私は望郷の気持ちで月を眺めている。

それと同じように日本で誰かも私を思って月を見ている事であるのかしら。

不思議な気持ちで月を眺めていると、なんだか涙腺が弱くなってきてしまつて、涙があふれてきた。

私が産まれた日も月が綺麗な満月の夜だったそう。

その時の月のように、どこにいても輝くようにと、意味を込めてつけられたのが

私の名前、莉月<sup>リツキ</sup>という。

日本にいた時は、こんな風に月を見つめて泣いたりした事なんてなかったのに、きっと月光を浴び過ぎたせいかもしれない。

しばらく、故郷を思つて涙を流れるままにして月を眺めていたら、

「リツキ」



不意に後ろで、聞き慣れた声がしたので、驚いて反射的に振り返ると、近くのバルコニーからアデレイが身を乗り出していた。

「…アデレイ」

そうだった。

ここはたくさんある客室の一室だから、アデレイの部屋とも近いはずだ。

けれどまさか、こんな時間まで起きているとは思わなくて、驚くと同時に、泣いていた事を知られるのが恥ずかしくて慌てて顔をそむけて手で涙をぬぐう。

そうして慌てて拭いた後、

「どうしたの？アデレイ、眠れないの？」

平静を装ってそう尋ねると、アデレイは返事をする代わりに、バルコニーから身を乗り出し、手すりにはその長い足をかけていた。ちよっ…ちよっと危ないよ、

焦った私が声をかけようとすると同時に

「あ…！」

アデレイはバルコニーの手すりに足をかけたと思ったら、瞬時にそこから飛び、私のバルコニーまで見事着地したのだ。なんたる、瞬発力。褒めてやりたい所だが、しかし

「危ないよ！アデレイ！ここ何階だと思っているの！」

そうだ、ここは三階だ。下手したら怪我では済まなくなるのに！

心配して怒った顔のままアデレイを見つめると、アデレイは

「何をしていたんだ？」

やっぱり人の話を聞いていない。

…まあ、いいや。いつもの事だし。

あきらめと、慣れと共に私はため息を一つついて、空を見上げると、

「すごいね、アデレイ。満月に満点のこの星空、見ているだけで素敵だと思わない？」

そう言われてアデレイも、私と一緒に満月を見上げる。

「私のいた国でも、満月の時があつて、こっちで見る月も、私のいた所でみる月も同じだなあ…」って思ってた見たの」

アデレイはいつの間にか私の隣に立って、二人で並んで月を見る。月光が私とアデレイを照らす。アデレイの月光に照らされた横顔は、いつも見ている私でさえ一瞬どきりとしてしまう程の整った顔立ちに、やたらと輝いている気がする。

なんだか、何時も会っているアデレイに対してそんな気持ちを持つ事を恥ずかしく感じて、慌てて顔をそむけ、月を眺める。月明かりは優しい光で私とアデレイを照らし出す。

そうして、どのくらい時間がたったのか、しばらくは月に見とれていた。

ふと隣のアデレイを見ると、沈黙したまま真っ直ぐに視線をぶつけてくる。

「？」

首をかしげて何か言いたい事でもあるの？と聞いてみるが、何も言わずにこちらを見つめているだけのアデレイは月光に照らされて、その存在自体が輝いている気がする。黙ったままのアデレイに

「まだ寝ないの？ひょっとして眠れないの？」

私も眠れないんだけどね、そう告げようとした私に

「…今日の事、ラインから聞いた」

静かな口調で言うアデレイに

「…そう」

そっか。聞いたのか。じゃあ、私が何となく落ち込みモードな訳は知ってるはずよね。

「…すまない」

唐突に謝られて私は咄嗟に

「何でアデレイが謝るの？」

アルメリアお嬢様の事？それとも帰れる保証はないって黙っていた事？

けれど、どっちも私の問題だと思う。

何だか、昼間の事にこれ以上触れて欲しくなくて、私はわざと話を逸らして同じ事を聞いた。

「もう夜中だよ。眠れないの？」

「お前が近くの部屋にいるのに、眠れるものか…」

えー何ソレ？意味分からない…と口を開けて笑おうとした瞬間、急に手を取り引き寄せられた。

そして私を包み込む、透明感と力強さを併せ持つアデレイ香りと甘い吐息。抱きしめられているのだと、認識した瞬間。

「なぜ、今泣いていた」

「…え」

力強く頭をアデレイの手で押さえられ、私の頭はアデレイの胸元へ、もう片方の手も私の腰にまわされていて、逃げだす事は不可能。だって、アデレイに抱きしめられている。

この状態に私は急な事で頭がついていくはずもなく、なすがまま、されるがままの状態で抱きしめられていた。

身動きとれない程に力強く抱きしめられ呼吸する事も忘れてしまう瞬間。

優しく、けれど力強く、私を抱きしめているアデレイの香りに酔いそうだ。

抱きしめているアデレイの逞しい胸元から、私の耳に響いて来るアデレイの心臓のリズム。

思考停止している私に、耳元で囁かれる甘い吐息。

「一人でなんて泣くな」

「え…」

やっぱり気付いていたのか、アデレイ。泣いていたのがばれて、少し恥ずかしい私。

「この国の月をみて、元の国の月を思い出し、一人で泣くな」

「……………」

アデレイの胸元から、そつとアデレイの顔を見上げる。私が顔を見上げると、アデレイは少し腕の力を弱めてくれた。下から見上げるアデレイの瞳は月明かりに照らされてなお、蒼く深い。

金の髪は月明かりに照らされて輝きを放ち、その存在は独特のオーラを放つ存在だと思う。人の目を惹き付ける魅力のある人だと、今更ながらに思い知った。そして、そんな人物に今抱きしめられている。

そんなアデレイの顔を黙って見ていたら、アデレイの顔がだんだん下に、私の目線まで下がってきた。

あれ…

ちょ…

ちょっと…！ アデレイ近い…！ちか…

せまってくる至近距離のアデレイの顔に、だんだん焦ってきて抱き

しめられている私の体に入ってきた。

体に入ってきているのがわかったらしく、アデレイは、

「…そういえば前にも近づきすぎて園庭で張り倒されたな」

自嘲気味にクスリと笑うアデレイだけど、その笑顔すら月明かりに照らされて輝いて見える。

何だか、目が離せないし、緊張して心臓の鼓動が速く高鳴る。だけど、それを認めるのも癪に障るので、

「張り倒すに決まってるわー！」

照れ隠しに強がって叫び、アデレイの胸の中でアデレイを睨む。

アデレイは、そんな私の様子を一瞬笑った後、急に真剣な顔つきになり私の耳元までそっと降りてきて、そのまま耳元でささやく。

「…触れたかったんだ」

静かに小声でささやかれて私の心臓がドクンと波打つ。

「…お前に触れたかったんだよ」

私の耳にかすかに触れる柔らかい感触はアデレイの唇なのかー。

## 67 感じる想い

弾ける水しぶきのような爽快感をイメージさせるベルガモット系の香りは、

透明感と力強さを併せ持つアデレイの香りで。

その香りに包まれた私は、自分の心臓の音が最大限に響いているような気がしてならなかった。

アデレイは固まっている私に微笑むと、そのまま、私のおでこにキスを一つ落とした。

目を見開き、驚いている私にアデレイは軽く微笑んだ後、真剣な顔つきになり私に告げる。

「俺は、もう王都に戻らねばならん。だから……」

月光を浴びて輝き、まるで王者の気品を放つアデレイはそのまま続ける。

「お前を連れて行きたい」

王都：？

昼にラインに聞いた事が頭の中でよみがえる。

王都には私と同じで異世界からの迷い人が存在すると言う。

私は、その人達に会いたい。会って話を聞きたい衝動に駆られる。

そして元の世界に帰れる手段がわかるのなら。

そこでふとアデレイは私をなぜ王都に連れて行きたいと言うのだろうか疑問に思う。

うつむいて考えこんでいた顔を上げ、アデレイを見上げると、彼は私にその疑問の答えを告げる。

「……側にいて欲しいと思う」

だけど、私は元の世界に戻りたいの。

私にとって、もし王都に行くってなったら、元の世界に帰る手段を見つける為に行くんだよ？

だけど、それは側にいて欲しいから王都に来て欲しいアデレイと元の世界に帰る手段を探す為に王都に行く私と矛盾してない？

アデレイのその気持ちを私は利用する、って事になるんだよ。

私の複雑な表情の意味を感じとったアデレイは、

「俺は、お前が側にいて欲しいと思う。」

…たとえ元の世界に戻る手段を探す為に王都に來ると言っても、俺は喜んで受け入れるだろう」

私の考えている事を見透かしたようにアデレイは『それでもいい』と言う。

「王都に來たら、いつか帰る手段を見つけられるかもしれない。」

その時までには、帰りたい気持ちを躊躇させる程の男になろう。

その前に王都に戻ったら、俺もいろいろやるべき事や、片をつけるべき事が出来た。



アルメリアや他の婚約者候補達の事情も含めて、だ」

アデレイの真剣で真っ直ぐな視線を向けられて、私は口を挟む事も出来ずに聞いていた。

「側にいて欲しいし、その力を貸して欲しい。…俺が今言えるのは、ここまでだ」

側にいて欲しい。

目と目を合わせて、そうはつきりと告げられて、まだまだ私の知らない事の多いこの広い世界で、こんなちっぽけな私の存在でも必要としてくれる人がいると思うと、心は動揺しながらも、正直嬉しく思った。

「…その先もはつきりと言葉にしたいが、まだ俺はそれが口に出来る立場ではない」

どこか少し心残りな様子で、けれどもはつきりと言い切るアデレイは、自分の中で何かを決めているようだった。

その先の…言葉…？

アデレイは一体私に、何を言うつもりなの…？

「…今、その言葉を口にしてしまったら、お前に対して不誠実になつてしまつたらう。」

…だから王都に戻りすべてが片づいたら、その言葉を口にしよう」

熱を含んだ蒼い瞳は、ぶれる事なく私を真っ直ぐに上から見下ろす。  
私もアデレイの瞳を見つめ、数々の言葉の意味を考えていた。

もしかして…

アデレイ……

私の事…好き…な…の…？

その可能性に気付いた私は、そのまま包み込まれる姿勢で、そして  
黙ったままアデレイを見上げている。

月明かりは、優しい光で私達を包み込む。

アデレイは、自身の右の手のひらでそっと私の頬を軽く、そして優  
しく撫でる。

はつきりと口にしなくても、アデレイの瞳を見ているだけで、そん  
なアデレイの気持ちが伝わってきた。

月明かりに照らされて、蒼い瞳は神秘的に熱を持ち、その輝きを放  
っている。

「……仮に私が一緒に王都に行っても…特別力になれる程、何かを  
出来る訳ではないよ」

買いかぶられても困るので、そんな大それた才能も技術もないとい  
う事を、あらかじめ宣言しておく。

「…側にいてくれるだけでいい…」

笑って言うアデレイが、ふと顔を上げる。

「…風が出てきたな」

確かに先程より風が強くなり、アデレイのハニーブロンドの髪も風に流されている。

そうして、ゆつくりと私の体を離して解放する。

「そろそろ部屋に戻ったほうがいい。風邪をひく」

「あ…うん」

素直に返事をする私にアデレイは

「それに、俺も男だから…な。我慢にも限界がある」

そう言うと、私の手を取りバルコニーから部屋の入り口まで移動させる。

そうして自分は、バルコニーに足をかけると、

「…おやすみ」

一言そう呟くと、最初にこのバルコニーにきた方法で、さつと自分の部屋に引きあげて行った。

その間、私は黙ったままアデレイの後ろ姿を見送った。

アデレイが去ってから、しばらくその場にたたずむ事数分…はいたと思われるが、突風が吹いて我に還る。

風も強くなってきて、急に肌寒く感じて身震いをする。

つい先程まではアデレイと一緒にだったから、そんなに寒くは感じなかったけど、やはり夜は気温が下がるし肌寒いな…。

そう思った瞬間、抱きしめられていたから寒く感じなかったのだ、と気付き、頬が一瞬で高揚する。

抱きしめられていた腕の感触、耳たぶに感じた甘い吐息、心地よく感じたアデレイの香り、思い出すと心臓の鼓動が早くなる。

高鳴る心臓を自身で落ち着かせようと、深呼吸をひとつ。

しかし、もう寝なくては…

バルコニーから部屋に戻り、鍵をかけ、広いベッドに戻り、疲れた体を沈める。

広いベッドに体を沈めて、高い天井を見上げて考える。

今日はいろいろな出来事がいつぱんに起きて、考える事は山積みだけど、焦っても仕方ないし、すぐに答えは出ないだろう。

私は私で一つずつ解決していくしかないのだ。

まずは、明日の仕事に普通に出勤する事だ。その為には、まずはしっかりと寝て、体を休めて明日に備えるのだ。ベッドの中で横向けになり、目を閉じて、深呼吸を一つして眠りにつく準備をする。

さあ、おやすみなさ…い…

…

…

………  
って！

寝れる訳がねえ、つつうの！！！！

なんなの、なんなの、アデレイ！あの態度は反則だろ！しかも『王都に連れて行きたい』って…！

おまけに『側にいて欲しい』…って…！

私の事す、す、す…好きっぽくない…？？

うお  
！

私は先程までの出来事を反芻して、一人ベッドで悶絶死しそうにな  
って、恥ずかしさと照れでジタバタと騒ぎ、まさに身もだえ。5人  
は寝れそうな広いベッドの中を一人で何往復もした、ゴロゴロと転  
がって。

なんかもうキャパオーバーというか、興奮MAX、これが騒がずに  
いられようか！

アデレイ！私を寝かせないつもりか！そう来たか！

その後、私が眠りに付く事が出来たのは、空に朝日が昇りはじめて  
部屋がうっすら明るくなりかけた頃だった。

## 68 絶不調

そうしていつもの朝を迎えた。

朝日が部屋に入りこみ、薄明るくなってきた頃にやっと眠りについた私は完璧睡眠不足。

やっと眠りについたのに、もう起きなくてはならないとは、何とせつない事か。

私の全身がベットから離れるのを拒否していると感じる。

部屋の外で鳴く小鳥達の元気なその姿でさえ正直羨ましい。その元氣、今の私に分けて欲しい、切実に。

ああ…だけど、起きなくては…。

自分自身を何とか奮い立たせて寝心地のいいベットから、のそのそ起き上る。

そうして、いつものメイド服に着替えて、脳内をすっきりさせる為にも、両手で自分の頬を叩く。

…痛い…。

…けど眠い…。

駄目だ。痛みより眠気の方が強い。さっきまで寝ていたベットを振り返ると、ベットが私を呼んでいる気がする。

あのシーツの肌触り、ふかふかの寝心地…。

一緒に行きたい夢の国。

だけど、それも叶わぬ夢と早々にあきらめて仕事に向かわねば。

昨日の昼間はあれだけ泣いたし、それに加えての寝不足で、自分の顔がどうなっているのか見るのが怖い。

上手く働かない寝起きの頭で考え事をしていたら、不意に扉がノックされ、ノック音が部屋に響き渡る。

どうぞ、と声をかけると扉が開いた。

「……………」

ノックの主は、この豪華なお部屋をある意味無理矢理、私に勧めてくれたラインだった。

ははっ、ライン様の粋な計らいのお陰か、ただいま寝不足です。

ラインは扉を開けて、部屋に入ってくると、無言のまま私を見つめる。

「……？」

薄紫の瞳を見開いて、無言で私を見つめている。不思議に思いながらも、私も無言で見つめ返す。

「あの…？」

痺れを切らして私の方から声をかけると、

「ああ、リツキ！おはよう！良かった！部屋を間違えたかと思ったよ！」

…それは、いったいどういう意味でなのだろうかと不思議に思う。

「…あと、今日はお休みにしなよ」

「へ？」

「リツキは今日は仕事はお休み」

「え…？でも…どういう…？」

唐突なラインの申し出に驚いて、どういった理由で？と聞きかえす前に、

「この前、庭園でリツキがお休みなのに無理矢理お茶会に参加させたでしょ？あの時言ったよね？『代わりに好きな日にお休みをあげる』って。だから、それが今日」

でも…、と言いかけるが、そんなありがたい申し出に正直乗っかかりたい。

「じゃあ、この部屋は今日一日使っていいからね」

私が返事に迷っていると、言うだけ言って早々と部屋から去っていったライン。

寝不足の私の頭が、正常な判断を下す前に、来た時と同じ様に爽やかに部屋を出て行った。



何だったんだろう…。

しばらく考え込むも、せつかなので、意味もわからずその好意に甘える事にした。

とりあえず部屋についている洗面台で顔を洗い、備え付けのタオルで顔を拭き、鏡を見ると、

…ラインが急に休みにしてくれた理由がわかった。

鏡にうつる私の顔は、前日泣いた為、腫れぼったく重いまぶたに変わって、寝不足の為か、目の下にクマまで作っていた。

こりゃ、ひでえや

。

ラインが部屋を間違えたかもしれないと一瞬思ったのは、私の顔のひどさに驚いたのだろう。

確かにひどい顔をしている。自分でもびっくりだ。

まぶたがこんなに腫れていても、目は見えるもんなんだなー、と変な所で感心する。

水で顔を洗った為、さっきよりは多少頭の中がクリアになった。

私はベットまで戻り、端に腰をかけて急なお休みを貰ったので、今日一日何をしようか考える。

そうやってばーっと、考えていると思い出して来るのは、昨夜の出来事。

アデレイは王都に連れて行きたいと言う。

王都には迷い人達もいるし、私としても興味がある。

だけど、この地を離れる事は正直抵抗がある。

このヒューストン伯爵の土地の皆はよくしてくれたし、今さら他の土地で過ごすのは想像がつかない。

アドマさんやローサさんやカリアなどのメイド仲間とも離れたくない。

それに…私の大事なトマト畑だってあるし。

「…よくわかんないや」

悩んで、ぐじぐじ考えていても、結局はなるようにしかなんのだ。考えてもわからないのなら、今は考えるのはやめにする。

悩んで答えが出ないなら、悩むのは今はパスする、保留にする。

今は、きっと答えの出る時ではないのだろう。

基本楽天的で能天気な、こんな私だけど、悩み続けていたら頭がショートしてしまう。

大きい悩みでも、ひとつひとつ解決していけば、いつか大きい悩みも解けるはず。

その為に、今出来る事からしていこう。

私はそう心に決めると、そのまま二度寝を決めた。

まずは、この睡眠不足と、ひどい顔をどうにかしないとねおやすみなさい。

そうして悩みを保留にすると決めた私は、見事三秒程で眠りに落ちた。

二度寝から目覚めると、もう昼すぎだった。  
どんだけ寝たんだ私。

しかしお陰様で頭がすっきりした。  
顔のむくみはまだあるけれど、気分爽快だし、頭は朝より冴えてる  
気がする。

さあ、体力も補充したなら、あとは自分のお休み楽しむべし！

私は起き上り部屋を簡単に掃除すると、客室を飛び出し、向かうの  
はいつものあの場所へ。

赤く実ったトマトが並ぶ、いつもの畑。

今日も晴天で、太陽は地面を照りつけて輝いている。

いつもは、朝に来る畑だけど、今日は二度寝したので、こんなに太  
陽が高くなってから来てしまった。

畑に近づくと、光り輝く太陽の下、人影が見えた。

その後ろ姿と、太陽の光を受けて輝く髪は間違えようのない人物だ  
った。



## 69 彼の気遣い

後ろ姿でも、すぐにわかる。

すらりと伸びた手足に、ハニーブロンドの髪は光輝き、風に揺れて  
いる。

白いシャツが清潔感を感じさせ、黒いパンツに革のブーツを履いた  
ラフな格好で優雅に佇んでいる。

後ろ姿からも感じる事が出来る、その存在感。

柵に腰をかけて、そこから伸びる足の長いこと。

同じ人間なのに不公平だ。いやいや人間、見た目じゃない。大切な  
のはハートさ、ハート。

自分で自分をなくさめながら、後ろ姿の彼をみつめる。

しかし、私はここでためらっていた。

なぜなら昨日の今日なので、正直気まずい。

心の準備も何も出来ていない私は、どういった態度を取ったらいい  
のか一瞬戸惑う。

「……アデレイ」

悩みながらも思わず名前を呼んでしまった私と、呼ばれて振り返っ  
たハニーブロンドの主は、

「……………遅い」

と一言。

しかも眉間にしわ寄せつき。

は？何で少し不機嫌モードなの？  
私に来るのが遅いつて？

そりゃ、昼過ぎに畑に来る事は珍しいけどさ、そもそも、約束なんてしてないじゃん！

逆ギレ気味に、口をとがらせる。

…と、ここで私は重要な事に気付いて慌てて声をかける。

「もしかして、ずっとここにいたの？いつから？」

「…いつもの時間からいた」

「いつものつて！？いつもって朝からいたの！？」

無言で私を見つめるアデレイの様子をみて、そうなのだを知る。

何と無謀な事を！天高く燃え上がるお天道様を甘くみるではないわ  
ゝ！

「熱中症になるでしょ！危ない！」

「ねっちゅう…？」

「あーもう、ほら、早く日かげに入る！」

意味がわからない様な顔をして、そのままポケットと突っ立っている  
ままのアデレイに、説明するより早いと思い、近くの大木の下にア  
デレイの手を引っ張って、無理矢理連行する。

本当にいつから待っていたのだろう。

私が優雅にお客様ベットで二度寝をしていた間も、ずっとこの畑の炎天下の中、待っていたのか？

私がヨダレを垂らしている間も、いびきをかいていたであろう間も？聞きたいけど、怖い。

アデレイを無理矢理引っ張り、日かげに入れると、風は吹いている爽やかな気候なので、割と肌には気持ちいい。

ここですばらく休んでいてもらわないと。

しかし良かった、倒れる前に私が畑に来て。心の中で安堵する。

次期第一王位継承者、干からびて畑で発見…

そんなニュース、シャレにならんわ。

「だけど、何で私を待ってたの？何か用事？」

木陰で休むアデレイを振り返り、ふとした疑問を投げかけて、その蒼い瞳を見つめて首をかしげる。

アデレイは私が質問をしても、私を見つめたまま軽く口端を上げて笑うのみ。

…そうだ。

思い出した…。

私は昨夜アデレイに抱きしめられ、まるで告白みたいな想いを告げられたのだった。

思い出すと急に恥ずかしくなり、どういう態度を取ればいいのか迷う。

しかし、私の動揺とは別にアデレイの態度はいたって普通で、特に照れも恥ずかしさもない様子。

炎天下の下に長時間いたくせに、至って涼しい顔で平然としている。

くっ！美形は汗の一つもかかないのか！

私は、一人あたふたと動揺から挙動不審になって、そわそわとして手なんて落ち着きがなくなっているのに。

あきらかに動揺した様子の私を見ると、アデレイは口を開く。

「昨夜は混乱させたと思って」

そりゃあね、混乱するに決まってる！

けど、それも二度寝をしたら、多少はすっきりもしたけどさ。

しかし、見た目は平然としているけれど、その言葉から私を気遣ってくれる様子は伝わった。

いつもと変わらぬ普通の態度で接してくるアデレイに、私だけ動揺した様子を見せているのも何だかアホらしく、気が抜けた。

けれど、アデレイがいつもと変わらぬこの態度を取ってくれた方がずっと楽。

いつものふてぶてしい態度でも、ゴーイング・マイウェイな態度でも、よそよそしいよりずっと楽！

私はある程度気が楽になり、

「そりゃ、混乱もするわ！」



などと、笑ってツツコミながらも、今日も畑へと来た目的の一つ、完熟トマトをカゴに集め始める。

その赤く熟れたトマトの一つを、日陰で休んで眺めているアデレイへと手渡す。

出されたトマトを黙って受け取ると、アデレイはそのまま口に運ぶ。私は自信たっぷり、

「どう？美味しいでしょ。それに、この畑も広くなったでしょ？」

目の前に広がる、赤く色づく私の宝の畑を見つめる。

「そうだな。このまま増やす事が出来るなら、この国にとっても貴重な食料が増えたという事だな」

「それに、アデレイが食べている時点で毒見は完了してるわね」

私も笑いながらトマトを口に入れる。  
みずみずしくて、口の中で広がる酸味と甘み。

日かげで二人並んで、赤いトマト畑を見ながら二人で頼張るトマト。

次期、第一王位継承者の立場だという彼に認められたなら、今後はどんだん国に出回るかしら。

なんて、ちよっと期待してしまう。

眩しい思いで、アデレイと並んで畑を見つめていたら、

「…焦らなくていい」

並んで立つ隣から、不意に静かな声が聞こえてきた。  
その声の主を、私はゆっくりと見上げる。

まっすぐに私を見つめる蒼い瞳は、この快晴の空みたいに雲一つないのと同じ、迷いのない蒼い色。

「返事は待っている。リツキの心が決まるまで」

優しげな、それでいて力強い瞳を見ていると本気なんだ、って伝わってくる。

『王都に一緒に来て欲しい』

昨夜言われた事は、やはり夢でも冗談でもなかったのだ。  
彼が本気になれば私の意見なんて無視して強引に連れていく事だって可能はずだ。彼の身分や立場を考えると。

だけど、実力行使をしないで、私の返事を待つと言うー。

「…うん」

私は目の前に広がる赤いトマトの大群を見ながら、一言返事をした。

## 70 彼女の願い

発表します。

本日のティータイムのお菓子は、上質のバターをたっぷりを使って、じっくりと焼き上げた香ばしいクッキーに、レーズンクリームをふんだんに挟んだレーズンクリームサンドです。

あと、紅茶はストレートでそのままの味と香りを楽しんで頂く方向で！。

ふむふむ、香ばしく焼けたクッキーの匂いがとっても美味しそうだ！中に挟まれているレーズンクリームは、ちょっぴり洋酒の香りがして、それがまた食欲をそそののよね！

私、実はレーズンサンドって大好きなんだ！！

元の世界で、レーズンサンドを大人買いして一気ぐいした経験ありよ！

そのレーズンサンドと紅茶を、名指しで『部屋まで運んできて欲しい』との指令が下った。

指名主はアルメリアお嬢様。

ノオオオー！

何コレ、どんな再現ドラマ！

いや、もう、『運んできて欲しい』なんてかわいく希望系ではなく『持って来なさい』と、命令系に感じるのは気のせいではないはずだ。しかも、お茶の時間は口実だと、鈍感でバカな私でもわかる。前回の続きか！？

前は、『迷い人が帰れる保証はどこにもない』という事実を、呑気に生きていた私に叩きつけ、まるでハンマーで殴られたかのような衝撃を与えた結果、私をノックアウトした上に、サヨナラホームランを打ったではないか。

結果、泣いて場外へと逃げるように走り去った私だけど、そんな私にとどめを刺す気なのだろうか。

恐るべしお嬢様。

可愛い容姿とは裏腹に、とどめを刺すのを忘れないとは、怖いけれども見習わなければいけない姿勢かもしれない。

きつと、何か話があるんだろう。

ああ…すぐに終わればいいのにな…。

どんよりとした気持ちのままアルメリアお嬢様の部屋まで行き、ノックをして入室を願う。

今日のアルメリアお嬢様は、薄いブルーのロングドレスを着て、髪は高くまとめ結いあげていて、いつもの可憐な装いより、少し大人びている気がする。

そして、ただ静かに黙って、私が紅茶セットの用意をしているのを眺めている。

前回の話には特に何も触れてこないの、私からも触れずに、黙々と業務をこなすのみだ。

沈黙している間、空気が重く感じるけど、気にしないように努める。紅茶とお菓子をセットし終えて、お嬢様に差し出してから、側に仕えている間、空気の重さを感じないように、心を無にして他の事を考えていた。

アルメリアお嬢様は、ストレートティーの入ったティーカップを口にもっていき、静かに何口か飲むと、そのままティーカップをテーブルに置いた。そして静かに口を開く。

「…この前の話の続きだけど」

きたっ！きたね、やっぱり蒸し返すつもりですね。

空気に緊張が走る。私もつい身構えてしまう。

「はい」

「…私はね、小さい頃から、将来あの方の隣にいるのは私だと、周囲の人々に言われて育ったわ。…アーデレイド様の隣にいても恥をかかせない為に、教育も受けてきたし、努力を惜しまなかったわ」

あれ…。

静かな声で、淡々と話すお嬢様の様子に首をかしげる。

前回のアルメリアお嬢様の強気な言い方とはまるで違って、何だか弱気で、ぼつぼつと力なく話す様子に驚き、動揺してしまう。

何だろう、一体どうしたんだろう。不思議に思う私の側でアルメリ

アお嬢様は続ける。

「それも全部、あのお方の側にいるためよ。隣にいる事を周囲の皆も望んでいたし、物心ついた時から、私もそう思い続けてきたわ」

そこでアルメリアお嬢様はため息を一つついてから、うつむいていた顔を上げて、真っ直ぐに私の顔を見つめる。

「だから、私には何もない」

力なく呟いた。

「…何もないのよ…私には…」

自嘲気味に、悲しそうな声が聞こえる。

そして、赤茶色の大きい瞳は、私を下から見上げて、潤んでいる。

唇を真一文字に引き締めて、何かをこらえてる様子で自分の手を固く握りしめた。

そんな様子が痛々しくて、側にいる私でさえ心配になってオロオロしてしまう。

しかし、私はそんな傷つき悲しい顔をしている彼女を目の前にして、何と声をかけていいかとも思い浮かばず、その場から動く事が出来ない。全く、気の利かない私め！

しかし、可愛らしい美少女が、声と肩を震わせながらも、涙をこらえて強がる様子とかを目の前で見ていると、女の私でも、何かこう、そそるモノがある。

あまりの可愛さと愛しさで、思わず抱きしめたくなってくる。

…やばい。新たな世界を解放ゲートオープンする前に、そんな思考は閉じなくてはいけない。

そんな腐れた思考をかき消す為にも、私は目を閉じる。

アルメリアお嬢様は、痛々しい様子で声を震わせながらも口を開いて続ける。

「アーデレイド様を取ってしまったと、私には何も無いの」

目を開けると、アルメリアお嬢様の悲しみの表情が見える。そして、悲しみを宿しながらも、力強い想いを訴えてくる。

「だから…私からあなたに、お願いがあるの」

思い切った申し出のように、息を飲むお嬢様の真剣な様子に、私も真剣に向き合う。

彼女のお願いとは何だろう。

話の流れからいってアデレイに關係する事だとは想像がつくけれど、一体どんなお願いなのだろうか。アルメリアお嬢様が口を開くまでの間、私の心臓も緊張により鼓動が早くなる。

数秒の沈黙の後、決心した様子で口を開いたアルメリアお嬢様の言葉に耳を傾ける。

「アーデレイド様の側を離れてくれないかしら？」

「側を離れる…？」

一瞬、言葉の意味が飲み込めずに聞き返す私に、

「…そうよ」

思い切ったように、アルメリアお嬢様は話し続ける。

「あなたが、ここを離れてもやっていけるように働き口も用意するし、住む場所も心配ないように手はずを整えさせるわ。もちろん、それ相当の報酬も用意するわ。…だから…」

うつむき加減に小さい声で話すお嬢様からは、いつもの自信たっぷりで我がままな様子が見えない。

「私からアーデレイド様を取らないで欲しいの」

不安そうな様子を見せながらも、最後は、はっきりと宣言した。

そこまで言われてようやく理解した。

つまりは『アデレイから離れてくれ』と言う意味なのだ。  
お金も働く場所も用意するから、側を離れてくれーと。

思いもよらなかった『お願い』に、驚いたと同時に、なんだかすごく悲しくなった。

こんなプライドの高いお嬢様が、そこまで言ってくるなんて、余程の事だ。

しかも、こんな悲しそうな顔までして。



アルメリアお嬢様を見つめると、目が潤んでいる。

きつと、私みたいな異世界の訳のわからない人間に頭を下げて『お願い』をするなんて、相当の覚悟と勇気がいると思う。

それも日頃、謝る事に慣れていないお嬢様にとって、かなりの心の葛藤があつたと思う。

しかもメイドな私では、立場的にずっと下だ。

それこそ、真正面から『お願い』と言っているが、本来なら私に命令出来る立場だ。

可哀想に長いまつ毛を震わせて、悲痛な面持ちで言う可愛らしい彼女の『お願い』を聞いてやりたい気持ちになってくる。

それでいつもの、可愛くて勝気な彼女に戻るのならー。

しかし誰だ？こんなに可愛い女の子に、こんなに悲しい思いをさせてる奴！出て来い！

…私か。

…この場合は私になるのか。

何だか、すごく罪悪感にかられる。

こんなに可愛い女の子を不安にさせて、悲しませた挙句、プライド捨てさせてお願いまでさせて。

それ程までに、彼女がアデレイに対する想いは強いって事なのだろうか。

だけど…

何かが違う気がする。

そう感じた瞬間、反射的に口から言葉が出ていた。

「それは無理です」

## 71 誤解

私の言葉を聞いて何かに弾かれたように顔を上げた彼女は、目を見開いて私を見つめる。

まさか、すぐさま反論されるとは思ってもいなかったような様子だ。私も、彼女の目を見つめ返し、ゆっくりと自分の考えを口にする。

「側を離れるとか、離れないとかは、人をお願いされてする事じゃないと思うので…」

それに、『アーデレイド様を取らないで欲しい』と言われても、取った覚えがないのだ。

取った覚えもなければ、私の『物』でもないので、残念だけどお嬢様にも『返せない』

アルメリアお嬢様のお願いする様子を見て、あやうく、その願いを叶えてやりたい気持ちにもなったけど、何かこう、上手くは言えないけれども、自分の感覚的に違う気がしたのだ。

その違和感を言葉で説明しようとするが、なかなか難しい。難しいながらも、何とか伝えようと口を開く。

「それに、世の中お金でどうにかなる事ばかりじゃないと思うので…」

こつちの世界での常識は、どうなっているのかわからないけれど、私は私の常識で貫きさせてもらう。

「だから、私は、私の意志でアデレイの側を離れる事はできません」

きっぱりと言い切る。

綺麗事と言われるかもしれないけれど、お金で解決出来る事が全てではないと思う。

そりゃ、『よく考えなよ？お金は大事だよ！』と、私の心に住む金の亡者達が騒ぐけれど、お金と引き換えにして、アデレイの側を離れて違う地に移り住むという事は、それに関わる全ての人の関係を絶つという事だ。

新しい地に住む場所と働く場所を用意してもらい、お金を貰う。

それは、お世話になったこの地に住む人々との関係を絶つて、黙って去るという事だ。

そんな恩知らずな事、出来やしないし、出来る訳がない。

再び強い意志を瞳に宿らせて、アルメリアお嬢様に言いきる。

「アデレイの側にいます」

私は、まっすぐにアルメリアお嬢様の顔を見つめて、はっきり意見を言う。

彼女も譲れない何かがあるだろうけど、私にだって譲れない何かがあるのだ、こんな私でも。

きっぱりと言い切ったら、妙に清々しい気分になり、アルメリアお嬢様を真っ直ぐに見つめる。

そのままアルメリアお嬢様と真正面から見つあい、静かな沈黙が続

く！。

……

…あれ？

ちよつと待て？この言い方…。

何かがおかしい私の言い方…。

自分の中で軽くリピートをかけてみよう…巻き戻し巻き戻し…

『だから、私は、私の意志でアデレイの側を離れる事はできません』  
『アデレイの側にいます』

これは……

……まるで、私がアデレイを『好き』みたいな言い方じゃないか？

……それに……何だか…『告白』みたいじゃないか……??

自分で言っただけから気付く。マズイ。ひっじょーにマズイ。

自分で言っただけ台詞ながら、おかしい言葉を吐いた事に今更気が付く。  
この言い方は、確実に誤解を招くのでは…。

やばい。変な汗をかいてきたぞ、私！

慌てて混乱しながらも、目の前で自分の手を強く握りしめ、下唇を力強く噛みしめて、今にも泣きそうになっているアルメリアお嬢様じゃない、って意味です。

…ね？友達ね！？あくまでも友達ですから！』

と、早く真意を告げて安心させてやらなければ、と思って焦る。

それに、アデレイだってお金で売られるのは嫌でしょう！アデレイ、ドナドナな気分！

私が口を開こうとするのと同時に、急に後方から、勢いよく扉の開く音が聞こえて驚く。

そして、ノック音もしなかった。

…私の知っている人物で、ノックをしないで部屋に入って来るのを特技とする人がいる。

何の自慢にもならない特技だと私は思っているけれどー。

…という事は……

………ちょ……嫌な予感マックス。

「それは、側について王都に来てくれるという意味と受け取って構わないのだな？」

勢いよく急に開け放たれた扉と、その扉の向こうから、嬉しそうに瞳を輝かせて、早足でいきなり距離をつめてくるアデレイに、ぎよつとする。

ちよ…！おま！私の肝心要の訂正の台詞を聞く前に早とちりしちゃダメでしょ！

それに、いつから聞いていたの？

おまけに、開口一番に言いたい。

「ノックぐらいしろ〜〜！」

思わず顔を見て叫んだ私がいる。

## 72 訂正

「ノックぐらいしろ〜〜！」

その顔を見た瞬間、素で叫んだ。

そうして直後に、先程の私の台詞を慌てて訂正しようとアデレイの顔を見ると、

私を見つめながら、なぜか早足で側に近づいてくるアデレイ。

そのスピードの速さと、キラキラ輝きを放ちながらも、どんどん近付いてくる様子に、何だか、よからぬ予感めいたモノを感じて、ちよつとたじろぐ。

反射的に本能が『逃げる』と感じ、顔をそむけて距離を取ろうとした瞬間、確かな力で掴まれる私の右手。

ーそう、私の右手はアデレイによって捕えられていた。

私の右手を掴む大きな手。関節の固さから、男の人の手だと知る。いきなり掴まれた驚きか、心臓が一瞬跳ねた気がした。

そうして、逃げる機会を失った私は、いきなり私の隣に来て、私の右手を捕えた人物の顔を見る。

ちよつと長めのハニーブロンドに、高い鼻筋、引き締まった唇に、蒼い瞳は輝いている。

感じる存在感は、今日はいつもより輝きが増している気がする。背後に金粉でも舞っていそうなイメージだ。

そんな想いで見つめていると、金粉舞う彼は、一瞬ほほ笑んだ後、



腰を折る。

黙って見つめていたら、腰を折った姿勢で、

捕まえた私の右手に、いきなり口づけをした！。

ぎゃー！おま、いきなり何すんねん！

その口づけされた行為によって、訂正しようとしていた私の頭の中の台詞は飛んではじけた。

条件反射で、手を引っこ抜こうと力を込めるも、アデレイに掴まれてびくともしない。

それどころか、立ち上がり熱のこもった瞳で、ずっと私を見下ろす蒼い瞳。

優しくほほ笑んで、そのほほ笑みは光り輝いていて眩しい。

しかし、何かを勘違いしているようなその笑顔、今の私にはコワイ。

ここは早く訂正しなければ！善は急げで、先程頭の中ではじけ飛んだ台詞をつなぎあわせて、口を開く。

「あのね…！」

「共に王都に行ってくれるか…」

ちよ、待て！聞けええ！

そんな熱っぽい視線よこす前に聞いてええ！

「ちょっ……！」

「…いや…行くぞ」

おいしいいいい！

何だその、いきなり強気な上から目線発言は！

非難を込めて見つめ返すと、熱っぽさの中にも、力強い意志が感じられる瞳の色を宿していた。

「あのね…！」

「アルメリア」

アデレイは、急に視線を変え、アルメリアお嬢様の方を向き、彼女の名前を呼ぶ。

…そして、先程から、私の呼びかけは無視ですか。

…ああ、そうですか。特技の一つのスルーですか。スルースキル発動中ですか。

しかし、今からすごく大事な事を言っつもりだから、まずは聞いて欲しい。

懲りずに再度アデレイを呼ぼうと思ったが、

「アーデレイド様…」

私より先に、アルメリアお嬢様が口を開き、呼びかける。

しまった、先を越された。

だけど、私の訂正したい部分はとても大事な部分だと思うの！  
今後の展開にぜひ重要だと思うから、まずは聞いて欲しいの！

私の想いとは裏腹に、

「私は、ずっとずっとアーデレイド様の事、お慕いしていました。  
決して他の婚約者候補達に負けてはいないつもりです。それが…」

アルメリアお嬢様は、細いその肩を震わせて話し始めた。

やばい、始まってしまった！

アルメリアお嬢様の大きくて赤茶色の瞳は潤んでいて、今にもポロポロと雫がこぼれ落ちそうで、見ているこっちがハラハラする。

それに対して、アデレイは静かに続ける。

「アルメリアは、『王位第一継承者』の側に添えるように幼い頃から、周りの者達に言われて育てられてきたのだ」

「それは…！」

真剣な二人の話しあう様子から、今から大事な話が始まるんだと予想がつく。

それを、私がいきなりぶった切る訳にはいかない。

ここでいきなり、ちょっと待ったコールをかける程、私だって空気を読めない人ではないはずだ。…多分。

なんだか、いたたまれなくて、自分は今この場にいるべきではないと感じた。

アルメリアお嬢様と話合いが始まったアデレイの手から、このどさくさに紛れて掴まれた手を離して貰おうと、そつと右手を抜きにかかると、アデレイはそれに気付いて逆に力を入れてきた。

ちよ！離して！

離して欲しくて焦る私の気持ちを構いなしに、アデレイはアルメリアお嬢様と会話を続ける。

「だから…俺じゃない」

「……………！」

「アルメリアが向ける感情の相手は俺ではなく『王位第一継承者であるアデレイ』だろう」

真剣な会話が始まった中、ようやく右手を抜く事に成功し安堵する。あまりにも力を入れて握ってきたので、不意を突いてアデレイの足を踏んでやった。

…そして掴まれた手が緩んだ隙に脱出成功って訳。

そして私は、そつとその場を離れ、自然に部屋からフェードアウトする。

きつとアルメリアお嬢様は、アデレイに対する想いをぶつけるかもしれない。

そんな告白最中に私が側にいてはいけない。

あとは、二人の問題だと思っからー。

アルメリアお嬢様が真剣な想いをぶつける最中、第三者の私が聞いていちゃ失礼だと思ったので、そっと部屋を後にした。

アルメリアお嬢様のお部屋を、そっと抜け出て、いつもの業務に戻るべく長い廊下をカートを押しながら歩いていると、結局重要な訂正をすることが出来なかった事に気付く。しまった。

そして、アデレイの嬉しそうにほほ笑む顔をふと思い出す。アデレイの、輝きに満ちたあの嬉しそうな顔。

金粉は舞い、薔薇が背後に咲き乱れるかのようだった。

しかし、いつから、どこから聞いていた？

アデレイは地獄耳だな。

「王都かあ……」

私は一人でつぶやきながら廊下を進んで行った。

### 73 マイナス思考

あの日、そつとアルメリアお嬢様の部屋から退室した私だけど、二人の間でどんな話し合いがされたのだろう。

まったく気にならないと言うと嘘になるけれど、私がずっずっしくも口出しする事じゃないしな。

そんな事をぐだぐだと考えながらも、数日たった訳だけど、いくら気になっていても根ほり葉ほり聞く訳にもいかないので、その話題には触れていない。

よって私的には何も変わらない日々だ。

そして今日も相変わらず良いお天気で畑のトマト達もプリプリに実っている。

そんな食べごろのトマトを収穫して、入れ物につめる。

そして今日の収穫分をいつものように市場の叔父さんに渡して貰えるようにローデイにお願いをする。

さあ、今日も私の城での一日が始まる。

太陽に照らされながら、遅刻しないように走って行った。

「おはようございます」

いつものように皆に元気に挨拶をしてから、モップがけをする為にモップを手にとって廊下を歩いていたら、アドマさんに呼び止めら

れた。

「リツキ、ちょっといいかい？」

何だろう？

いつもの明るい様子と違って、少し真剣な顔をしたアドマさんが私を手招きで呼びつけ、廊下の隅へと連れて行く。

「…元気かい？」

「はい。元気ですけど…」

何だろう。私が元気かなんて、見ればわかると思うけど…。

具合なんてどこも悪くはないんだし、悪そうにしているつもりもない。

しばらくアドマさんは、何かを言いたそうに、けれども、言葉を選んで頭の中で整理している様子だったので、黙って次の言葉を待っていた。

しばらくするとアドマさんは、

私はいろいろ考えて言葉を選ぶのが苦手なんだから…とか、

いや、いっそはつきり聞か…など、ひとり言のようにぶつぶつ言い始めた。

いや、アドマさん、思考がダダ漏れですけど…。

ツツコミたいけど、黙って見守っていると、ようやく彼女の中で決まった様で口を開く。

「リツキ、単刀直入に聞くけど…」

私は向かいあうアドマさんの言葉を黙って聞いていると、

「坊っちゃんとアーデレイド様達と、王都に行ってしまうのかい？」

「えっ？行くんですか！？」

それを聞いて私は驚いた。

王都に行くって、まだ正式に返事だとしてないのに、いつのまに決定したのだろう。

それに私は誰にも言っていないのに、アドマさんってば、何処からそんな事を聞いたの？

私が驚いて張り上げた声に逆にアドマさんが驚き、それから呆れた様子で

「自分の事だろうに。それとも、違っのかい？」

「違います…！…とも言えませんが…でも…まだ…けど…あの…」

返事もしないし…。決めてないし…。

言葉尻がだんだん濁って、だんだん下を見て俯いていく私の様子とは反対に、目の前でどっしりと構えて腕組みを始めたアドマさんは、

「迷ってるって事だね？」

一言でずばりと当てた。

うっ、と言葉につまる。



しかし、どこで知ったのだろう。

女の人がおしゃべり好きなのって、世界は違えど共通事項だと思う。話す内容も、恋の話や、人の噂話やそう大差ない。

それにしてもメイド仲間の情報通は恐ろしい。

壁に耳あり障子に目ありの世界だ。こつちの世界、さすがに障子はないけれど。

そんなアドマさんは、私の考えてる事など、全てお見通しのようで、

「そりゃ、あんた、私の情報網を甘く見るんじゃないよ」

アドマさんはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

ひえゝ、恐ろしい。この人だけは敵にはまわしたくない！

まさに、家政婦…いやメイドは見た！

もしかして、もうかなり噂になっている？

私のビビり具合を鼻で笑った後、

「安心おし。噂にはなってるないよ。…まだね」

まだ…って言う所が怖い。

今は大丈夫だけど、いつかは噂になる確率が大って事よね。

「まあ、こつゆう事は隠していても、いずればれる事だからね」

アドマさんは私の不安を的確に当てる。

そうなのだ。なぜアドマさんが知っているのか不思議だけど、噂って広まる時ってあつと言う間だからね。

人の口には戸は立てられないってのは、まさにこつゆう事よね。私はため息を一つつく。

「それよりも…王都に行くか行かないかは、迷っていても答えは出さないと！」

「…はい…」

今の私の顔は、悩んで困って眉毛がハの字に下がっていると思う。そんな私を見て、

「自分の事だし、リツキが自分で決めるしかないよ！」

後押しするように、力強く言ってくれるアドマさんだけど、私の心は多少複雑だった。

私が迷っている事を察してくれていた嬉しい気持ちと、『あんたがいなくなると寂しいから、行かないでくれ』って言われる事を期待していた自分もいたのが正直な気持ちであって…。

私って何で、自分勝手な人間なんだろう。

もしかして私って、城の仲間から見て、いてもいなくても構わない存在なのかな？

お城で働いていても、迷惑なのかな？

何だか、どんどんマイナス思考になってきた。

私の複雑な表情を見たアドマさんは、両手を組んで、私の顔を見ながら続けた。

「そりゃあね、私だってあんたが可愛いから、出来ればここにいて欲しいさ。」

「バカな子でも飼えば情も沸くつてもんだろ？」

アドマさんに言われると、私は、まるで犬か猫のようだ。

アドマさんに飼われるのなら、それでも幸せだと思った自分がいる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4591o/>

---

トマトリップ

2011年11月27日22時44分発行